

永源寺跡遺跡
発掘調査報告書

2001

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

永^{よう}源^{げん}寺^じ跡^{あと}遺跡

発掘調査報告書

平成13年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査区全景（北から）



SK274人骨出土状況（北から）



ST487（東から）



S T 489出土土器



S T 489出土状況（南から）



S T 492出土土器



S T 492出土状況（西から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、永源寺跡遺跡の調査成果をまとめたものです。

永源寺跡遺跡は天童市南部の高揃地区にあり、直ぐ南には奥羽山系を源流とする立谷川が西下し、対岸の山形市と接しています。遺跡は食品加工、機械などの各種工場が建ち並ぶ清池工業団地内に位置しています。

この度、主要地方道山形天童線道路改築事業に伴い、工事に先立って緊急発掘調査を実施しました。

調査では奈良・平安時代の8世紀～10世紀頃まで継続した堅穴住居跡群や掘立柱建物跡のほか縄文時代や中世の遺構遺物も検出されております。これらの遺構・遺物は当時の人々の生活の一端を示す貴重な資料といえます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫に伝えていくことが、私たちの重要な責務といえます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場清耕

例 言

1 本書は、主要地方道山形天童線道路改築事業に係わる「永源寺跡遺跡」の発掘調査報告書である。

2 調査は山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は次のとおりである。

遺跡名	永源寺跡遺跡	遺跡番号	239
所在地	山形県天童市大字清池字笠仏		
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
委託期間	平成12年4月1日～平成13年3月31日		
現地調査	平成12年4月18日～平成12年8月9日		
調査担当者	調査第四課長	名和 達朗	
	主任調査研究員	齋藤 主悦	
	調査研究員	押切 智紀 (調査主任)	
	副調査員	衣袋 忠雄	

4 発掘調査および本書を作成するにあたり、山形県土木部山形建設事務所、東南村山教育事務所、天童市教育委員会等関係機関に協力をいただいた。また、資料整理にあたっては下記の方々から御教示を賜った。

吾妻俊典 (多賀城跡調査研究所)、高橋誠明 (古川市教育委員会)、水澤幸一 (中条町教育委員会)、藤澤良祐 (瀬戸市埋蔵文化財センター)、平田禎文 (三春町教育委員会)、田中則和 (仙台市教育委員会)、高橋博志 (郡山市埋蔵文化財発掘事業団)、川崎利夫 (うきたむ考古資料館)、齋藤仁 (山形市教育委員会)、押野一貴 (天童市教育委員会)、北野博司・松井敏也 (東北芸術工科大学)、東北中世考古学会、永源寺 (敬称略)

5 本書の作成・執筆は、押切智紀、衣袋忠雄が担当した。編集は須賀井新人、多田和弘が担当し、全体については名和達朗が監修した。

6 委託業務は下記の通りである。

遺構写真実測	国際航業株式会社
出土遺物保存処理	東北芸術工科大学
理化学試料分析	パリオ・サーヴェイ株式会社

7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ST…竪穴式住居跡	SB…掘立柱建物跡	SA…柵(柱)列
SK…土坑	SD…溝跡・溝状遺構	SG…河川跡
SE…井戸跡	SP…ピット	SX…性格不明遺構
EB…柱穴堀方	EP…遺構内柱穴	EK…遺構内土坑
EL…炉跡・カマド跡	ED…遺構内溝	RP…登録土器・陶磁器
RM…登録金属製品	RQ…登録石器・石製品	XO…出土地点不明遺物
P…土器・陶磁器	S…石	

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記の通りである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は $N-32^{\circ}-E$ を測る。
- (3) 遺構実測図は $1/20 \cdot 1/40 \cdot 1/50 \cdot 1/60 \cdot 1/80 \cdot 1/150 \cdot 1/160 \cdot 1/200 \cdot 1/400$ 縮図で採録し、挿図毎にスケールを付した。なお、実測図中の●は遺物の出土地点を表す。
- (4) 遺物実測図・拓影図は、原則的に $1/3$ を標準にして採録し、それ以外の場合には個々に表示した。
- (5) 遺物図版については任意の縮尺とした。
- (6) 遺物実測図・拓影図の土器については土師器、赤焼土器、及び中世陶磁器は白ぬき、須恵器は、黒塗りで表示した。また、土器内外面の網点は黒色処理を表している。
- (7) 焼土層については砂目で表示した。
- (8) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (9) 遺物について本文中で取り上げる場合には、「第○図△番」を「○-△」または(△)と略記した。
- (10) 本分中の「○○G」はグリッド番号を示す。
- (11) 出土遺物観察表中の()内の数値は、図上復元による推定値であり、破片での現存値は省略している。
- (12) 基本層序および遺構覆土の色調の記載については、1998年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 立地と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	4
III 遺跡の概要	
1 遺跡の層序	6
2 遺構と遺物の分布	6
IV 遺構と遺物	
1 縄文時代の遺構と遺物	
(1) 検出遺構	10
(2) 出土遺物	11
2 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物	
(1) 竪穴住居跡	19
(2) 掘立柱建物跡	62
(3) 河川跡・溝跡	69
(4) 土坑他	71
(5) 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物	81
3 中世以後の遺構と遺物	
(1) 河川跡・溝跡	97
(2) 土坑・土坑墓	97
(3) 井戸跡	100
(4) 中世以後の遺物	106
V 調査のまとめ	120

付編

永源寺跡遺跡の自然科学分析

表

表-1 検出遺構一覧	10	表-9 出土土器観察表(2)	114
表-2 出土土器観察表(1)	18	表-10 出土土器観察表(3)	115
表-3 石器・石製品観察表	18	表-11 出土土器観察表(4)	116
表-4 竪穴住居跡観察表	20	表-12 出土土器観察表(5)	117
表-5 カマド観察表	21	表-13 出土土器観察表(6)	118
表-6 掘立柱建物跡観察表	62	表-14 土製品・石製品・金属製品観察表	119
表-7 土坑・性格不明遺構観察表	78	表-15 出土銭貨計測表	119
表-8 河川跡・溝跡・土坑・土坑墓観察表	99	表-16 土器分類表	122

挿 図

第1図	地形分類図	2	第38図	S T 492・847・S X 493・S T 494 出土遺物	55
第2図	遺跡位置図	3	第39図	S T 489・490	56
第3図	調査区概要図	5	第40図	S T 489出土遺物	57
第4図	遺構配置図	7	第41図	S T 489出土遺物	58
第5図	遺跡層序	9	第42図	S T 491・496・814	59
第6図	S T 78・80・82・97	12	第43図	S X 488・S T 489・490・496 出土遺物	60
第7図	A区縄文時代遺構配置図	13	第44図	S T 814出土遺物	61
第8図	S D 35・39・S K 32・505	14	第45図	S B 92・600	64
第9図	縄文土器	16	第46図	S B 650・832	65
第10図	縄文・弥生土器・石器	17	第47図	S B 700	66
第11図	石器・石製品	18	第48図	S B 845・S A 892	67
第12図	S T 1・31	24	第49図	S B 1070・1200	68
第13図	S T 58・59	25	第50図	S G 267	72
第14図	S T 1・31出土遺物	26	第51図	S D 470他	73
第15図	S T 31・58出土遺物	27	第52図	S D 670・671・S K 1166	74
第16図	S T 20・177	28	第53図	S G 936・S D 914・947	75
第17図	S T 20出土遺物	29	第54図	土坑他	79
第18図	S T 20・177出土遺物	30	第55図	土坑他	80
第19図	S T 177・202出土遺物	31	第56図	掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・ 土坑の遺物(1)	83
第20図	S T 202・201	33	第57図	掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・ 土坑の遺物(2)	84
第21図	S T 201・558出土遺物	34	第58図	掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・ 土坑の遺物(3)	85
第22図	S T 823・844・846	36	第59図	掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・ 土坑の遺物(4)	86
第23図	S T 558・800	37	第60図	掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・ 土坑の遺物(5)	87
第24図	S T 486	38	第61図	掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・ 土坑の遺物(6)	89
第25図	S T 487	39	第62図	掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・ 土坑の遺物(7)	90
第26図	S T 558・800・486・487出土遺物	40	第63図	掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・ 土坑の遺物(8)	93
第27図	S T 487出土遺物	41			
第28図	S T 840・913・S X 923	44			
第29図	S T 840・913・S X 923出土遺物	45			
第30図	S T 863・864	46			
第31図	S T 863・864出土遺物	47			
第32図	S T 865・S X 866	48			
第33図	S T 865出土遺物	49			
第34図	S T 865・S X 866出土遺物	50			
第35図	S T 492・847	52			
第36図	S T 494・S X 493	53			
第37図	S T 492出土遺物	54			

第64図	掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・ 土坑の遺物(9)……………	94	第71図	土坑・土坑墓……………	104
第65図	掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・ 土坑の遺物(10)……………	95	第72図	S E 1196……………	105
第66図	掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・ 土坑の遺物(11)……………	96	第73図	中世以後の遺物(1)……………	109
第67図	S G 401・S D 402・204……………	98	第74図	中世以後の遺物(2)……………	110
第68図	S K 274他……………	101	第75図	中世以後の遺物(3)……………	111
第69図	土坑・土坑墓……………	102	第76図	中世以後の遺物(4)……………	112
第70図	土坑・土坑墓……………	103	第77図	中世以後の遺物(5)……………	113
			第78図	遺物分類図(1)……………	123
			第79図	遺物分類図(2)……………	124
			第80図	集落建物群変遷図……………	124

図 版

- | | | | |
|-------|------------------------------|------|-----------|
| 巻頭図版1 | 調査区全景 | 図版22 | 出土遺物 (6) |
| 巻頭図版2 | S K 274人骨出土状況
S T 487完掘状況 | 図版23 | 出土遺物 (7) |
| 巻頭図版3 | S T 489出土土器・出土状況 | 図版24 | 出土遺物 (8) |
| 巻頭図版4 | S T 492出土土器・出土状況 | 図版25 | 出土遺物 (9) |
| 図版1 | 調査区全景他 | 図版26 | 出土遺物 (10) |
| 図版2 | A区縄文時代遺構他 | 図版27 | 出土遺物 (11) |
| 図版3 | S T 20完掘状況他 | 図版28 | 出土遺物 (12) |
| 図版4 | S T 823・844・846他 | 図版29 | 出土遺物 (13) |
| 図版5 | S T 487断面他 | 図版30 | 出土遺物 (14) |
| 図版6 | S T 863完掘状況他 | 図版31 | 出土遺物 (15) |
| 図版7 | S X 493・S T 494完掘状況他 | 図版32 | 出土遺物 (16) |
| 図版8 | S T 491 E L断面他 | 図版33 | 出土遺物 (17) |
| 図版9 | S B 650完掘状況他 | 図版34 | 出土遺物 (18) |
| 図版10 | S D 470完掘状況他 | 図版35 | 出土遺物 (19) |
| 図版11 | S D 671完掘状況他 | 図版36 | 出土遺物 (20) |
| 図版12 | S K 6断面他 | 図版37 | 出土遺物 (21) |
| 図版13 | C区北側完掘状況他 | 図版38 | 出土遺物 (22) |
| 図版14 | S K 274人骨頭部精査状況他 | 図版39 | 出土遺物 (23) |
| 図版15 | C区中央土坑群他 | 図版40 | 出土遺物 (24) |
| 図版16 | S K 458断面他 | 図版41 | 出土遺物 (25) |
| 図版17 | 出土遺物 (1) | 図版42 | 出土遺物 (26) |
| 図版18 | 出土遺物 (2) | 図版43 | 出土遺物 (27) |
| 図版19 | 出土遺物 (3) | 図版44 | 出土遺物 (28) |
| 図版20 | 出土遺物 (4) | 図版45 | 出土遺物 (29) |
| 図版21 | 出土遺物 (5) | 図版46 | 出土遺物 (30) |

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

本遺跡は天童市南部、高橋地区^{たかはし}清池^{しみづ}の工業団地内にある。直ぐ南に立谷川が西下し、対岸は山形市である。奥羽山系を源流とする立谷川によって形成された自然堤防上に拓かれた集落跡である。

今回の緊急発掘調査は、主要地方道山形天童線道路改築事業に伴って実施されたものである。本調査に先立ち、平成11年9月17日に山形県教育委員会によって、工事予定内の遺跡の所在や性格を調べる分布調査が実施された。その結果、遺跡の存在が確認され、さらに平成11年12月16～17日に同教育委員会によって遺跡の範囲や遺構の数・遺構の深さ、遺物の出土状態等を調べる2回目の分布調査が実施された。

その結果、8～9世紀と考えられる竪穴住居跡や掘立柱建物跡を示す柱穴、土坑、溝跡等の遺構や土師器・須恵器・赤焼土器などの遺物が検出され、南北250m、東西100m以上の範囲となる奈良・平安時代の集落跡である事が確認された。

調査結果・資料をもとに、平成12年4月12日に山形県教育庁文化財課・山形県土木部山形建設事務所・天童市教育委員会など関係機関による協議が行われ、道路改築事業区域内については、車道部分（東西20m幅）は緊急発掘調査による記録保存、歩道部分（車道を挟んでそれぞれ7m幅）は盛土による遺跡の現状保存という二つの方法が取られる事になり、記録保存部分については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが山形県から委託をうけて発掘調査を実施することになったものである。

2 調査の方法と経過

現地調査は平成12年4月18日から始まり、初日は発掘器材の搬入と現場事務所の設営など、発掘作業のための諸準備を行った。

次に地山面や遺物包含層確認のため、調査区内に試掘トレンチを設定し、掘り下げ、遺構面及びその深さを検討し、その結果に基づいて、重機による耕作土（表土）を除去、平行して面整理を繰り返しながら、遺構の確認にあたった。

遺構や遺物の位置関係を正確に記録するために5m×5mを1単位とするグリッド（方眼区画）を設定した。南北軸に北からアラビア数字による番号を、東西軸に西からアルファベットを付け加え対処した。グリッドの南北軸は磁北から32°東に振れる。

遺構検出後は白線マーキングを行い、続いて遺構精査に入った。その間、適宜遺構などの平面図や断面図、出土遺物の図面作成、写真撮影などの記録作業とともに遺物の収集を行った。8月3日からは空中撮影による写真実測に着手した。

なお、8月7日にこれまでの調査結果を公開し、現地説明会を実施した。当初の計画通り、8月9日に現地調査は終了した。実働77日間の日程であった。その後、ネーミング・実測・拓本・トレース・版組などの整理作業を通して、報告書の作成にあたった。

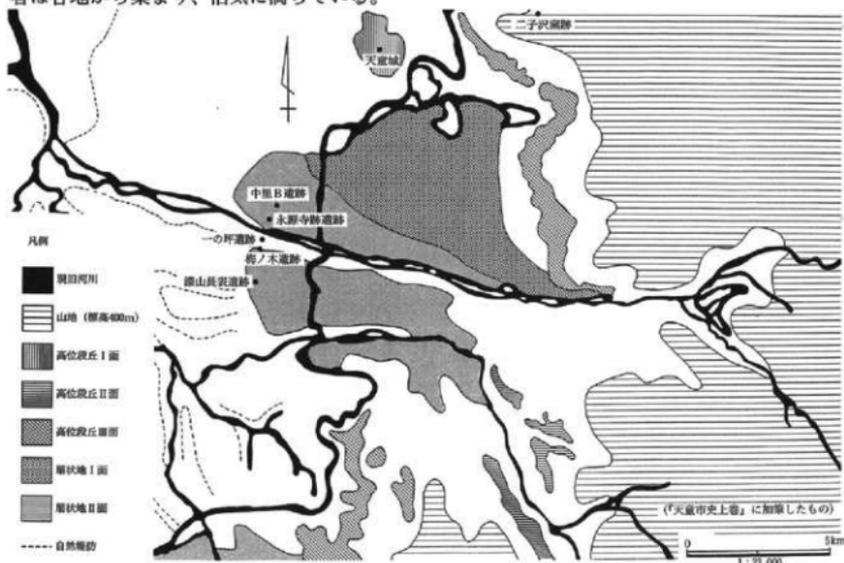
II 立地と環境

1 地理的環境

永源寺跡遺跡が存在する天童市高楠地区は山形盆地にあり、山形県中央部の東寄りに位置する。東部は奥羽山系まで延び、面白山上流に源を発する立谷川が西下し、立谷川扇状地を、北は乱川が西下し、乱川扇状地を形成している。山形市を流れる馬見ヶ崎川と同様にいずれも天童市西部を流れる山形県の母なる大河、最上川に注ぐ。夏は高温多湿、冬は県内では南隣の山形市とともに降雪量は最も少ない。本遺跡は、標高は約113mを測り、立谷川扇状地（下図F面）の扇端部に位置する。付近には清池、大清水などの地名があるように、豊富な伏流水に恵まれ、湧水池が多く分布し、農耕に利用されてきた。

本遺跡付近は交通の便にも恵まれ、東から国道13号線、JR山形新幹線、旧国道がそれぞれ南北に走り、県内でも最も交通量の多い地域に挟まれている。旧国道沿線には山形市の漆山、そして天童市の清池、中里、長岡、芳賀などの集落が並び、かつての羽州街道の面影を残している。本遺跡は羽州街道と横街道の連絡路になっており、本遺跡北を横切る県道は以前から使われていたことが、地籍図などからも確認できる。

現在、本遺跡付近は昭和45（1970）年頃から「清池工業団地」が形成され、機械器具、医薬品、精密、建設プラント、食品加工、などの工場が操業している。立谷川を挟んで山形市の「立谷川工業団地」と連携しあいながら、生産力の増大に努めている。交通の利便性も高く、通勤者は各地から集まり、活気に満ちている。



第1図 地形分類図



- 1 永源寺跡遺跡(縄文・奈良～中世) 2 中里A遺跡(縄文) 3 中里B遺跡(平安) 4 三千段遺跡(縄文・平安)
- 5 伊達城(室町～安土桃山) 6 清池跡壇(室町) 7 清池遺跡(平安) 8 村東B遺跡(平安) 9 十二木遺跡(平安)
- 10 桜段遺跡(縄文・平安) 11 礼井戸糸屋遺構(平安・室町) 12 高橋東遺跡(奈良・平安) 13 入水遺跡(奈良・平安)
- 14 高橋城(南北朝～江戸) 15 桜江遺跡(古墳～奈良) 16 塔の前石塔群(室町～安土桃山) 17 漆山館(室町～戦国)
- 18 北海上B遺跡(奈良・平安) 19 大明神遺跡(奈良・平安) 20 伊達城(室町～戦国) 21 一の坪遺跡(平安)
- 22 梅ノ木遺跡(古墳～平安) 23 漆山長教遺跡(奈良・平安)

第2図 遺跡位置図(国土地理院発行 2万5千分の1地形図「寒河江」「天童」「山形北部」「山寺」を使用)

2 歴史的環境

本遺跡の周辺には歴史的遺産が数多く残されている。

東部の立谷川中流右岸の扇状地扇尖部には縄文時代の上荒谷遺跡が確認され、北には同時代の中里A遺跡が存在する。

西には2基よりなる火矢塚古墳と上述矢塚古墳がある。これらは当時の水田と集落があった低湿地の湧水帯を見下ろす微高地にあり、集落全体から望まれる場所に位置しており、6世紀代は立谷川扇状地を中心とする地域を支配する統合の首長の墓であったと思われる。

また『和名類聚抄』によると出羽の国に地方古代組織として最上郡の芳賀郷が記されている。現在の高榎地区の芳賀周辺と見られている。

平安時代の中里B遺跡、室町時代の清池遺跡、奈良・平安時代の高榎東遺跡、南北朝～江戸時代の高榎城遺跡、古墳・奈良時代の桜江遺跡、立谷川を挟んで直ぐ南には一の坪、梅ノ木遺跡が位置している。特に中里B遺跡からは本遺跡と同時期の9世紀代の集落が確認されており、何らかの接点があったことが想起される。

地形的には扇状地の扇端部にあり、湧水の存在する地域である。ここに、縄文時代から近世までの遺跡や遺物が数多く分布している。

また、中世の石造文化財である「清池の石鳥居」（県指定有形文化財）が清池の東、山寺街道と横街道（山形から天童へ通じる旧道）の交差点近く山寺の方向をむいて立っている。高さ3.87m、柱間3.0mの凝灰岩製で最上三鳥居の一つに数えられている。また本遺跡B調査区の目の前には高さ2.6mの「大宮龍殿の板碑」（天童市指定有形文化財）と笠石の径が1.82m、笠石を含めた高さが3.5mにもなる「六面石幢（笠仏）」（天童市指定有形文化財）が向かい合うように立っている。いずれも他に類例を見ない壮大なものであると伝えられている。この地には山寺山王21社の下7社の一つ、大宮龍殿のあったところであり、板碑には金剛界大日如来の種子（パーンク）が刻まれている。石幢は鎌倉時代以来阿弥陀浄土信仰とともに次第に庶民に広まり、地神信仰とも結んで室町時代には旅の守護の信仰が生じ、横街道沿いであって、往来の無事安全を祈る事から設けられたものと推定される。古刹で有名な山寺立石寺の足元で、その影響下にあった地域であることが推察される。いずれも鎌倉時代や南北朝時代に建立されたものといわれている。

本遺跡の登録名にもなった永源寺は永正16年（1519）に山形市七日町にある法祥寺の白円和尚が永源寺を建立したが、大永年間（1521～28）に天童高榎城主が寺を高榎の現在地に移し、今日に至っている。寺関係の古文書・記録類は幕末の火災により焼失している。過去帳などはそれ以後に記載されたものである。

本遺跡からは縄文時代や古墳～中世の遺構・遺物が多数検出された。中でも竪穴住居跡や掘立柱建物跡、河川跡などのほかに古銭（宋銭）、人骨などが出土した土坑墓が検出されたことは特筆される。それらの遺構・遺物を通して、本遺跡の特色や当時の人々の暮らし・社会の仕組み、他の集落との関連などが解明できる足掛かりにしていきたい。

III 遺跡の概要

1 遺跡の層序

今回の調査区は、遺跡の中央東側にあたり、南北に細長く位置している。当該地域は、清池工業団地の東側に位置し、削平・盛土された箇所が大半である。中には3m以上の攪乱もあり遺構の全容が把握できない所もある。

また、本遺跡は立谷川の北側に位置しており、検出された遺構で東西ないし、北東から南東にのびる河川跡が3条確認された。A区からB区北側にかけての微高地とC区中央から南側の微高地を区切るように東西に走る河道が想定でき、氾濫と安定を繰り返しながら流れていたものと思われる。調査区内でも立谷川に近づくほど、礫層が露呈している箇所が多くみられる。

基本層序Aでは、IからIIIまでに碎石を含む盛土があり、その下層1・2層に暗褐色ないしにぶい黄褐色土層(旧表土)があり、3層の暗褐色土層が奈良・平安時代の遺構確認面である。その下4・5層は黒褐色土縄文時代包含層または、落ち込み遺構で、6層に褐色微砂層が確認できる。基本層序Bでは、3層黒色土が1・2層の下層に落ち込んでいる。4層で遺構確認面に達する。B区河川跡周辺のため氾濫時の堆積が想起される。C区は比較的削平・盛土が避けられた地域である。基本層序Cでは、I層表土層下層に暗褐色シルト層が展開し、奈良・平安時代の遺構が確認できる。基本層序Dでは、I層表土層の下層に遺物を若干包含する黒色土層が展開する。3層にぶい黄褐色シルト(地山層)が広がる。傾向として、褐色土が、薄い黒色土下層に入り込む層の堆積を確認でき、河川の氾濫等が影響していると思われる。礫層も褐色地山面の間から出ている。

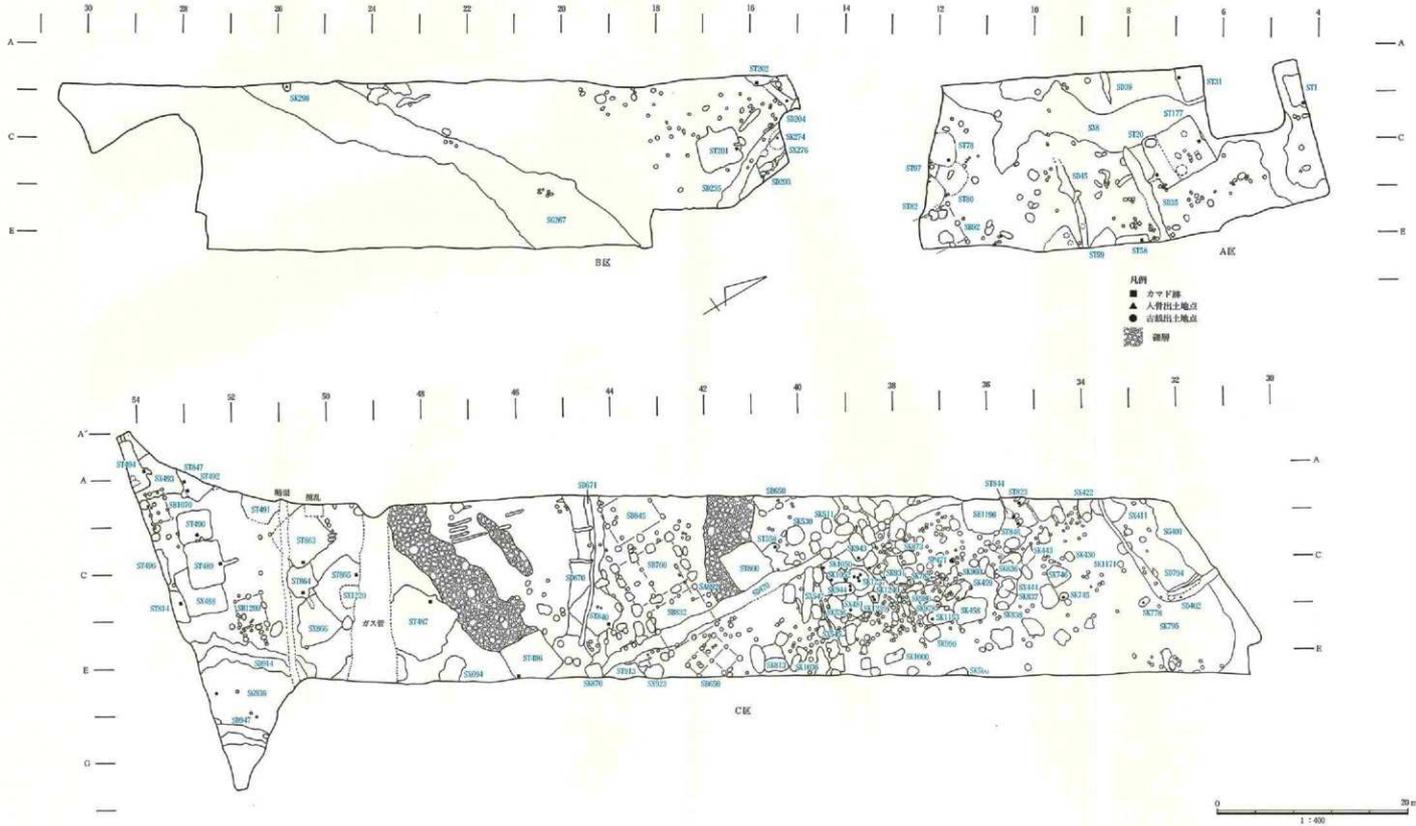
2 遺構と遺物の分布

調査で検出された遺構は、竪穴住居跡32棟、掘立柱建物跡8棟、柵列1基、河川跡3条、溝・畝状遺構40条、土坑155基、ピット687基、性格不明遺構93基で、登録遺構は、1,018を数える。主体となる遺構は、奈良・平安時代のものである。

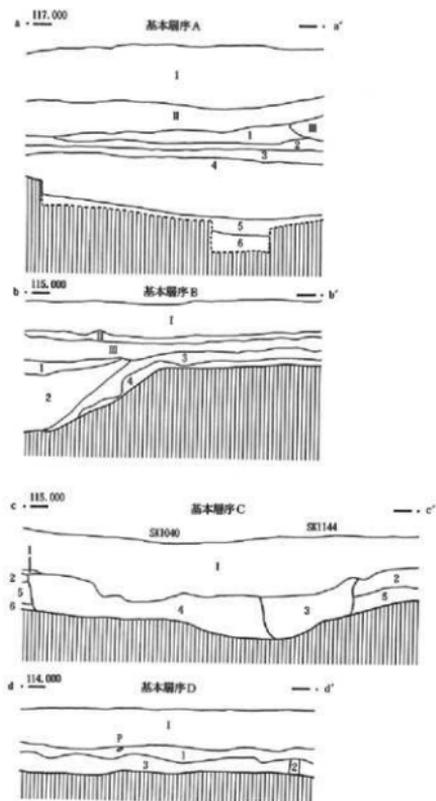
縄文時代の遺構は、A区で竪穴住居跡がほぼ床面で確認され、集落はA区を南北に検出された落ち込み遺構南東辺の若干の微高地に形成したと思われる。上面に包含層が展開しているが、遺物が散見されるのみで、縄文中期大木9式から弥生までの土器片と石器片が出土している。

奈良・平安時代の遺構は、A区・B区北側とC区南側に竪穴住居跡が検出されている。A区・B区の集落では、8世紀後半から9世紀半ばにかけての土器とともに、鉄製の紡錘車が、出土している。B区南側の河川跡周辺になると遺構がまばらになる。C区南側の集落は、8世紀後半から10世紀まで継続しており、時代が下るにつれて南側から検出される傾向がある。また、C区中央からは、掘立柱建物跡が検出され、南北にのびる区画溝とほぼ同軸の建物もある。

中世の遺構は、B区・C区で土坑・土坑墓が検出され、古銭や中世陶磁器、石製品、鉄製品が出土している。中には、人骨を含む遺構が確認され、当地域が一時期墓域として使用されていたことを想起させる。

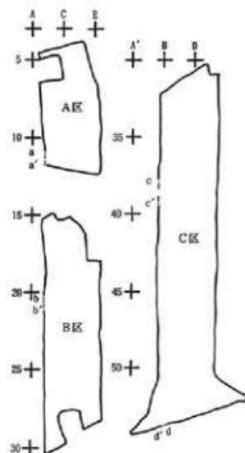


第4図 遺構配置図 (S=1:400)



基本層序

- A
- I 5Y 4/3 暗オリーブ色凝灰質砂 (黄土)
 - II 2.5Y 2/1 黄褐色シルト質砂 (黄土)
 - III 2.5Y 2/2 黄褐色粘灰質砂 (黄土)
 - 1 10Y R 2/4 暗褐色シルト質砂 (紅土)
 - 2 10Y R 4/3 に近い黄褐色シルト質砂 (紅土)
 - 3 10Y R 3/3 暗褐色シルト質砂 (赤黄・中黄土山)
 - 4 10Y R 2/2 黄褐色砂質シルト (黄文土山)
 - 5 10Y R 4/4 褐色砂質シルト (黄文土山)
 - 6 10Y R 4/6 褐色砂 (黄文土山)
- B
- I 2.5Y 2/3 暗オリーブ粘粉質砂 (黄土)
 - II 2.5Y 2/1 黄褐色粘土質シルト (黄土)
 - III 10Y R 2/2 黄褐色砂 (白土)
 - 1 10Y R 2/2 黄褐色シルト質砂 (地山)
 - 2 10Y R 4/4 褐色シルト質砂 (地山)
 - 3 10Y R 1.7/1 褐色シルト質砂 (白土)
 - 4 10Y R 4/6 褐色シルト質砂 (地山)
- C
- I 2.5Y 2/2 黄褐色砂質シルト (黄土)
 - 1 10Y 2/1 褐色砂質シルト (粘土)
 - 2 10Y R 3/3 暗褐色砂質シルト (粘土)
 - 3 10Y R 2/1 黄褐色砂質シルト (SK 1144 層上)
 - 4 10Y R 2/3 黄褐色砂質シルト (SK 1040 層上)
 - 5 10Y R 4/4 褐色砂質シルト (地山)
 - 6 10Y R 3/3 暗褐色砂 (地山)
- D
- I 2.5Y 2/2 黄褐色砂質シルト (黄土)
 - 1 10Y R 2/1 褐色粘土質シルト (粘土)
 - 2 10Y R 2/1 黄褐色砂質シルト
 - 3 10Y R 4/3 に近い黄褐色砂質シルト (地山)



第5図 遺跡層序

IV 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 検出遺構

竪穴住居跡群は、A区南辺で4棟検出され、上部の削平のためほとんど床面で確認された。S T78で東側に炭化城(一部火床)がみられる他は、炉跡と思われる施設は他の竪穴住居では確認できなかった。形状は、不整形円形ないし楕円形で、小柱穴・浅い掘り込みの周溝が確認できる。3~4重に切り合うため柱穴の所属が曖昧であるが、覆土の様子から判断した。住居中央のやや大きめのピットは遺構内土坑の可能性もある。遺物については、床面直上で、縄文時代後期中葉から末葉にかけての粗製土器が散見する。出土点数は、S T78・16点、S T80・9点、S T80・3点、S T97・1点である。

A区縄文時代包含層の下層から落ち込み遺構S X 8が検出され、調査区を南北に20cm程の浅い

表-1 検出遺構一覧

遺構番号	押図	位置(グリッド)	規模(cm)	深さ(cm)	形状	長軸方向	備 考
ST78	6	B11~C12	370×260	4	不整形円形	N-90°-E	貼床・小柱穴6本・炭化城(地床伊力)あり、周溝あり、ST80→ST82→ST97→ST78
ST80	6	C11~D11	370×340	6			貼床・小柱穴9本、SK96から切られる
ST82	6	C11~D12	392×260	8	楕円形力	N-10°-W	貼床・小柱穴16本、周溝あり
ST97	6	C12	196×132				貼床・小柱穴1本、周溝あり、SK81から切られる
SK81	6	C12	50×45	2	楕円形力	N-35°-E	ST97を上から切る
SK96	6	C11	105×98	12	不整形楕円形	N-10°-W	ST80を上から切る
SK8	7	B4~B11	4,200×550	25	南北に蛇行	N-55°-E	縄文時代の落ち込み遺構
SK14	7	C5	90×80	15	楕円形	磁北	
SK30	7	D6	85×45	18	楕円形	N-70°-W	
SK32	7・8	D6~D7	97×67	23	楕円形	N-20°-E	縄文土器小片出土
SK113	7	D8	95×55	30	不整形楕円形	磁北	
SK116	7	D9	150×60	25	不整形楕円形	N-20°-E	上面にSD45あり
SK164	7	C8	100×40	40	円形力		SK35から切られる
SK165	7	C8	66×54	20	楕円形	N-40°-E	
SK43	7	C9	44×40	15	円形		
SK51	7	C10~C11	125×100	18	楕円形	N-65°-E	
SK54	7	D9~D10	70×44	10	楕円形	N-45°-E	SK55を切る
SK55	7	D10	75×70	10	楕円形	N-70°-W	
SK56	7	D10	105×85	18	楕円形	N-50°-W	
SK63	7	D10~D11	140×45	10	南北長い楕円形	N-50°-E	
SK68	7	D10~D11	115×70	25	楕円形	N-20°-W	
SK50	7	C10	50×50	7	円形		
SK129	7	B10	75×66	20	隅丸長方形	磁北	落ち込み下層
SK69	7	D10~D11	90×50	10	楕円形	N-30°-W	
SK84	7	D11~D12	105×95	25	隅丸長方形	N-35°-E	SK95に切られる
SK94	7	D12	110×92	22	不整形楕円形	N-75°-W	
SK95	7	D11~E12	152×130	13	不整形楕円形	N-50°-E	
SK73	7	C11	80×60	20	楕円形	N-60°-E	
SD35	7・8	C7~C8	760×120	48	東西に貫流	N-85°-W	SD39とつながるか
SD39	7・8	A8	380×70	38	東西に貫流	N-63°-W	
SK505	8	D38	97×67	23	楕円形	N-68°-W	底面に浅鉢1個体出土

※数値はすべて現存長を示した。

堆積がある。調査区中央やや北寄りが若干深い。包含する遺物は僅かで、縄文・弥生時代の土器・フレーク等の小破片67点である。上層の包含層から15点の小片が出土している。いずれも土器様相を推し量るには困難な資料である。

主な溝状遺構・土坑について考察してみる。S D35・39はA区を東西に横切る。S D35は、A区東側から中央にかけて検出され、断面形は、途中段があり開口部に向けて緩やかに立つ。最下層から、弥生土器壺口縁部小片が出土している。S D39は、A区西側から中央にかけて検出され、S D35と同一遺構の可能性があり縄文包含層の下から検出された。遺物は確認できなかったが、層位的に縄文・弥生の遺構である。S K32は、壁が緩やかに立ち上がり、平坦な底面である。東側壁側上層に縄文土器小片が出土している。S K505はC区中央部で検出され、断面形はレンズ状で、底面が平坦である。S P793の西側を切る。底面から浅鉢が出土している。出土点数は少なく2点である。出土品の様相から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。奈良・平安時代の遺構確認面ではば検出できる。

以上のことから、A区からC区まで縄文・弥生時代の遺構がみられるが、中心となるのは、集落を含み一定の遺構が検出されたA区落ち込み東側と考えられる。

(2) 出土遺物

A 出土土器

第Ⅰ群土器（縄文時代中期後葉）

中期後葉の土器で、C区南側、A区S X 8から少量の出土がある。C区南から出土した土器(1)は、体部のみの小片であるが、縦位の∩字状文が施され、縄文が充填されていることがわかる。大木9式と考えられる。

第Ⅱ群土器（縄文時代後期中葉～末葉）

縄文土器後期の磨り消し縄文や貼瘤をもつものや、粗製土器でも同時期と思われるものを挙げた。量的には、主体となる土器群である。

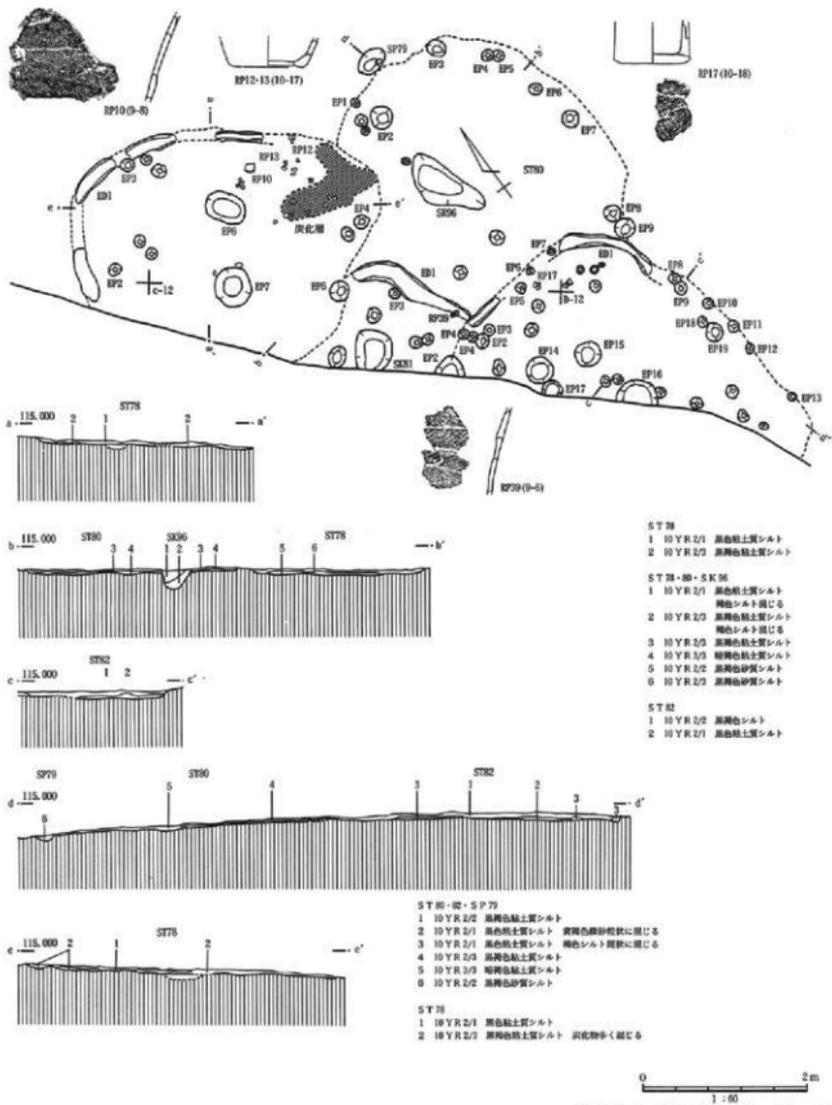
・第Ⅰ類土器（2・4・5・20）

口縁部端部、体部上半に貼瘤を伴う土器群を指す。(2)は、口縁部貼瘤直下に2本の平行沈線を巡らし、その区画内を研磨している。その下に縄文帯を巡らしている。(4)は、外面横位の沈線を巡らし、研磨調整をしている。内面は無調整で、壺あるいは注口土器を想定できる。体部中位に沈線が途切れ、丸く大きな貼付痕が残存しており、大突起が貼られていた可能性がある。(5)は、貼瘤の想定できる口縁端部を欠くが、横位の沈線に区画された縄文帯が(2)と類似しており、この類型に当てはまると思われる。なお、体部無文で壺を想定できる(20)は、(4)と同一個体の可能性がある。

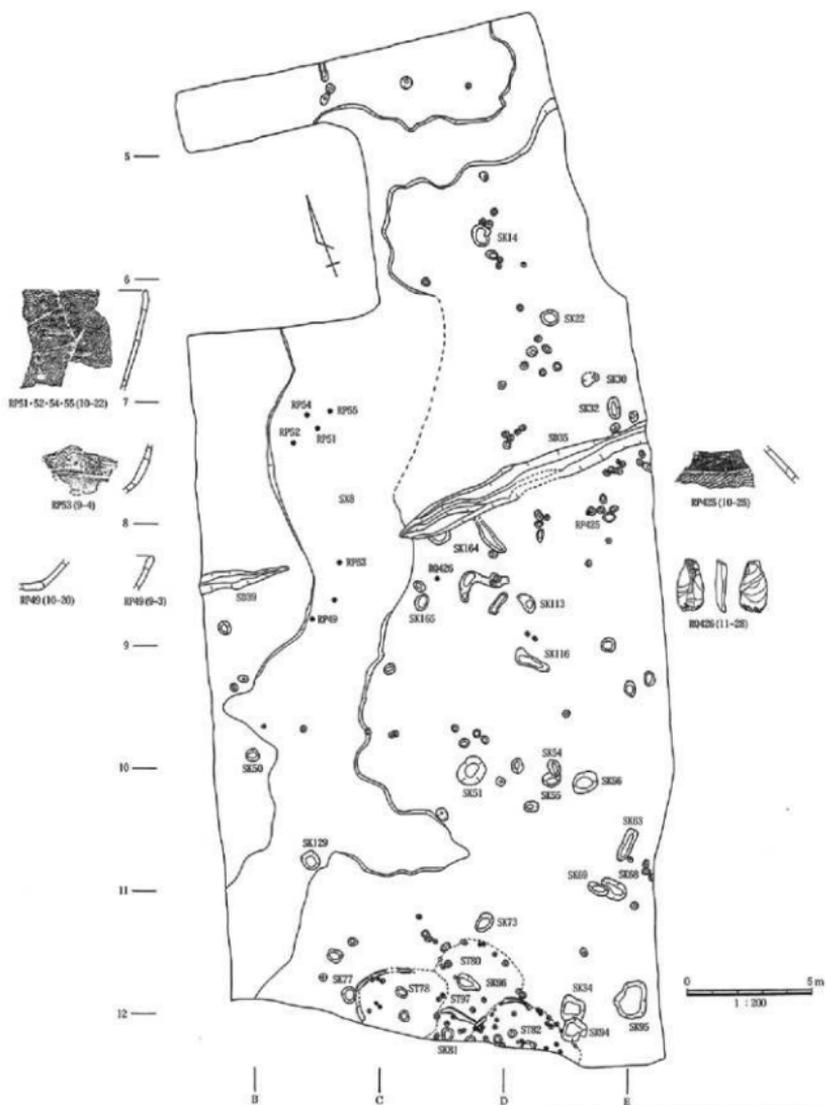
・第Ⅱ類土器（6・7）

頸部の沈線で区画された縄文帯に、垂下蛇行あるいは円状に曲がる沈線をもつものである。(6)は、沈線間はやや広く、円状に曲がる沈線を施す。口縁部がやや肥厚する。(7)は、口縁部直下に2本の沈線を巡らし、縄文を充填したのち、斜め蛇行する沈線と刺突を施している。体部は、直立し研磨されている。底部は磨滅している。

遺構と遺物

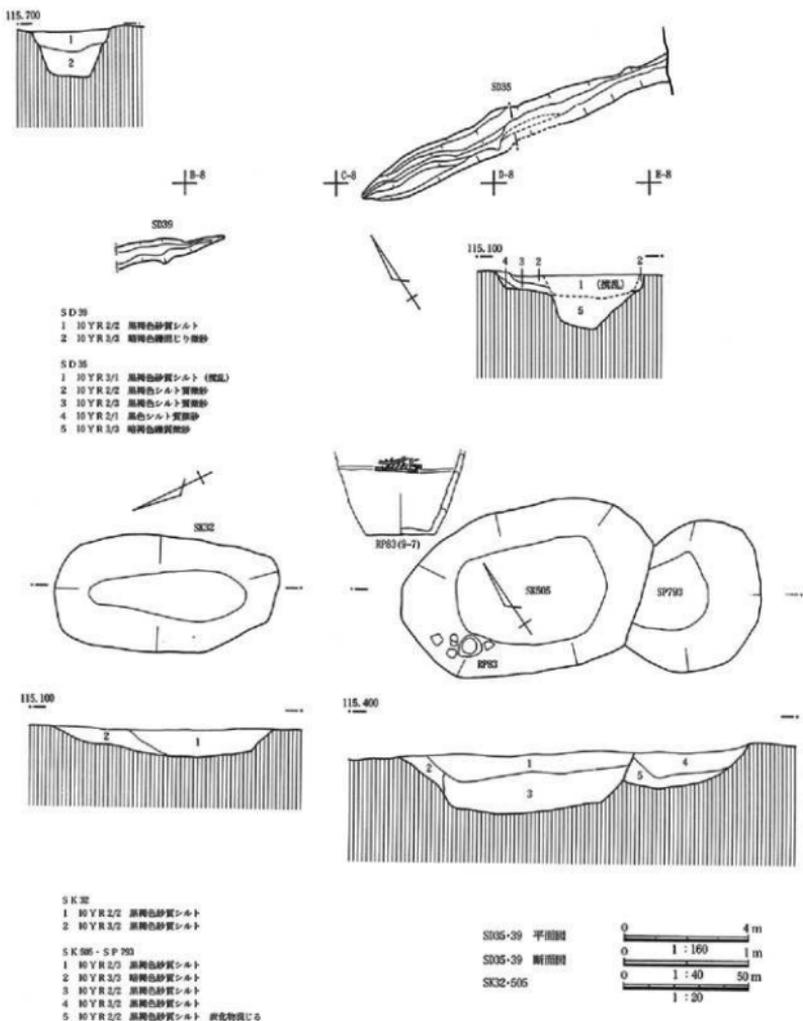


第6図 ST 78・80・82・97



第7図 A区縄文時代遺構配置図

遺構と遺物



第8図 SD35・39・SK32・505

・第3類土器（3・9～19）

器面が縄文あるいは無文となるために特徴的な文様帯を持たない土器群を一括して挙げた。(3)・(10)は無文で口縁部が直立する。(3)は口縁端部が肥厚する。(9)・(11)は縄文を想定でき、(9)は直立する、(11)はやや外反する口縁部をもつ。(12)は、口縁端部直下から撚糸文を施す。内面に若干の研磨をしている。以上口縁部の形態をみだが、平縁で波状のものは、本調査においては出土しなかった。(8)は、頸部で屈曲して立ち、口縁部は無文帯を施す形態で、渡戸遺跡第16類土器にも同じ様相の土器が挙げられている。(14)・(15)は、粗製土器の体部で地文縄文である。(15)が口縁部にかけてやや外反する。(13)・(16)・(17)・(18)・(19)は、無文の底部を挙げた。底部からやや外反して立つ(16)・(17)、ほぼ直立して立ち上がる(18)、内傾して立ち上がる(19)がある。(13)は底部のみで立ち上がりまでは判断できない。網代痕を残す。

・第4類土器（23）

粗製土器で、地文疑似縄文で、直立する口縁部をもつ(23)。

第Ⅲ群土器（縄文時代晩期）

粗製土器で地文縄文のものが出土している。地文縄文で、口縁部がやや外反して無文帯が巡る(21)、地文結節で直立する口縁部をもつもの(22)がある。

第Ⅳ群土器（弥生時代）

ここでは、標記の時期が想定できるものを挙げる。(24)は口径のやや広い甕を想定できる。頸部に沈線を巡らし、口縁部から頸部に丁寧なナデ調整を行っている。(25)は、壺の肩部を想定でき、縄文、沈線を施した後に、頸部にかけて丁寧なナデ調整を行っている。

B 出土石器・石製品

ここでは、本調査で出土した石器・石製品を挙げる。

削器は(26)の1点のみで、剥片の左側縁に連続的に調整加工して、刃部を作り出している。刃部は、摩耗しており、使用された頻度が多かったことが想定できる。

石匙は(27)の1点のみで、横形で、つまみの付く位置が刃部の中心より一方に偏っている。刃部が丸く調整加工されている。

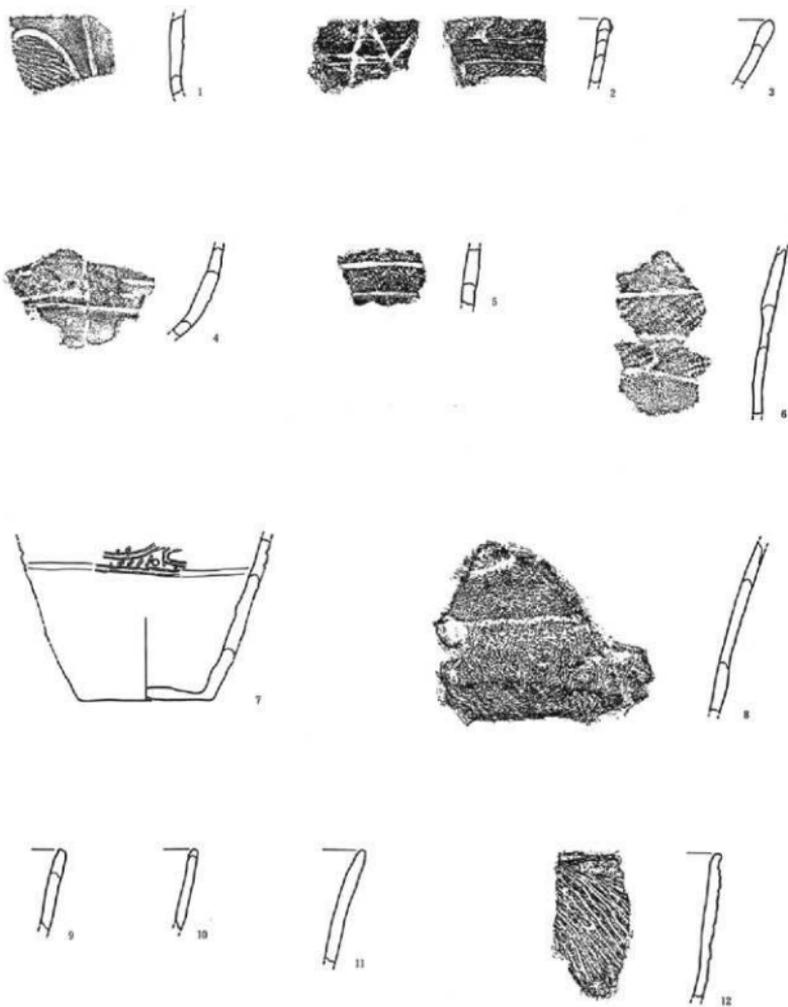
(28)は、二次加工のある剥片で、剥離調整した後、幅の広い面に加工調整を行っている。形状として完全な製品ではないものである。

磨製石斧は(29)の1点のみである。両側縁を面取りする態状で、基部と刃部の間に若干の窪みをもつ。使用による刃部の刃こぼれがある。

磨石は(30)の1点のみである。断面形が球状を呈する。多少扁平しており、使用された痕跡を残す。

石皿は(31)の1点のみである。大形の扁平な三角形の形状で、中央部が緩やかに窪み、使用痕跡がある。

(32)は、不明石製品で中央部に穿孔がある。孔は貫通している。2分の1が欠損しており全体としての形状は判断できないが、装身具の可能性もある。石材が安山岩であり、翡翠などではなく、身近な石材を用いている。



第9図 縄文土器



第10図 縄文・弥生土器、石器

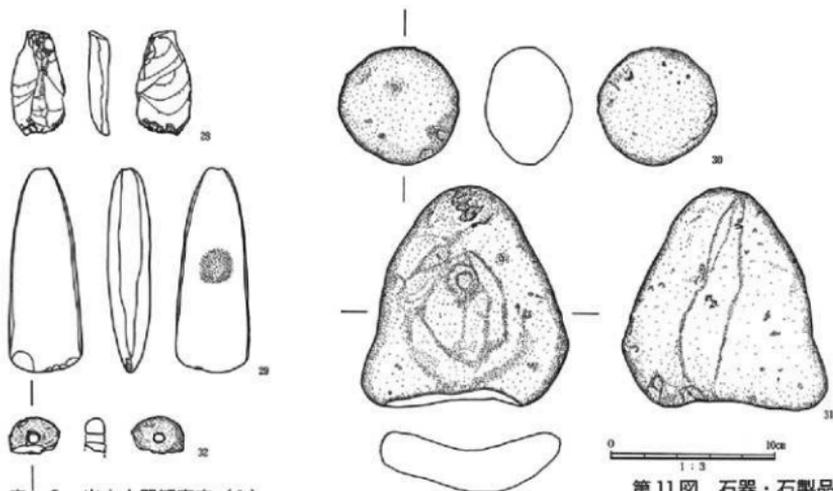


表-2 出土土器観察表(1)

第11図 石器・石製品

図番号	出土遺構	R.P.番号	器種	部位	口縁形状	計測値(mm)		胎土	焼成	文様	焼文	備考
						長さ	器厚					
9	C 底層		深鉢	外底	平縁	7.9	細砂質	良	白字文	焼文なし	内面ナズリ、外面ミガキ	
	S2028・陶		深鉢	口縁部	平縁	6	細砂、石灰質	良	平行波線、點線	焼文なし	内面ナズリ、ミガキ	
	S2028a	49	浅鉢力	口縁部	平縁	6	細砂質	良	焼文	焼文	内面ナズリ	
	S2028b・陶	53	腹力	外底		8	細砂、礫砂、石灰質	良	平行波線、點線	焼文	外面波線状ナズリ、内面波線状	
	S6401 底力		深鉢	外底		8	細砂質	良	平行波線	焼文なし	内面波線状ナズリ、外底ミガキ	
	S737	39	深鉢	外底		8	細砂、石灰質	不良		焼文なし	内面ナズリ、外底ミガキ	
	S7005	83	浅鉢	底面-体部		8.0	粗砂、石灰質	良	平行波線、内面波線	焼文なし、焼文	口縁部に焼文等あり	
	S778	10	深鉢	外底		7	細砂、石灰質	不良		焼文なし、焼文	口縁部に焼文等あり	
	S780		深鉢	口縁部	平縁	8	細砂、石灰質	不良		マメツ	二次加飾	
	S7001		深鉢	口縁部	平縁	7	細砂、礫砂、石灰質	不良		焼文	口縁部に焼文等あり	
10	30		深鉢	口縁部	平縁	8	粗砂、石灰質	良		マメツ	二次加飾	
	12	S778	深鉢	口縁部	平縁	7	細砂、礫砂、石灰質	不良		焼文なし	内面ナズリ	
	13	S6401 C30a	391	深鉢	底面	8	細砂、石灰質	不良		マメツ	二次加飾	
	14	S232		深鉢	外底	6	細砂、礫砂、石灰質	良		焼文なし		
	18	S6401 C30b	390	深鉢	外底	8	粗砂、礫砂、石灰質	良		焼文	内面ナズリ、外底ミガキ	
	19	C2	190	深鉢	底面	口底	11	細砂、礫砂、石灰質	良		焼文	内面ナズリ、外底ミガキ
	17	S778	12・13	浅鉢	底面	底	7	細砂、石灰質	不良		焼文	二次加飾
	16	S782	17	浅鉢	底面	口底	11	細砂、石灰質	不良		マメツ	二次加飾
	20	S6401 C30c	392	深鉢	底面	口底	12	細砂、礫砂、石灰質	良		焼文	水滲
	20	S2028b	49	腹力	外底		7	細砂質	不良		焼文	外面ミガキ、内面波線状
21	S25	228	深鉢	口縁部	平縁	8	粗砂、礫砂、石灰質	良		焼文なし	内面ナズリ	
	S25 底力	51・52・54・55	深鉢	口縁部	平縁	7	細砂、礫砂、石灰質、炭酸鈣付着	良		焼文なし	内面ナズリ、ナズリ	
	S25 底力(51)		深鉢	口縁部	平縁	6	細砂、石灰質	良		焼文なし		
	S25 底力		深鉢	口縁部	平縁	8	細砂、礫砂	良		平行波線→ナズリ	焼文なし	
	S25 底力	425	深鉢	外底		8	細砂、礫砂、石灰質	良		平行波線→ナズリ	焼文なし	

表-3 石器・石製品観察表

図番号	出土遺構	R.P.番号	器種	器種	計測値(mm・g)			製造時期	用途	石材		
					長さ	幅	重量					
10	28	S3955	256	石槌	刮磨	61.5	33.4	9.2	17.61	有	片割加工、刃部は左側縁	頁岩
	27	S4504	106	石槌	石槌	54	45	13	27.94	無	縁部4/5加工	頁岩
	28	C8	426	石槌	刮片	64	33	12	62.07	有	二次加工	頁岩
11	29	S4500	440	石槌	磨製石斧	124	44	25	218.16	有		安山岩
	30	S60		石槌	磨石	71.6	71	52	292.8	有		安山岩
	31	S60		石槌	石槌	130.9	106.5	25	600	有		安山岩
	32	30		石製品	不明石製品	31	22	12	81.5	有	中央に穿孔あり	安山岩

2 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、建て替えが行われたものを含めて28棟確認された。詳しくは、表4・5に記載したので、遺構と遺物の簡単な概略を述べることにする。遺構番号の次に付した()内には該当する遺構と遺物の押印番号を記載している。なお、遺物に関しては、関連する土坑などの遺物も含んでいるので、文章の中で説明を加えている。

ST1 (遺構・第12図、遺物・第14図33~40)

A4~B4Gで検出された。北側は、個人の水道管が付設されており、南側半分のみ調査となった。平面形は、およそ4m内外の長方形と推定される。柱穴は1基、南東側に赤焼土器甕を伴う貯蔵穴が検出されている。カマドは、東壁中央に付設され、調査区の設定で南側のみ袖部を検出した。西壁寄りにも土師器片を含む焼土層が広がっている。出土遺物について述べる。須恵器蓋(33)は、器高がやや低く、口縁部が軽く屈曲する。天井部の切り離しは回転糸切である。須恵器瓶(34)は、底部直上から直立する体部をもつ。(35)・(36)は、赤焼土器甕で、器面調整が前者はロクロナデ、後者はカキメの後ヘラ削を施している。(37)~(40)は、土師器甕である。(38)・(39)は、体部が直線的に立ち、口縁部が外反する。(37)・(40)は体部が丸く膨らみ、口縁部が緩やかに外反する。(37)は小型甕である。出土土器の点数は、須恵器が11点、赤焼土器・土師器は113点である。

ST31 (遺構・第12図、遺物・第14図41~第15図51)

B6~C6Gで検出された。北側は、電柱が付設されているため南東側の調査となった。平面形は、現存長は3m四方であるが、4m内外の隅丸長方形と推定される。柱穴は3基、焼土塊を多量に含む貯蔵穴が1基検出されている。カマドは、南壁西寄りに付設され、浅い残存のため北側に広がる焼土層を確認し、一部袖部の痕跡を残すのみである。出土遺物について述べる。(41)~(44)は、須恵器坏で、底部切り離しは、(42)がヘラ切であるのを除いて回転糸切である。(41)・(42)・(43)は底径が小さく、体部が直線的に立ち上がる器形である。(45)~(50)は土師器甕である。(45)は、小型甕で体部が膨らみ、口縁部が短く外反する。(46)・(48)は体部が膨らむ器形である。(48)の底部に編み物圧痕がみられる。(47)は、口縁部が短く外反する。(49)・(50)は長胴甕で器面をハケ目・ヘラナデで調整し、直線的に立つ体部に強く外反する口縁部が付く。(51)は、金属製の紡錘車で円盤部と片方の軸部のみ出土した。出土土器の点数が、須恵器12点、赤焼土器・土師器202点である。

ST58・59 (遺構・第13図、遺物・第15図52~53)

ST58がD8~E9G、ST59がD9~E9Gで検出された。いずれもA区東側で確認されたが調査区の設定により東側が未調査である。平面形は、半分が未調査のため不明な点が多いが概ね3m内外の台形ないし長方形を推定できる。東側の調査区際壁面の層序によりST59が58に切られているのが確認できる。ST58の柱穴は3基確認された。ST59は北西隅に1基検出された。出土遺物は、須恵器坏(52)、蓋(53)がある。(52)は、底部切り離しがヘラ切で、直線的に立つ。(53)は、器高がやや低い。出土点数は、須恵器2点、赤焼土器・土師器6点である。

表-4 竪穴住居跡観察表

遺構番号	グリッド	平面形	北緯方位 (度)	面積 (㎡)	埋没 深 (m)	築 年	床 状	壁 状	遺構 状況	遺構の内部 (柱穴、敷居など)	カマド	調査年度	備 考
S11	A4~B4	長方形	8-90°-E	3.5×2.0	19	上層部	平	貼		南西側壁に、南壁基部に竪穴1	北壁中央		調査区設定により西側を調査
S131	B6~C6	隅丸長方形	8-167°-E	3.3×3.9	12	やや浅	平	貼		南壁基部に、カマド基部付、カマド基部跡(土粒多量付)	南壁東寄り		調査区設定により西側を調査
S135	B6~C7	隅丸長方形	8-177°-E	7.5×1.8	10	やや浅	平	貼	埋没全	壁面から等間隔に柱穴4基	南壁東寄り	S117~20	SPI152・156から切り取る
S117	B6~C7	隅丸長方形	8-3°-E	5.4×4.4	12	やや浅	平	貼		南壁基部に、カマド基部付、カマド基部跡(土粒多量付)	北壁中央	S117~20	調査区設定により西側を調査
S138	D6~E9	曲形	8-13°-E	3.5×0.9	24	やや浅	平	貼		南壁基部に柱穴1基、カマド基部跡(土粒多量付)		S159~58	調査区設定により西側を調査
S139	D6~E9	長方形		3.0×2.1	32	埋没全	平	貼		北壁基部に柱穴1		S159~58	調査区設定により西側を調査
S152	A15~A16	隅丸長方形	8-167°-E	2.1×1.9	6	上層部	平	貼		北壁基部に柱穴1	南壁東		調査区設定により西側を調査
S161	B16~C17	西側に寄り出しのある長方形	8-15°-E	4.7×4.5	30	やや浅	平	貼		壁にそって小柱付、カマド基部跡(土粒多量付)	北壁東寄り		
S133	A35~B35	隅丸長方形	8-10°-E	3.7×3.3	15	やや浅	平	貼		カマド基部に柱穴1	北壁東寄り	S123~044~546	調査区設定により西側を調査、両側S1186から切り取る
S144	A35~B35		8-13°-E	1.8×0.8	18	やや浅	平	貼			北壁	S123~044~546	調査区設定により西側を調査、両側S1186から切り取る
S146	B35	平長方形	8-32°-E	4.5×3.6	20	埋没全	平	貼		北壁基部に柱穴1	北壁	S123~044~546	調査区設定により西側を調査、両側S1186から切り取る
S159	D40~C41	平長方形	8-2°-E	4.4×4.4	5	上層部	平	貼		カマド基部に柱穴1	北壁西寄り	S159~000	壁面をSD70Cから切り取る
S160	D41~C41	ほぼ正方形	8-85°-E	4.4×4.2	5	上層部	平	貼		カマド基部に柱穴1	北壁	S159~000	壁面をSD70Cから切り取る
S136	B45~F46	ほぼ正方形	8-174°-E	5.0×4.0	10	上層部	平	貼	埋没全	壁面、北壁基部に柱穴1基、南壁基部に柱穴1基、カマド基部跡(土粒多量付)	南壁東寄り		調査区設定により西側を調査
S147	D47~E48	隅丸長方形	8-30°-E	7.0×7.0	20	やや浅	平	貼	埋没全	壁面、北壁基部に柱穴1基、南壁基部に柱穴1基、カマド基部跡(土粒多量付)	北壁中央		調査区設定により西側を調査
S190	D63~E64	隅丸長方形	8-16°-E	5.1×4.2	25	やや浅	平	貼		カマド基部に柱穴1、土粒跡	北壁中央		SD70Cを壁面、SD62から北壁基部を切り取る
S113	E43~E44	平長方形	8-12°-E	3.9×1.6	30	壁中	平	貼		北壁基部に柱穴1	北壁東寄り		調査区設定により西側を調査、SD70Cから切り取る
S193	A49~B50	隅丸長方形	8-90°-E	3.9×3.8	15	土	貼	北壁		北壁に柱穴1	南壁東寄り	S194~063	西側を壁面より切り取る
S194	B50~C50	平長方形	8-90°-E	3.7×2.2	15	やや浅	平	貼	北壁	北壁に柱穴1、南壁に柱穴1	南壁東寄り	S194~063	壁面をSD66Cから切り取る
S195	A51~A52	隅丸長方形	8-2°-E	4.3×3.9	20	やや浅	平	貼		北壁に柱穴1、南壁に柱穴1	北壁東寄り	S194~063	北壁をガス埋没により覆い、両側S1186から切り取る
S192	A52~A53	隅丸長方形	8-175°-E	4.0×2.4	10	壁中	平	貼		カマド基部に柱穴1、貯蔵穴1	南壁東寄り	S194~063	調査区設定により西側を調査
S197	A53~A54	隅丸長方形	8-176°-E	4.0×2.0	10	土	貼			壁面に柱穴1	南壁東寄り	S194~063	調査区設定により西側を調査
S194	A54~A55	長方形	8-8°-E	5.4×4.2	32	やや浅	平	貼	北壁	北壁基部に柱穴1、南壁に土器片(土粒多量付)	北壁東寄り		SD70Cを壁面、両側S1186から切り取る
S149	B51~C52	隅丸長方形	8-22°-E	5.4×4.9	30	やや浅	平	貼	北・東	南壁に柱穴1、カマド基部跡(土粒多量付)	北壁	S149~049	SD48を壁面、両側S1186から切り取る
S140	A52~B53	隅丸長方形	8-112°-E	3.5×3.5	8	上層部	平	貼		南壁に柱穴1、カマド基部跡(土粒多量付)	北壁	S149~049	SD48を壁面、両側S1186から切り取る
S181	A50~A51	平長方形	8-46°-E	4.8×2.5	0	やや浅	平	壁			北壁		調査区設定により西側を調査
S134	D52~D53	隅丸長方形	8-13°-E	3.5×1.7	10	やや浅	平	貼		カマドを南壁で東西に柱穴1	北壁		調査区設定により西側を調査、SD48を壁面
S146	B53~C53	隅丸長方形	8-16°-E	3.7×1.0	10	やや浅	平	貼	北壁	北壁に柱穴1	北壁		調査区設定により西側を調査

※※は埋没深を示した。

S T 20・177 (遺構・第16図、遺物・第17図54~78)

S T 20・177ともにB6~C7Gで検出された。S T 20の平面形は、隅丸長方形で、柱穴が四隅から等間隔に配置している。周溝が浅い掘り込みで全周している。カマドは、南壁東寄りに位置し、袖部が欠損しており、煙道部も基部のみ検出された。焼土層が燃焼部から煙道部に土器器片を含み広がる。S P 152・156が上層から掘り込んでいる。S T 177は、S T 20の貼床を外して検出した。平面形は隅丸長方形で、西南側壁面に柱穴4基が確認されている。貯蔵穴がカマド東側に位置し、土器器片を多量に含んでいる。カマドが、北壁中央に位置し、カマド南側から袖部の構築材が出土している。燃焼部は、東西に長く広がり、焼土塊・土器器片が散乱している。貼床下層からS P 138~142・149・S K 147が検出された。

出土遺物について述べる。S P 152から須恵器環(56)が出土している。底部の切り離しは回転糸切である。S T 20から須恵器(54)・(55)・(57)~(61)、土器器(62)~(65)、土製品(67)、石製品(68)、金属製品(69)・(70)が出土している。須恵器環(55)は、底部の切り離しがへら切で、底径がやや大きく逆台形の器形をしている。(56)は、回転糸切で、体部立ち上がりが直線的に外反する。高台付環(57)は、高台が欠損しているが、直線的に立つ。底部切り離しがへら切である。(58)~(60)は、須恵器蓋である。(58)は宝珠形つまみをもつ、丸味のある天井部をもつ。

表一五 カマド観察表

遺構番号	主軸方向	長さ (cm)	幅 (cm)	現存高 (cm)	総長さ (cm)	煙道長 (cm)	煙道幅 (cm)	煙道深 (cm)	遺存状態	燃焼部	袖部	煙道部
ST11EL	N-90° -E	100	88	25	64				良好	焼土塊散乱	西洋米甕蓋	
ST31EL	N-152° -W	180	104	18	(80)				不良	焼土層が北面に広がる	薄く残存	
ST20EL	N-177° -E	170	70	22		100	40	10	不良	焼土層が南側から南 煙道にかけて埋積	穴洞、南側に焼 土層が広がる	基部のみ検出
ST177EL	N-3° -E	140	196	20					不良	焼土塊散乱		
ST202EL	N-130° -E	70	70	20					不良	45cm楕円形の焼土塊埋 積		
ST201EL	N-15° -E	95	110	20	70				良好	カマド北面に埋積あり 、支脚あり	焼土層一部残存	煙道部から見て立ち 上がる
ST823EL	N-10° -W	160	100	20	140				良好	カマド北面に埋積あり	良好な残存状態	北西部米甕蓋のため 検出できず
ST844EL	N-20° -W	180	70	20					不良	カマド南側に東向きに 広がる	西側に一部残存	
ST846EL	N-29° -W	80	85	18	75				良好	火床南南側に広がる		3X441から切り取れ、 埋積のみ残存
ST558EL	N-2° -E	55	35	4					不良	積り状の燃焼部破断		西側に一部残存
ST487EL	N-30° -W	45	23	10					不良	新面にて埋積		
ST487EL	N-30° -W	192	88	15		25	3	10	不良	積り状の焼土塊埋積	穴洞、南側に埋 積がまじる	上面削平
ST840EL	N-16° -E	140	82	28		48	32	10	不良	積り状の上に深く埋積	穴洞、南側に埋 積がまじる	基部のみ検出
ST863EL	N-90° -E	108	116	14					不良	焼土塊散乱、灰い塊も みあり	穴洞、南側に埋 積がまじる	
ST864EL	N-90° -E	220	88	20	72	105	32	8	良好	焼土層が西側に広がる	北側にのみ残存	
ST865EL	N-4° -W	34	85	28					不良	火床面残存	南側に積り状の一 部埋積	
ST494EL	N-55° -E	118	54	32		50	35	20	不良	積り状の燃焼部破断	穴洞、南側に埋 積がまじる	表面被動
ST492EL	N-172° -E	155	70	13					不良	燃焼部北面に広がる	穴洞、南側に埋 積がまじる	
ST847EL	N-175° -E	68	50	10					不良	積り状の燃焼部破断		
ST489EL	N-18° -E	303	126	30	86	164	49	13	良好	南側に広がる	東側袖部長蓋、住 居の隅にカマド石な ど散乱	先端部に円形の埋み があり、土師器埋積 あり
ST490EL	N-120° -E	116	70	10	52				不良	南側に広がる		
ST491EL	N-46° -E	60	60	10					不良	円形の焼土塊		
ST814EL	N-15° -E	90	74	17					不良	土師器片・壺を多量に 含む楕円形の焼土塊埋 積、支脚あり	穴洞、南側に埋 積がまじる	

※長さは現存長で示した。

(59)は、器高が高く、口縁部が直立する。(60)は、器高がやや低く、口縁部が直立する。須恵器長頸瓶(61)は、口縁部から頸部まで残存し、やや長い口縁部が外反する。直立した口縁端部をもつ。土師器杯(62)は、内湾して立つ。土師器蓋(63)は、器高が低く、口縁端部内面に浅い溝を巡らす。(64)～(66)は、土師器甕である。体部が膨らむ(64)、体部直立の後に口縁部が外反する(65)、底部に木葉痕のある(66)が出土している。他に土製紡錘車(67)、砥石(68)、金属製品の鉄鎌(69)・釘(70)がある。土器の点数は、須恵器が33点、赤焼土器・土師器が207点である。

ST177の遺物について述べる。須恵器杯は、底径がやや広く逆台形の器形の(71)・(72)が出土している。(71)の底部切り離しはヘラ切である。赤焼土器甕は、大型の長頸甕で口縁部が外反したのち上端が立つ(75)がある。上層からの掘り込みの可能性がある。土師器杯(73)は、内湾しながら立つ。土師器鉢(74)は体部が内湾しながら立ち、口縁端部で外反する。土師器甕(76)は、直立する体部に外反する口縁部が付く。その他、カマドの周辺から土製紡錘車(77)、金属製紡錘車(78)が出土している。出土土器点数は須恵器10点、赤焼土器・土師器173点である。

ST202(遺構・第20図、遺物・第19図79～83)

A15～A16Gで検出された。平面形は、3～4m内外の隅丸方形か長方形かと思われる。東側隅のみの検出のため全容は把握できない。カマドは、住居南東壁に付設され、45cmの楕円形の焼土域が確認された。袖部・煙道部は上部削平のため検出できない。カマド周辺に土器片が散乱し

ている。出土遺物について述べる。(79)・(80)は須恵器環である。(79)は、やや底径が小さく、体部が直線的に外反する器形で、(80)は、体部が緩やかに内湾している。(79)の底部は回転糸切である。(80)・(81)は赤焼土器である。(80)は、口縁部が外反した後、上端が立つ。(81)は、体部が丸く膨らむ器形である。(82)は、土師器甕の底部で、木葉痕が認められる。出土土器の点数は、須恵器7点、赤焼土器・土師器77点である。

S T 201 (遺構・第20図、遺物第21図84~91)

B16~C17Gで検出された。平面形は、長辺4.7m、短辺4.5mの長方形である。西側に溝状の掘り込みが確認された。壁の残存も良く、やや垂直に立ち上がる。壁にそって小柱穴が巡りカマド西側に長径1mの貯蔵穴がある。カマドは、北壁東寄りに付設されている。カマド壁面が被熱し、支脚も出土している。袖部は、東側一部欠損している。煙道部は、燃焼部から鋭く立ち上がる。出土遺物について述べてみる。(84)・(85)は、須恵器環である。(84)は、やや底径が大きく、器形が逆台形になる。底部の切り離しは、ヘラ切をした後にヘラ削を施している。(85)は、底部が欠損しているが、底径が大きく、器形は逆台形を想定できる。(86)は、やや直線的に立ち上がる。切り離しがヘラ切である。(87)は、須恵器蓋で、器高が低く口縁部が軽く屈曲する。(88)は須恵器小壺で、やや長い口縁部が外反して、口縁端部が立つ。底部は、ヘラ削を丁寧に施す。(89)~(91)は、赤焼土器である。(89)は、蓋で器高が低く平坦な天井部をもつ。(90)・(91)は、甕で体部が内湾し、口縁部が外反した後上端が立つ器形である。出土土器の点数は、須恵器20点、赤焼土器・土師器251点である。

S T 823・844・846 (遺構・第22図)

S T 823は、A35~B35Gで検出された。西側は調査区の設定により、南側がS E1196からの破壊により確認できない。平面形が4~5mの隅丸方形か、または長方形と思われる。カマドの残存が良く、壁が内湾して立ち上がり、壁面が被熱している。北西部未調査で煙道が確認できない。S T 844は、S T 823の南側を切り、ほとんどカマド周辺のみを検出である。カマドから南側に炭化層が広がる。S T 846は、さらに両S Tの南側を切っている。カマドの燃焼部は、南側にのびる火床で確認し、袖部は東側がS X 441により壊されている。3棟のカマドはいずれも北壁に付設されている。出土土器の点数は、S T 823で須恵器3点、土師器1点のみである。

S T 558・800 (遺構・第23図、遺物・第21図92~第26図100)

S T 558は、B40~C41Gで検出された。西側と南側をS D 470・S T 800により破壊されている。更に、上部削平のため、ほとんど貼床での確認である。平面形は、現存長で長辺4.4m、短辺3.4mの不整長方形である。北壁西寄りに楕円形の燃焼部のみであるが、カマドと思われる施設を確認した。燃焼部に、カマドの構築材が多量に含まれる。支柱穴ではないが、遺物を含むピットを1基確認している。

出土遺物について述べる。(92)は、灰釉陶器碗である。底部の様相は掴めないが、推定で口径140mm、器高40ないし45mm程度と判断される。高台が欠損しているため、三ヶ月高台か角高台になるかは不明である。(93)は、須恵器甕の肩部である。外面タタキ、内面アテ痕の調整を

施している。(94)・(95)は、赤焼土器甕である。(94)は、中型で体部がやや内弯して、口縁部が外反の後、上端が少し立つ。(95)は、口縁部の調整は(94)とほぼ同じで、大型の体部が直立する器形である。(96)は土師器環で体部が直線的に立つ。(97)は、底部に木葉痕が認められる。出土土器の点数は、須恵器12点、赤焼土器・土師器102点である。

S T 800は、B 41～C 41 Gで検出された。平面形は、ほぼ方形で、ほとんど貼床での確認である。やや大きめの柱穴が北壁と東壁側に1基ずつ検出された。南東部に長径1.1mの貯蔵穴と思われる施設も確認されている。北側でS T 558を切っている。出土遺物は、須恵器で器高が低く、口縁部が屈曲する蓋(98)がある。口縁部が直線的に外反する赤焼土器環(99)、底部切り離しが回転糸切の赤焼土器環(100)がある。出土土器の点数は、須恵器2点、赤焼土器・土師器36点である。

S T 486 (遺構・第24図、遺物・第26図101～104)

D 46～F 46 Gで検出された。平面形は5m四方のほぼ方形である。調査区の設定により東側が未調査である。柱穴は、東南・北東に1基ずつ確認されている。カマドは、調査区東壁際に検出されたが、袖部・煙道部ともに確認されず、45cmほどの燃焼部のみの調査となった。出土遺物について述べる。(101)～(104)は須恵器である。(101)は、環で底径が広く逆台形の器形になる。底部の切り離しは、ヘラ切である。(102)は、高台付環で、底径が広い器形を推定できる。(103)は蓋で、口縁部が屈曲している。(104)は双耳杯で、直線的な立ち上がりの体部に斜方向の把手が付く。

S T 487 (遺構・第25図、遺物・第26図105～第27図115)

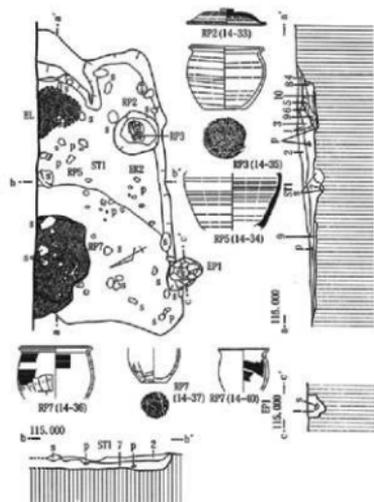
C 47～D 48 Gで検出された。南西側をガス管による破壊を受けている。平面形は、7m四方の大型の隅丸方形と推定される。周溝は浅い掘り込みが全周にまわっている。主柱穴は4基確認され、北側柱穴2基の間に、小柱穴が直線的にのびており、間仕切り遺構と思われる。カマドは、上部削平により細長の焼土域が確認できるのみで、袖部は欠損し、煙道部も基部がわずかに残るのみである。

出土遺物について述べる。(105)は、須恵器環で底径が広く、逆台形の器形である。底部の切り離しが、ヘラ切で、後にヘラナデ調整をしている。(106)は赤焼土器鉢で、外面がハケ目による器面調整をしている。(107)～(115)は、土師器である。(107)は、底部が欠損しているが、口縁部の様相から土師器甕と思われる。やや直線的に立ち上がり、口縁部が弱く外反する。頸部に沈線を回している。(108)～(115)は土師器甕である。(108)は、体部が直線的に立ち、頸部に沈線をまわす。外面の調整がハケ目で口縁部周辺をハケ目の後にナデ・ヘラナデを施す。(109)～(111)は底部～体部の資料であるが、体部が直立する(109)・(111)と、やや膨らむ(110)・(112)がある。底部に木葉痕が認められる。(113)は、大型で体部が丸く膨らみ、緩やかに外反する。(114)は、中型で体部が丸く膨らむ器形である。(115)は、体部がやや直線的に立ち、強く外反する。出土土器の点数は、須恵器2点、赤焼土器・土師器558点である。

S T 840 (遺構・第28図、遺物・第29図116～122)

C 43～D 44 Gで検出された。S D 670を上層から切る。S D 893から北東壁を切られる。平面形

遺構と遺物

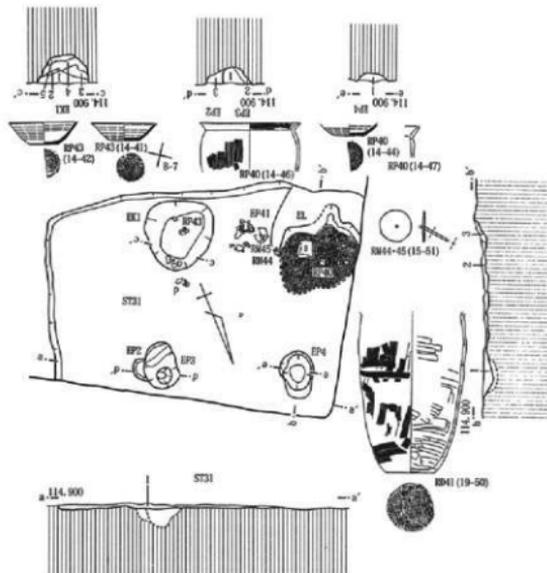


ST1

- 1 10 Y R 2/I 黒色砂質シルト 炭化物3%含む
褐色シルトブロック状に5%混じる
- 2 10 Y R 2/II 黒褐色砂質シルト 炭化物5%含む
褐色シルトブロック状に5%混じる
- 3 10 Y R 2/III 黒褐色砂質シルト 炭化物5%含む
褐色シルトブロック状に5%混じる
- 4 10 Y R 2/IV 暗褐色粘土質シルト 炭化物5%含む
褐色シルトブロック状に5%混じる
- 5 10 Y R 2/V 暗褐色粘土質シルト 炭化物10%含む
褐色シルトブロック状に10%混じる
炭6%含む
- 6 10 Y R 1.7/I 褐色粘土質シルト 炭化物10%含む
褐色シルトブロック状に10%混じる
(炭化層)
- 7 10 Y R 2/VI 黒褐色砂質シルト 炭化物3%含む
褐色シルトブロック状に3%混じる
- 8 10 Y R 1.7/II 褐色シルト (炭化層)
- 9 10 Y R 4/4 褐色シルト 腐植シルト塊状に20%混じる (炭化層)
- 10 10 Y R 2/III 暗褐色シルト 炭化物含む 地山混入
する

ST1 EP1

- 1 10 Y R 2/II 黒色砂質シルト 炭化少混じる
炭化物少し含む



ST31

- 1 10 Y R 2/III 暗褐色砂質シルト 炭化物少し含む
腐植を含む
- 2 10 Y R 4/III にふくまぬ暗褐色砂質シルト 褐色シルト
炭化物塊状に混じる
- 3 10 Y R 4/IV にふくまぬ暗褐色砂質シルト 遺物を含む
褐色シルトブロック状に混じる

ST31 EP2-3-4

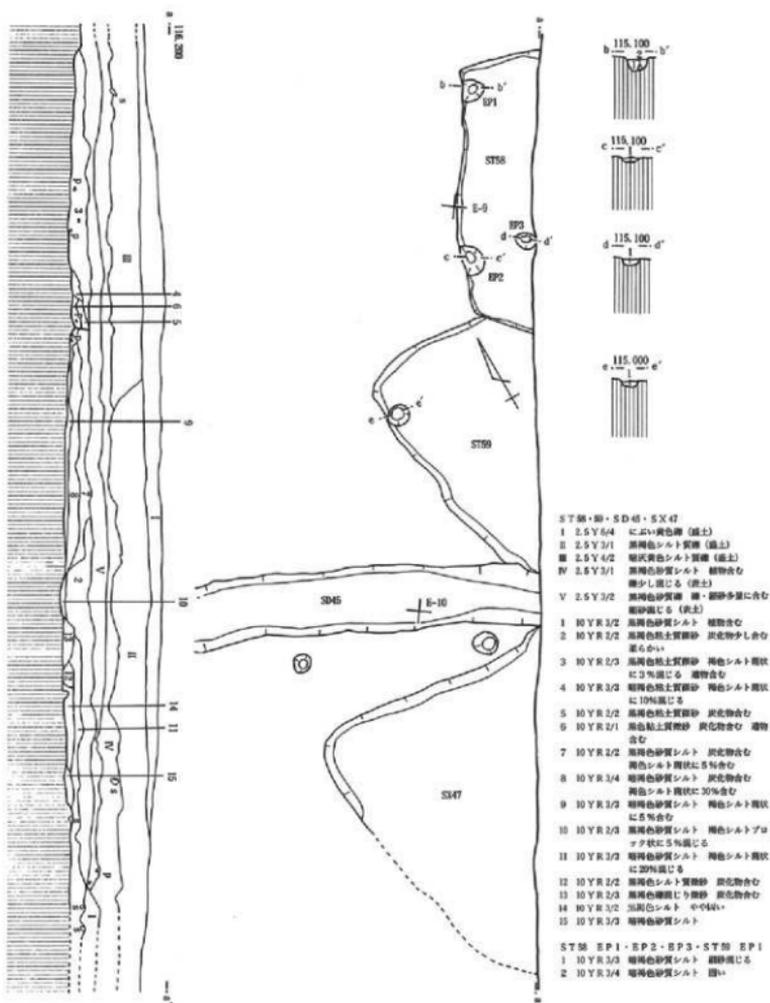
- 1 10 Y R 2/III 黒褐色砂質シルト 褐色シルトブロッ
ク状に10%混じる
- 2 10 Y R 2/IV 暗褐色砂質シルト 黒色シルト 褐色
シルトブロック状に10%混じる

ST31 EE1

- 1 10 Y R 2/IV 黒褐色砂質シルト 褐色シルトブロッ
ク状に10%混じる 炭化物を含む
- 2 10 Y R 4/III 褐色砂質シルト (粘土層)
- 3 10 Y R 2/II 黒褐色砂質シルト 褐色シルトブロッ
ク状に10%混じる 炭化物を含む
- 4 10 Y R 2/II 黒褐色砂質シルト 褐色シルトブロッ
ク状に10%混じる 炭化物を含む
- 5 10 Y R 2/III 暗褐色砂質シルト 褐色シルトブロッ
ク状に10%混じる 炭化物を含む



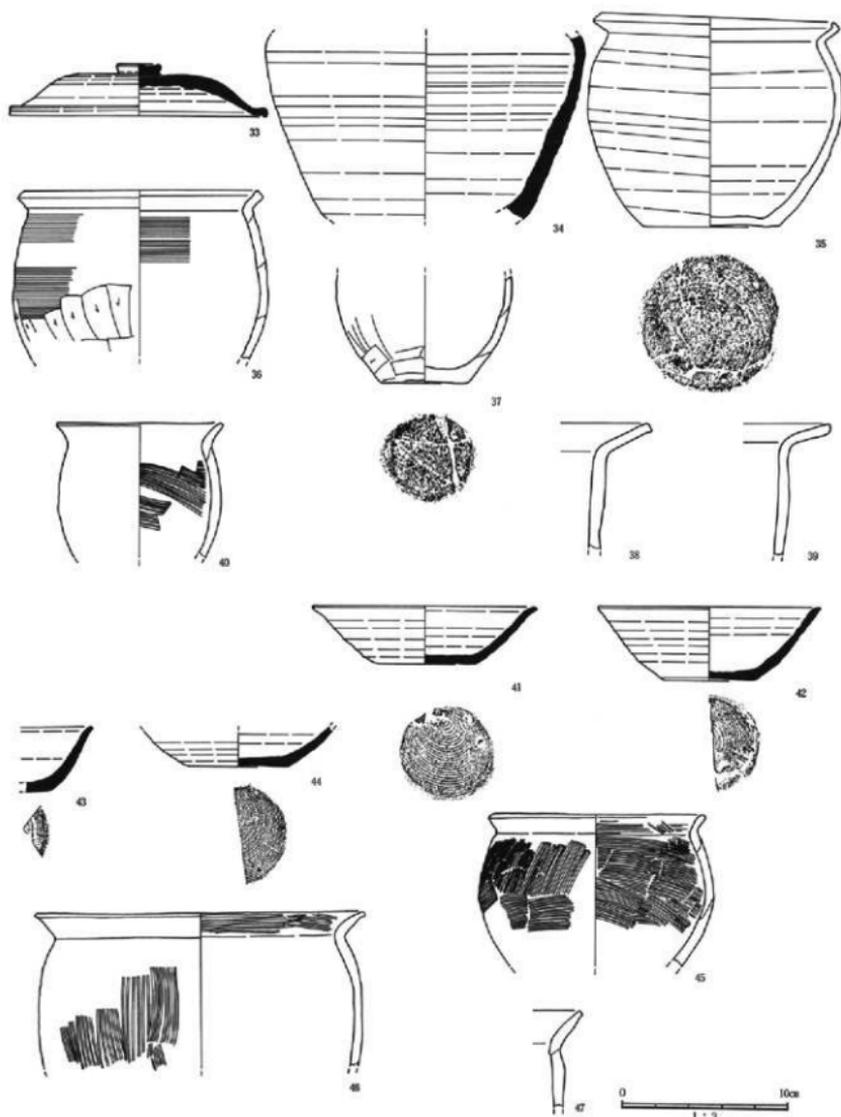
第12図 ST1・31



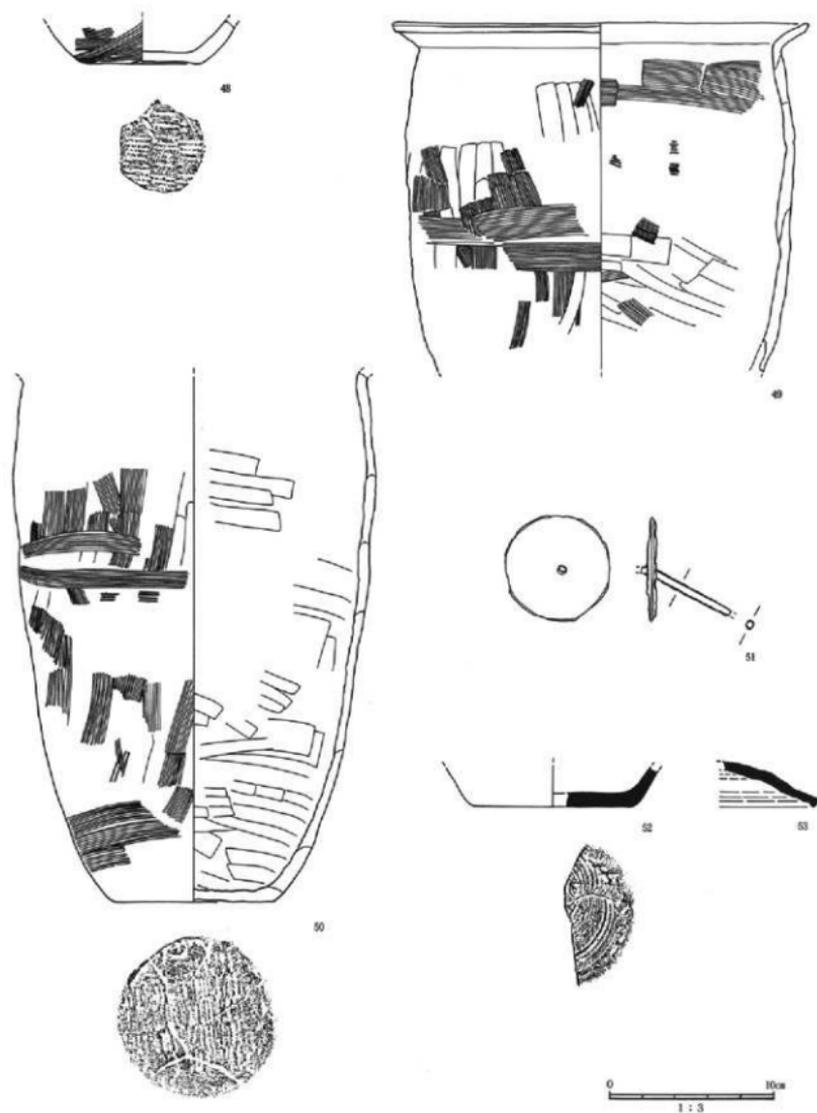
- ST 58・59・SD 45・SY 47
 I 2.5 Y 5/4 濃い黄褐色 (土上)
 II 2.5 Y 3/1 黒褐色シロト質礫 (土上)
 III 2.5 Y 4/2 埴輪色シロト質礫 (土上)
 IV 2.5 Y 3/1 埴輪色砂質シロト 埴輪跡に合む
 V 2.5 Y 3/2 埴輪色砂質シロト 埴輪跡に合む
 1 10 Y R 2/2 埴輪色砂質シロト 埴輪跡に合む (土上)
 2 10 Y R 2/2 黒褐色粘土質礫砂 灰化跡少し合む
 3 10 Y R 2/3 黒褐色粘土質礫砂 褐色シロト層状に3%混じる 埴輪跡合む
 4 10 Y R 2/3 埴輪色粘土質礫砂 褐色シロト層状に10%混じる
 5 10 Y R 2/2 黒褐色粘土質礫砂 灰化跡合む
 6 10 Y R 2/1 黒褐色粘土質礫砂 灰化跡合む 遺物合む
 7 10 Y R 2/2 埴輪色砂質シロト 灰化跡合む
 8 10 Y R 2/2 埴輪色砂質シロト 灰化跡合む
 9 10 Y R 2/2 埴輪色砂質シロト 褐色シロト層状に5%合む
 10 10 Y R 2/3 埴輪色砂質シロト 褐色シロトゾナ状に5%混じる
 11 10 Y R 2/2 埴輪色砂質シロト 褐色シロト層状に20%混じる
 12 10 Y R 2/2 埴輪色シロト質礫砂 灰化跡合む
 13 10 Y R 2/2 埴輪色砂質シロト質礫砂 灰化跡合む
 14 10 Y R 1/2 赤褐色シロト 砂・砂質
 15 10 Y R 2/2 埴輪色砂質シロト

0 2 m
 1 : 80

第13図 ST 58・59

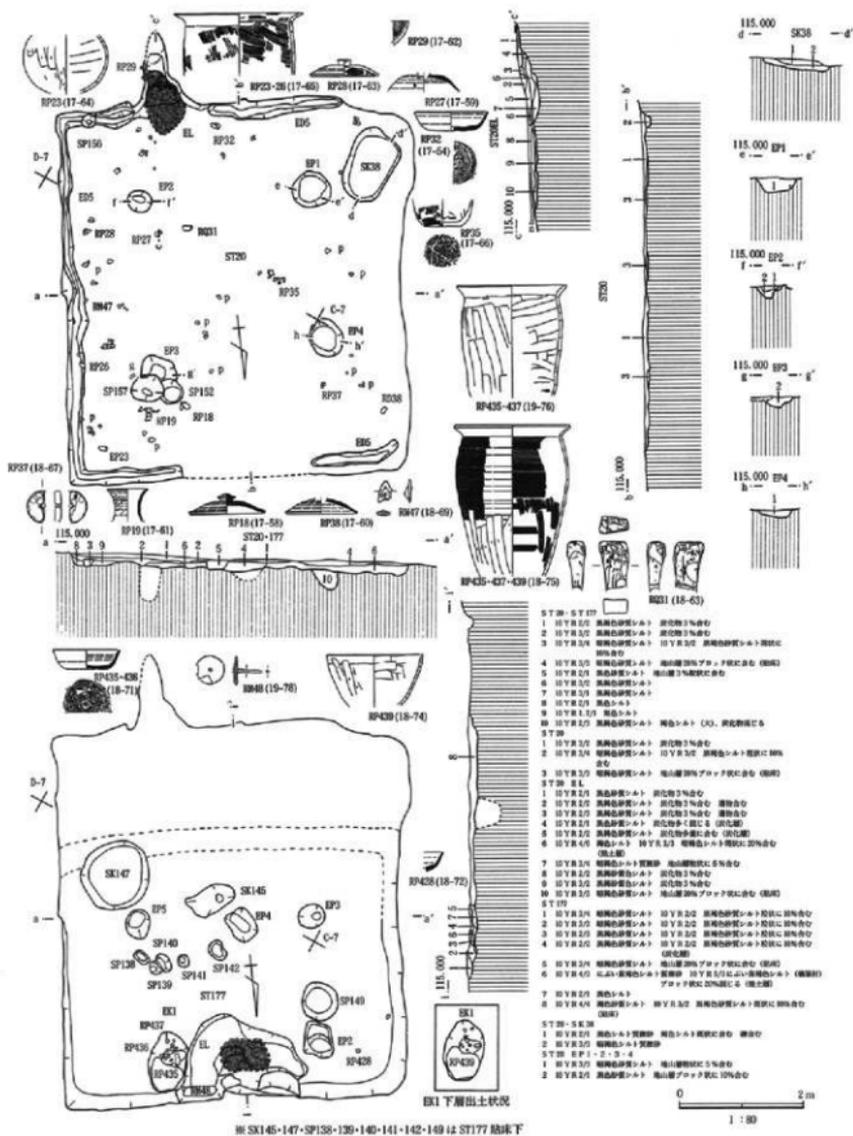


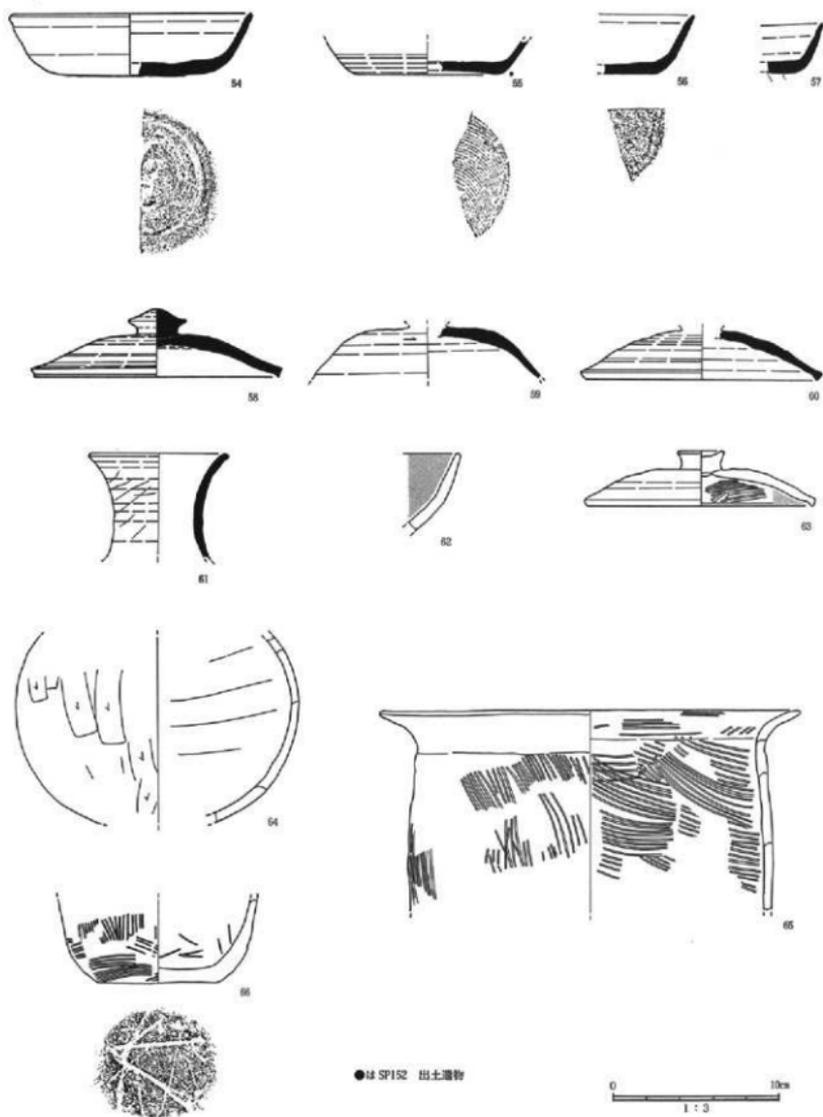
第14図 ST 1・31出土遺物



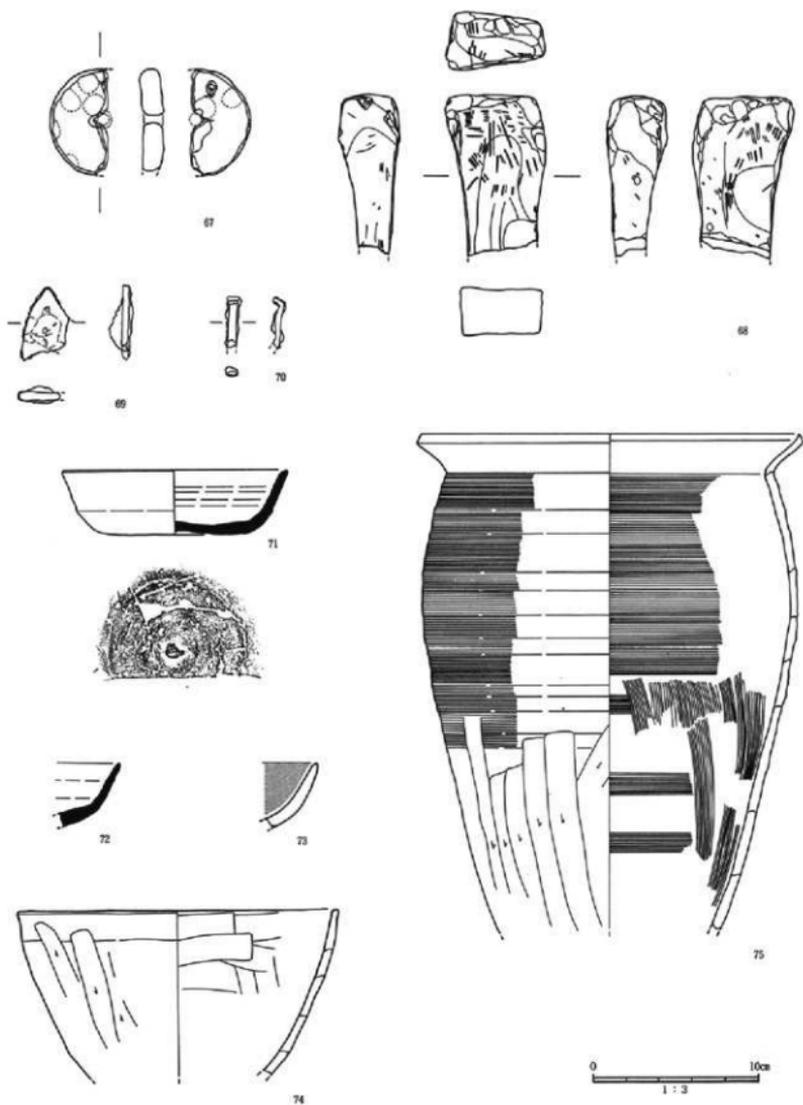
第15図 ST 31・58 出土遺物

遺構と遺物

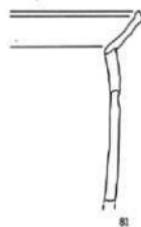
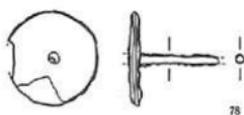
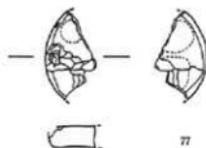
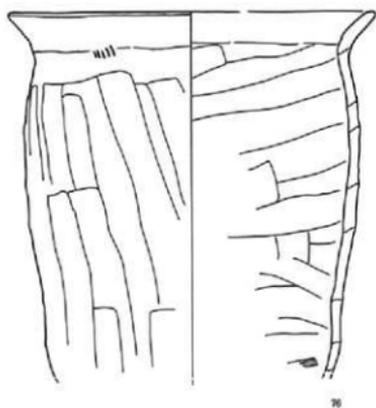




第17図 ST 20 出土遺物



第18図 ST 20・177出土遺物



第19図 ST 177・202 出土遺物

は、長辺5.1m、短辺4.2mの隅丸長方形で北壁中央にカマドを付設している。遺物は、カマド周辺に散乱し、遺構内土坑も遺物を含んで西側にある。カマドの燃焼部は、火床面直上に薄く確認できる。袖部は欠損している。煙道部は、基部のみが検出された。

出土遺物について述べる。(116)は、須恵器環で、直線的に体部が立つ器形である。底部の切り離しがヘラ切である。(117)・(118)は須恵器高台付環である。(117)は、法量が小さく、体部が直線的に立つ。(118)は、高台の相違点を除いては小松原窯跡出土高台付環と色調、胎土の点で酷似している。(119)～(121)は赤焼土器甕である。(119)は、口径が大きく、鉢状に立ち上がる器形である。(120)・(121)は、大型で器高が高く、口縁部が外反した後、上端が立つ器形である。外面にカキメ調整の後、下部にヘラ削を施す。(122)は、石製の紡錘車で円盤部のみ出土した。出土土器の点数は、須恵器が27点、赤焼土器・土師器が100点である。

S T 913・S X 923 (遺構・第28図、遺物・第29図123～126)

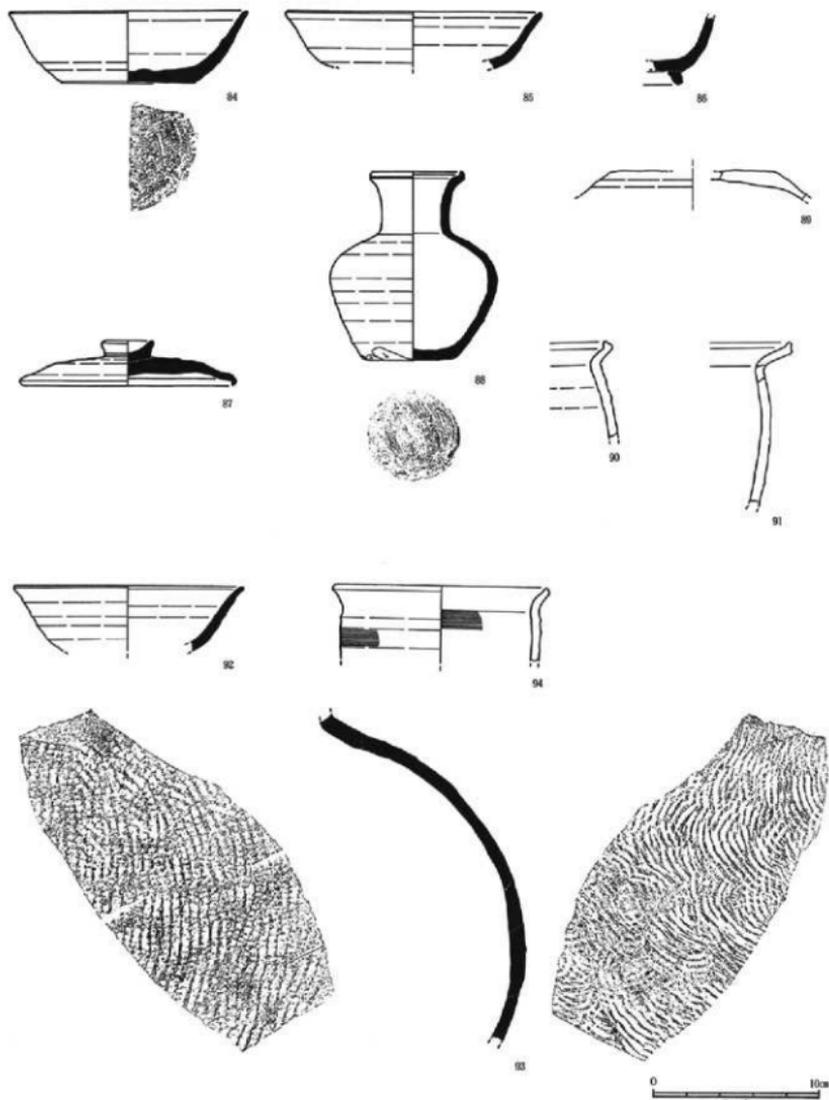
E 43～E 44 Gで検出された。南側をS D 470、北側をS X 923に切られる。調査区の設定により東側未調査である。平面形は、不整形長方形と思われる。北東隅に柱穴1基が検出されている。長径2mの不整形のS X 923が、竪穴住居跡の北側に位置する。出土遺物について述べる。(123)・(124)は、須恵器環である。底径がやや大きく、器形が逆台形になる。底部の切り離しが、(123)は回転糸切・(124)はヘラ切である。以上がS T 913の遺物である。(125)は、須恵器高台付環で小型の製品である。(126)は、赤焼土器甕で、体部が膨らみ、口縁部が短く外反する器形である。以上がS X 923の遺物である。S T 913の土器点数は、須恵器16点、赤焼土器・土師器32点である。S X 923の土器点数は、須恵器5点、赤焼土器・土師器17点である。

S T 863 (遺構・第32図、遺物・第31図127～135)

A 49～B 50 Gで検出された。西側・南側が攪乱により破壊されている。また、北側を畝状遺構により一部切られている。平面形は、長辺3.9m、短辺3.8mの隅丸長方形を想定できる。北側に主柱穴を含むピットが3基検出されている。住居中央に大小の焼土域が確認できる。カマドは、東壁南寄りに付設され、やや深い掘り込み内に焼土層が広がり、欠損した構築材を含んでいる。東側でS T 864の西北部を切る。

出土遺物について述べる。(127)は、須恵器環で、底径がやや大きく、器形が逆台形になる。底部切り離しは、ヘラ切である。(128)・(129)は、須恵器高台付環である。(128)は、法量が小さく、体部がやや直線的に立つ。口縁端部内面に油煙が付着している。底部切り離しは、ヘラ切である。(129)は、底径がやや大きく、体部がやや直線的に立ち上がる。付高台の内面に油煙が付着している。この2点から高台付環の法量の分化が行われていることがわかる。

(130)～(132)は、赤焼土器である。(130)は、体部がやや膨らみ、口縁部が短く外反する器形である。(131)は、底部が磨滅し、切り離しは不明であるが、外面調整はヘラ削を施している。(132)は、大型で器高が高い器形を想定でき、口縁部が、外反した後上端が立つものである。内外面調整をカキメによって行っている。(133)～(135)は、土師器甕である。(133)は、口縁部が短く外反し、体部が丸く膨らむ器形である。(134)は、体部の立ち上がりが直線的で、底部に木葉痕が認められる。(135)は、口縁部が短く外反する器形を想定できる。出土土器の点数は、須恵器8点、赤



第21図 S T 201・558 出土遺物

焼土器・土師器97点である。

S T 864 (遺構・第30図、遺物・第31図136～140)

B50～C50Gで検出された。平面形は、長辺3.7m、短辺2.2mのやや北西に張り出した不整長方形である。北西側一部をS T 863から切られ、東側をS X 866に切られている。北辺に浅く周溝が残存している。柱穴は、北壁に1基、南壁に3基検出されている。カマドは、東壁南寄りに付設している。燃焼部は、不整形で西側に広がっている。袖部が北側のみ残存している。煙道部は、上層をS X 866から壊されているが、東西にのびる8cmほどの掘り込みを確認できる。壁面が被熱を受け、土師器甕を埋設している。煙道を補強する意味合いがあったと推定される。本調査で確認されたS T 489も同様に煙道部に甕が埋設されている。木ノ沢橋跡S T 151住居跡でも同様なことが確認されている。

出土遺物について述べる。(136)は、須恵器環で、底径が広く、器形が逆台形になる。底部切り離しは、ヘラ切の後ヘラ削調整を行っている。(137)は、須恵器高台付環で、広い底径の器形を想定できる。(138)～(140)は、土師器である。(138)は体部が内弯しながら立つ器形である。外面をヘラ削・ナデ調整を行い、内面をミガキによる黒色処理を施している。(139)は、底部～体部の残存であるが、体部が直線的に立ち、底部に木葉痕を確認できる。(140)は、中型で、口縁部が短く外反し、体部が丸く膨らむ器形である。出土土器の点数は、須恵器3点、赤焼土器・土師器97点である。

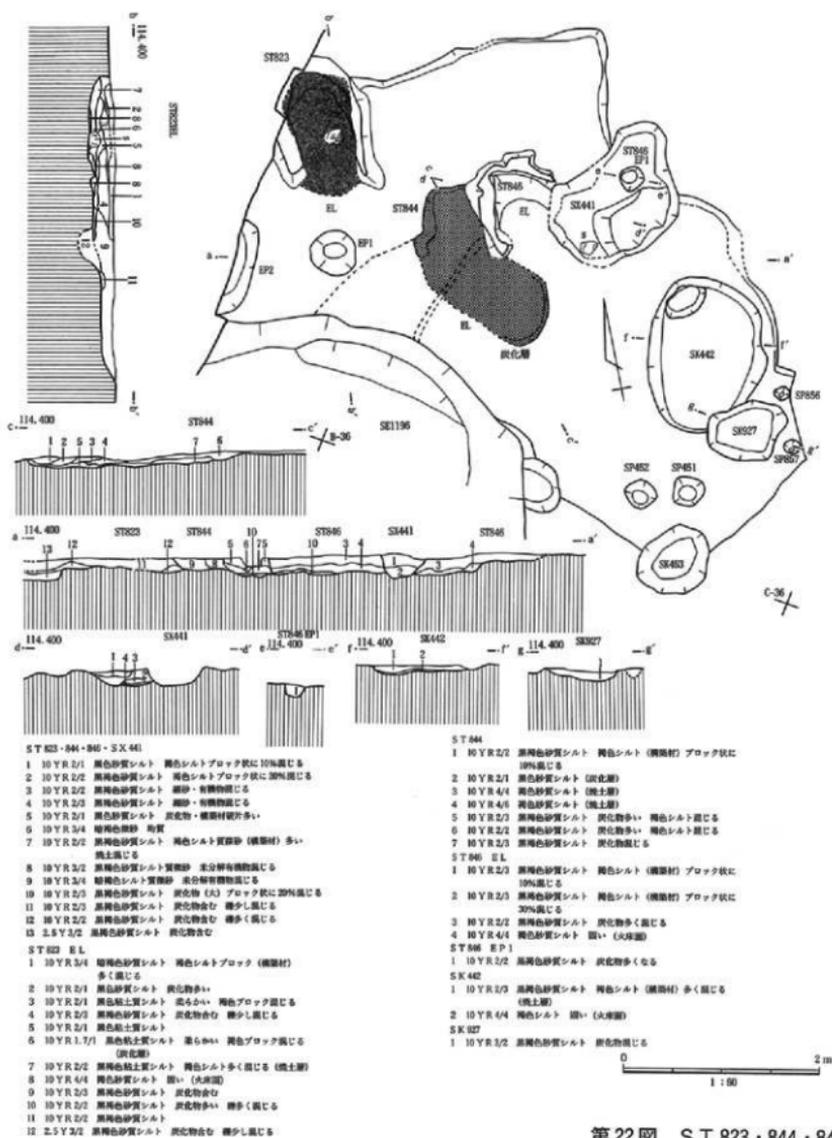
S T 865・S X 866 (遺構・第32図、遺物・第33図141～第34図163)

S T 865は、B49～C50Gで検出された。北西壁をガス管理設により破壊されている。南側でS T 864を切る。南東側をS K 718から切られる。平面形は長辺4.2m、短辺3.9mの隅丸長方形である。北側に柱穴1基、南側に主柱穴を含む柱穴5基を確認している。貼床を外すと中央下層から一辺が2mで8cmの深さに掘り込まれたS X 1221を検出した。土師器片が8点出土している。また、南東側でS K 718を検出した。長辺126cm、短辺100cm、深さ20cmの楕円形の形状である。カマドは北壁西寄りに付設され、一部焼土層、火床面を確認している。カマド東側で袖部構築材を断面により確認している。煙道部は攪乱により欠損している。

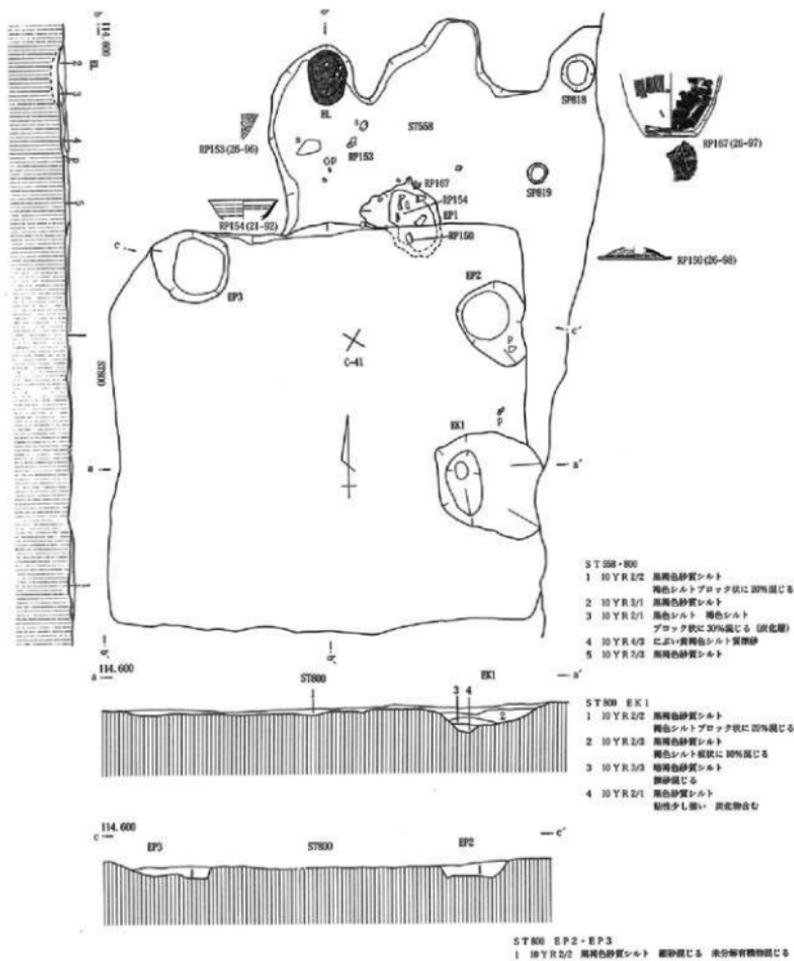
出土遺物について述べる。(141)・(142)は須恵器環で、両者とも底径がやや大きく、器形が逆台形になる。底部切り離しがヘラ切で、後にヘラ削を施す。(143)は、須恵器高台付環で、高台部が欠損している。法量が小さく、体部がやや直線的に立ち上がる。底部切り離しが、ヘラ切である。(144)・(145)は、須恵器蓋である。(144)は、焼成が生焼で、胎土も粗砂混じりである。大型で、欠損したツマミ部から口縁部まで直線的に下がり、口縁部が直立する。器種として火舎蓋の可能性があり、火を受けるため焼成が土師質になる傾向がある。(145)は、口縁部が屈曲している器形である。(146)は須恵器壺で、短い口縁部が外反する。(147)は、S K 718から出土したもので、赤焼土器環である。底部切り離しが、回転糸切である。底径がやや小さく、体部が直線的に立つ器形である。内部に炭化物・残留物が付着している。胎土は、細砂混じりで、焼成は、堅めで良好である。

(148)は、赤焼土器蓋である。器高が低く、口縁端部が直立する。(149)～(156)は、赤焼土器

遺構と遺物

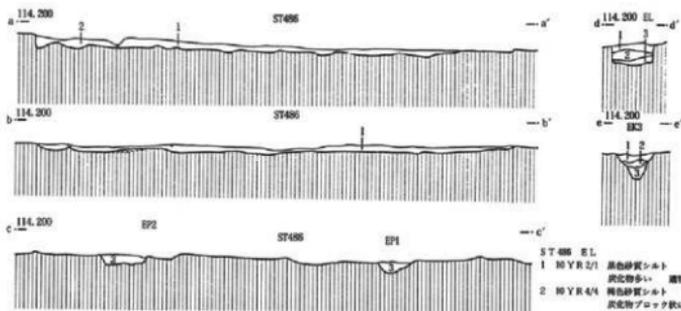
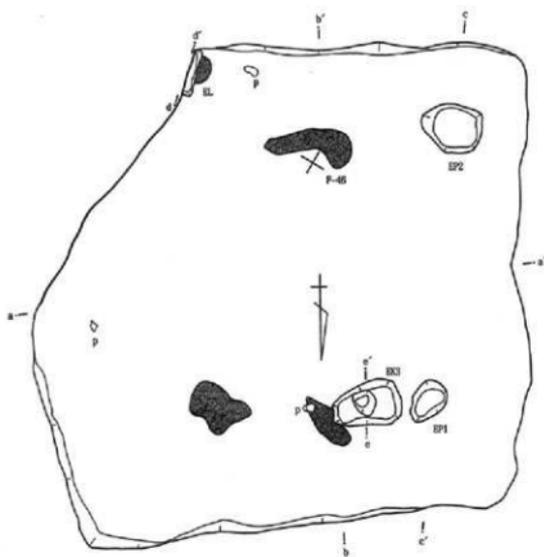


第 22 図 ST 823・844・845



第23図 ST 558・800

遺構と遺物



ST 486 EP1 - EP2

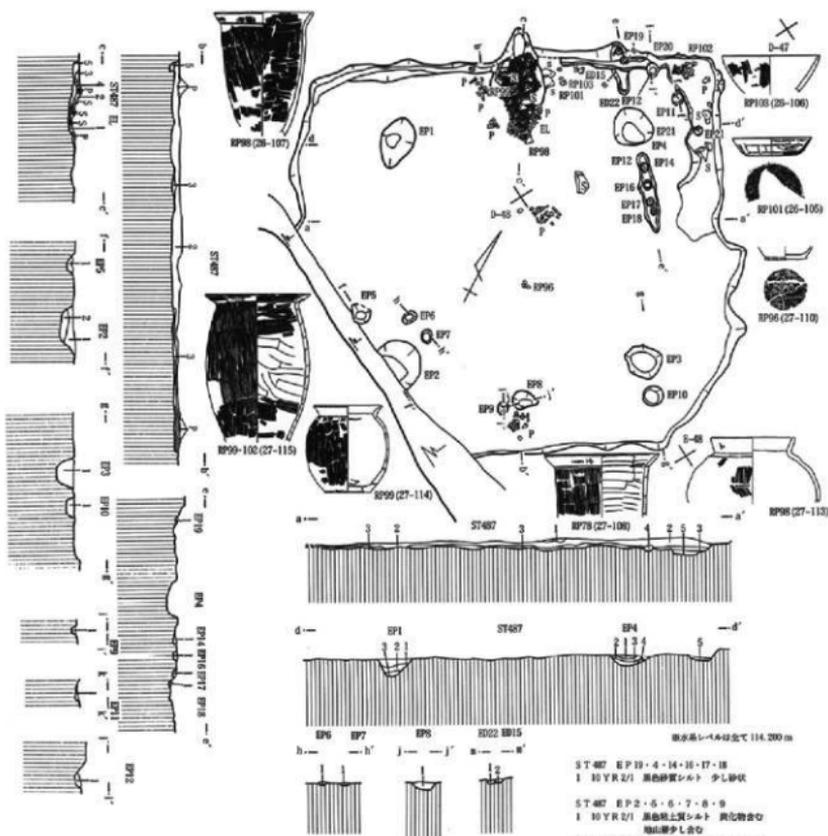
- 1 10 YR 2/1 黒色砂質シルト 炭化物含む
薄少し腐じる 遺物あり
- 2 10 YR 2/2 黒褐色砂質シルト 腐少し腐じる
- 3 10 YR 3/2 黒褐色砂質シルト 強い
炭化物含む 腐砂腐じる

ST 486 EK3

- 1 10 YR 2/3 黒褐色砂質シルト
強い 炭化物あり 腐砂腐じる
- 2 10 YR 3/2 黒褐色粘土質砂
腐る弱い
- 3 10 YR 2/2 黒褐色砂質シルト
遺物あり 炭化物腐じる



第24図 ST 486



ST 487

- 1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 雑物を含む 高さ約1m
- 2 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物を含む 火山礫ブロック状に10%混じる
- 3 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 火山礫層内に30%混じる
- 4 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 火山礫ブロック状に20%混じる
- 5 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シルト 炭化物を含む

ST 487 E L

- 1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 雑物、焼石を含む 炭化物を含む
- 2 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シルト 炭化物を多く含む (炭化層)
- 3 10 Y R 4/2 赤い・黄褐色砂質シルト 固い (積層状)
- 4 10 Y R 4/4 褐色シルト 炭土ブロック 炭化物を含む 土面片多い
- 5 10 Y R 1/2 黒褐色砂質シルト 炭化物が多い

ST 487 EP1・EP4・ED13

- 1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 固い 雑物混入 褐色シルトブロック状に30%含む
- 2 10 Y R 3/4 黒褐色砂質シルト 炭化物を少し含む
- 3 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シルト 炭化物を少し含む
- 4 10 Y R 3/3 暗褐色シルト 炭化物を少し含む 固い
- 5 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シルト 褐色シルト層状に10%含む

海水高1.64mはて114.200 m

- ST 487 EP 10・4・14・16・17・18
 1 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シルト 少し砂状

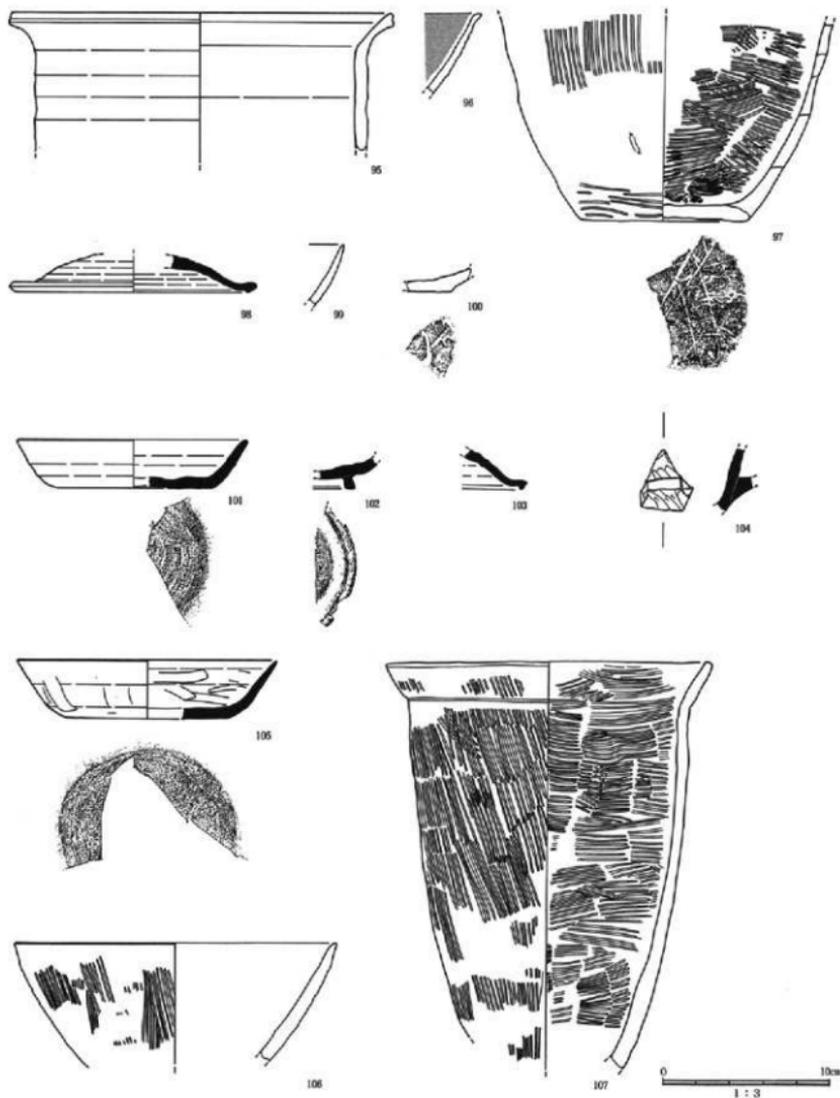
- ST 487 EP 2・5・6・7・8・9
 1 10 Y R 2/1 黒褐色土質シルト 炭化物を含む 火山礫少し含む
 2 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物を含む 火山礫少し含む

- ST 487 EP 3・EP 10
 1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 固くしるる 雑物混入 褐色シルトブロック状に10%混じる

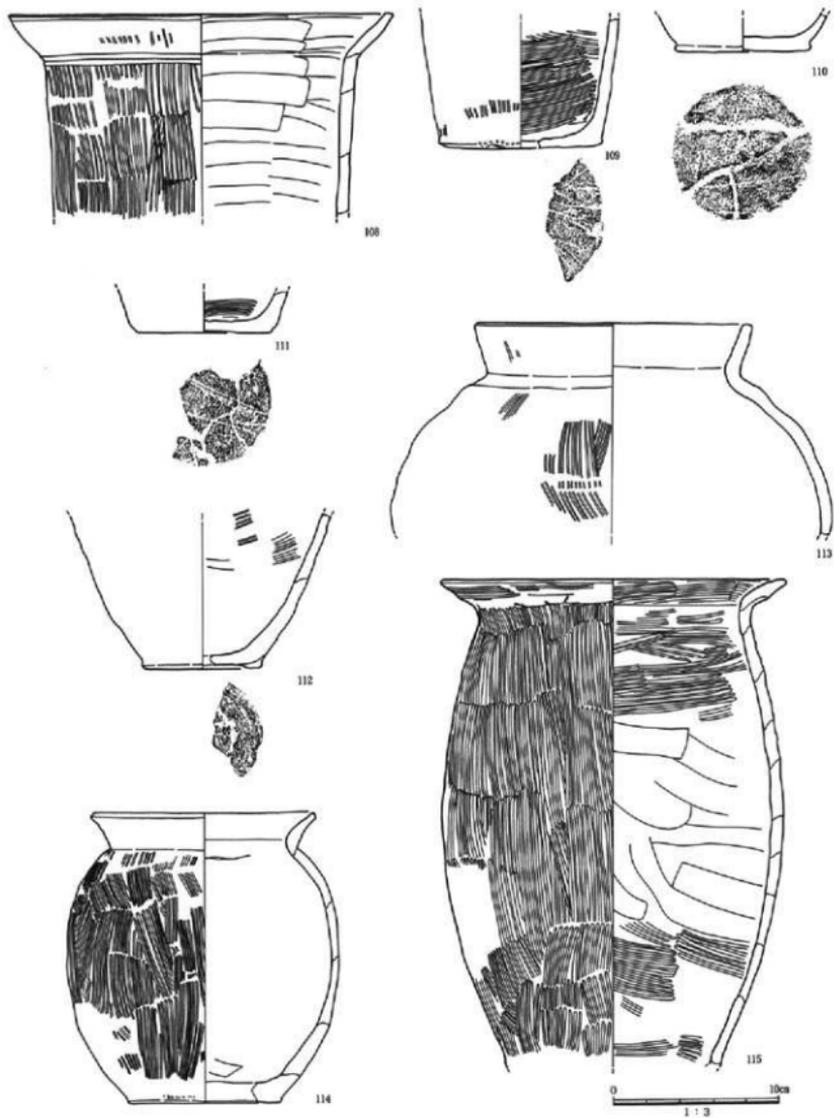
- ST 487 EP 11・12・ED 12・ED 15
 1 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シルト 褐色シルトブロック状に5%混じる
 2 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 褐色シルトブロック状に10%混じる



第25図 ST 487



第26図 S T 558・800・486・487 出土遺物



第27図 ST 487 出土遺物

甕である。(149)・(151)・(154)は、体部がやや膨らみ、口縁部が短く外反する。(150)は、口径がやや広く、体部が内湾しながら立つ器形である。(152)・(153)は、底部～体部のものであるが、切り離しが回転糸切で、体部が直線的に立つ。(155)・(156)は大型で器高が高く、口縁部が外反した後、上端がやや肥厚している。(157)～(161)は、土師器である。(157)・(158)は環で、底径がやや大きく、体部が内湾する。内面黒色処理をしている。(159)の甕は、体部がやや膨らみ、口縁部が緩やかに外反する。(160)の甕は底部～体部のもので、底部に網代圧痕が認められる。(161)は、土師器甕の体部で、内面に漆が付着している。出土土器の点数は、須恵器31点、赤焼土器・土師器710点である。

S X 866は、C 50～D 50 Gで検出され、一辺が3.5mの不整形で、深さが8cmである。西側でS T 864煙道部の上層を壊している。出土遺物は、体部が直線的に立つ器形の須恵器環(162)、底部～体部で底部切り離しが、回転糸切の(163)がある。出土土器の点数は、須恵器4点、赤焼土器・土師器8点である。

S T 492・847(遺構・第35図、遺物・第37図164～第38図176)

S T 492は、A' 52～A 53 Gで検出された。同住居の貼床下層にS T 847が確認された。調査区の設定により、西側が未調査である。一辺が4m強の隅丸方形の住居と考えられる。S T 847も同様の平面形と思われる。S T 492の壁の立ち上がりが緩やかで、S T 847は急である。前者は、貼床であるのに対して、後者は直床である。S T 492のカマドは南壁東寄りに位置し、袖部・煙道部ともに欠損している。燃焼部が北側にのびている。カマド西側に土師器片が出土する貯蔵穴が検出された。S T 847のカマドは南壁中央に位置し、燃焼部の焼土域を確認している。支柱穴を含む柱穴が5基検出され、東壁にそって支柱穴が存在する。

出土遺物について述べる。(164)～(166)は須恵器環で、底径がやや大きく、器形が逆台形になる。(165)・(166)は、重なった状態で出土した。3個体とも色調は、灰オリーブ色である。底部の切り離しはヘラ切である。(167)～(171)は、赤焼土器甕である。(167)・(170)は底部～体部で、底部切り離しが前者は回転糸切、後者はヘラ切である。(168)・(169)は、口径が広く、体部がやや膨らむ器形である。切り離しが、前者は回転糸切、後者はヘラ切である。(171)は、大型で口縁部が外反した後、上端が立つ器形である。(172)～(174)は、土師器甕である。(172)は小型で口縁部が短く、体部がやや直線的に立つ。(173)・(174)は、底部～体部のみの資料である。(173)は底部に網代圧痕が認められ、体部がほぼ全面に被熱している。(174)は、やや大型である。出土土器の点数は、須恵器7点、赤焼土器・土師器139点である。(175)・(176)は、S T 847から出土したもので、体部が直線的に立ち上がる器形である。出土土器の点数は、赤焼土器・土師器19点である。

S T 494・S X 493(遺構・第36図、遺物・第38図177～183)

S T 494は、A' 53～A 54 Gで検出された。南側が未調査であるが、凡そ平面形は、5m内外の長方形と推定される。壁はやや垂直に立ち上がり、32cmの深さの自然堆積が確認された。北側に周溝の一部を確認し、支柱穴を含んで柱穴が北側に並んでいる。深さは15cm内外である。カマドは、北壁東寄りに付設し、袖部欠損、煙道部基部のみ残存という状態であった。燃焼部は

楕円形の焼土域を確認し、構築材を多く含んでいる。貼床下層に、SK820・821を検出した。40～60cm程の深さで掘り込んでいる。SX493は、A'52～A54で検出された。遺存状態が不良で、一辺が4.6mの不整形である。

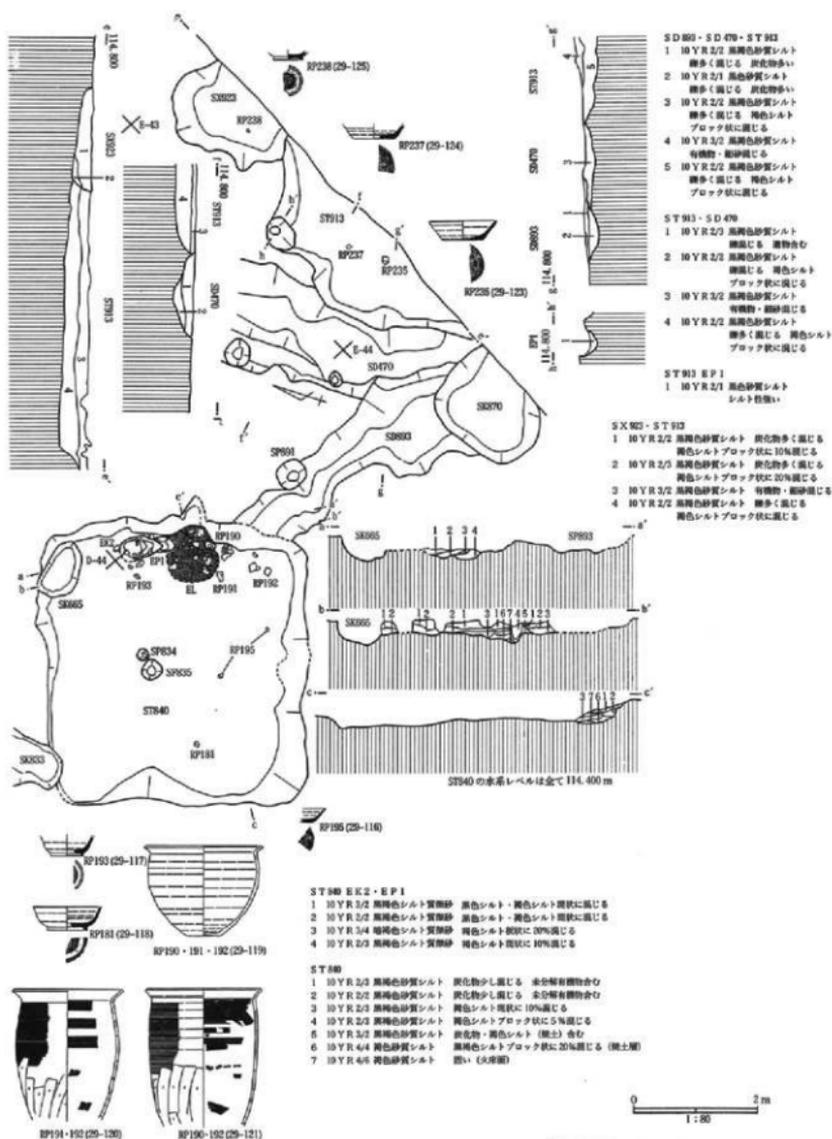
出土遺物について述べる。SX493からは(177)が出土している。内外面カキメ調整を施している赤焼土器甕である。出土土器の点数は、赤焼土器・土師器44点である。ST494で、出土土器の点数が、須恵器5点、赤焼土器・土師器189点である。(178)は須恵器坏で、やや底径が大きく、逆台形の器形である。底部の切り離しはへら切である。ST492と同一形態である。(179)は、須恵器蓋で、器高がやや低く、口縁部が軽く屈曲する。(180)は赤焼土器坏で底径が大きく、底部切り離しがへら切である。(181)は、赤焼土器甕で口縁部外反の後に上端が立つ。(182)は土師器坏で、内面黒色処理を施す。(183)は、体部が直線的に立ち、口縁部が強く外反する。

ST489・490(遺構・第39図、遺物・第40図184～第43図214)

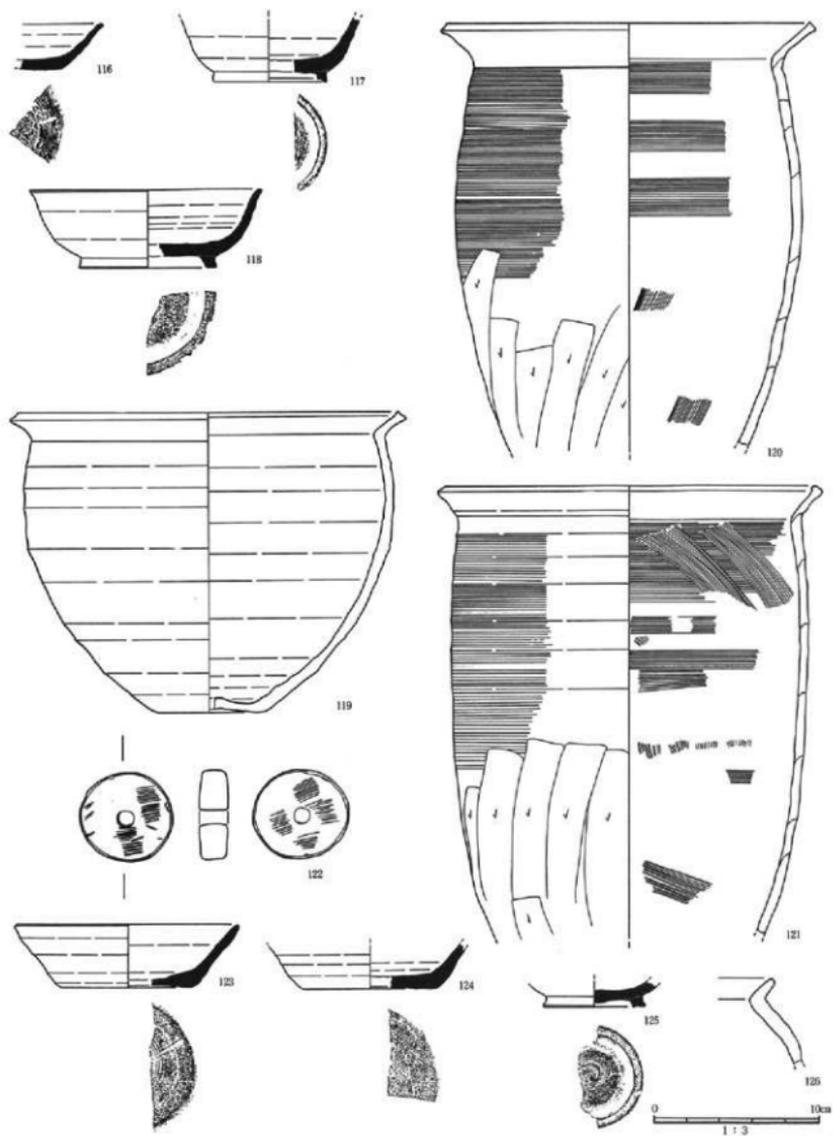
ST489は、B51～C52Gで検出された。西側でST490を切り、両側でSX488を切っている。5m内外の隅丸方形で、煙道部まで含めた計測値は、長辺5.4m、短辺4.9mである。壁はやや垂直な立ち上がりで、柱穴が壁面にそって9基、貯蔵穴が1基確認されている。周溝も僅かに残存している。カマドは、北壁に位置し、燃燒部が南に広がっている。袖部は西側が残存し、東側袖は住居内で廃棄されている。煙道部は1.6mの長さがあり、先端部に円形の窪みがある。煙出しの可能性もある。その部位周辺から土師器甕が出土している。ST490は、A52～B53Gで検出され、平面形は長辺3.6m、短辺3.5mの隅丸方形である。南壁に貯蔵穴1基、カマド南側貯蔵穴1基確認されている。東壁にカマドを付設し、袖部一部のみ残存、燃燒部西側に広がる。煙道部は、ST489に切られる。

出土遺物について述べる。ST489について、(184)～(186)は、須恵器坏で底径がやや広く、逆台形の器形である。底部の切り離しが、へら切である。(187)～(192)は須恵器高台付坏である。底部のあるものは、切り離しがへら切である。(187)・(192)は、底径が大きく、やや内湾しながら立つ。(189)・(190)・(191)は、法量が小さく、体部がやや直線的に立ち上がる。(188)は、器高が高く、体部が直線的に立ち上がる。高台部端部が外側に立ち北陸的な要素がある。(193)～(195)は、須恵器蓋である。(193)・(194)は、器高が低く、口縁端部が直立する。(193)は内面が摩耗しており、墨痕は無いが、転用碗を想定できる。(195)は、丸い天井部をもつ。(196)は、須恵器長頸瓶で、長い口縁部が内側に内傾した後外反する。肩部が、張る器形を想定できる。口縁端部が立つ。(197)は、須恵器甕の底部である。へら削による器面調整をしている。

(198)～(202)は、赤焼土器である。(198)は、底径がやや大きく、器形が逆台形になる。様相の新しい(199)・(200)は、上層出土であり、上部に削平された新しい時期の遺構が存在した可能性がある。底径が小さく、切り離しが回転糸切の(199)・(200)は高台付坏で底部に菊花状ナデツケ調整を施す。(201)・(202)は甕で、前者は体部が丸く膨らむ器形で、後者は体部がやや丸く膨らみ、口縁部が短く外反する。外面に二次加熱が認められる。(203)・(204)は、土師器坏で、底径がやや大きく内湾して立つ。(205)は、(199)と同様に上層出土のため新しい様相である。底部に菊花状ナデツケが施される。(206)・(207)は土師器甕で、直線的に立ち上がる体部に外反する

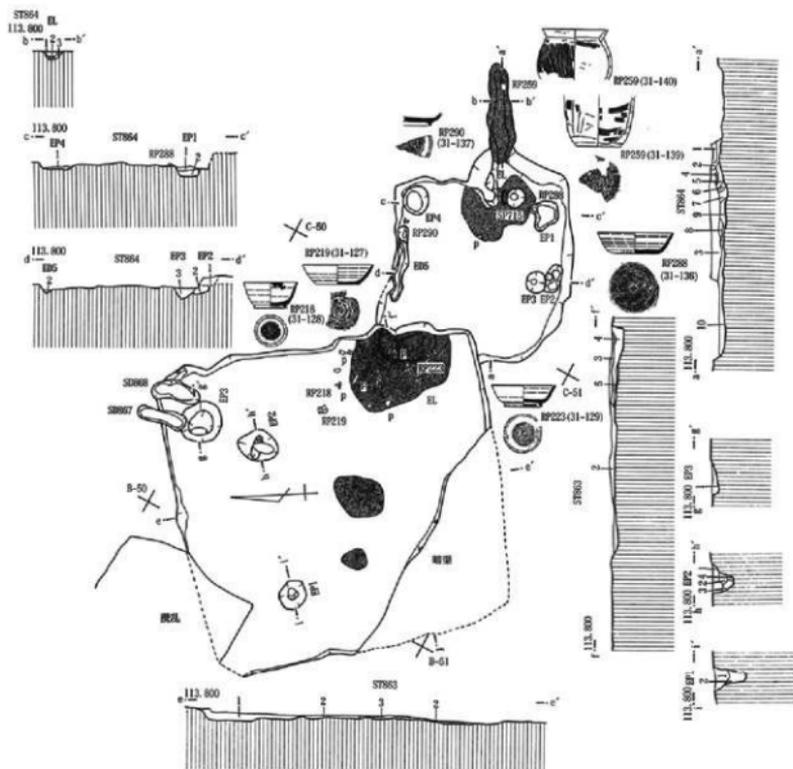


第28図 ST840・913・SX923



第29図 ST 840・913・S X 923 出土遺物

遺構と遺物



ST 864

- 1 10 Y R 3/2 黒褐色砂質シルト 褐色シルト（粘土）ブロック状に20%混じる
- 2 10 Y R 4/3 にふい黄褐色砂質シルト 褐色シルト（粘土）ブロック状に30%混じる
- 3 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 有機物混じる 炭化物少し含む
- 4 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シルト 有機物混じる 炭化物少し含む
- 5 10 Y R 2/2 黒褐色粘土質シルト 褐色シルトブロック状に10%混じる
- 6 10 Y R 2/3 黒褐色粘土質シルト 褐色シルトブロック状に10%混じる（粘土層）
- 7 10 Y R 2/3 黒褐色粘土質シルト 褐色シルトブロック状に3%混じる（粘土層）
- 8 10 Y R 2/1 黒褐色粘土質シルト 炭化物少し含む 有機物混じる
- 9 10 Y R 2/1 黒褐色粘土質シルト 褐色シルトブロック状に20%混じる（粘土層）
- 10 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シルト 炭化物含む 有機物多く混じる

ST 864 EL

- 1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 褐色シルト（粘土）混状に5%混じる 炭化物少し含む
- 2 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シルト 褐色シルト（粘土）混状に3%混じる（粘土層）
- 3 10 Y R 4/4 黒褐色砂質シルト（粘土層）

ST 864 EP1-EP4-ED5

- 1 2.5 Y 3/1 黒褐色砂質シルト 腐植層に5（腐植）
- 2 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物多い 褐色シルト（粘土層）混状に10%混じる
- 3 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シルト 褐色ブロック5%混じる

ST 863

- 1 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シルト 褐色シルト混状に10%混じる
- 2 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シルト 褐色シルト混状に20%混じる

ST 863

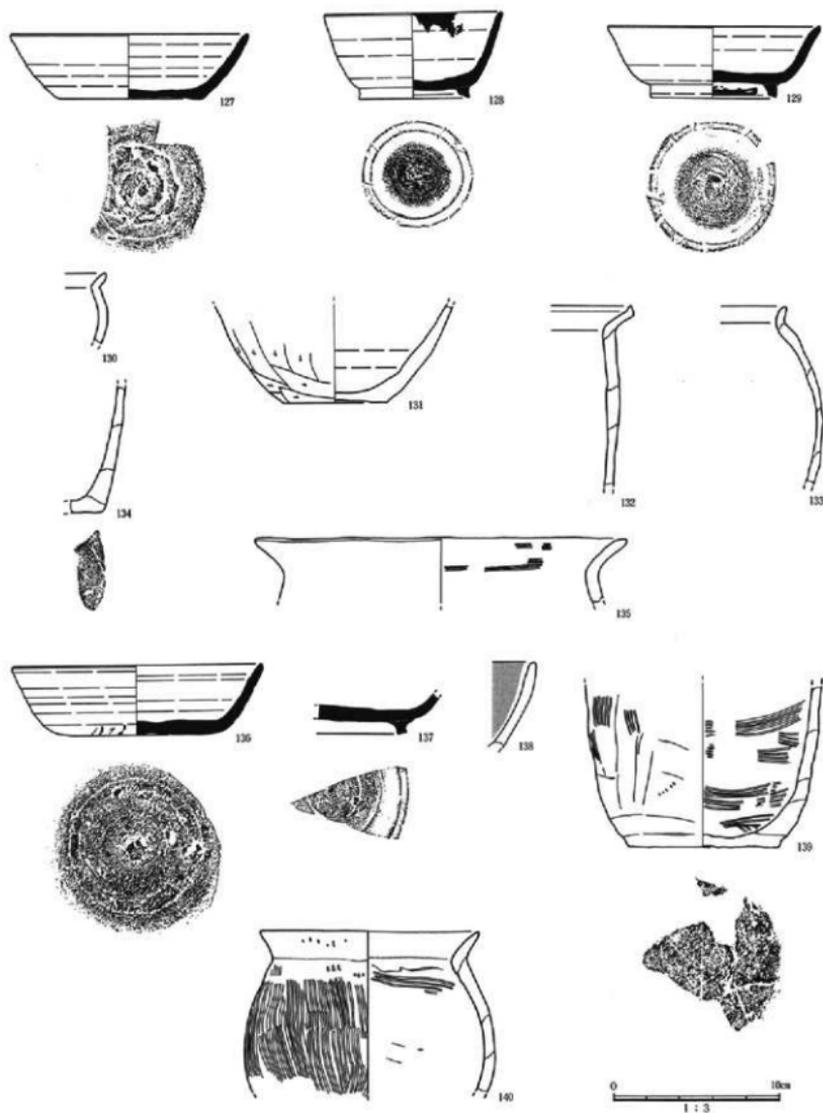
- 2 10 Y R 4/6 褐色砂質シルト 腐植材・遺物多く含む 炭化物多く含む
- 3 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シルト 腐植材・遺物多く含む 炭化物多く含む
- 4 10 Y R 4/4 褐色シルト 濃い（粘土層）
- 5 10 Y R 4/4 褐色シルト（大灰層）

ST 863 EP1-EP3

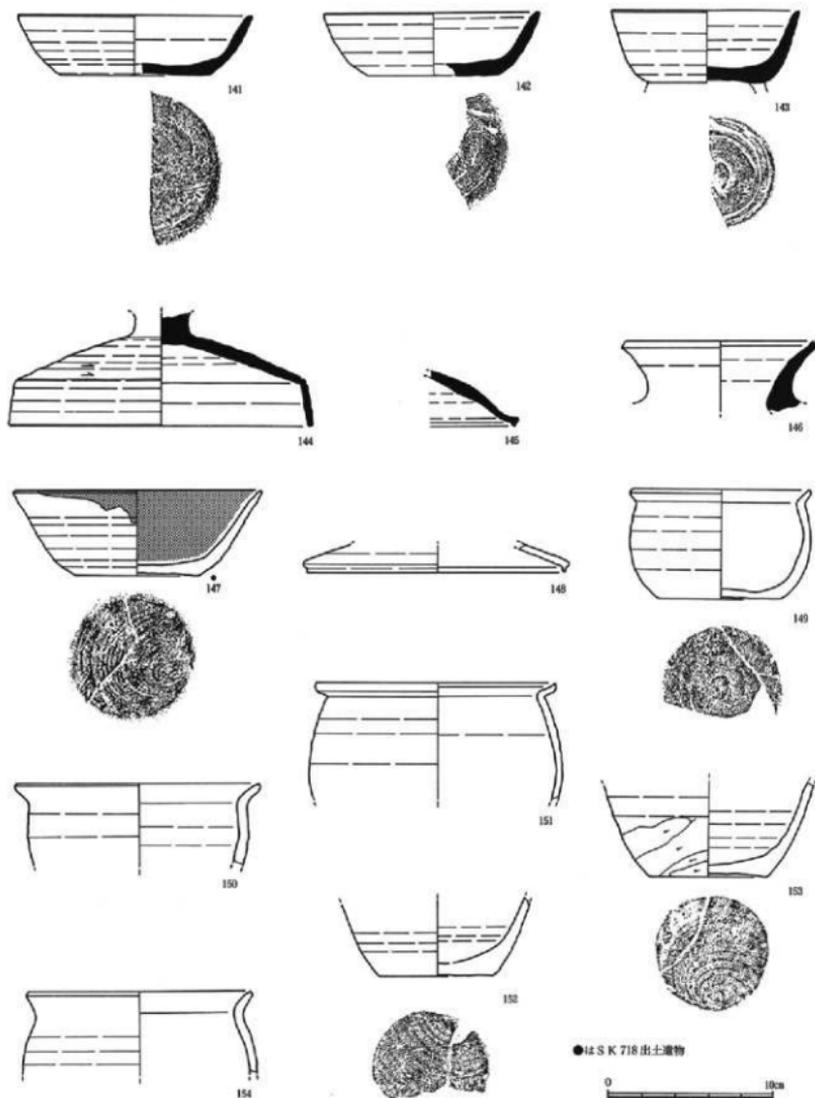
- 1 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シルト 炭化物10%含む
- 2 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物5%含む
- 3 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シルト 炭化物5%含む
- 4 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シルト 炭化物5%含む



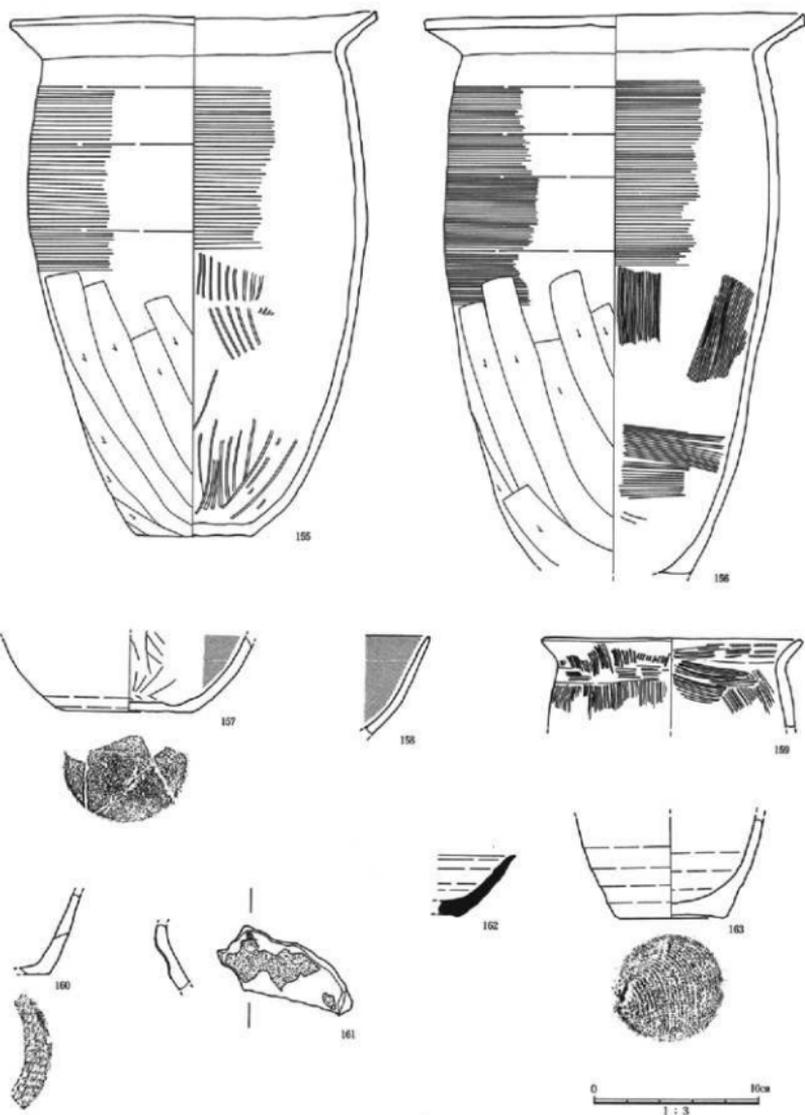
第30図 ST 863・864



第31図 ST 863・864出土遺物



第 33 図 S T 865 出土遺物



第34図 ST 865・SX 866 出土遺物

口縁部が付く。(208)は、胴部中位で丸く膨らむ器形である。(209)は、底部～体部のもので、器面調整がへう削である。(210)は、カマド構築材で、面取した面が被熱を受けている。出土土器の点数は、須恵器63点、赤焼土器・土師器421点である。

S T 490の出土土器の点数は、須恵器5点、赤焼土器・土師器128点である。(211)～(214)は土師器甕である。(211)は、直立する体部に短く外反する口縁部が付く。(212)・(213)は、直立する体部に、強く外反する口縁部が付く。(214)は、底部に木葉痕が認められる。

S T 491 (遺構・第42図)

A50～A51Gで検出された。西側が調査区設定の関係で未調査であるが、一辺が5m内外の不整形であると思われる。カマドは、北壁に付設され、円形の焼土域が確認された。袖部は欠損している。煙道部は未調査である。

S T 496 (遺構・第42図、遺物・第43図219)

B53～C53Gで検出された。両側が未調査であるが、3.7m内外の隅丸長方形であると推定される。北壁にそって周溝の一部を確認し、柱穴が2基検出している。出土遺物では、須恵器高台付坏(219)が出土している。底径がやや小さく、底部の切り離しがへう切である。出土土器の点数は須恵器1点、土師器1点である。

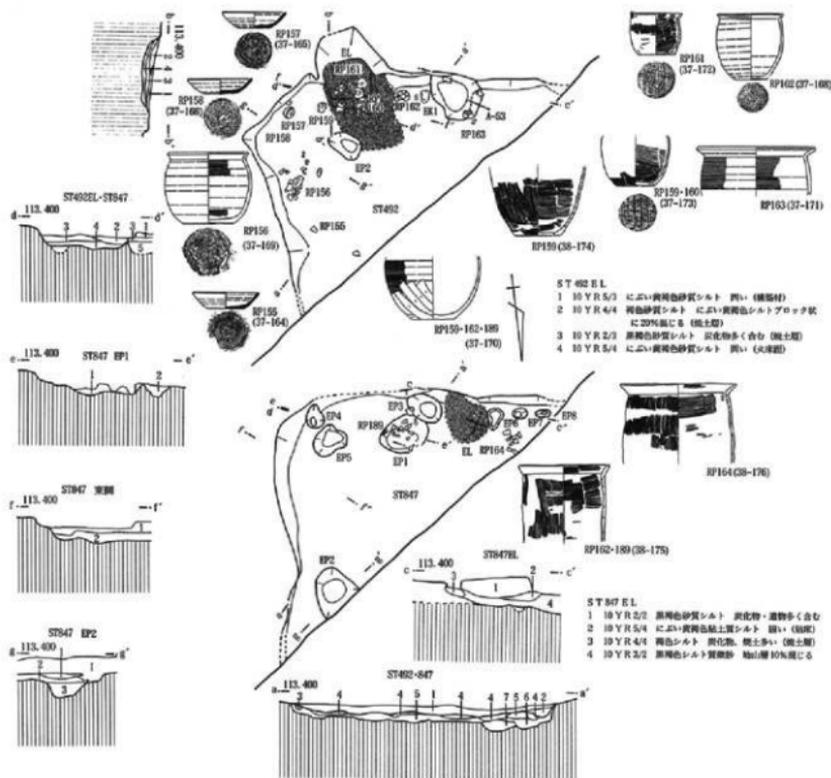
S T 814・S X 488 (遺構・第42図、遺物・第43図215～第44図231)

S X 488は、B52～C53Gで検出された。北側をS T 489から、南側をS T 814から切られている。長辺5.3m、短辺4.9mの長方形で、南壁沿いに遺構内土坑を検出している。出土土器の点数は、須恵器9点、赤焼土器・土師器68点である。(215)は、須恵器環で底径の広い逆台形の器形である。(216)は、上層からの出土で、S T 814と関連する可能性がある。底径が小さく、切り離しが回転糸切である。(217)は土師器甕で口縁部が外反した後に上端が立つ。(218)は、直立する体部に強く外反する口縁部が付く土師器甕である。

S T 814は、C52～C53Gで検出された。両側が未調査であるが、一辺が3.5m内外の隅丸長方形と思われる。壁の立ち上がりは、やや緩やかで、貼床が敷かれている。柱穴は、北壁に2基検出している。カマドは、北壁に付設され、楕円形の焼土域が確認できる。袖部は欠損しており、燃焼部焼土層に遺物が多く含まれる。燃焼部中央に支脚が出土している。

出土遺物について述べる。(220)～(222)は、赤焼土器である。(220)・(221)は環で、底径が小さく、体部が直線的に立つ器形である。(220)の底部切り離しは、回転糸切である。(222)は、高台付坏で体部が内湾した後、外反する。底部の調整は、菊花状ナデツケを施している。(223)～(231)は、土師器である。(223)・(224)は、高台付坏で体部が直線的に立ち上がり、端部が外反する器形である。底部調整が菊花状ナデツケである。(225)～(231)は、土師器甕である。(225)・(226)・(230)は、口縁部が外反の後、上端が直立する器形である。(226)・(227)は、体部が膨らむ。(225)は、直立する体部に短く外反する器形である。(229)・(231)は、大型で直線的に立つ体部に外反する口縁部が付く。(228)は、底部であるが、丸底である。器面調整がハケ目である。出土土器点数は、須恵器1点、赤焼土器・土師器88点である。須恵器については、上層からの流れ込みの可能性がある。

遺構と遺物



ST 492 E.L - ST 847

- 1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物多く含む 遺物多く含む
- 2 10 Y R 4/4 褐色砂質シルト 土壌に黄褐色シロートブロック状に20%混じる (焼土層)
- 3 10 Y R 5/4 土壌に黄褐色砂質シルト (炭質)
- 4 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 褐色シルト層状に5%混じる
- 5 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 土壌に黄褐色シルトブロック状に5%混じる 炭化物・遺物を含む

ST 847 E.P 1

- 1 10 Y R 5/4 土壌に黄褐色粘土質シルト (炭質)
- 2 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 土壌に黄褐色シルトブロック状に5%混じる 炭化物・遺物を含む

ST 847 東側

- 1 10 Y R 5/4 土壌に黄褐色粘土質シルト 焼土 (焼土)
- 2 10 Y R 2/2 黒褐色粘土質シルト

ST 847 E.P 2

- 1 10 Y R 2/1 黒色粘土質シルト 未分解有機物混じる
- 2 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物多く含む 遺物多く含む
- 3 10 Y R 3/2 黒褐色粘土質シルト 腐植層に黒色シルト層状に混じる
- 4 10 Y R 1/1 黒褐色粘土質シルト 腐植層に黒色シルトブロック状に20%混じる

ST 492 E.L

- 1 10 Y R 5/3 土壌に黄褐色砂質シルト 焼土 (焼土)
- 2 10 Y R 4/4 褐色砂質シルト 土壌に黄褐色シルトブロック状に20%混じる (炭土層)
- 3 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物多く含む (焼土層)
- 4 10 Y R 5/4 土壌に黄褐色砂質シルト 焼土 (炭質)

ST 847 E.L

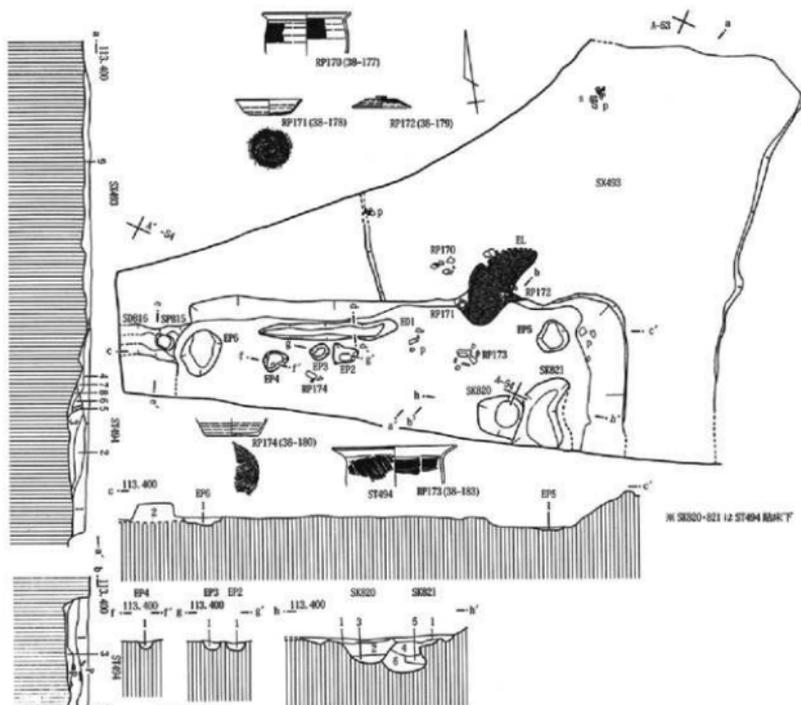
- 1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物多く含む 遺物多く含む
- 2 10 Y R 5/4 土壌に黄褐色粘土質シルト 焼土 (焼土)
- 3 10 Y R 4/4 褐色シルト 炭化物、焼土多い (焼土層)
- 4 10 Y R 2/2 黒褐色粘土質シルト 腐植層に黒褐色シルト層状に混じる

ST 492 - ST 847

- 1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物多く含む 遺物多く含む
- 2 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シルト 炭化物多く含む
- 3 10 Y R 1/1 黒褐色粘土質シルト 炭質層、炭質層、
- 4 10 Y R 5/4 土壌に黄褐色粘土質シルト (炭質)
- 5 10 Y R 3/2 黒褐色粘土質シルト 炭質層に黒褐色粘土質シルトに混じる
- 6 10 Y R 2/2 黒褐色粘土質シルト 腐植層に土壌に黄褐色砂質シルトに混じる
- 7 10 Y R 1/1 黒褐色粘土質シルト 腐植層に黒褐色シルトブロック状に10%混じる



第 35 図 ST 492・847



- ST 494-S X 493
- 1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物多く含む 水分解有無不明
 - 2 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シルト 褐色シルトブロック状に30%混じる
 - 3 10 Y R 2/1 黒色砂質シルト 褐色シルトブロック状に5%混じる
 - 4 10 Y R 4/6 黒色砂質シルト 褐色シルトブロック状に混じる (機土層)
 - 5 10 Y R 3/2 暗褐色砂質シルト 褐色シルトブロック状に混じる
 - 6 10 Y R 2/1 黒色砂質シルト 少し粘性無い
 - 7 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 細くしまる 炭褐色シルト混じる
カラス嵐
 - 8 10 Y R 4/4 褐色シルト 細くしまる (机土層)
 - 9 10 Y R 2/2 黒褐色シルト質砂砂 炭化物含む

- ST 494
- 1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物多く含む
 - 2 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シルト 炭化物多く含む 褐色シルトブロック状に混じる
 - 3 10 Y R 2/1 黒色砂質シルト 炭化物多く含む 褐色シルトブロック状に30%混じる

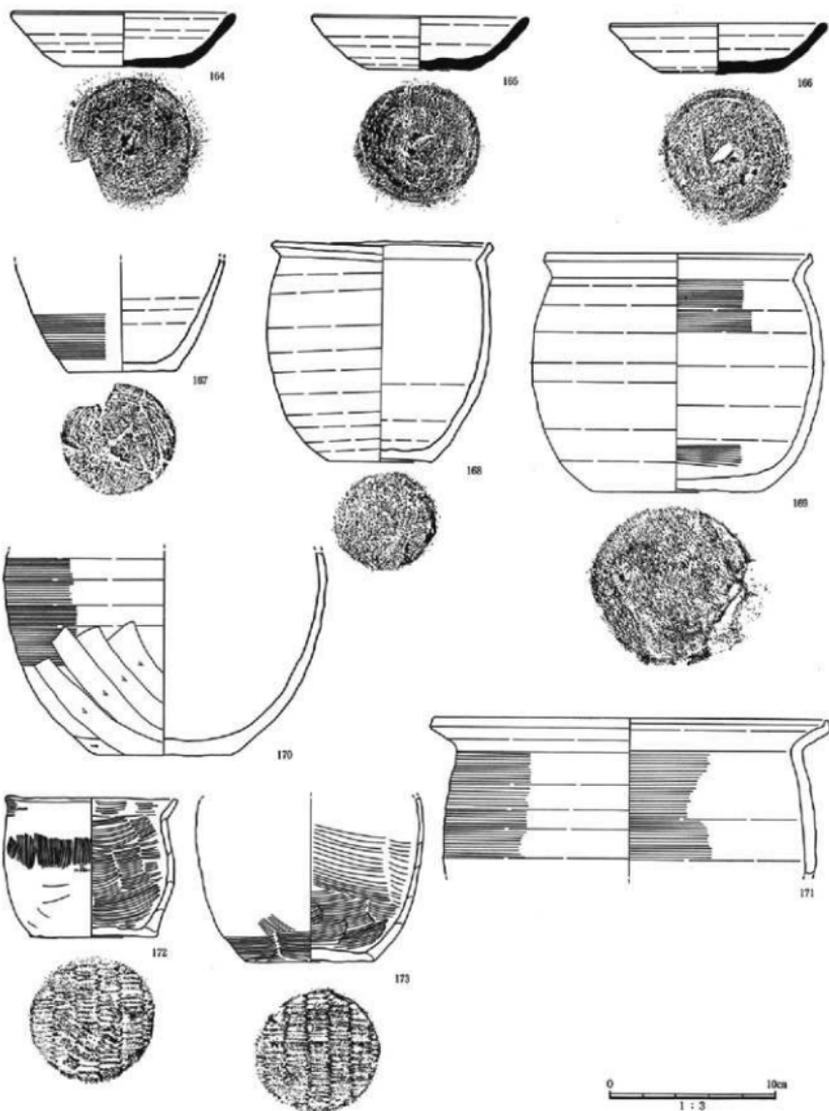
- ST 494 E P 5・E P 6・S D 816
- 1 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シルト 褐色シルトブロック状に混じる
 - 2 10 Y R 3/2 黒褐色シルト質砂砂 褐色シルトブロック状に10%混じる

- ST 494 E D 1・E P 2・3・4
- 1 10 Y R 2/2 黒褐色シルト質砂砂 粘性無い 炭化物含む

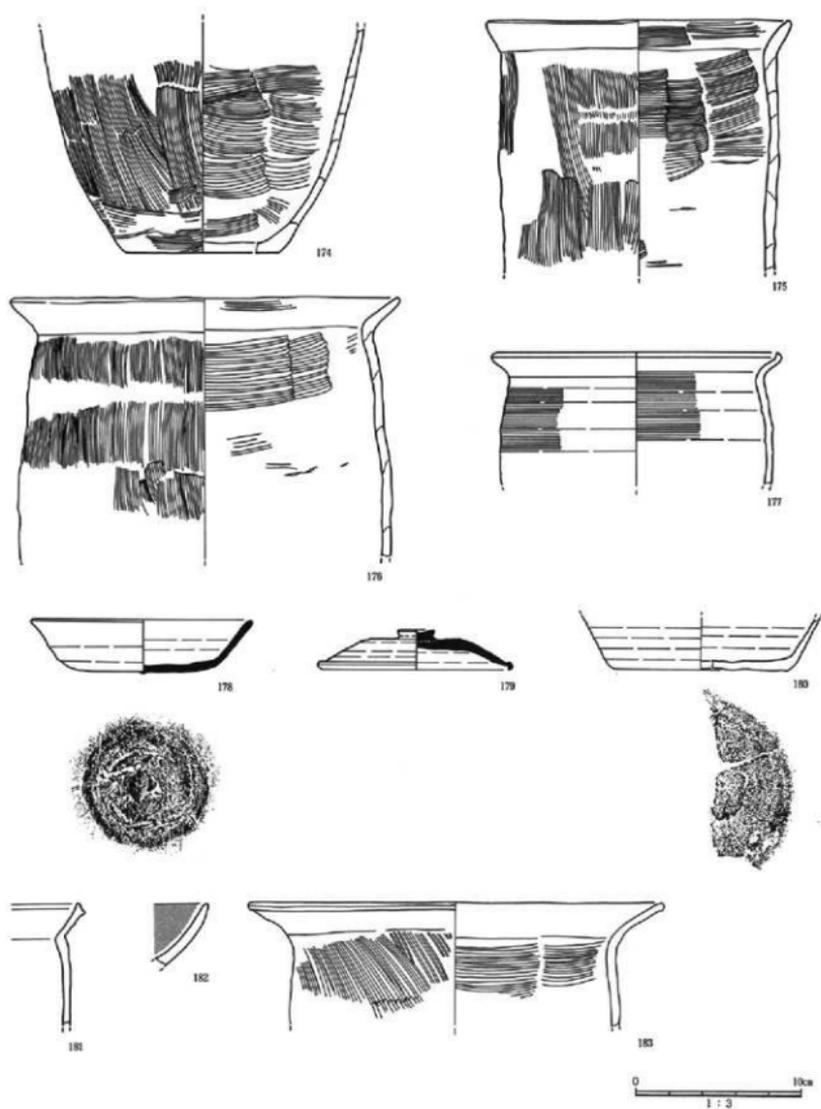
- SK 630・SK 631
- 1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 褐色シルトブロック状に30%混じる (机土)
 - 2 10 Y R 2/1 黒色砂質シルト 褐色シルト塊状に混じる
 - 3 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 褐色シルト (機) ブロック状に30%混じる
 - 4 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 褐色シルト (機) ブロック状に30%混じる
 - 5 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シルト 褐色シルト (機) ブロック状に30%混じる
 - 6 10 Y R 1,7,1 黒色砂質シルト 褐色シルト (機) ブロック状に30%混じる
機土混じる



第36図 ST 494・S X 493

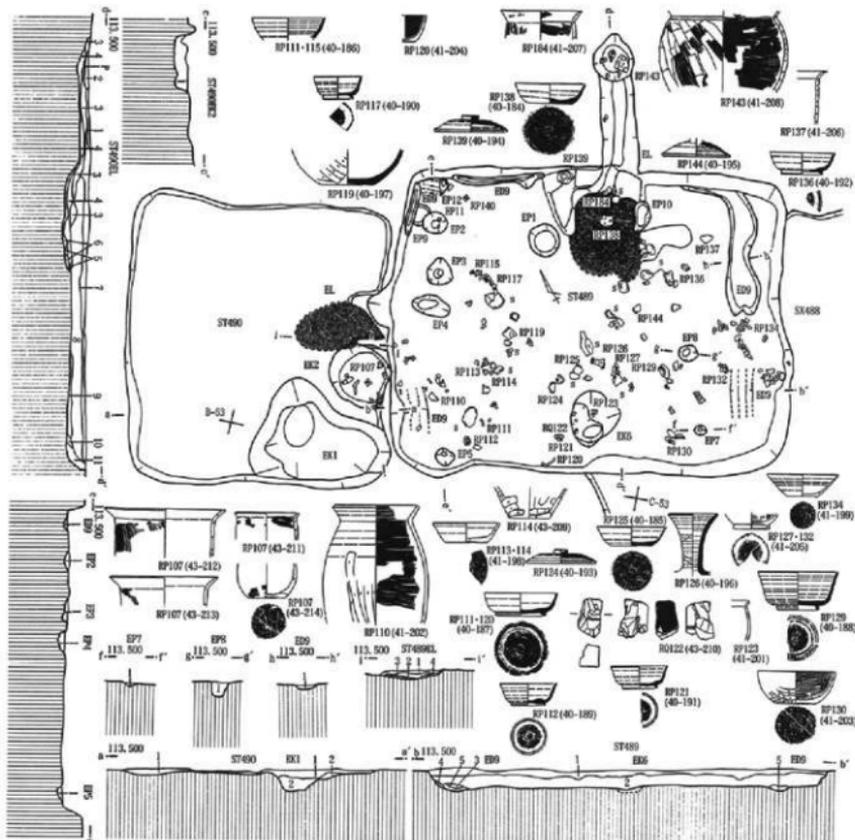


第37図 ST 492 出土遺物



第38図 ST 492・847・494・SX 493出土遺物

遺構と遺物



ST 489 E X 2
1 10 Y R 4/4 褐色砂質シロト 黒褐色砂質シロト上層に被る(被覆 焼土層)に属する

- ST 489 E L
1 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シロト 灰化物を含む(灰化層)
2 10 Y R 2/1 黒色砂質シロト 灰化物少く含む(灰化層)
3 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シロト 褐色シロトブロック状に20%含む(焼土層)
4 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シロト 褐色シロトブロック状に10%含む(焼土層)
5 10 Y R 2/1 黒色砂質シロト 灰化物を含む
6 10 Y R 4/4 褐色砂質シロト 硝い(灰泥面)
7 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シロト 灰化物を含む 遺物を含む 未分鮮有動物層に属する
8 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シロト 灰化物を含む 褐色シロトブロック状に20%含む
9 10 Y R 4/4 褐色砂質シロト 焼土層
10 10 Y R 2/1 褐色シロト質灰砂 黒褐色シロトに属する
11 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シロト 灰化物少く含む

ST 489 E F 2 ~ E P 8 ~ E D 9
1 10 Y R 2/1 黒色砂質シロト 灰化物多く含む

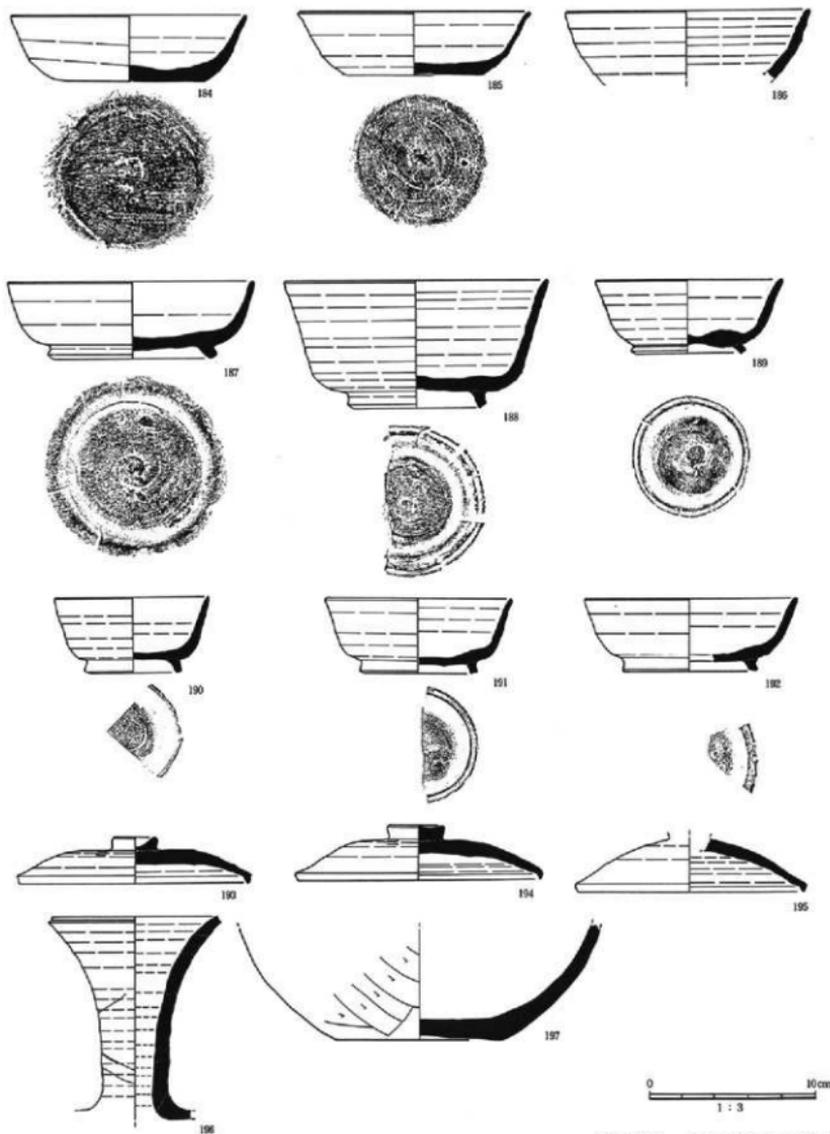
- ST 489 E L
1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シロト 灰化物を含む
2 10 Y R 2/1 黒褐色砂質シロト 灰化物少く含む
3 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シロト 褐色シロトブロック状に30%含む(焼土層)
4 10 Y R 4/1 褐色砂質シロト (灰泥面)

ST 489 (E K 1 を含む)
1 10 Y R 3/1 黒褐色砂質シロト 褐色シロトブロック状に5%含む
2 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シロト 褐色シロト (A) ブロック状に20%含む
3 10 Y R 2/3 黒褐色砂質シロト 褐色シロト (A) ブロック状に10%含む

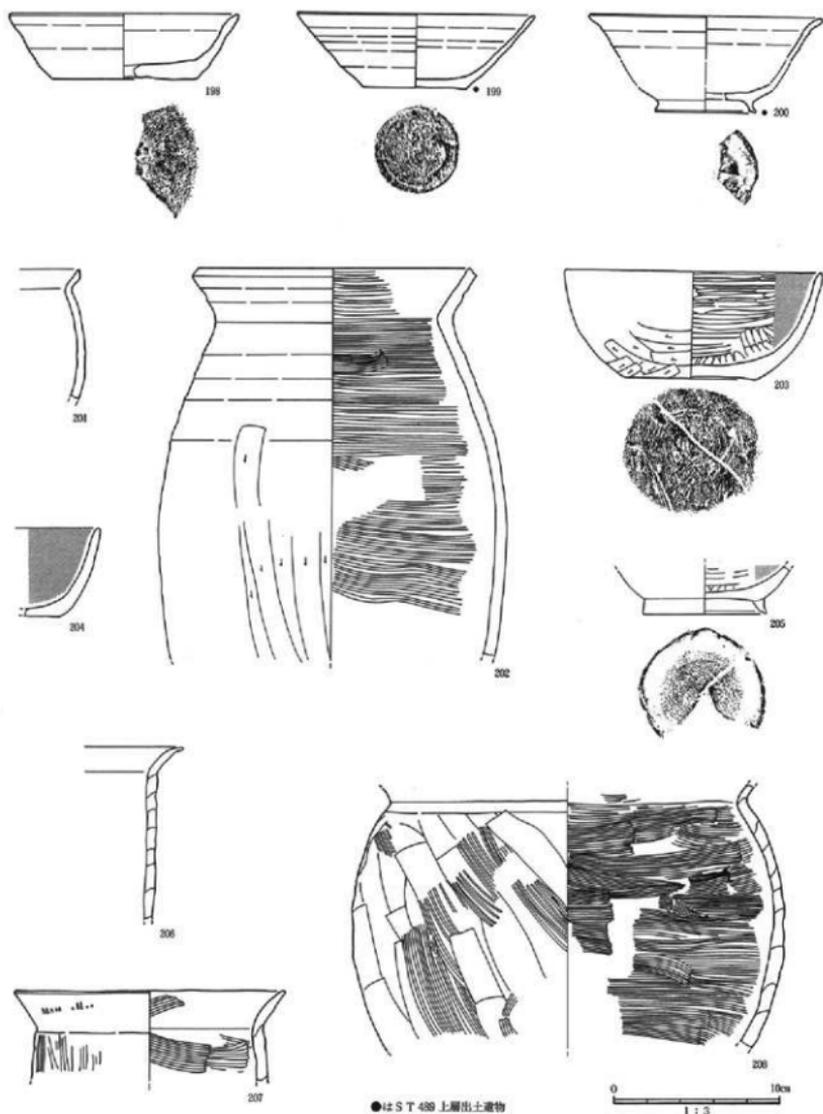
- ST 489
1 10 Y R 3/2 黒褐色砂質シロト 灰化物を含む 遺物を含む 未分鮮有動物層に属する
2 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シロト 灰化物を含む 遺物を含む
3 10 Y R 4/4 黒褐色砂質シロト 焼土層
4 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シロト 灰化物少く含む
5 10 Y R 2/1 黒色シロト質灰砂 黒褐色シロトに属する



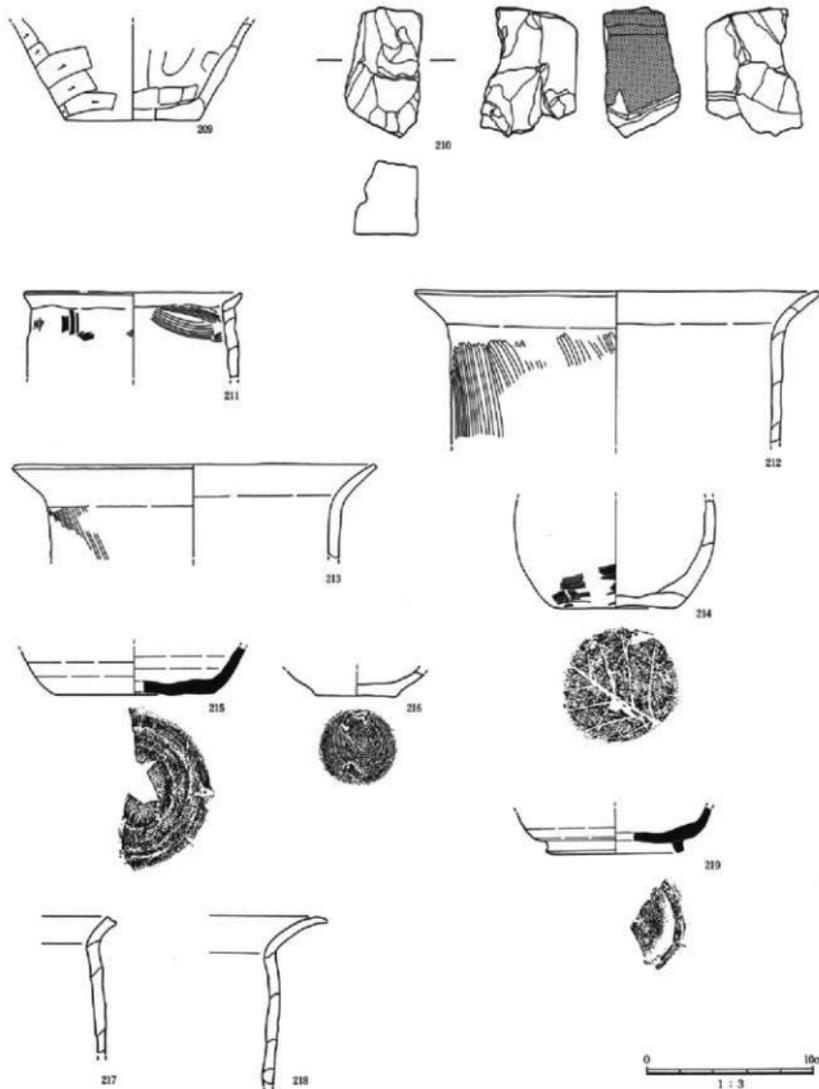
第39図 ST 489・490



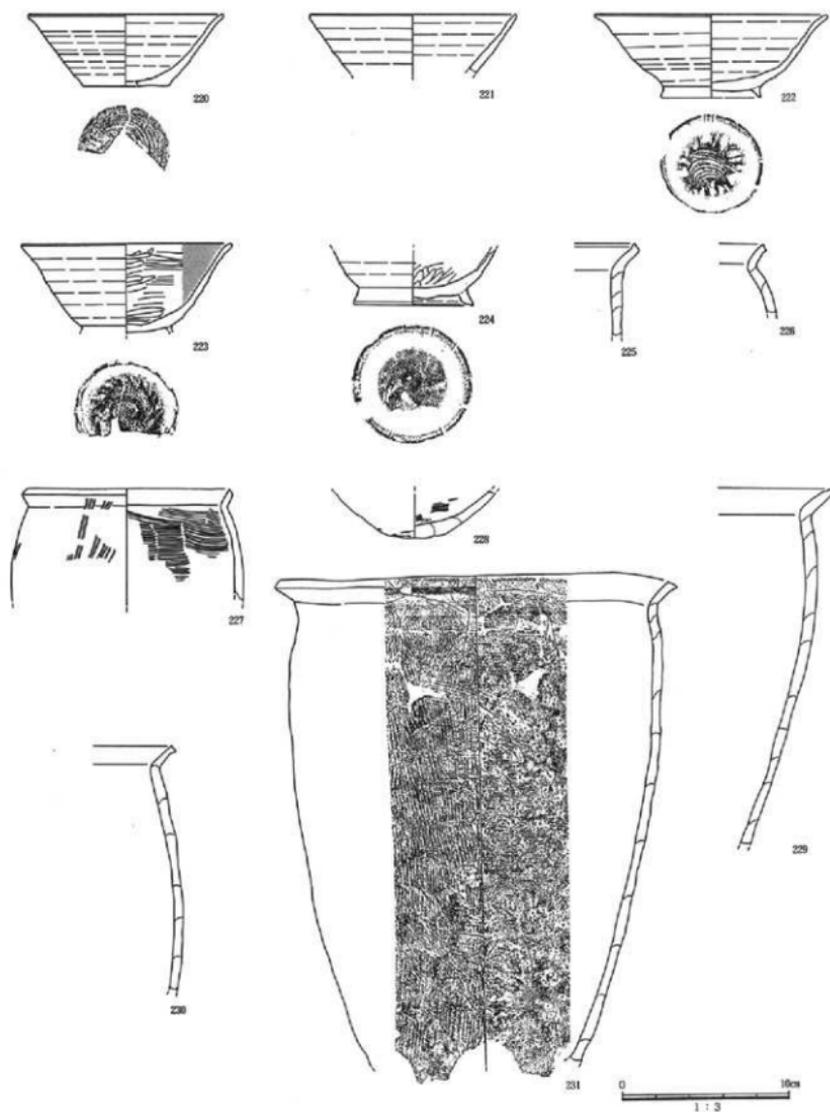
第40図 ST 489 出土遺物



第41図 ST 489 出土遺跡



第43図 S X 488・S T 489・490 出土遺物



第44図 ST 814出土遺物

(2) 掘立柱建物跡

SB92(遺構・第45図)

D11～E12Gで検出された。南側に市道があり未調査である。梁行東西2間であるが、桁行は不明である。柱穴の平面形は、22～60cmの円形である。深さは、6～28cmで、覆土は礫混じりの黒褐色土である。上部の削平があり、ほとんどの柱穴は浅い掘り込みとなっている。遺物は出土しなかった。

表一6 掘立柱建物跡観察表

	位置	遺存状態	規模	方向	柱 穴	出土遺物	備 考
SB 92	D11～E12	不良	梁行 東西2間 桁行 不明 削柱	N-7° -W	EB83, 86～88, 91 柱間170～230cm 掘方字型 直径22～60cm、深さ6～28cm 覆土礫混じりの黒褐色		南平部、市道により未調査
SB 600	D41～E42	不良	梁行 東西2間 桁行 南北2間 削柱	N-16° -W	EB801～607, 514, 581, 617, 620 柱間180～240cm 掘方字型 直径40～60cm、深さ10～35cm 一部礫混による放煙あり 覆土黒褐色砂質シルト	EB801～603, 606, 581, 617, 514, 620で須恵器(6)、土師器(32)、土師器(黒色処理) (1)が出土	調査区の設定で南東側未調査
SB 650	C41～D43	良	梁行 不明 桁行 不明 2間×2間力 削柱	N-0° -W	EB651～654 柱間200～230cm 掘方レンズ状 直径70～82cm、深さ12～36cm 抜き取り痕を検出 アタリ覆土黒色シルト貫挿砂	EB652, 654で須恵器(1)、土師器(1)が出土	調査区の設定で西側未調査 SD470とほぼ同軸 倉庫力
SB 823	C41～D43	良	梁行 東西2間 桁行 南北2間 削柱	N-10° -W	EB576, 590, 612, 618, 629, 644, 638, 802 柱間200～300cm 掘方レンズ状、途中段をもつものあり 直径20～85cm、深さ10～40cm 覆土黒褐色または黒色シルト	EB802, 644, 639で須恵器(1)、土師器(6)が出土	SD470を切る。
SB 700	B42～C43	良	梁行 東西2間 桁行 南北2間 床ツカあり	N-0° -W	EB701～712, 648, 636 柱間150～280cm 掘方レンズ状、途中段をもつものあり 直径130～100cm、深さ30～60cm 抜き取り痕を検出 アタリ覆土黒色シルト貫挿砂	今柱穴から遺物出土 須恵器(5)、土師器(24)が出土	SD470とほぼ同軸 倉庫力
SB 845	A43～B44	不良	梁行 東西2間 桁行 南北2間 削柱	N-10° -W	EB662, 629, 623, 636, 634, 642 柱間200～320cm 上部削平のため少し遺存 直径36～90cm、深さ4～22cm 覆土黒褐色砂質シルト		
SA 892	C41～C42	不良	梁行 南北1間 桁行 東西2間	N-80° -E	SP569, 613～615 柱間180～190cm 掘方字型 直径30～90cm、深さ6～24cm 覆土黒褐色砂質シルト		
SB 1070	A53	良	梁行 南北2間 桁行 東西3間 削柱	N-63° -W	EB733, 734, 738, 740, 1069, 1071～1073, 1076 柱間85～190cm 抜き取り痕を検出 直径20～35cm、深さ20～50cm 覆土黒褐色砂質シルト	EB734, 740, 1071, 1076で須恵器(1)、土師器(5)出土	
SB 1200	C51～D51	良	梁行 南北2間 桁行 東西2間 削柱	N-75° -W	EB723～725, 730, 828, 1220, 1215, 1220 柱間130～200cm 掘方レンズ状、途中段をもつものあり 直径30～60cm、深さ15～30cm	EB725, 1220で土師器(2)出土	

※出土遺物の()は出土土器片の数

S B 600 (遺構・第45図、遺物・第66図362)

D41～E42Gで検出された。調査区の設定により、南東側未調査。梁行東西2間、桁行南北2間で、方向軸は磁北から16度西に傾く。柱間が1.8m～2.4mの総柱である。E B 603は、一部攪乱を受けている。この柱穴から土師質の耳皿の体部が出土している。柱穴の平面形は、40～60cmの円形である。同軸の建物が無く、東側に建物群がある可能性がある。

S B 650 (遺構・第46図)

D41～E42Gで検出された。調査区の設定により、西側未調査で、梁行・桁行ともに不明である。掘方の平面形は、70～82cmの楕円形で、ほぼ中心に直径20cmの柱抜き取り痕が確認できる。東側にほぼ磁北の向きに走るS D 470と同軸である。溝により区画された西側に建てられたものと思われる。南側にある同軸のS B 700と同時期と思われる。

S B 832 (遺構・第46図)

C41～D43Gで検出された。E B 644が、S D 470南側を切っており、区画溝が廃絶した後建てられた建物跡と思われる。方向軸は、磁北から10度西側に傾く。西側にある同軸のS B と同時期と考えられる。構成する柱穴は直径の20～85cm円形である。深さは、10～40cmであるが、概ね30cm前後のものが多い。

S B 700 (遺構・第47図、遺物・第66図363)

B42～C43Gで検出された。長辺8m、短辺6.2mの大型の建物跡である。梁行東西3間、桁行南北3間の側柱構造であるが、南側に2基の床ヅカがあり、一部土間構造ではない箇所がある。掘方は、直径1.3～1mの楕円形または隅丸長方形である。深さは、30～60cmであるが概ね60cm程のレンズ状の断面形である。ほぼ中心に直径20cm程の円形の柱抜き取り痕が検出された。全柱穴から遺物が出土しているが、E B 710から土師質の突帯付瓶の体部破片が出土している。方向軸が、S B 650、S D 470と同軸のため、同時期に存在していたものと考えられる。

S B 845 (遺構・第48図)

A43～B44Gで検出された。調査区の設定により、西側が未調査である。上部の削平のため浅い掘り込みのみ確認された。柱穴の平面形は、直径36～90cmの円形または楕円形で、深さは、4～22cmの浅い掘り込みである。建物域が西側に拡張する可能性がある。方向軸は、磁北から10度西側に傾く。

S A 892 (遺構・第48図)

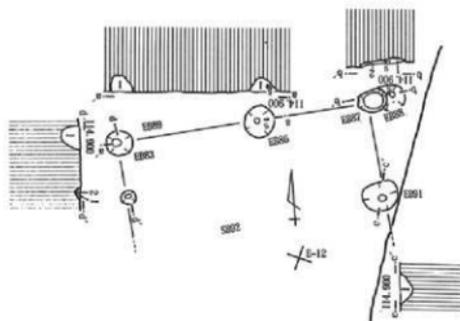
C41～C42Gで検出された。方向軸は、磁北から90度東側に傾く。

S B 1070 (遺構・第49図)

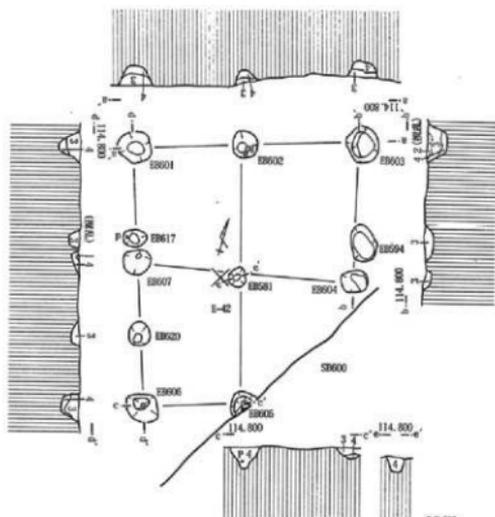
A53Gで検出された。方向軸は、磁北から83度西側に傾く。柱穴の平面形は、直径20～35cmの円形で、深さは20～50cmである。梁行南北2間、桁行東西3間の側柱である。

S B 1200 (遺構・第49図)

C51～D51Gで検出された。方向軸は、磁北から75度西側に傾く。梁行南北2間、桁行東西2間である。柱穴の平面形は、直径30～80cmの円形である。遺物は土師器片のみである。



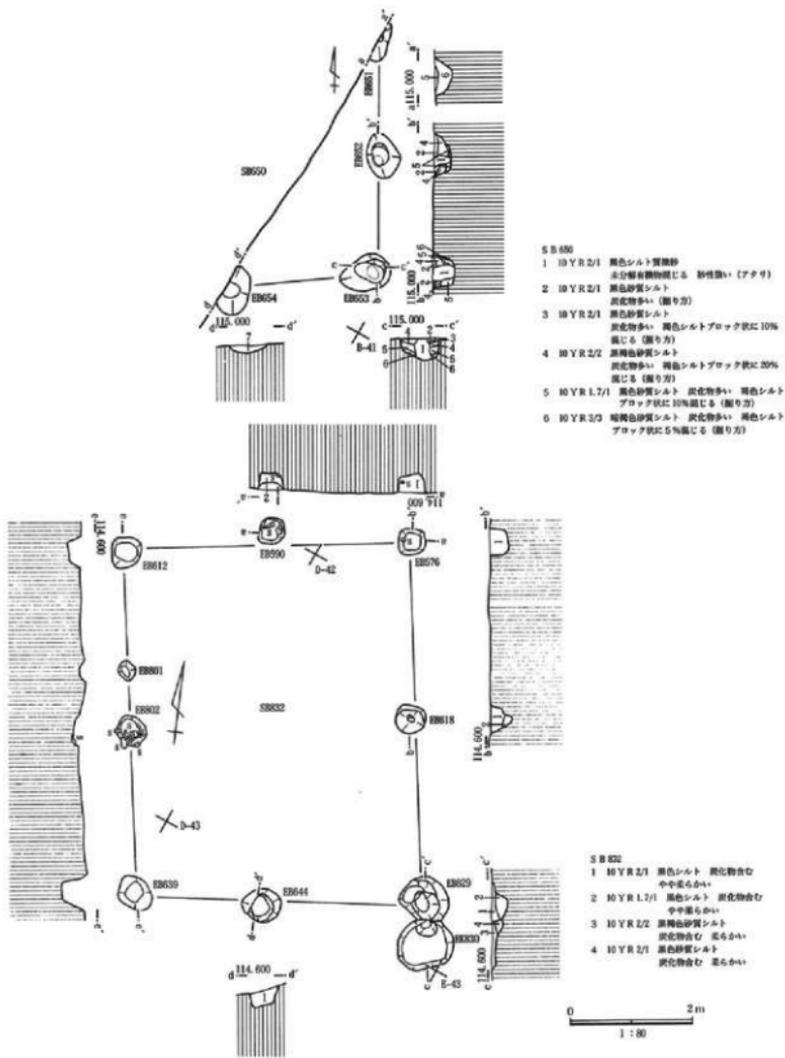
- SB 92
- 1 10 Y R 2/2 黒褐色シルト質細砂 礫多く混じる
 - 2 10 Y R 3/3 暗褐色細砂 礫物混入
 - 3 10 Y R 2/2 黒褐色シルト質細砂 礫物・細砂混じる



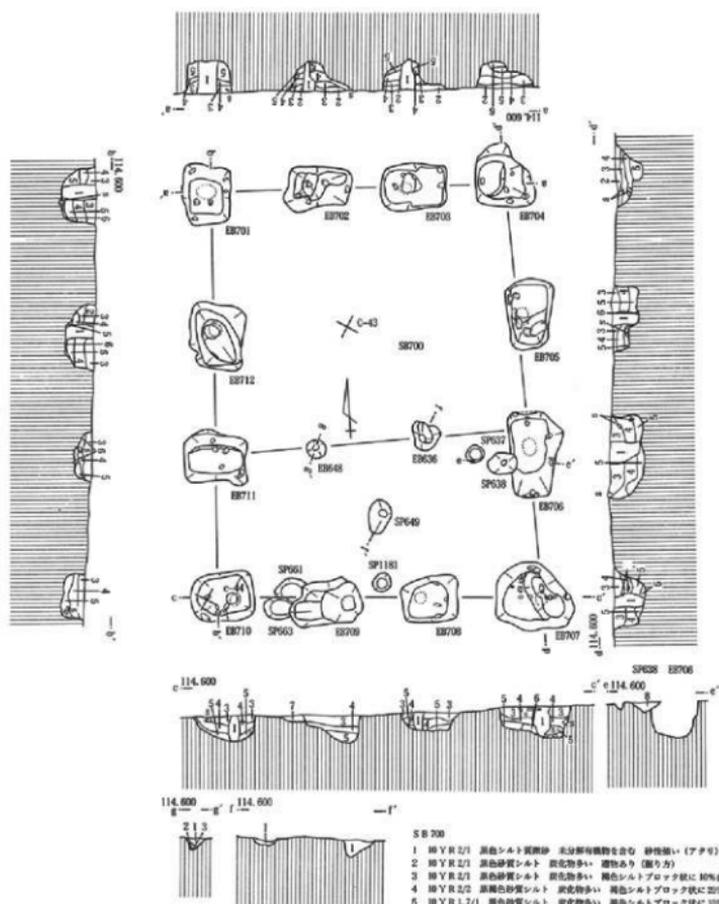
- SB 900
- 1 10 Y R 4/3 濃い黄褐色細砂 均質 (混濁)
 - 2 5 Y 3/2 オリーブ黒色砂質シルト (混濁)
 - 3 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 礫物混じる 礫化物混じる
 - 4 10 Y R 2/1 黒褐色土質シルト 礫物混じる 礫化物混じる 礫色シルトブロック状に認められる



第45図 SB 92・600



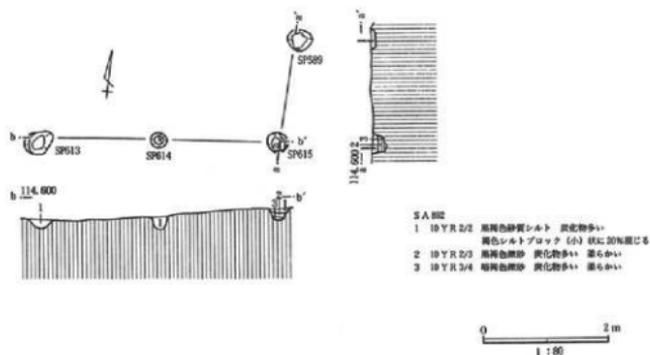
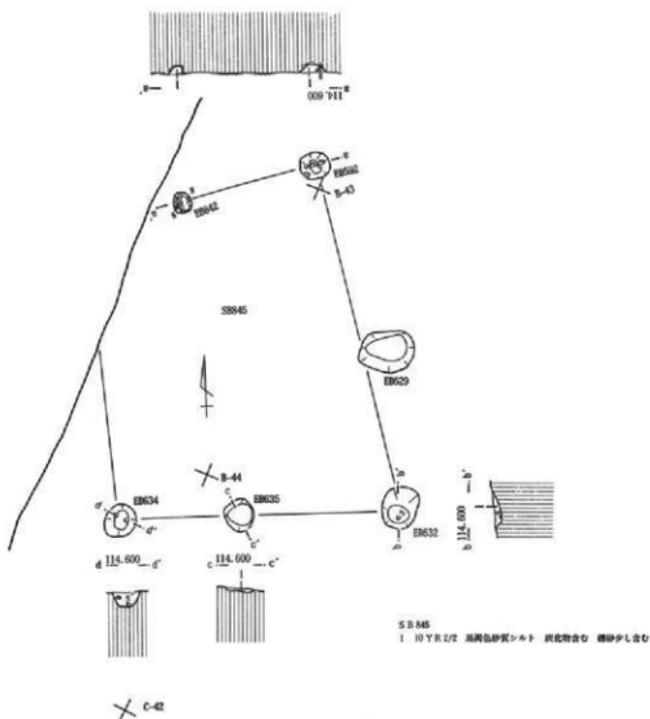
第46図 SB 650・832



- S B 700
- 1 黒 Y R 2/1 黒色シルト質礫砂 水分含有物多量 砂性強 (アチリ)
 - 2 黒 Y R 2/1 黒色砂質シルト 炭化物多量 遺物あり (廻り方)
 - 3 黒 Y R 2/1 黒色砂質シルト 炭化物多量 褐色シルトブロック状に 10% 含む (廻り方)
 - 4 黒 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 炭化物多量 褐色シルトブロック状に 20% 含む (廻り方)
 - 5 黒 Y R 1.7/1 黒色砂質シルト 炭化物多量 褐色シルトブロック状に 10% 含む (廻り方)
 - 6 黒 Y R 3/2 粘褐色砂質シルト 炭化物多量 褐色シルトブロック状に 5% 含む (廻り方)
 - 7 黒 Y R 2/1 黒色砂質シルト
 - 8 黒 Y R 2/2 黒褐色シルト質礫砂 遺物あり 炭化物あり
- E B 848・506・S P 640
- 1 黒 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 高い褐色細砂を層状に混じる
 - 2 黒 Y R 3/4 粘褐色シルト質礫砂 炭化物混じる 層少し混じる
 - 3 黒 Y R 3/3 粘褐色砂質シルト 高い褐色細砂砂に混じる

0 2m
1:80

第47図 S B 700



0 2 m
1 : 80

第48図 SB 845・SA 892

(3) 河川跡・溝跡

S G 267 (遺構・第50図)

A24～E18Gで検出された。B区を北東から南西に直線的に貫流する。幅2.5～9.2m、長さ45.5mで、深さは最深部で40cmを測る。方向軸は、磁北から西に130度傾く。壁の立ち上がりは、緩やかである。底面は、河床礫が確認でき、ほぼ平坦である。柱穴11基、土坑墓1基から切られる。土層は1層目黒褐色砂質シルトで、2層目が黒色砂質シルトである。遺物量は覆土1層目で多く出土した。登録遺物は21点で、出土土器の点数は、須恵器137点、赤焼土器・土師器260点である。1層目の点数が329点で、2層目は68点である。上層が削平されている箇所が多く、元々の上層部はもっと存在したものと思われる。遺物は、概ね9世紀代の様相で上層において10世紀代の土師器や、流れ込みで珠洲系陶器も出土している。

S D 470 (遺構・第51図)

A37～E44Gで検出された。C区中央部で、北から南へ直線的に貫流している。北側A38～B39Gが平安・中世の土坑群から切られる。中央部が攪乱で壊されている。方向軸が磁北である。幅0.8～2mで、長さ42.2mで、深さが最深部で40cmを測る。壁の立ち上がりは、緩やかで、途中段をもつ。小礫の混じる地山を掘り込み、やや起伏のある底面をもつ。覆土は3層で、1層目に酸化鉄を多く含む層があり、2・3層目は黒色ないし黒褐色砂質シルト層が堆積する。出土遺物で、登録遺物は24点を数え、点数は722点にのぼる。出土土器の内訳は、須恵器が167点、赤焼土器・土師器が543点である。1・2層ともほぼ概ね9世紀半ばの様相の土器である。同じ方向軸をもつ掘立柱建物跡S B 650・700の東側を区画する溝である可能性が高い。

北側と南側で土坑、柱穴から切られている。土坑の詳細なことについては、表6において記載しているので、北側の遺構から切り合い関係のみを整理する。

- ・ S D 470 → S X 877 → S D 862
- ・ S D 470 → ? S K 1144 → S K 861 → S K 860 → S K 808
- ・ S D 470 → S K 1042 → S K 1040 → S K 1144
- ・ S D 470 → S K 1042 → S K 510 → S K 1041
- ・ S D 470 → S K 1042 → S K 1062 → S K 1039 ・ S K 1061 → S K 943
- ・ S D 470 → S K 1047
- ・ S D 470 → S D 893 → S K 870

上層からの削平で、理解しづらい遺構もあるが、概ねこのようになると思われる。なお、中世陶器及び古銭が伴出した遺構は、S K 861・S K 860・S K 1141・S K 1040・S K 1041・S K 943・S K 870である。S K 943では、覆土中ではあるが古銭が出土している。

S D 670・671・S K 1166 (遺構・第52図)

S D 671は、S D 670・S T 840の上層を東西に掘り込んでいる。調査区の設定により西側が未調査である。東側が途中切れているが、東西に直線的に貫流しているものと思われる。S D 672・673の畝状遺構から一部切られる。位置はA44～D44Gで検出された。幅0.5～0.9mで、長さ16m、深さは確認面から10cmと浅い。覆土は1層の黒褐色砂質シルトで、丸礫を多く含む。

出土土器点数が23点で、須恵器10点、赤焼土器・土師器13点である。平安時代の遺構を想定できる。

S D670は、南北にS D671から、東側をS T840から切られ、西側をS B845から切られている。中央部でS K1166を切っている。調査区設定により、西側が未調査である。東側が、途中礫層により途切れているが、東西に貫流していたものと思われる。位置は、A44～D44Gで検出された。幅2.4～4mで、長さ17.4m、深さは12cmと浅い。覆土は、1層の黒褐色砂質シルトで丸礫を多く含む。出土土器点数は60点で、須恵器20点、赤焼土器・土師器40点である。平安時代の遺構を想定できる。

S K1166は、B44Gで検出され、上層をS D670により切られている。平面形は、やや歪んだ円形をしている。直径が1.2m、深さが確認面から12cmである。覆土は2層で、上層は黒褐色砂質シルトで炭化物を含み、下層はにぶい黄褐色砂質シルトでややグライ層である。出土土器は2点のみで、古墳時代中期の土師器片が出土している。本遺跡では、唯一の古墳時代の遺構である。

S G936・S D914・947(遺構・第53図)

S G936は、D50～F52Gで検出された。C区南東一角を南北に貫流する。北側に一部暗渠埋設による攪乱を確認できる。東側・西側をそれぞれS D947・914から南北に切られる。調査区の設定により、南北が未調査である。現存長で、南北12.2m、東西11.9mを測り、確認面から50cmの深さである。方向軸は、磁北から45度東に傾く。壁の立ち上がりは、緩やかで、底面には河床礫が広がり、北側に向かい高い。土層は、2層で上層の黒褐色砂質シルト、下層の黒色砂質シルトともに遺物量は多い。登録遺物数は52点を数え、全体の出土点数は1,562点である。出土土器の点数は、須恵器338点、赤焼土器・土師器1,216点である。上層は1,331点、下層は215点の土器片が出土した。1・2層とも多少の差があり、8世紀後半～9世紀初頭の土器様相である。須恵器片は概ね底部切り離しがへら切である。2層目を切るS K939、S P937・938・940があり、1層目の堆積以前に橋脚等の施設があった可能性がある。覆土はにぶい黄褐色シルト質微砂である。

S D914は、S G936の西側を南北に切る。調査区設定の関係で南北が未調査で、北側の一部を暗渠による削平を受ける。D50～E52Gで検出された。やや西側に蛇行しながら南北に貫流する。幅0.8～1.9mで、長さ11.5m、深さは最深度で50cmを測る。方向軸は、磁北から45度東に傾く。断面形はレンズ状で、S G936を掘り込んでいる。覆土は単層で黒色砂質シルトである。出土点数は242点を数え、土器点数は須恵器43点、赤焼土器・土師器199点である。登録遺物は16点を数える。土器様相は9世紀半ばを示し、須恵器片の底部切り離しは概ね回転糸切である。

S D947は、S G936の東側を南北に切る。調査区設定の関係で南北が未調査である。F51～F52Gで検出された。直線的に南北に貫流する。幅0.8～1.6mで、長さ5.6m、深さが最深度で80cmとS D914より深めのU字状の掘り込みをみせる。土層は4層で、最下層で黒褐色シルト質微砂、2・3層で暗褐色砂質シルト、1層目に黒褐色砂質シルトが堆積し、遺物は1層

目からほとんど出土している。出土土器の点数は10点で、須恵器5点、赤焼土器・土師器5点である。土器様相は、概ね9世紀半ばで、須恵器坯の底部切り離しは回転糸切である。

(4) 土坑他

ここでは、前頁で述べた以外の主な奈良・平安時代の土坑・性格不明遺構について述べる。切り合いの関係で、他時期の遺構も挿図等で載せている。なお、関連する事項については、表6に一覧表にしてあるので参考にして頂きたい。

SK6 (遺構・第54図)

C4Gで検出された。平面形が、楕円形で、磁北から東に25度傾く。現存長で長径85cm、短径48cm、深さ13cmである。壁の立ち上がりが、緩やかで、底面が平坦である。覆土は3層で、概ね黒褐色粘土質シルトの礫・遺物片を多く含んでいる。出土遺物は、須恵器1点、赤焼土器・土師器9点である。赤焼土器甕の底部などが出土している。

SX694 (遺構・第54図)

D47～E47Gで検出された。調査区設定で、東側が未調査である。平面形が不整楕円形で、方向軸が磁北から50度西に傾く。現存長で長径270cm、短径210cm、深さが確認面から10cmと浅い。底面がほぼ平坦で、覆土が黒褐色砂質シルトで褐色シルトが混じり固い、上部削平のため形状が不整形であるが、堅穴住居跡の可能性がある。出土遺物は、須恵器4点、赤焼土器・土師器3点である。上層から須恵器片が出土しているが、下層からは10世紀代の土師器高台付坏が出土しており、須恵器は流れ込みかと思われる。

SK530 (遺構・第54図)

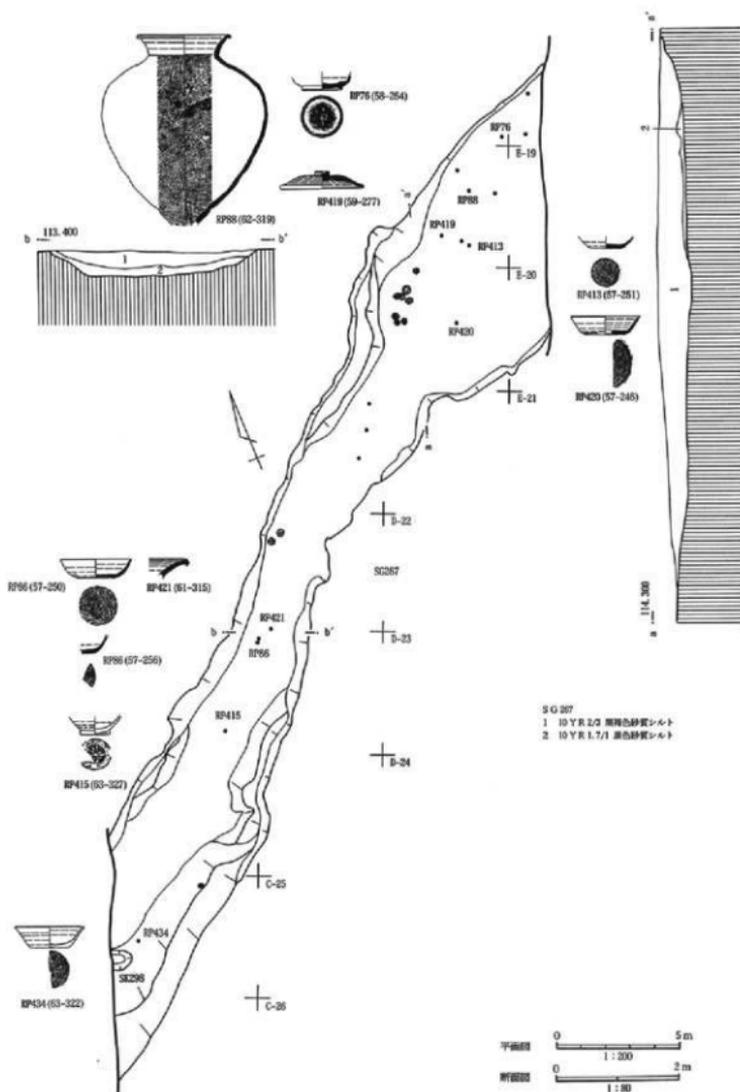
B40Gが検出された。直径200cmの円形で、深さが確認面から25cmである。断面形は、レンズ状で、底面が平坦である。覆土は4層で、概ね黒褐色砂質シルトで、褐色シルトの間層が入る。出土遺物は、須恵器2点で、赤焼土器・土師器19点である。

SK782・SX785 (遺構・第54図)

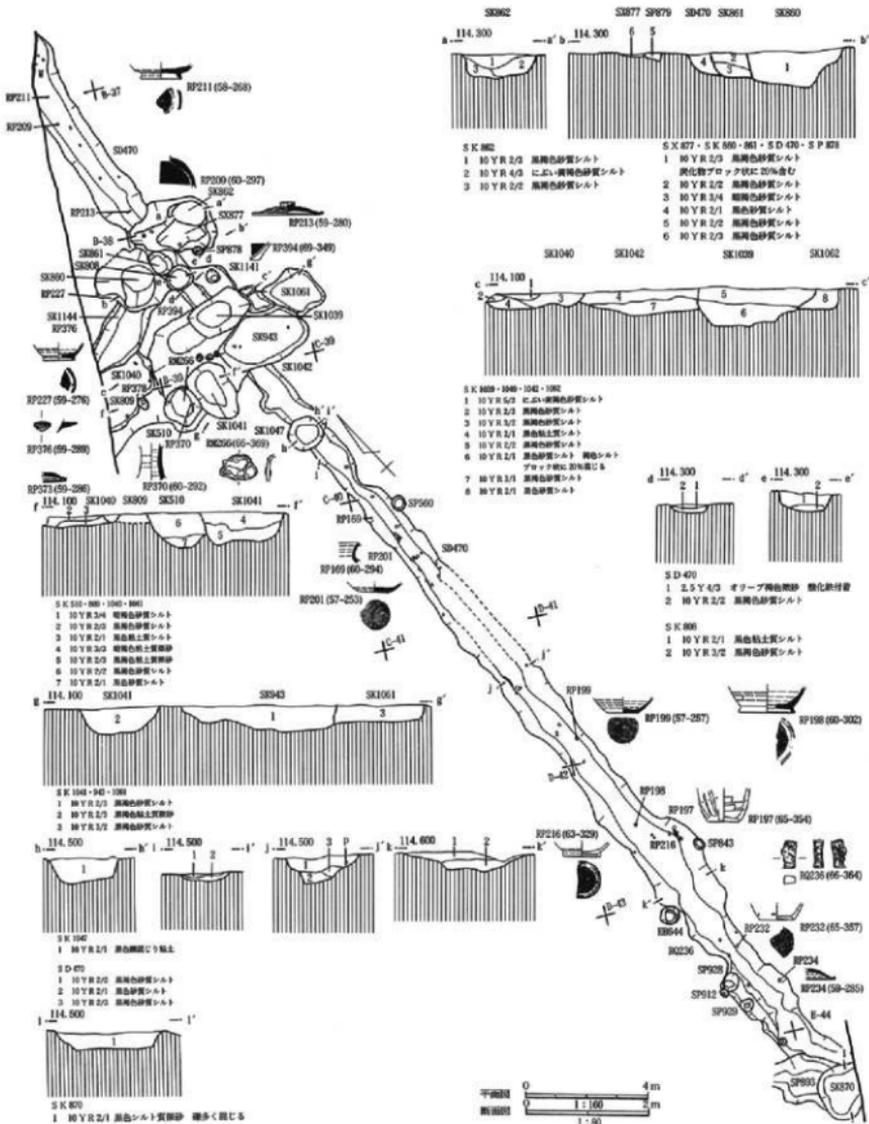
SK782は、C37Gで検出された。平面形は、直径115cmのほぼ円形である。深さは、確認面から45cmでやや深い掘り込みである。壁の途中で段を形成する。底面は、平坦である。覆土は2層で、上層が黒褐色砂質シルト、下層が暗褐色粘土質微砂で地山層粒が混じっている。出土遺物は、須恵器5点、赤焼・土師器6点である。口径が大きく、稜をもつ器形の須恵器高台付坏が出土している。8世紀後半の遺構と想定され、本遺跡の奈良・平安時代遺構の中でも古い段階の遺構である。これを切るSX785は、C37～C38Gで検出され、西側でSK931を切っている。中世の遺構を切っているため、中世以降の遺構と思われる。平面形は不整形で、長軸150cm、短軸140cmである。深さは確認面から35cmである。垂直な壁の立ち上がりで、底面で起伏がある。出土遺物は須恵器2点、赤焼土器・土師器4点である。

SK873・874 (遺構・第54図)

SK873は、B37Gで検出された。平面形は、長径120cm、短径100cmの楕円形である。深さは、確認面から45cmである。壁の立ち上がりに段を形成し、中央部が窪む。出土遺物は須恵器1点、赤焼土器・土師器6点である。SK874は、B37Gで検出され、北側をSK873から切ら

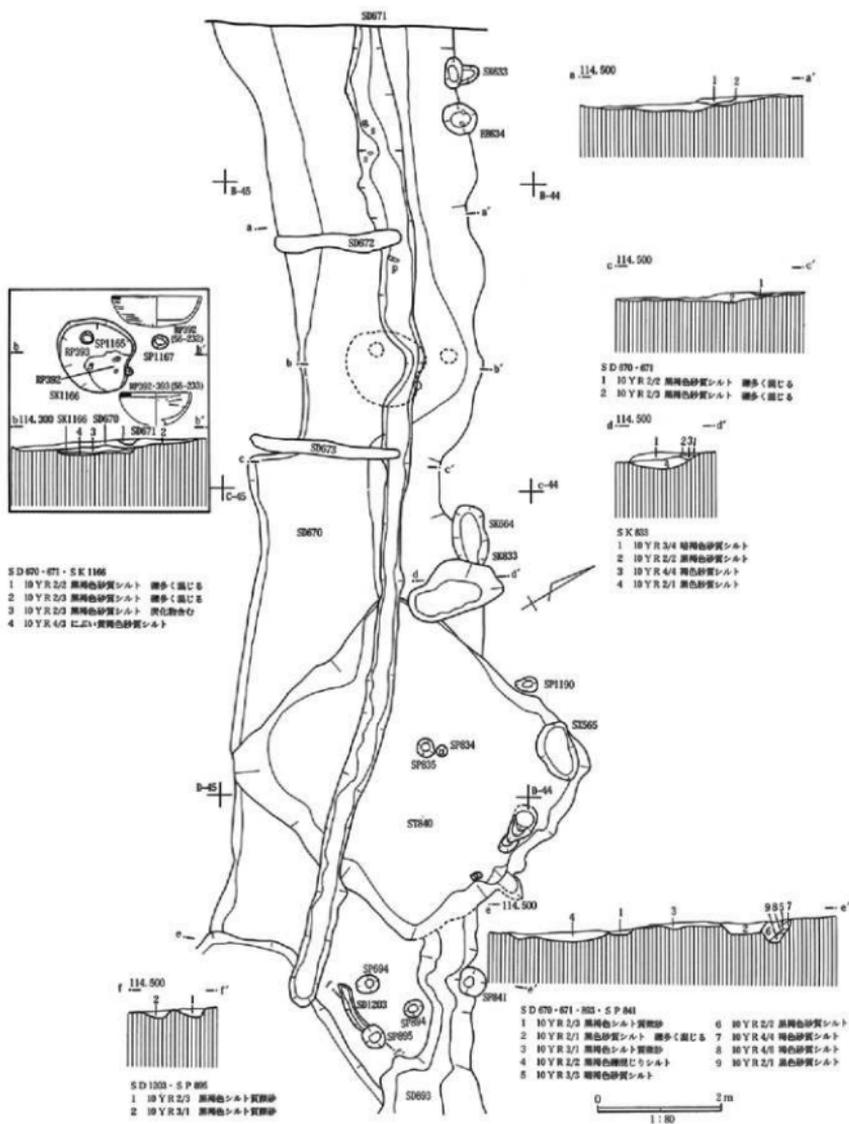


第50図 S G 267

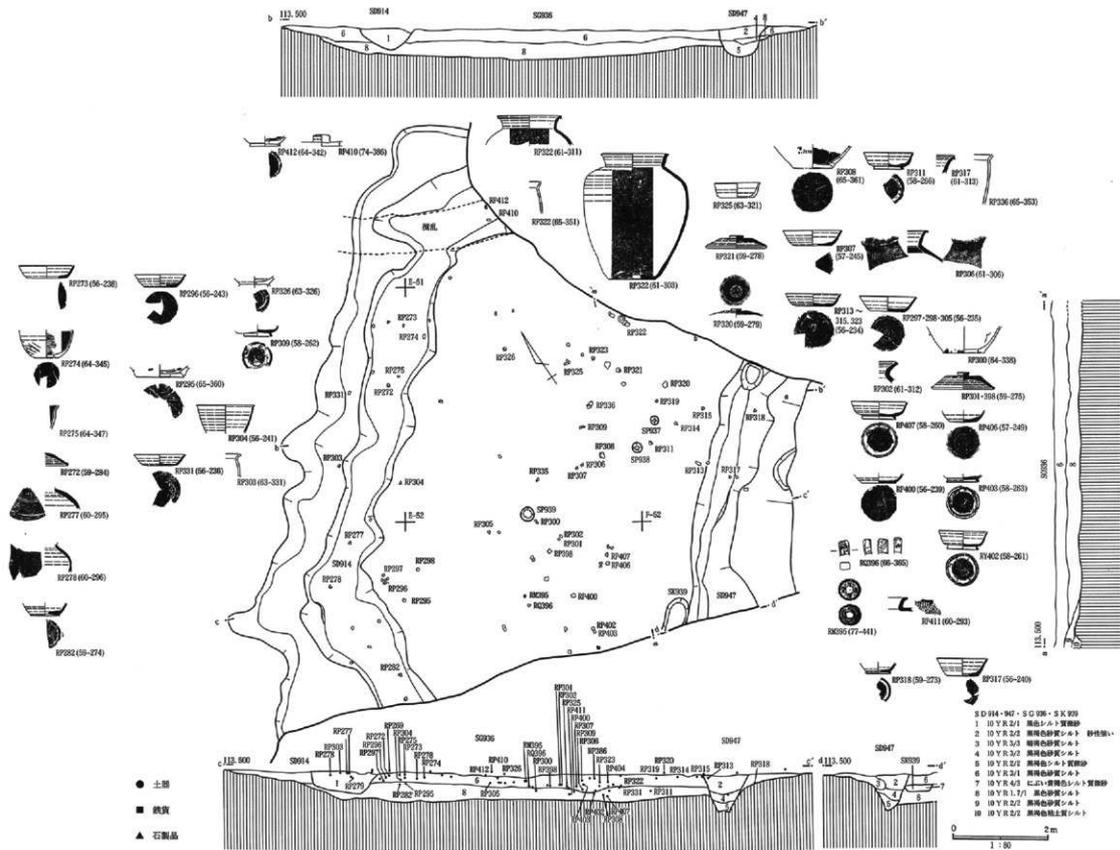


第 51 図 SD 470 他

遺構と遺物



第52図 SD 670・671・SK 1166



第53図 SG 936・SD 914・947

れる。現存長で、長径70cm、短径65cmの楕円形と思われる。深さは確認面から40cmである。出土遺物は、須恵器1点、赤焼土器・土師器10点である。

S K563・584・813(遺構・第55図)

S K563は、E40Gで検出され、東側と南側をそれぞれS K813・584から切られる。現存長が、長径190cm、短径120cmで、平面形が不整形長方形である。深さは、確認面から20cmである。壁は、緩やかな立ち上がりで、底面が南側に傾斜している。出土遺物は、須恵器7点、赤焼土器・土師器38点である。

S K583は、D40～E41Gで検出された。長径295cm、短径155cmの小判形で、方向軸が磁北から西に65度傾く。深さは確認面から30cmである。壁の立ち上がりが緩やかで、底面が平坦である。出土遺物は、須恵器7点、赤焼土器・土師器34点である。

S K813は、E40Gで検出された。長径250cm、短径135cmの小判形で、方向軸が磁北から東に27度傾く。深さが確認面から30cmである。断面形はレンズ状で、底面は平坦である。出土遺物は須恵器7点、赤焼土器・土師器34点である。流れ込みで石器1点が出土している。

S K1035・1036(遺構・第55図)

S K1035は、D40～E40Gで検出された。南側でS K1036から切られる。長径160cm、短径90cmの楕円形で、確認面から10cmの深さである。底面は平坦である。出土遺物は、須恵器1点、赤焼土器・土師器1点である。S K1036は、D40～E40Gで検出された。平面形は、長径180cm、短径70cmの小判形である。深さは、確認面から35cmである。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。出土遺物は、須恵器2点、赤焼土器・土師器1点である。

S K1172(遺構・第55図)

B33～C33Gで検出された。長径65cm、短径55cmのほぼ円形で、深さが確認面から35cmである。中央部が窪み、断面形がU字形である。出土遺物は、須恵器3点、赤焼土器・土師器4点である。底部回転糸切の須恵器坏が出土している。

S K541・S X545(遺構・第55図)

S K541は、D39Gで検出された。北側がS D540、南側がS X545から切られる。長径210cm、短径130cmの楕円形で、深さが確認面から30cmである。断面形はレンズ状で、底面がほぼ平坦である。出土遺物は、須恵器2点である。S X545は、D40Gで検出された。平面形がL字形の不整形で、長径160cm、短径100cmである。深さが確認面から15cmである。中央部が窪み、断面形がU字形である。出土遺物は、須恵器6点、赤焼土器・土師器11点である。天井部直下に穿孔がある須恵器蓋が出土している。

S K1023(遺構・第55図)

D39～E39Gで検出された。S K1024の東側、S X1027の西側、S X1142の北側をそれぞれ切っている。平面形が不整形楕円形で、長径190cm、短径160cmである。深さが、確認面から55cmである。中央部が窪み、断面形がレンズ状である。出土遺物は、須恵器8点、赤焼土器・土師器29点である。

遺構と遺物

表一 土坑・性格不明遺構観察表

遺構番号	坪数	位置	規模(m)	深さ(m)	形状	掘削方向	断面形状	断面	出土遺物	備考
9882	51	827	120×80	40	櫛形	N-52°-W	レンズ状	ほぼ平地	須磨器(14)、赤鉄・土師器(2)	SK377を上層から切る
9877	51	837-838	280×180	10	不整形円形	N-58°-W	浅い掘込み	ほぼ平地	須磨器(2)	SK478を上層から切る
9861	51	837	80×40	40	櫛形	不明	レンズ状	平地	須磨器(4)、赤鉄・土師器(2)、須磨器(10)	SK360を上層から切る
9860	51	A38-638	240×210	60	不整形	N-26°-W	途中段を形成	両側に傾斜	須磨器(11)、赤鉄・土師器(14)、笠置瓦(2)	SK381を上層から切る
SK144	51	A38-638	290×140	40	東西に溝状	N-15°-E	垂直な立ち上がり	両側に傾斜	須磨器(10)、赤鉄・土師器(14)、笠置瓦(2)	SK1048を上層から切る
SK140	51	A38-638	190×180	43	不整形円形	N-82°-W	垂直な立ち上がり	北側に傾斜	須磨器(10)、赤鉄・土師器(15)、笠置瓦(2)	SK1042を上層から切る
SK142	51	A38-639	540×400	25	不整形円形	N-68°-W	浅い掘込み	起伏あり	須磨器(1)、赤鉄・土師器(3)	
9808	51	838	84×90	30	ほぼ円形	N-76°-W	レンズ状	平地	須磨器(1)、赤鉄・土師器(14)	SK478を上層から切る
SK1039	51	838	200×120	40	櫛形	N-16°-E	途中段を形成	起伏あり	須磨器(10)、赤鉄・土師器(2)	SK1042を上層から切る
SK1041	51	839	120×110	58	ほぼ円形	N-22°-E	L字形	やや丸底	須磨器(10)、赤鉄・土師器(7)、笠置瓦(1)	SK106の西側を切る
9810	51	839-639	200×120	55	櫛形	N-7°-E	レンズ状	西側に凹	須磨器(6)、赤鉄・土師器(4)	SK1042を上層から切る
9843	51・70	839	300×200	40	櫛形	N-62°-W	起伏あり	須磨器(6)、赤鉄・土師器(14)、笠置瓦(2)	SK1042を上層から切る	
SK1061	51	839-C38	210×170	25	不整形	N-36°-W	レンズ状	平地	須磨器(4)、赤鉄・土師器(6)	SK102の西側を切る
SK1052	51	838	96×90	30	不整形	N-47°-E	垂直な立ち上がり	平地		SK1038の西側を切る
SK1047	51	839	120×120	40	円形		レンズ状	平地	須磨器(10)、赤鉄・土師器(2)	SK478を上層から切る
9870	28・51	844	160×140	22	櫛形	N-27°-E	レンズ状	平地	須磨器(10)、赤鉄・土師器(14)、笠置瓦(2)	SK478を上層から切る 隣接の段で東側を調査
SK166	53	844	128×122	14	不整形	N-22°-E	浅い掘込み	平地	古式土師器(2)	SK576を上層を切られる
9833	53	844	186×90	28	不整形円形	N-40°-E	浅い掘込み	丸底		SK576を上層から切る
9839	52	752	64×48	15	不整形円形	N-67°-E	レンズ状	平地		SK389の掘目を作る
986	54	84	85×48	13	櫛形	N-25°-E	壁やかな立ち上がり	平地	須磨器(1)、赤鉄・土師器(6)	
9894	54	847-847	270×210	10	不整形円形	N-57°-W	浅い掘込み	ほぼ平地	須磨器(4)、赤鉄・土師器(3)	隣接の段で東側を調査 隣接の段で調査あり
SK11	54	A32-832	360×220	40	不整形	N-70°-E	壁やかな立ち上がり	起伏あり	須磨器(6)、赤鉄・土師器(14)	SK402を上層から切る
SK22	54	A33-833	210×120	30	東西に溝状	N-67°-W	壁やかな立ち上がり	中央部が凹	須磨器(3)、赤鉄・土師器(6)	SK421を上層から切る
SK421	54	833	100×100	20	円形		L字形	中央部が凹		SK477を上層から切る
SK330	54	840	200×200	25	円形		レンズ状	平地	須磨器(2)、赤鉄・土師器(10)	
SK782	54	837	115×115	45	楕円形		途中段を形成	平地	須磨器(5)、赤鉄・土師器(6)	SK785から南側を切られる
SK785	54	C37-C38	150×140	35	不整形	N-68°-W	垂直な立ち上がり	起伏あり	須磨器(10)、赤鉄・土師器(6)	SK782の北側を切る
SK373	54	837	120×100	45	櫛形	N-70°-E	途中段を形成	中央部が凹	須磨器(1)、赤鉄・土師器(6)	SK374の南側を切る
SK24	54	837	70×65	40	櫛形	N-10°-W	壁やかな立ち上がり	平地	須磨器(1)、赤鉄・土師器(10)	SK373から北側を切られる
SK563	56	840	190×120	20	不整形	N-15°-E	壁やかな立ち上がり	両側に傾斜	須磨器(7)、赤鉄・土師器(8)	SK313、SK4から切られる
SK584	56	840-841	295×195	30	小円形	N-65°-W	壁やかな立ち上がり	平地	須磨器(10)、赤鉄・土師器(14)	SK313、SK5を切る
SK313	56	840	250×125	30	小円形	N-27°-E	レンズ状	平地	須磨器(7)、赤鉄・土師器(8)	SK385の南側を切る
SK1035	56	840-840	180×90	10	楕円形	N-42°-W	浅い掘込み	平地	須磨器(1)、赤鉄・土師器(1)	SK1038から南側を切られる
SK1036	56	840-840	180×70	35	小円形	N-35°-W	壁やかな立ち上がり	平地	須磨器(2)、赤鉄・土師器(1)	SK1035の南側を切る
SK1172	56	833-C33	66×55	35	ほぼ円形	N-70°-W	L字形	中央部が凹	須磨器(3)、赤鉄・土師器(6)	
SK541	56	039	210×130	30	櫛形	N-87°-E	レンズ状	ほぼ平地	須磨器(2)	SK545から東側を切られる
SK545	56	840	180×100	15	不整形	N-62°-E	L字形	中央部が凹	須磨器(6)、赤鉄・土師器(1)	SK541の東側を切る
SK1034	56	039-C39	210×90	15	不整形円形	N-57°-W	浅い掘込み	赤鉄・土師器(3)	SK1023から東側を切られる	
SK1023	56	039-C39	190×160	55	不整形円形	N-68°-W	レンズ状	中央部が凹	須磨器(6)、赤鉄・土師器(8)	SK1034の東側を切る
SK1142	56	039-C39	300×160	35	不整形円形	N-67°-W	垂直な立ち上がり	中央部が凹	須磨器(4)、赤鉄・土師器(14)	隣接の段で東側を調査
SK1027	56	839	70×42	50	長方形	N-67°-W	垂直な立ち上がり	平地		隣接の段で東側を調査

※出土遺物の()は出土遺物の数量
※斜線はすべて埋存品

(5) 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物**古墳時代の土器****古式土師器 (第56図232・233)**

(232)・(233)は、土師器環である。(232)は、中型環で、体部がやや内湾して立ち上がり、底部は丸底である。赤彩を施し、外面調整が体部ヘラ削、口縁部ナデである。(233)は、やや小型環で、体部が内湾して立つ。口縁部にナデ調整を施す。5世紀代の様相で、高橋編年の3期に併行するものと思われる。

奈良・平安時代の土器**須恵器環 (第56図234～第57図258)**

(234)・(237)・(238)・(242)は、器形が逆台形で、底径が広い。器高がやや低い。底部切り離しは、ヘラ切した後にはヘラ削調整を施す。(235)・(243)・(244)・(245)・(246)は、底径がやや広く、器形が逆台形になる。底部切り離しが、ヘラ切した後にはヘラ削調整を施す。(236)は、器形が逆台形でやや底径が広い。器高が低い。底部切り離しがヘラ切である。(239)は、底部～体部であるが、やや底径が広く、直線的に外反する。底部切り離しが、ヘラ切した後にはヘラ削調整を施す。(240)は、底径がやや広く、体部が直線的に外反する。底部切り離しがヘラ切で、ヘラ削調整を施す。(241)は、器高が高く、体部が直線的に立つ。(247)・(248)は、残存率が低く全容が不明であるが、体部が直線的に外反する。(247)は、生焼である。(249)は、底部～体部のみで、丸底風のやや底径が広い器形である。底部のあるものは、底部切り離しがヘラ切で、ヘラ削調整を施す。

(250)・(252)は、底径がやや小さく、体部が、緩やかに内湾しながら立ち上がる。底部切り離しが、回転糸切である。(251)・(253)・(254)・(255)は、底径が小さく、体部が直線的に立ち上がる。底部切り離しは、回転糸切である。(256)は、残存率少なく全容が不明であるが、底径がやや小さく、体部が直線的に立ち上がる器形と考えられる。

(258)は、底部のみであるが、ヘラ書で「×」と刻書されている。底部の切り離しは、ヘラ切である。

須恵器高台付環 (第58図259～第59図274)

(259)は、口径が大きく、体部下方に稜をもち、器面にヘラ削調整を施す。底部切り離しは、ヘラ切である。(260)・(264)は、底径が大きく、体部がやや直線的に外反する。底部切り離しが、ヘラ切である。(261)・(266)・(286)は底径がやや大きく、体部がやや直線的に外反する。底部切り離しはヘラ切である。(262)は、底径がやや大きく、体部が歪んでいる。底部切り離しが、ヘラ切である。(263)・(267)は、底部のみであるが、底径が広い。底部切り離しが、ヘラ切である。(265)は法量が小さく、体部がやや直線的に立ち上がる。底部切り離しが、ヘラ切である。(269)・(272)は残存率が少なく、全容はつかめないが、体部が直線的に立ち上がり、底径が広い器形を想定できる。(272)は、高台が欠損している。底部切り離しがヘラ切である。(270)は、底部のみであるが、やや尖った付高台をもち、底部切り離しが回転糸切である。(274)は底径がやや小さく、体部がやや直線的に立ち上がる。底部切り離しが回転糸切である。(271)・(273)は、

底径が小さく、体部が直線的に立ち上がる。底部切り離しが回転糸切である。(271)は、焼成がしっかりしており、外面の色調が双耳杯と類似する。

須恵器蓋(第59図275～287)

(275)は、器高が高く、天井・体部の境が角をなし、口縁端部が直立する。天井部にヘラ削調整を施す。(276)・(277)は、器高がやや低く、口縁部が軽く屈曲する。外面にヘラ削調整を加えている。(276)は天井部直下に穿孔がある。焼く前から開けている孔である。(278)は、扁平で広いツمامをもち、器高が低く、口縁端部が直立する器形である。(279)は、器高が低く、平坦な天井部をもつ。天井部の切り離しが回転糸切である。(280)は、器高が低く、口縁部が屈曲し、口縁端部が直立する。外面にヘラ削調整を加えている。(281)は、口縁部が欠損しているのに、全容がつかめないが、丸味のある器形である。(282)は、ツمامが欠損しているが、器高が低く、口縁端部が直立する器形である。外面ヘラ削調整を加える。(283)～(286)は、残存が少なく、全容がつかめない。(283)は、やや器高が低く、口縁部が屈曲している。(284)は器高が高く、口縁端部が肥厚する。(285)・(286)は、器高が低く、口縁端部が直立する。

須恵器双耳杯(第59図288・289)

(288)は、直線的に立ち上がる体部に斜方向の把手が付く器形である。把手の先端部が欠損している。(289)は、把手のみであるが、(288)と同様の器形を想定できる。器面を丁寧なヘラ削を施している。

須恵器鉢(第60図290・291)

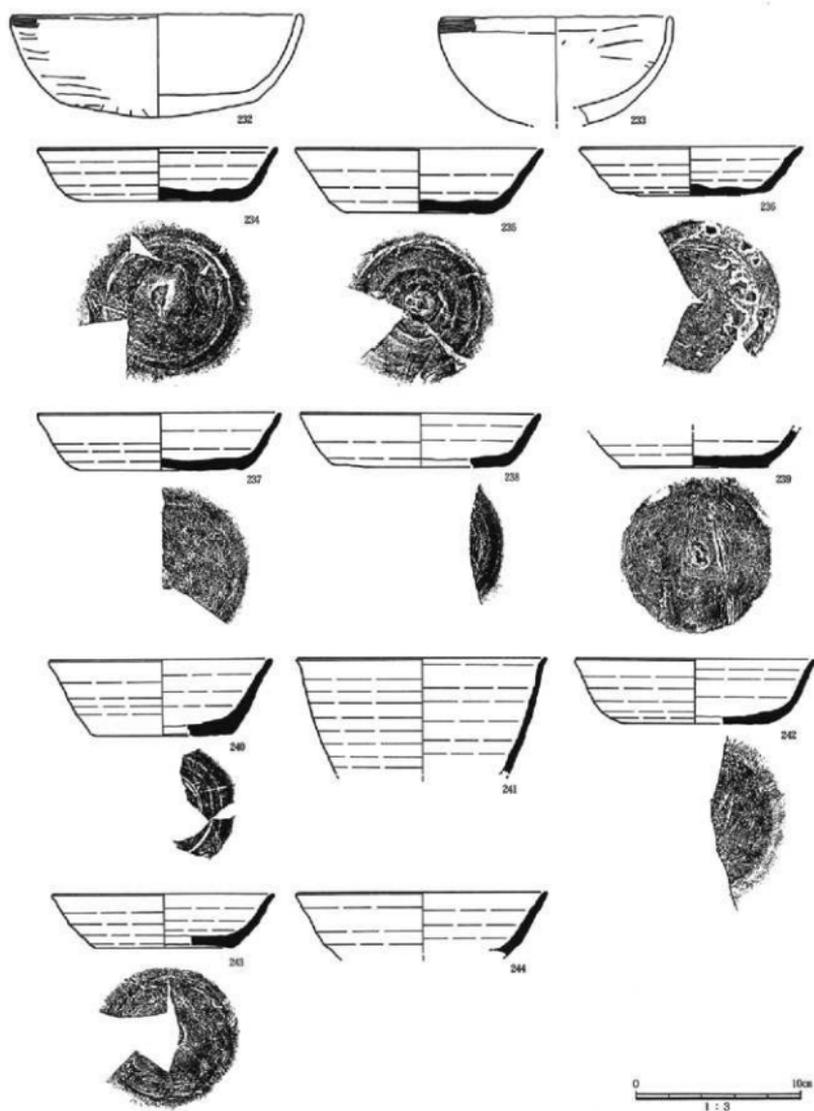
(290)は、口縁部～体部が直線的に立ち上がる。(291)は、口縁部が内弯する。

須恵器長頸瓶(第60図292)

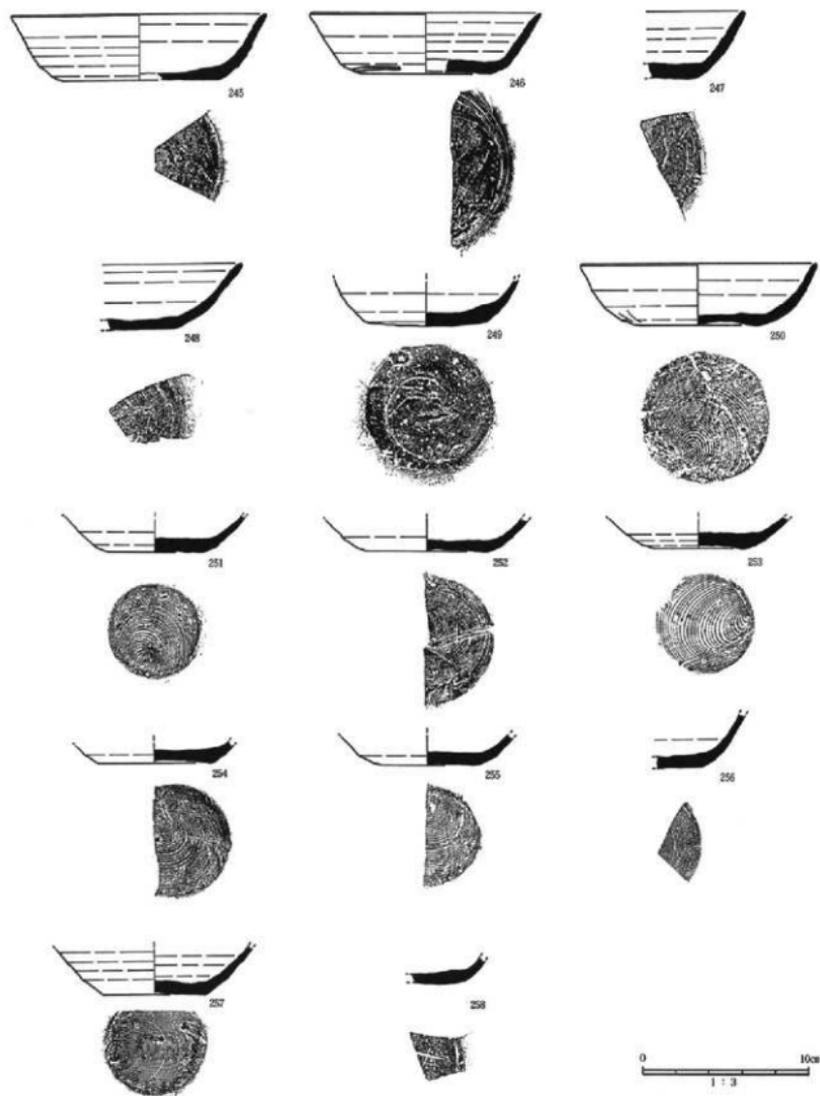
(292)は、頸部～口縁部で、長い口縁部が付く。口縁端部が欠損している。

須恵器壺(第60図293～第61図303)

(293)は、短い口縁部が外反し、体部が膨らむ。外面タタキ調整をした後にロクロナデを施している。内面をアテ具による調整をした後にロクロナデ調整を施す。(294)は、短い口縁部が外反する。口縁端部が直立する。(295)は、肩部のみであるが、体部が丸く膨らむ器形を想定できる。平行な沈線を3条施している。器面の調整はロクロナデである。(296)は、体部が膨らむ器形を想定できる。器面の調整は、外面タタキ調整の後ロクロナデを施す。内面はロクロナデである。(297)は、肩部のみであるが、体部が丸く膨らむ器形を想定できる。外面の調整が、ロクロナデの後、ヘラ削である。内面調整にカキメ調整を施す。(298)は、底部のみである。底部が若干マメツしているが平底である。外面の調整が、雑なヘラ削調整である。内面がロクロナデである。(299)は、底部のみで、平底である。内外面ロクロナデ調整を施し、底部に丁寧なヘラ削調整を施す。(300)は、底部のみで、平底である。外面ヘラ削調整を施し、内面ロクロナデ調整をする。底部切り離しが、回転糸切である。(301)は、付高台をもち、底部の切り離しがヘラ切である。内外面ともにロクロナデである。(302)は、付高台をもち、底部の切り離しがヘラ切である。内外面ロクロナデ調整を施す。(303)は、最大径がやや上位にあり、口縁部が短く外反する広口壺を想定できる。底部は平底であるが、磨減しており、切り離しが不明である。体



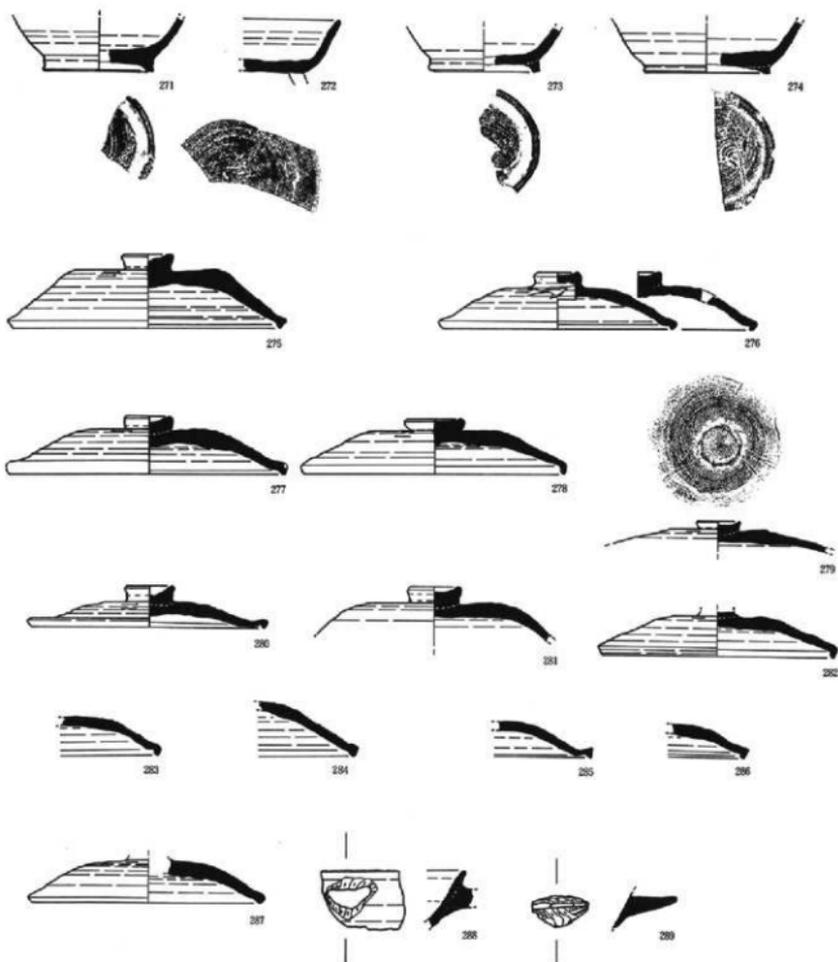
第56図 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物(1)



第57図 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物(2)

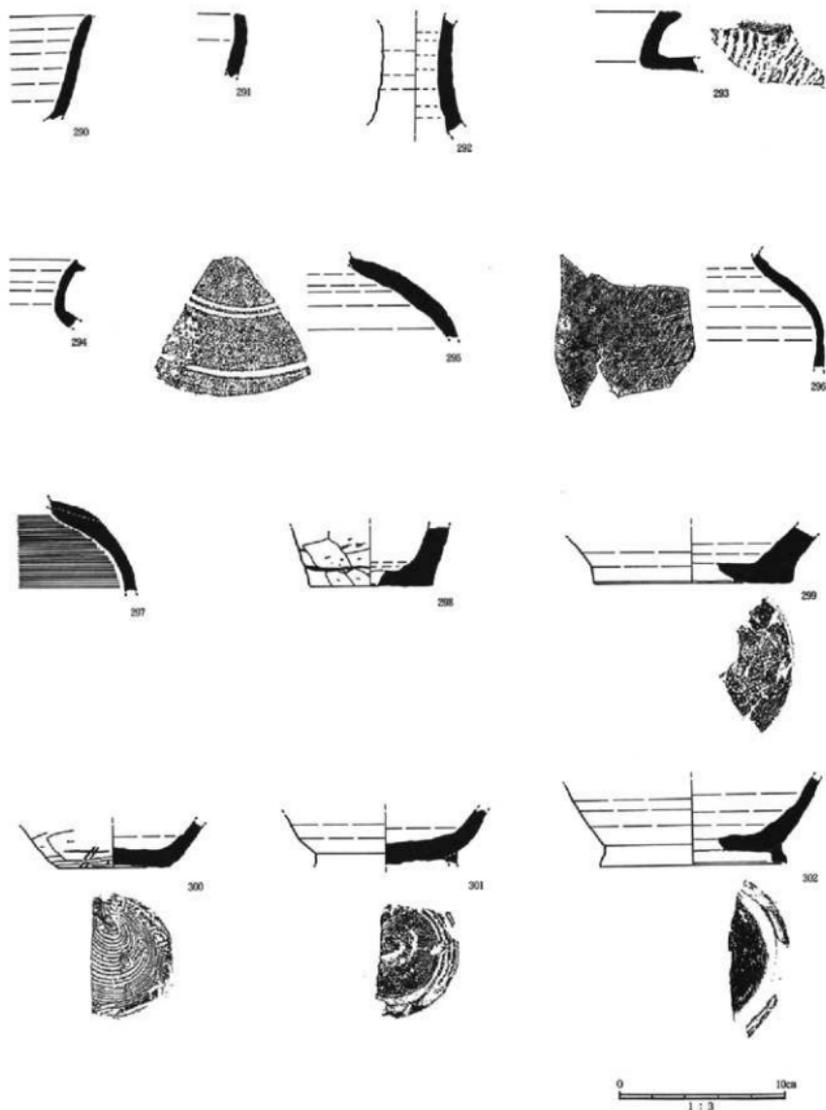


第58図 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物(3)



0 10cm
1 : 3

第 59 図 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物 (4)



第60図 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物（5）

部外面の調整は、タタキ調整をした後に、下半でヘラ削調整を施し、上半でロクロナデを施している。焼成が悪く、生焼である。

須恵器甕 (第61図304～第62図319)

(304)・(305)は、大型甕の口縁部である。口縁部中位に波状沈線を施している。(304)は、内面口縁部直下を窪ませており、外反する。(306)は、体部が膨らみ、口縁部が直立した後、口縁部が強く外反する。(307)は、口縁部が短く外反する。(308)は、口縁部が直線的に外反する。(309)は、口縁部が直線的に外反する。内外面の調整はカキメによる調整を施している。(310)は口縁部がやや上端が立つ器形である。(311)は、中型甕で短い口縁部が外反する。口縁部上端が直立する。外面調整をタタキ調整の後にロクロナデを施す。内面調整が、アテ具による調整を施した後にロクロナデを行っている。(312)・(313)・(314)は、直立して外反する口縁部をもち、端部上端が直立する。(315)は口縁部が強く外反する。やや口縁部端部上端が直立する。(316)は、大型甕の口縁部である。頸部と口縁部との接点に格子状の痕跡がある。(317)は、丸く膨らむ体部に、直立外反する口縁部が付く器形である。外面調整が、タタキ調整を施す。(318)は、底部から体部に直線的に立つ器形である。外面調整がタタキ調整をした後にロクロナデを施す。内面調整がアテ具による調整の後にロクロナデを施す。(319)は中型甕である。最大径が体部のやや上位にあり、口縁部が直立外反する。口縁部が屈曲する。外面調整がタタキ調整、内面調整はアテ具による調整である。

須恵器円状製品 (第62図320)

(320)は、周囲から打ち欠いた痕があり、製品としての須恵器甕を加工して使用したものと思われる。

赤焼土器杯 (第63図321～325)

(321)は、底径がやや大きく、器形が逆台形になる。底部が欠損しているが、切り離しがヘラ切を想定できる。(322)・(323)は、底径がやや小さく、直線的に立ち上がる器形である。底部の切り離しは、前者がヘラ切、後者が回転糸切である。(324)は、体部の立ち上がりが直線的に外反する。(325)は、底部のみである。切り離しが、回転糸切である。

赤焼土器高台付杯 (第63図326・327)

(326)は、底部のみである。底部の切り離しが、ヘラ切である。高台が欠損している。(327)は、底部の調整が菊花状ナデツケを施している。

赤焼土器鉢 (第63図328)

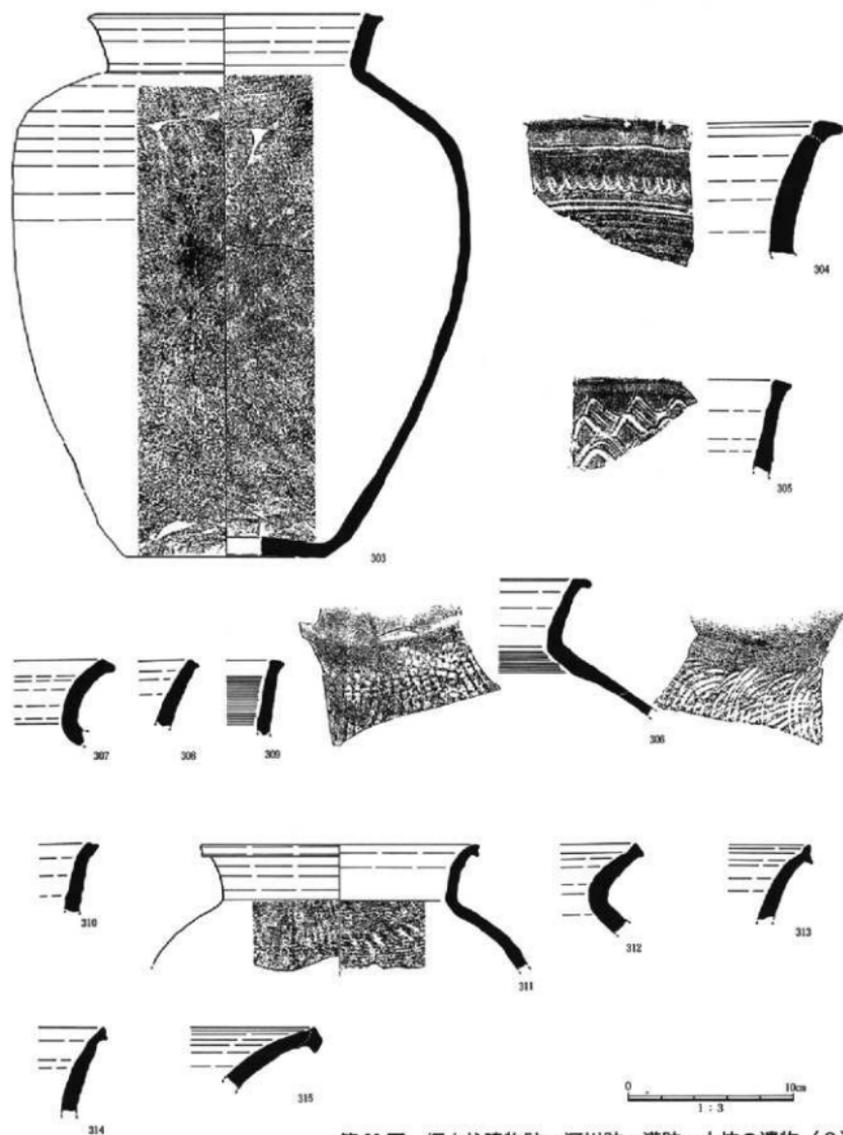
(328)は、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部で少し外反する。

赤焼土器壺 (第63図329)

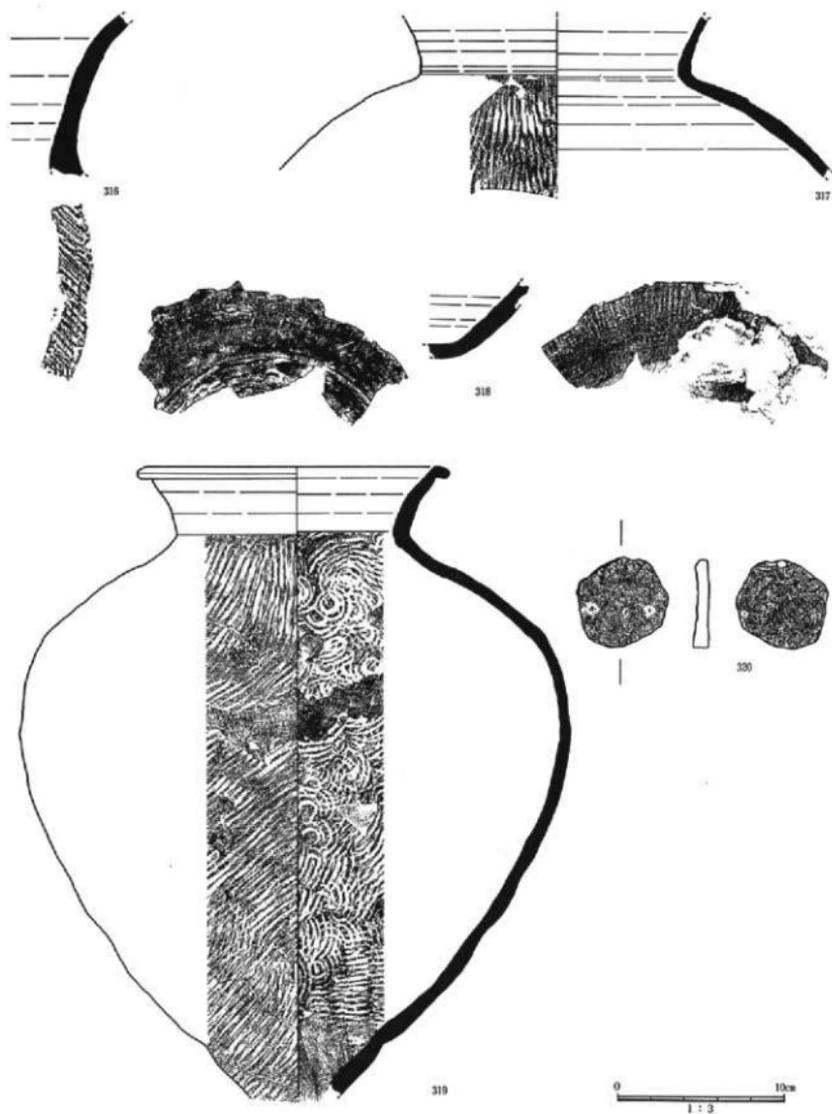
(329)は、底部のみである。付高台で、底部の切り離しが回転糸切である。

赤焼土器甕 (第63図330～第64図339)

(330)・(331)は、体部がやや丸く膨らんで、口縁部が短く外反する。前者の内外面の調整はロクロナデである。後者は外面調整がカキメ調整を施している。内面調整は磨減しており不明である。(332)は、直線的に立ち上がる体部に口縁部が強く外反する器形である。内外面の調整



第61図 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物（6）



第62図 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物(7)

は、カキメ調整を施す。(333)は、口縁部である。短く外反し、口縁端部の上端が直立する器形である。(334)は、体部がやや直線的に立ち上がり、口縁部が強く外反する器形である。外面の調整が、ロクロナデの後ヘラ削調整を施す。内面調整は、ハケ目調整をした後にロクロナデを施す。(335)は、底部～体部で、やや直線的に立ち上がる。外面はヘラ削調整である。内面はカキメ調整されている。(336)は、底部のみである。底部の切り離しは、回転糸切である。(337)は、体部が少し膨らむ器形で、外面調整がヘラ削である。(338)は、底部～体部で、少し膨らむ器形で、外面調整がハケ目の後ロクロナデをしている。内面調整はヘラ削である。(339)は、口径が広く、体部が鉢状に立ち上がる。外面調整はロクロナデの後、ヘラ削を施す。内面調整はロクロナデをした後にヘラ削を施している。

土師器環(第64図340・341)

(340)は、底径がやや小さく、体部が直線的に立ち上がる。ロクロ成形をして、内面ミガキ調整をして、黒色処理を施している。(341)は、体部が内湾して立ち上がる器形である。ロクロ成形をして、内面がミガキ調整の後黒色処理を施している。

土師器高台付環(第64図342～344)

(342)は、底径がやや大きく、付高台をもつ。底部切り離しは不明である。内面ミガキ調整の後黒色処理を施す。(343)・(344)は、底径が小さく、体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が外反する。ロクロナデ成形をして、内面をミガキ調整をして黒色処理を施す。底部の調整は、菊花状ナデツケを行っている。

土師器鉢(第64図345～349)

(345)・(346)は、体部が内湾して立ち上がる。外面調整がロクロナデ成形をして、ヘラ削調整する。内面調整が、ミガキ調整の後黒色処理をしている。底部切り離しが回転糸切である。(347)は、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。内面にミガキ調整をして黒色処理をしている。(348)は、底部のみである。内面にミガキ調整をし、黒色処理を施している。底部に木葉痕を認められる。(349)は、底部～体部で、直線的に立ち上がる。内面をミガキ調整をして黒色処理をしている。

土師器甕(第65図350～361)

(350)は、体部がやや膨らみ、口縁部が緩やかに外反する。外面調整は、ハケ目である。(351)は、小型甕で、口縁部が短く外反する。外面調整は、ハケ目調整をして、口縁部を強いナデ調整を施している。(352)は、体部が丸く膨らみ、口縁部が外反する。内外面にハケ目調整を施している。(353)は、体部が直線的に立ち上がり、口縁部が短く外反し、口縁端部上端が直立する。内外面にハケ目調整を施している。(354)は、小型甕で底部から直線的に立ち上がる。内外面の調整は、ヘラ削をしている。(355)は、中型甕で、体部が丸く膨らむ器形である。底部に木葉痕を認める。(356)は、底部のみで、若干の立ち上がりから膨らむ器形を想定できる。内外面の調整にハケ目調整をしている。底部に網代痕を認める。(357)は小型甕で、やや膨らむ器形である。底部に木葉痕を認める。(358)は中型甕で、やや膨らむ器形である。底部に木葉痕を認める。(359)はやや大型甕で、内面にハケ目調整を施す。底部に木葉痕を認める。(360)は、底部のみ

である。底部に木葉痕を認める。(361)は底部～体部で、体部が膨らむ器形を想定できる。内外面をハケ目による調整を施す。底部に木葉痕を認める。

耳皿(第66図362)

口クロ不使用で、底部から体部に丸味をおびながら立ち上がる。内外面とも丁寧なミガキ調整をして、黒色処理を施す。

突帯付瓶(第66図363)

肩部の突帯である。内外面調整にハケ目調整を施す。

奈良・平安時代の石製品

砥石(第66図364・365)

(364)の形状は、薄い板状で、一角のみ残存する。残存している面すべてを使用しており、4面に使用痕が残る。(365)の形状は、棒状である。4面に使用痕がある。

不明石製品(第66図366)

残存している2面において面取りを施している。欠損している部分が大半のため器種が不明である。

奈良・平安時代の金属製品

刀子(第66図367)

柄部の一部を除いて、ほぼ完形である。柄部に着装用の穿孔が確認できる。

片口鍋(第66図368・369)

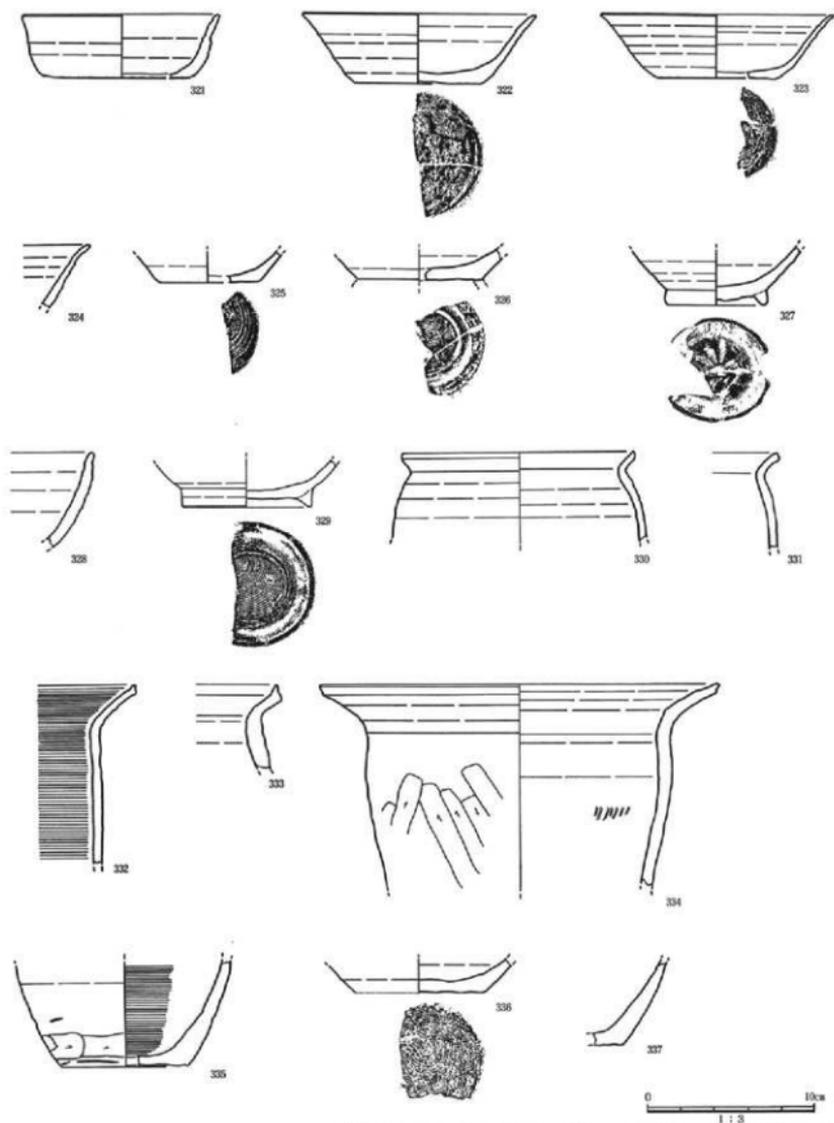
(368)は、底部からやや丸味をおびながら立ち上がり、短い注口部に至る。口縁部、底部が欠損している。(369)は、片口鍋の注口部直下で、体部が直線的に立ち上がる。

以上が、掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物であるが、C区南側SG936出土遺物の須恵器坏を中心に若干述べてみたい。

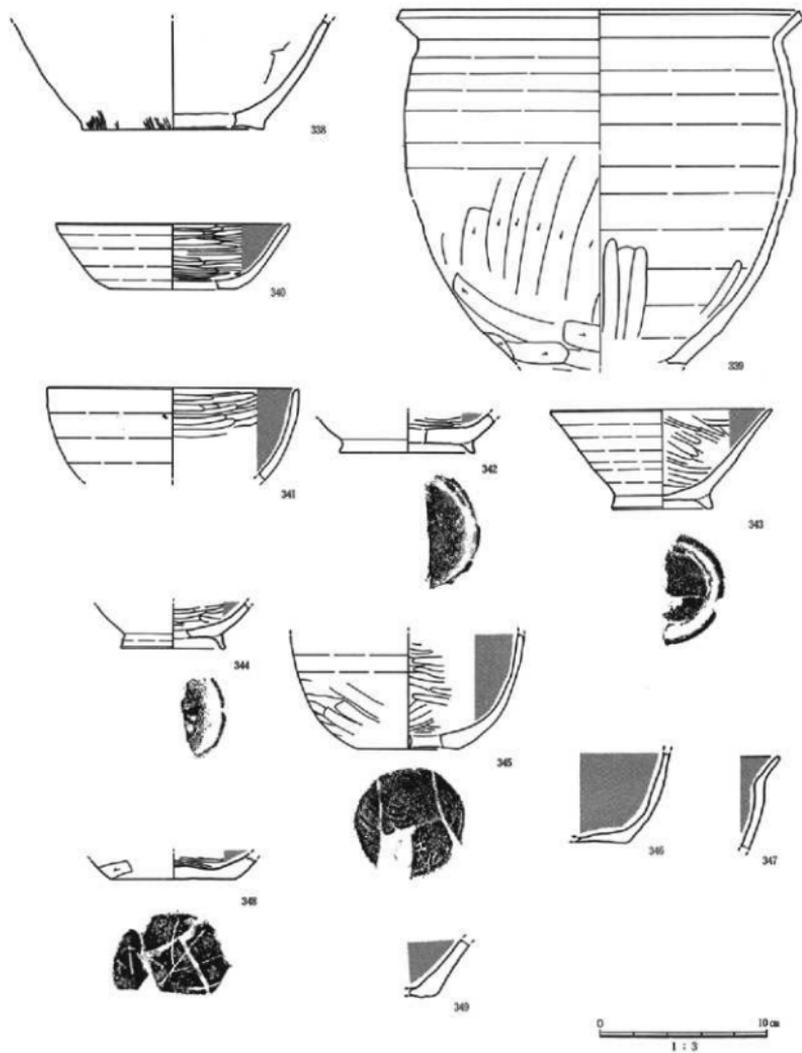
法量の分化をみるために、口径/器高×100を指数としてSG936、SD947出土須恵器坏を述べることにする。本報告書に掲載したものは、SG936は1層目(235):370・(243):403、2層目(234):436・(236):446・(242):369・(245):385、SD947は(240):291である。:の後にある数字は、法量指数である。SG936の2層目は口径が140mm以上で指数が430以上の坏が出土しているのに対して、1層目は口径が148mmで器高が40と指数が370となる(235)など、指数が概ね410以下である。SD947は、器高が46あり指数が291となる(240)がある。

次に周辺の堅穴住居跡・土坑から出土した須恵器坏の法量指数を比較してみる。

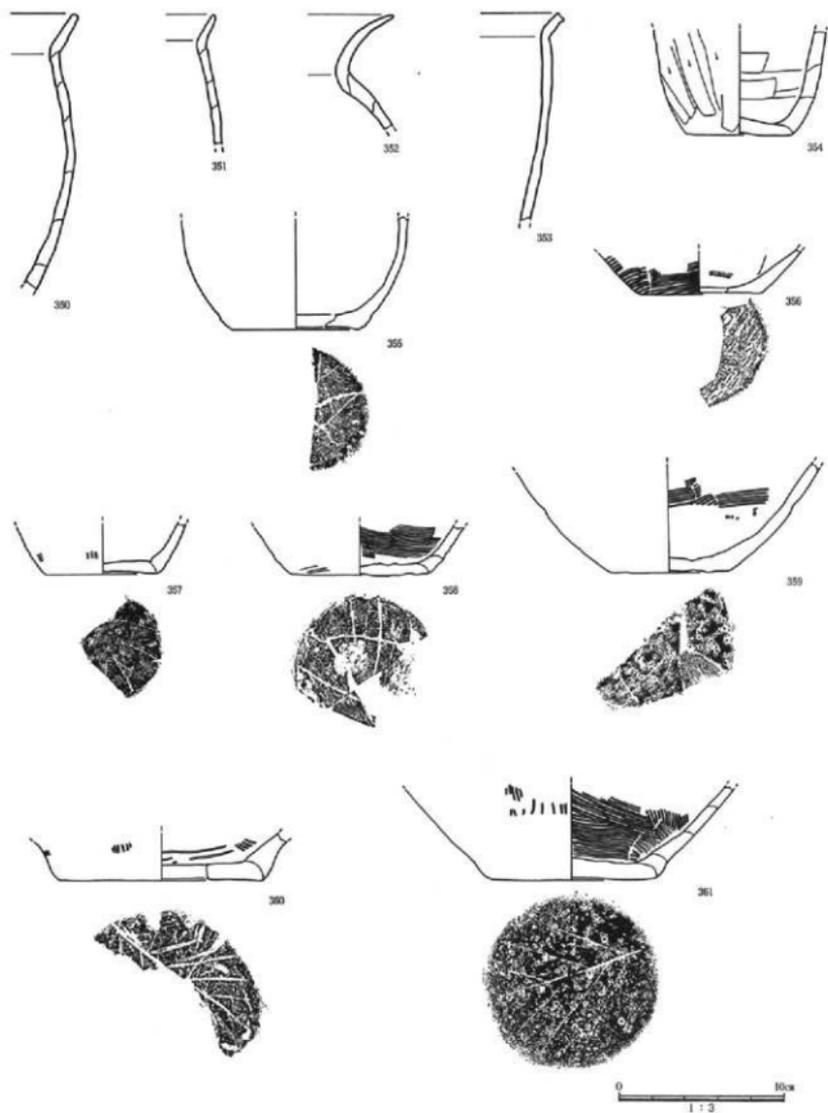
ST487では(105):490、ST863では(127):360、ST864では(136):353、ST865では(141):443・(142):342、SK718では、(146):288、ST492では(164):409・(165):393・(166):425、ST494では(178):394、ST489では、(184):346・(185):358である。残存率が少なく口径などが推定できない破片が多く、比較するのは困難である。一括性のあるST489出土土器の様式が、若干の時期差はあるものの8世紀後半を想定でき、器形的に共通性のある河川跡発生期の初現期をこの時期にあてることが適当であると思われる。1層目の須恵器坏の底径が広く、底部へラ切で手持ちへラ削での調整の共通点から言えるものである。



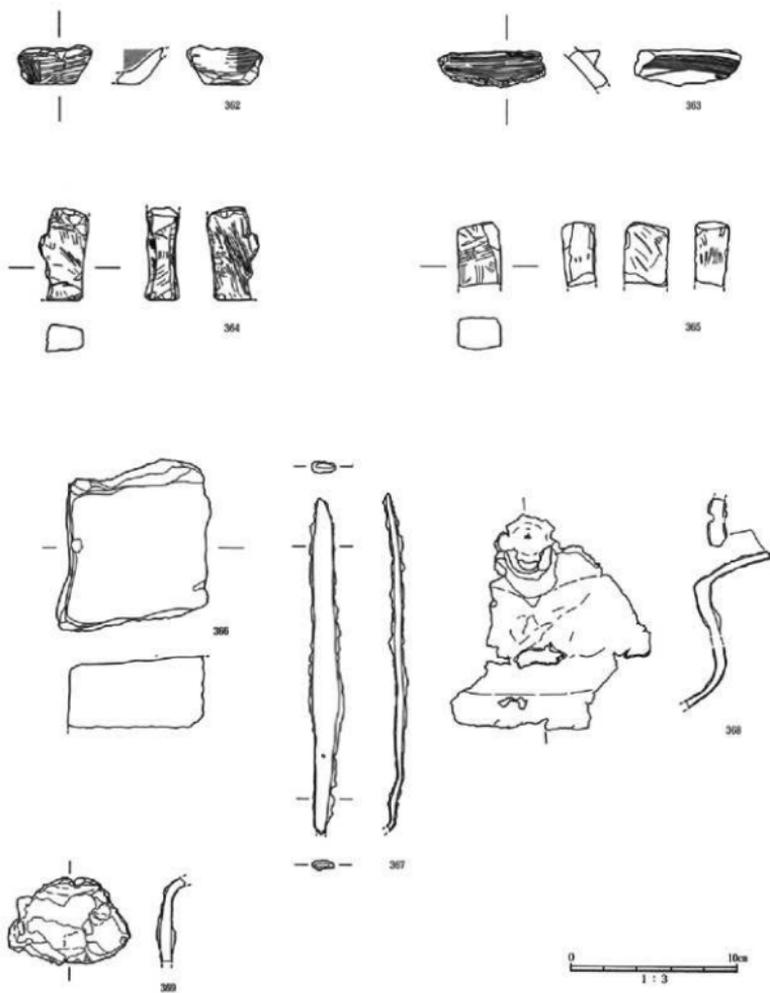
第63図 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物(8)



第64図 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑跡の遺物(9)



第 65 図 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物 (10)



第66図 掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑の遺物 (11)

3 中世以後の遺構と遺物

ここでは、主な中世以後の遺構と遺物について概略を述べる。河川跡・溝跡・土坑・土坑墓についての詳細な事項については、表7・8で一覧にしているので参照して頂きたい。また、土坑墓出土の人骨についての理化学分析は付編にて述べている。

(1) 河川跡・溝跡

SG401(遺構・第67図)

A32～E31Gで検出された。北側は市道があるため未調査である。SD402から中央部を切られている。C区北側を東西に貫流している。幅1.35～2.25m、長さ17.25mで深さが20cmである。壁は緩やかに立ち上がる。土層1層目は、黒褐色シルト質微砂で平安・中世の遺物を含み、2層目は暗褐色シルト質微砂で縄文時代の遺物を若干含む。出土土器の点数は、須恵器5点、赤焼土器・土師器34点、青磁1点、縄文土器1点である。

SD402(遺構・第67図)

A33～C32Gで検出された。C区北側にあり、クの字に屈曲する形状である。SD409・794・SK795を上層から切る。幅22.5～97.5cm、長さ15.75mで、深さ10cmと浅い。覆土中から骨片が出土しており、近接するSK778からの流れ込みと思われる。遺物は古代のもののみで須恵器5点、赤焼土器・土師器36点である。

SD204(遺構・第67図)

A15～B15Gで検出された。北東側をSX273から切られる。幅130～70cm、長さ3.3m、深さ15cmである。覆土上層に古銭(サシ銭)が出土した。古銭は、唐代もしくは宋代の銭貨である。

(2) 土坑・土坑墓

SK274(遺構・第68図)

C15Gで検出された。規模は、推定で長径1.9m、短径1.5mで、深さ25cmである。形状は楕円形を想定でき、平安時代のSX276を上層から切っている。覆土は単層の暗褐色砂質シルトで人骨・馬骨を多量に含む。埋葬方法は、人骨の出土した位置から伸展葬と思われ、分析の結果から土葬骨と考えられる。最少2個体の人骨を想定でき、小児と成人のものと解される。なお、若干であるが火葬骨が含まれており、遺構上面で追葬された可能性がある。馬骨も単独で埋葬された後に当土坑墓が造られた可能性もある。

SK298(遺構・第68図)

A25～B25Gで検出された。西側未調査のため、現存長が0.8m四方の不整形であるが、全体として楕円形を想定できる。覆土は、2層で下層黒色土に多量の人骨・馬骨を含む。分析の結果、火葬骨で、性別不明の成年の骨ということがわかった。

SK778(遺構・第68図)

C32～D32Gで検出された。長径1.25m、短径0.8mの楕円形で、深さ35cmである。覆土は1層で、黒褐色土に多量の人骨を含む。土坑下層から腐蝕性の土とともに頭蓋骨骨片が出土している。分析の結果、火葬骨で性別不明の成人骨ということがわかった。最少個体数は1体である。なお、近接するSD402からも人骨が出土しており、分析結果により同一個体との指摘も

表-8 河川跡・溝跡・土坑・土坑墓観察表

調査番号	時期	位置	規模(㎡)	深さ(m)	形状	掘削方向	掘削形	底層	出土遺物	備考
3041	67	A2-C1	236×1725	30	窪地(北東に張り、南に貫通)	北-東	緩やかな立ち上がり	ほぼ平直	須磨器(筒、香焼・土師器(片、縄文土器(片)、埴土)	下層から縄文土器出土。上層から須磨器出土
3042	67	A2-C2	80×1975	30	途中傾斜に出現する		やや緩やかな立ち上がり	ほぼ平直	須磨器(筒、香焼・土師器(片、人骨焼けた土)	出土人骨は3077号からの流れ込みの可能性あり
3094	67	C11-C2	60×300	33	窪地に溝状	北-東	ほぼ平直	丸底		3042から移される
3049	67	C11-C2	32×360	25	窪地に溝状	北-東	ほぼ平直	丸底	須磨器(筒、香焼・土師器(筒)	540、5403から移される
3075	67	C2	76×80	20	窪地	北-東	レンズ状	平直		3042から移される
30170	67	B3	180×135	35	窪地	北-東	レンズ状	平直		3042から移される
3004	67	A15-B15	130×330	15	窪地に溝状	北-東	やや緩やかな立ち上がり	段状あり	古鉄(刀)がワシンの状態で出土	北層にも3073に移される
3023	67	B14-B15	100×90	60	不明	不明	掘入土器形	中央部に凹		北層部に有蓋かすり土器
3074	66	C15	150×150	25	窪地	南北	浅い掘込み	西側に長く傾斜している	人骨、瓦器も多数に含む	3076の上層から移る
3076	66	C15	430×130	60	窪地に溝状	北-東	途中傾斜に出現	段状あり	須磨器(筒、香焼・土師器(筒、須磨器)	3024、275、278の上層から移される
3075	66	C15	85×70	32	窪地	北-東	やや緩やかな立ち上がり	平直	須磨器(筒、香焼・土師器(筒)	3076の西側から移る
3078	66	C16	130×80	30	窪地	北-東	やや緩やかな立ち上がり	ほぼ平直	須磨器(筒、香焼・土師器(筒)	3076の西側から移る
3033	66	C16	130×400	80	窪地に溝状	北-東	途中傾斜に出現	北側に傾斜	須磨器(筒、香焼・土師器(筒)	上層部にも有蓋かすり土器
3025	66	C15-C16	180×1100	50	窪地に溝状	北-東	レンズ状	中央部に凹	須磨器(筒、香焼・土師器(筒)	3075から移る。北層から有蓋かすり土器
3079	66	C26-C32	125×80	35	窪地	南北	やや緩やかな立ち上がり	平直	人骨も多数に含む	
3038	66	A25-A26	80×80	40	窪地	北-東	ほぼ平直	丸底	人骨、瓦器も多数に含む	須磨器(筒)が須磨器
3074	66	C24	230×210	20	平直	北-東	レンズ状	段状あり	須磨器(筒)	
3051	66	B18	160×100	35	窪地	北-東	やや緩やかな立ち上がり	ほぼ平直	香焼・土師器(筒、古鉄(片)	
3050	66	C16	190×30	15	掘入溝形	北-東	浅い掘込み	段状あり	有蓋かすり器(片)、石鏡(片)	須磨器(筒)が須磨器
30100	65	B17-B18	235×100	10	平直	北-東	やや緩やかな立ち上がり	平直	香焼・土師器(筒、古鉄(片)	
3074	65	C4	50×30	15	ほぼ平直	北-東	緩やかな立ち上がり	傾斜に凹	古鉄(片)	
3028	65	D37-D38	100×90	25	平直	北-東	やや緩やかな立ち上がり	平直	須磨器(筒、香焼・土師器(筒)	3027から移ると思われる
3027	65	D37-D38	200×130	50	小窪地	北-東	段状に立ち上がり	北側に傾斜	須磨器(筒、香焼・土師器(筒)	3028、3025を移る
30325	65	C38	130×70	40	掘入溝形	北-東	レンズ状	平直	須磨器(筒、香焼・土師器(筒、赤鉄器(片)、須磨器(筒)	3027から移ると思われる
3045	65	C38-C39	250×110	30	平直	北-東	途中傾斜に出現	傾斜に傾斜	須磨器(筒、香焼・土師器(筒、赤鉄器(片)、須磨器(筒)、須磨器(筒)	上層部にも有蓋かすり土器
3044	65	C38-C39	630×330	20	窪地に溝状	北-東	緩やかな立ち上がり	段状あり	須磨器(筒、香焼・土師器(筒)	上層部にも有蓋かすり土器
3038	65	B35	270×160	40	平直	北-東	やや緩やかな立ち上がり	平直	須磨器(筒、香焼・土師器(筒)	上層部にも有蓋かすり土器
3037	65	C35	200×140	40	平直	北-東	ほぼ平直	丸底	須磨器(筒)	上層部にも有蓋かすり土器
3038	65	C35-C36	120×90	30	窪地	北-東	レンズ状	平直	香焼・土師器(筒、縄文土器(筒)	3037から移ると思われる
3049	65	C38-C39	520×300	5	平直	北-東	浅い掘込み	平直		3030の北側に移る
3090	65	B38-C36	180×98	32	窪地	北-東	レンズ状	平直		30450-6の溝を移される
3081	65	B38-C38	300×210	50	平直	北-東	やや緩やかな立ち上がり		須磨器(筒、香焼・土師器(筒、須磨器(筒)、赤鉄器(片)	3030の溝を移る
3082	65	B38-C38	200×130	15	掘入溝形	北-東	浅い掘込み	平直		3031から移ると思われる
3041	65	C38	150×105	35	窪地	北-東	途中傾斜に出現	段状あり		3031から移ると思われる
3042	65	C38	45×30	20	不明	不明				3031、301から移される
3081	70	C38-D39	580×380	40	平直	北-東	やや緩やかな立ち上がり	傾斜に傾斜	須磨器(筒、香焼・土師器(筒、古鉄(片)	土師器(筒)に移される
3027	70	C38-C39	250×240	40	窪地	北-東	途中傾斜に出現	中央部に凹	須磨器(筒、香焼・土師器(筒、古鉄(片)	30449-5の溝を移される
30230	70	C38	240×70	35	窪地	北-東	途中傾斜に出現	平直	須磨器(筒、香焼・土師器(筒)	30231から移される
30230	70	C38-D38	130×140	45	窪地	北-東	やや緩やかな立ち上がり	段状あり	須磨器(筒、香焼・土師器(筒、古鉄(片)	30231に埋められる

※出土遺物()は出土土層内の位置

※表裏はすべて概略図

※方位、距離については概略図と必ずを要す

表一 8 河川跡・溝跡・土坑・土坑墓遺構観察表

遺構番号	時期	区画	縦長(m)	横長(m)	形状	瓦敷方向	位置	出土遺物	備考	
SK1240	70	C28	148×100	35	円形	南-北	中中層や中立ち上がり	中層	須置器(1)、香炉・土師器(10)、須置器(10)等(1)、青磁(1)、赤磁(1)	SK1230から陶器を伴われる
SK944	70	C28-C29	220×140	30	小円形	南-北	層や中立ち上がり	中層	須置器(1)、香炉・土師器(2)、青磁(1)	SK101の溝跡を伴る
SK950	70	C28-C29	200×150	30	楕円形	南-北	中中層立ち上がり	中層	碓石(1)、瓦葺(1)	SK109の溝跡を伴る
SK1051	70	C28	180×130	30	平直長方形	南-北	層や中立ち上がり	中層	須置器(2)、香炉・土師器(2)、瓦葺(1)	SK944から陶器を伴われる
SK1052	70	C28	180×130	30	平直長方形	南-北	レンズ状	中層		SK1050の溝跡を伴う
SK1049	70	C28-C29	110×90	15	平直長方形	南-北	レンズ状	中層		SK1050から陶器を伴われる
SK1053	70	C28	180×130	27	楕円形	南-北	傾斜立ち上がり	中層	須置器(1)、香炉・土師器(10)、須置器(10)	SK142から陶器を伴われる
SK948	70	C28	165×120	30	楕円長方形	南-北	レンズ状	中層	須置器(1)、香炉・土師器(10)	SK942から陶器を伴われる
SK958	70	C28-C29	300×190	40	平直長方形	南-北	層や中立ち上がり	段状あり	須置器(1)、香炉・土師器(1)	SK81から陶器を伴われる
SK1129	70	C28	80×80	20	円形		レンズ状	中層		SK83から陶器を伴われる
SK647	70	C28-C30	600×100	40	東西に狭長	南-北	途中段を形成	中層	須置器(10)、香炉・土師器(41)、青磁(1)	SK102、SK40の溝跡を伴う
SK1056	70	C28-C30	40×100	20	東西に狭長	南-北	途中段を形成	中央部へ段		
SK458	71	C28-C29	300×200	50	平直長方形	南-北	段状	中央部に段	香炉・土師器(10)、須置器(10)等(1)	SK67から陶器を伴われる
SK929	71	C28	330×130	10	平直長方形	南-北	段状	中央部へ段	香炉・土師器(1)	SK120の溝跡を伴う
SK939	71	C28-C29	210×130	10	平直長方形	南北	段状	段状	香炉・土師器(2)	SK175から陶器を伴う
SK936	71	C27	80×40	10	平直長方形	南-北	段状	段状	香炉・土師器(2)	SK175の西側を伴う
SK977	71	C27	80×40	10	楕円形	南北	段状	段状	香炉・土師器(1)	SK175の西側を伴う
SK975	71	C27	200×210	12	平直長方形	南北	段状	段状	香炉・土師器(1)	溝跡や中層の跡
SK978	71	C27	210×120	12	平直長方形	南北	段状	段状	須置器(10)、香炉・土師器(7)	SK185から陶器を伴われる
SK948	71	C28-C29	210×120	10	平直長方形	南-北	段状	段状		SK172の北側を伴う
SK972	71	C27	120×90	12	平直長方形	南-北	段状	段状	須置器(1)、香炉・土師器(2)	SK185から陶器を伴われる
SK930	71	C27-C28	220×90	60	楕円長方形	南-北	中中層立ち上がり	北側に段状	須置器(10)、香炉・土師器(10)	小土坑跡を伴う
SK990	71	SK7	170×140	60	楕円長方形	南-北	レンズ状	江戸中層	須置器(2)、香炉・土師器(22)、碓石(1)、赤陶器(1)	遺土を多く含む
SK1065	71	SK4	100×80	22	楕円長方形	南-北	中中層や中立ち上がり	段状あり	須置器(2)、香炉・土師器(10)	SK1123から陶器を伴われる
SK1163	71	SK9-SK7	220×170	50	楕円長方形	南-北	途中段を形成	東西に狭長	須置器(10)、香炉・土師器(12)、瓦(1)	溝跡や中層の跡

※以上遺構のうち11は出土土器片の位置
※数字はすべて縦向き
※開削・掘削についての掘削深度は必ず書き添す

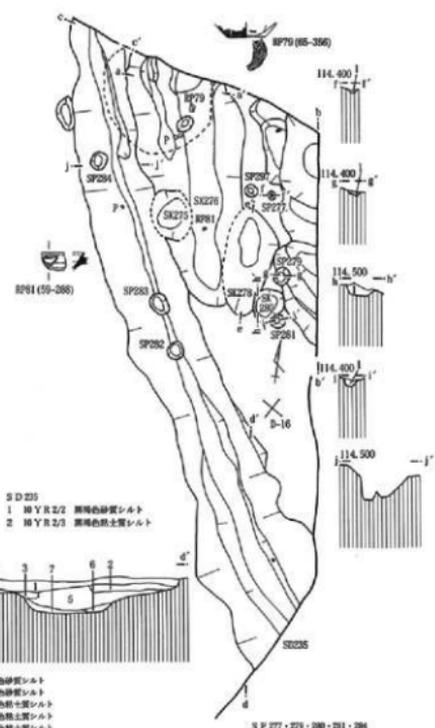
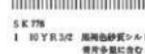
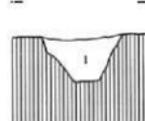
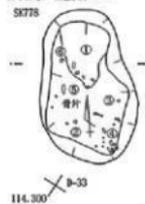
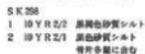
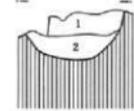
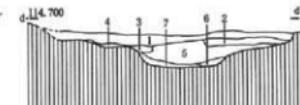
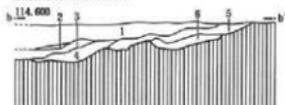
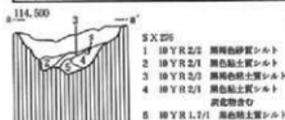
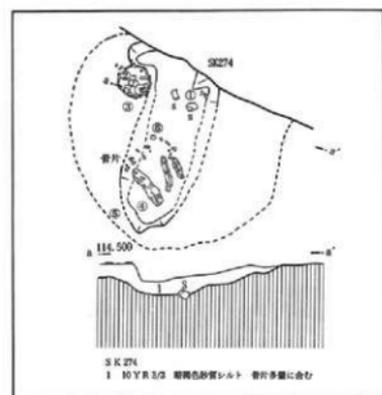
ある。

以上3基の土坑墓について述べてきたが、人骨の出土のみで判断しており、表中で古銭を伴出する土坑は、土坑墓の可能性が高い。特にSK944・1237・1238・1239・1240は、形状が小円形ないし楕円形で、覆土中であるが渡来銭及び無文銭(模鑄銭カ)を出土している。また、SK1051下層から灰白粒や焼土粒が確認されている。そのことから、C区中央部は、確定的なことは言えないが、土坑墓が多数存在していたものと思われる。

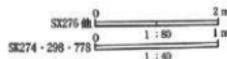
(3) 井戸跡(遺構・第72図)

A35～B36Gで検出された。西側が調査区の設定により未調査である。未加工の石材による地業で、平面形が楕円形、断面形が楕円形である。掘り方も含めた現存長が長径4.3m、短径3.8mで、深さが確認面から3.3mを測る。壁面及び底面にやや扁平な川原石を小口積みしている。最深部から近世陶器の壺が出土しており、近世の井戸跡と思われる。覆土は大量の川原石による人為堆積である。何らかの理由で故意に破壊した形跡がある。

(4) 中世以後の遺物

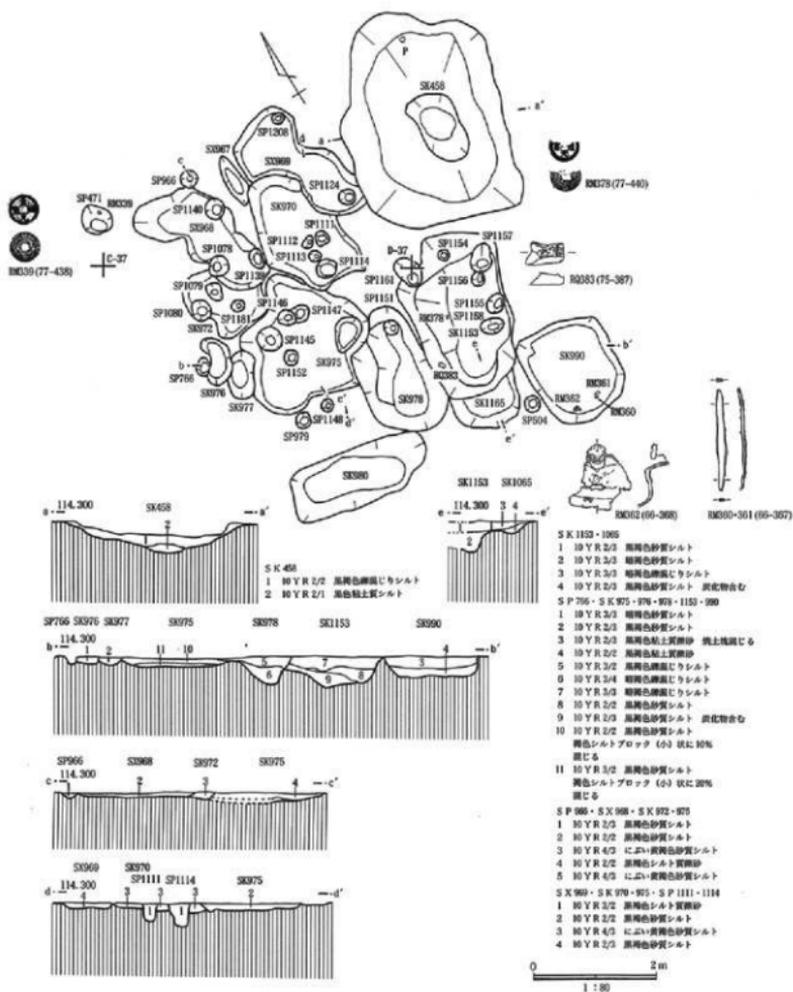


SK277・278・279・280・281・284
1 10 Y R 2/2 黒褐色砂質シルト
炭化物含む 黒色シルトブロック状に集まる

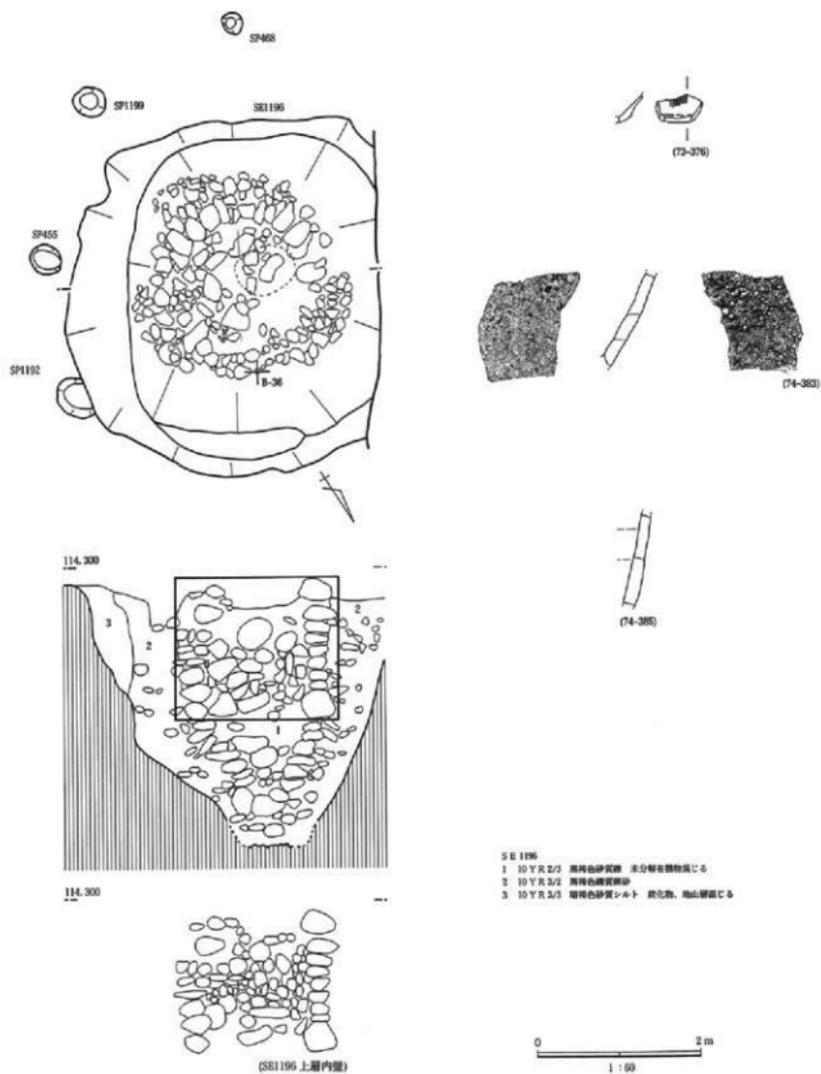


※遺構内の番号は柱圖と対応する。

第 68 図 SK 274 他



第71図 土坑・土坑墓



第 72 図 SE 1196

この時期の遺物では、磁器・陶器・石製品・金属製品が出土している。C区中央土坑群からの出土がほとんどである。輸入陶磁器は青磁4点のみである。国産陶磁器は、瀬戸2点・瓷器系陶器21点・珠洲系陶器2点・瓦質陶器1点などである。石製品は、砥石2点・石硯2点・五輪塔空輪部1点が出土している。金属製品は、釘・刀子などが出土している。以下本書掲載の遺物について詳しく述べたい。

青磁(第73図370~373)

4点出土しているが、口唇部のみ(373)以外は、蓮弁紋の碗である。蓮弁紋は、すべて鎬蓮弁である。(370)は、鎬蓮弁紋の碗である。蓮弁部の盛り上がりが存在している。口唇部がやや端反風である。釉掛けが薄い。龍泉窯系青磁9群I-5-b類と思われる。13世紀代の所産である。(371)は、(370)と同様の器形である。器面に貫入がある。口唇部が直立する。同時期の所産である。(372)は、体部の破片である。やや鎬が不明瞭になってきている。(373)は、口唇部のみである。やや内湾する器形である。器種は、碗と思われる。以上4点の色調は多様である。およそ13世紀代の様相を呈する。

瀬戸(第73図374・375)

本遺跡では、2点の出土が確認されている。すべてSK931出土である。卸皿1点・平碗1点が審察期の所産である。(374)は、卸皿である。大窯期には揃鉢に統一され量産されるが、この時期は、器種の多様性が挙げられる。本遺跡出土卸皿は口縁部で、両面灰釉が塗られている。卸皿の入る部分は露胎である。口唇部が内側に延び縁帯を設けている。型式年代は、藤澤編年の後期I期(14世紀後葉)に位置づけられる。(375)は、平碗である。本遺跡出土平碗は、口縁部から体部で、両面灰釉が流し掛けられている。体部下半が露胎である。体部の立ち上がりがやや立ち上がる器形である。器面に貫入がある。型式年代は、藤澤編年の中期III・IV期(14世紀中葉)にあたる。

瓦質陶器(第73図376)

本遺跡では、揃鉢1点の出土が確認されている。SE1196覆土内の崩落した川原石とともに出土した。体部のみであるが、僅かに7条の卸目が残る。底部からやや直立して立つ。細砂混じりで胎土が不良になっている。型式年代として16世紀代があてられ永源寺が当地にあった期間と合致する。この1点の他は、この時期のものは無い。

珠洲系陶器(第73図377・378)

本遺跡では、2点の出土が確認されている。揃鉢口縁部はSK500、甕体部はSG267で出土している。甕体部は上層からの出土で流れ込みの可能性もある。(377)は揃鉢口縁部で、口縁部が外傾している。口唇部が、内端・外端ともに張り出し、断面が台形状になる。卸目が10条を1単位として間なく施されている。海綿骨針が混入している。型式年代は、吉岡編年のV期にあたる。(378)は甕体部である。外面に条線状のタキ調整を施し、内面は円礫状の押圧痕が認められる。体部下半の部位と思われる。体部破片のみであり、型式年代は不明である。色調は揃鉢がオリーブ灰色で、甕が緑灰色で、やや生焼である。

瓷器系陶器(第73図379~第74図384)

本遺跡では、最も多く出土している中世陶器である。ここでは、6点のみ選んで傾向を述べてみたい。

(379)は、短頸壺である。口径45mm、器高62mm、底径54mmと小型である。SK746の覆土内から逆位で出土した。内部に混入していた土の中から、鉄釘1点が確認された。底部内面に鉄滓が付着している。器面調整は、ロクロによる成形をした後、外面下半をヘラ削により整えている。胎土は細砂混じりで、焼成は高温で焼きしめられ堅い。色調は、オリーブ色5Y5/4である。底部切り離しは磨滅して不明である。器形として茶入壺・お歯黒壺が想定される。今小路西遺跡では、地鎮で使用された例もある。在地産の可能性はある。周辺の窯場資料との比較を試みた。宮城県白石市の一本杉窯にも同系統の器種が焼かれているが、胎土・焼成とも粗悪で、窯場資料であることを差し引いても可能性としては薄い。むしろ宮城県東北伊豆沼周辺の熊沢窯などの資料と胎土・焼成が類似しているようである。

(380)は、卸目が確認できないことから、捏ね鉢口縁部と推定される。SK836で出土している。器面調整が、ロクロで成形をした後にヘラ状工具による調整を施している。また、口縁部上端を上から指または布によるナデ調整をしている。口唇部の内外両端がやや張り出す。この点では常滑風の調整が施されていると言える。色調は、オリーブ黄色5Y6/3である。一本杉窯でも同様の器形は出土しているが、胎土・焼成での相違点があり、積極的に比定することはできない。

(381)は、壺肩部破片である。出土地点不明の遺物である。ロクロ成形をした後に横位の細い沈線が施されている。胎土は細砂混じりで、堅く焼かれている。色調は、オリーブ黄色5Y6/4である。(382)は、甕肩部破片である。SK1025で出土した。器面調整が粗雑で、内外面に粗くナデツケを施している。胎土は、粗砂混じりで堅く焼いている。色調は、灰オリーブ色5Y5/3大型である。体部上半部に最大径があり、口縁部は欠損しているが短くク字に屈曲する口縁部の付く器形を想定できる。小田島城跡からも上半がほぼ完形のもの出土例がある。(383)は、甕の底部から体部までの破片である。SE1196で出土した。胎土が粗砂混じりで焼成が不良である。色調は、灰オリーブ色5Y5/2である。器面調整は、ロクロ成形をした後、ヘラナデ調整を施している。(384)は、甕体部破片である。SK1053で出土した。胎土が粗砂混じりで堅く焼かれている。色調がやや濃く、明オリーブ灰色5GY4/1である。ナデ調整を認める。

近世の遺物(第74図385・386)

(385)は、近世陶器甕の体部である。SE1196の最下層から出土した。井戸跡の時期決定に重要な役割を果たしている。ロクロによる成形で焼かれ、外面に黒色釉が流し掛けられているのが窺える。(386)は、土師質土器でツマミのみが残存している。SG936北側の暗渠による攪乱地点からの出土である。近世の火鉢かまたは風炉の蓋を想定できる。内側調整でケズリを施している。

石製品(第75図387~390)

(387)は、石硯で堤部が若干残存する。SK1153覆土下層から出土した。大部分が欠損しており器形的に不明であるが、一面に使用痕跡を確認できる。(388)は、五輪塔で空輪部のみ残存

する。石材は凝灰岩製で、器面は磨滅しており工具による加工痕は確認できない。宝珠形の頭頂部をもち、中位に帯をまわす。(389)・(390)は、砥石である。両方とも破損している。(389)はSK1051で出土した。4面に使用痕跡があり、中央部が窪み、錐状工具による研ぎ痕を確認できる。(390)は、3面が残存し、1面に使用痕跡がある。他の両側の2面にノミによる切り離し痕跡が確認できる。

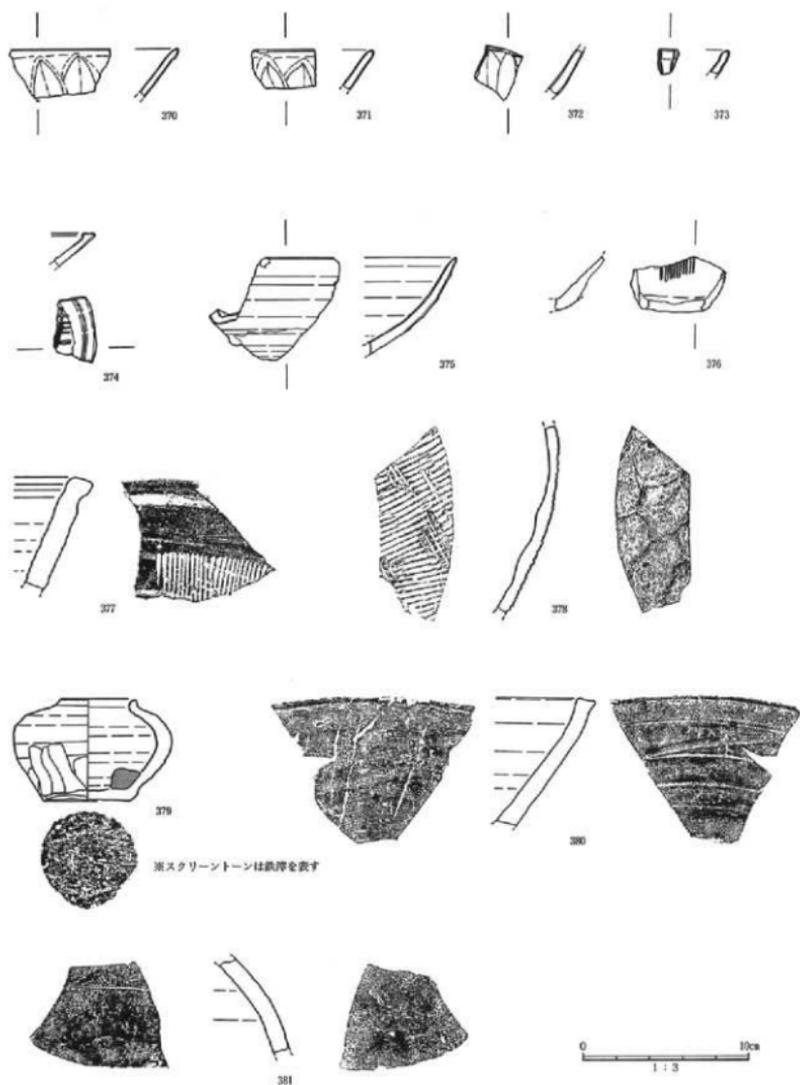
金属製品(第76図391～401)

(391)～(393)は、鉄釘である。(391)は、SK749内出土短頸室内で確認されたものである。形態は、丸釘である。先端が欠損している。(392)・(393)は、角釘である。いずれも先端部が欠損している。それぞれSP1132、SK443で出土した。(394)・(396)・(400)は、板状の製品で刀子の刃部と思われる。残存が少なく全容が掴めない。(395)は、両端が欠損しており、全容が掴めず不明鉄製品とした。形態が、L字形に屈曲する。(397)は、先端部のみであるが、ノミ状工具を想定できる。(398)・(399)は、角状の錐状工具と思われる。それぞれSK931、1061で出土した。(389)は14世紀代の瀬戸と相伴する。(401)は、キセルである。雁首のみ出土した。近世の所産である。

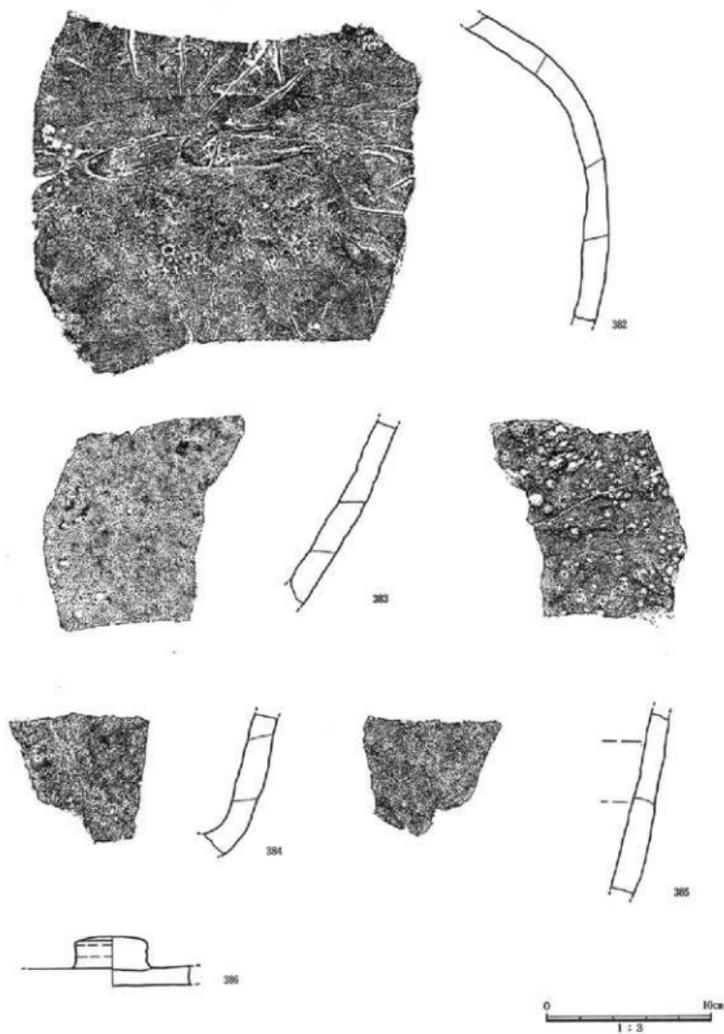
古銭(第76図402～第77図442)

本遺跡からは、SD204で出土したサシ状態の19枚、C区中央土坑群で出土したバラのもの22枚の古銭がある。41枚出土して、40枚は宋銭などの渡来銭で、1枚無文銭が出土している。出土状況は、サシ銭の方は、SD204の上層が削平され、古銭は溝の礫の間から出土している。溝跡で検出されたが、埋納銭として土坑があった可能性がある。他の古銭は、いずれも覆土内で確認され、土坑底面からのものは見いだせない。

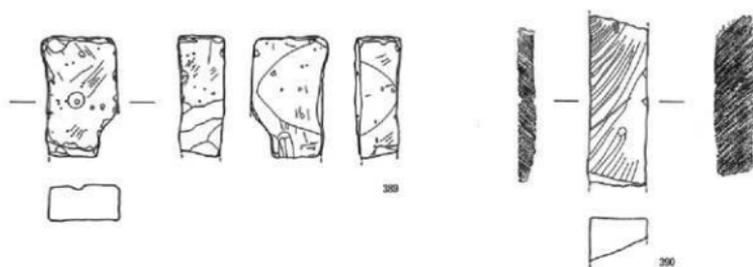
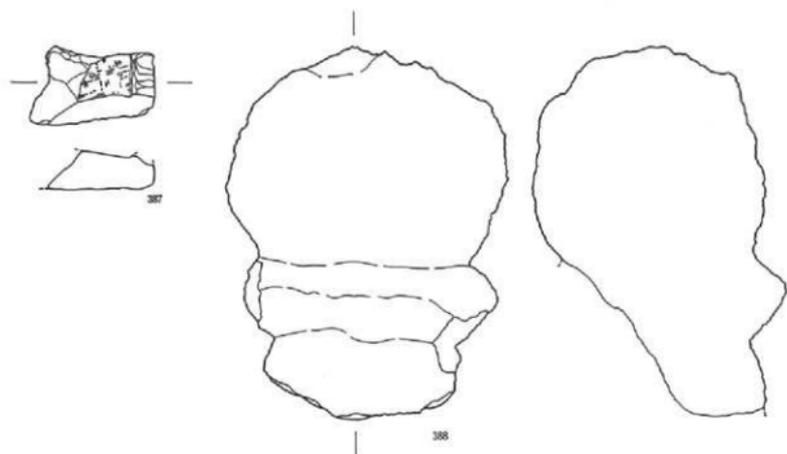
詳細は表15に記載しているので参考にしていただきたい。銭名別にみた場合、「開元通寶」のような唐銭が3枚で、全体の7%である。「政和通寶」などの北宋銭が30枚で全体の73%で大半を占める。「咸平元寶」などの南宋銭が2枚で全体の4%である。その他欠損による不明銭が6枚で全体の14%である。刻まれている銭文から宋銭と推定されるものが大半である。無文銭が1枚出土している。サシ銭を埋納銭と仮定して時期区分をしてみる。最古銭「開元通寶」で、最新銭「咸平元寶」であることから、永井編年で1期にあたる。「洪武通寶」・「永樂通寶」流通以前というところから、出土する青磁・瀬戸の型式年代と合致する。また、他の遺構から出土している古銭も同様な銭貨であることから、墓域の継続年代も13～14世紀を想定できる。(428)は、一部欠損しているが、薄く重量が軽い。内郭は、角がまだ残存しているが丸に近くなる。色調も灰オリーブ色5Y4/2でやや茶色がかった。他の渡来銭の色調が青灰色なのに対して成分の違いからか色調が違う。鑄造方法として、最近では「模鑄行為の踏み返し技法の延長線上にある」と認識されている。模鑄銭が14世紀第2四半期には流通していたことが、中村岡の久保出土銭(新居浜市)での資料から実証されており、本遺跡の墓域継続年代にも合致する。



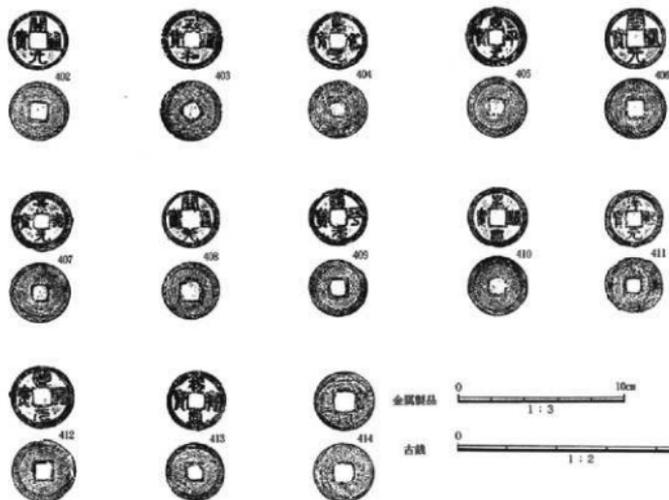
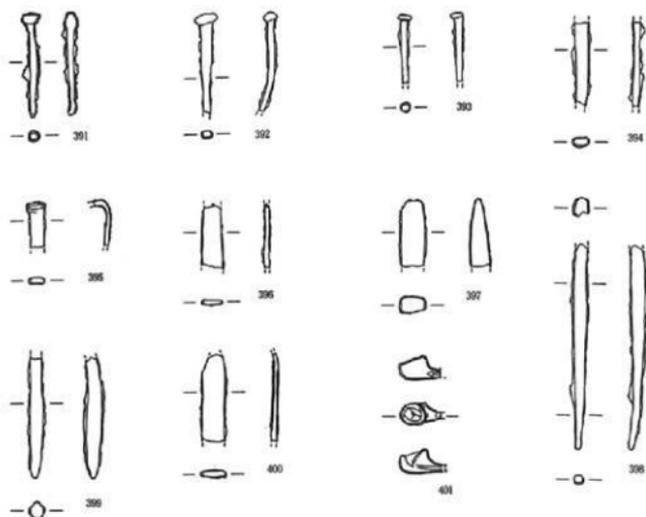
第73図 中世以後の遺物(1)



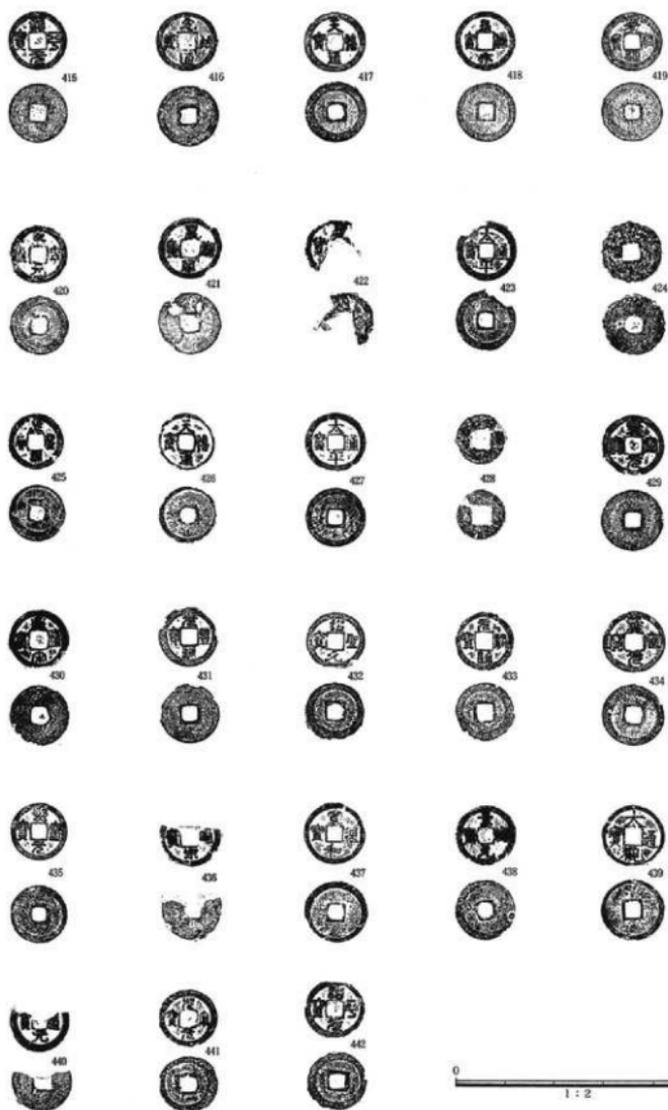
第74図 中世以後の遺物 (2)



第75図 中世以後の遺物(3)



第76図 中世以後の遺物(4)



第77図 中世以後の遺物 (5)

表-10 出土土器観察表(3)

品	番号	種別	器種	計	計			出土	用途	色	成形			出土地	備考	
					全数	観察	調査				外	内	原			
22	100	土師器	壺	229	190	109		8	雑形	黄	海部7/4	八角目・ナテ	ヘラナテ	S149L	PP9	
	109	土師器	壺				103	7	雑形	黄	海部7/4	八角目	八角目	ST49	PP9	
	110	土師器	壺				82	5	雑形	黄	海部7/4	八角目	八角目	S149F	PP9、本器類	
	111	土師器	壺				60	6	雑形	黄	オリブ7/20/5/4		八角目	ST49	PP9	
	112	土師器	壺				70	7	雑形	黄	海部7/4		八角目	ST49	PP9	
	113	土師器	壺	109	102	109		6	雑形	黄	海部7/6	八角目・ナテ		S149L	PP9	
	114	土師器	壺	136	113	114	60	17	6	雑形	黄	海部7/3	八角目・ナテ		S149L	PP9、本器類
	115	土師器	壺	200	160	200		7	雑形	黄	海部7/3	八角目・ナテ	八角目・ヘラナテ	S149L	PP9、102	
	116	土師器	杯				28	4	雑形	黄	海部7/5		ロクロ	S149F	PP16	
	117	土師器	高台付杯				10	5	雑形	黄	S146		ロクロ	S149F	PP16	
29	118	土師器	高台付杯	142			54	4	5	雑形	黄	海部7/5	樽ナリ・7/62、907/1	ロクロ	S149F	PP16
	119	土師器	壺	230	212	220	100	102	7	雑形	黄	海部7/4		ロクロ	S149L	PP10、191、192
	120	土師器	壺	220	198	212		5	雑形	黄	海部7/4	カキメ・ヘラ割	カキメ	S149L	PP10、192	
	121	土師器	壺	232	207	216		6	雑形	黄	海部7/4	カキメ・ヘラ割	八角目・ナテ	S149L	PP10、192、器類	
	122	土師器	杯	130			30	3	雑形	黄	海部7/5		ロクロ	S191F	PP26、器類・ヘラ割	
	124	土師器	杯	130			30	3	雑形	黄	オリブ7/20/5/1		ロクロ	S191F	PP27	
	125	土師器	高台付杯				52	6	雑形	黄	海部7/4		ロクロ	S149	PP28	
	126	土師器	高台付杯				8	6	雑形	黄	海部7/4		ロクロ	S149	PP28	
	127	土師器	杯	144			50	4	6	雑形	黄	オリブ7/20、5/6/5		ロクロ	S149	PP29
	128	土師器	高台付杯	109			62	32	4	雑形	黄	海部7/5		ロクロ	S149	PP29、口縁部は割れ
31	129	土師器	高台付杯	128			73	44	5	雑形	黄	海部7/3/7/4		ロクロ	S149L	PP22、口縁部は割れ
	130	土師器	壺					7	雑形	黄	海部7/4		ロクロ	S149	PP29	
	131	土師器	壺					7	雑形	黄	海部7/4		ロクロ	S149	PP29	
	132	土師器	壺				64	7	雑形	黄	海部7/4	ヘラ割		S149L	PP29	
	133	土師器	壺					7	雑形	黄	海部7/4	ヘラ割	カキメ	S149L	PP29	
	134	土師器	壺					7	雑形	黄	海部7/4	八角目	八角目	S149L	PP29	
	135	土師器	壺	224	184			7	雑形	黄	海部7/4	ナテ	八角目	S149L	二枚割、本器類	
	136	土師器	杯	132			60	43	5	雑形	黄	オリブ7/20、5/6/1		ロクロ	S149	PP29、器類・ヘラ割
	137	土師器	高台付杯					6	雑形	黄	JSEC 507/1		ロクロ	S149F	PP30	
	138	土師器	杯					6	雑形	黄	海部7/4	ナテ・ヘラ割	カキメ	S149L	PP30、口縁部は割れ	
33	139	土師器	壺				69	7	雑形	黄	海部7/4	八角目	八角目	S149L	PP30、二枚割、本器類	
	140	土師器	壺	132	111	132		6	雑形	黄	海部7/4	八角目・ナテ	八角目	S149L	PP30	
	141	土師器	杯	142			88	32	5	雑形	黄	JSEC 507/1		ロクロ	S149	PP30、器類・ヘラ割
	142	土師器	杯	133			76	35	6	雑形	黄	オリブ7/20/5/1		ロクロ	S149	PP30、器類・ヘラ割
	143	土師器	高台付杯	114				6	雑形	黄	JSEC 1006/1		ロクロ	S149	PP30	
	144	土師器	壺	136				4	雑形	黄	海部7/6	ロクロ・ヘラ割		S149F	PP31、252、253、器類	
	145	土師器	壺					4	雑形	黄	オリブ7/20、5/6/1		ロクロ	S149	PP31	
	146	土師器	壺	132				6	雑形	黄	JSEC 1006/1		ロクロ	S149	PP31	
	147	土師器	杯	150			74	52	6	雑形	黄	海部7/6		ロクロ	海部7/4	PP31、口縁部は割れ
	148	土師器	壺	150				4	雑形	黄	海部7/3		ロクロ	S149	PP31	
34	149	土師器	壺	106			24	80	5	雑形	黄	海部7/6		ロクロ	S149	PP31
	150	土師器	壺	146	131	133		6	雑形	黄	海部7/4		ロクロ	S149	PP31	
	151	土師器	壺	145	133	152		4	雑形	黄	海部7/4		ロクロ	S149	PP31	
	152	土師器	壺				73	6	雑形	黄	海部7/4		ロクロ	海部7/4	PP31	
	153	土師器	壺				72	5	雑形	黄	海部7/4	ロクロ・ヘラ割		海部7/4	PP31	
	154	土師器	壺	136	125			5	雑形	黄	海部7/3		ロクロ	S149	PP31	
	155	土師器	壺	122	103	200	70	20	6	雑形	黄	海部7/4	カキメ・ヘラ割	八角目	S149L	PP39
	156	土師器	壺	258	183	351		8	雑形	黄	海部7/3	カキメ・ヘラ割	八角目	S149L	PP39	
	157	土師器	杯				74	6	雑形	黄	海部7/5		ロクロ	ミガキ	PP39	
	158	土師器	杯					4	雑形	黄	オリブ7/20/5/4		ロクロ	ミガキ	PP39	
37	159	土師器	壺	152	135			6	雑形	黄	海部7/4	八角目・ナテ	八角目	S149L	PP39	
	160	土師器	壺					8	雑形	黄	海部7/4	八角目	八角目	S149L	PP39	
	161	土師器	壺					7	雑形	黄	海部7/4	八角目	八角目	S149	PP39	
	162	土師器	杯				37	5	雑形	黄	オリブ7/20、5/6/1		ロクロ	S149	PP39	
	163	土師器	壺				64	6	雑形	黄	海部7/5		ロクロ	海部7/4	PP39	
	164	土師器	杯	138			72	33	5	雑形	黄	オリブ7/20/5/2		ロクロ	S149	PP39
	165	土師器	杯				62	33	5	雑形	黄	オリブ7/20/5/2		ロクロ	S149	PP39
	166	土師器	杯	132			60	31	4	雑形	黄	オリブ7/20/5/2		ロクロ	S149	PP39
	167	土師器	壺				62	5	雑形	黄	オリブ7/20/5/3		ロクロ	海部7/4	PP39	
	168	土師器	壺	134	123	135	62	134	6	雑形	黄	海部7/4		ロクロ	S149	PP39
38	169	土師器	壺	164	153	173	98	146	6	雑形	黄	海部7/5		ロクロ	S149	PP39
	170	土師器	壺				192	8	5	雑形	黄	海部7/3	カキメ・ヘラ割	カキメ	S149L	PP39、102、180、器・ヘラ割
	171	土師器	壺	134	207	220		6	雑形	黄	海部7/4	カキメ	カキメ	S149F	PP40	
	172	土師器	壺	104	82	101	71	86	4	雑形	黄	海部7/4	八角目・ナテ	八角目	S149	PP40
	173	土師器	壺				137	5	雑形	黄	海部7/3		八角目	S149	PP40	
	174	土師器	壺	134	241	253		6	雑形	黄	海部7/4	八角目・ナテ	八角目	S149L	PP40、109	
	175	土師器	壺	220	203	220		6	雑形	黄	海部7/4	八角目・ナテ	八角目	S149F	PP40	

遺構と遺物

表-11 出土土器観察表(4)

国	番号	種別	器種	計 測						胎土	焼成	色 澤	成 形 技 造				出土地	備 考
				口径	高さ	口径	口径	口径	口径				成 形 技 造					
													外 径	内 径	底 径	備 考		
35	177	弥生土器	甕	070	054	050			5	磁器	青	オリ-795/6	カキ	カキ		5403	9730	
	178	弥生土器	甕	134			81	34	3	磁器	青	オリ-795/6/4	ロク	ロク	へう割	5404	9731, 遺跡へう割	
	179	弥生土器	甕	013				24	4	磁器	青	595/6/1	ロク	ロク		5405	9732	
	180	弥生土器	甕			010			4	磁器	青	595/7/6	ロク	ロク	へう割	5406	9734, 遺跡へう割	
	181	弥生土器	甕						5	磁器	青	595/7/4	カキ	カキ		5407	9735	
	182	土器	甕						8	磁器	青	595/7/3	ナチ	ミナキ		5764	9736, 内庭黒色土器	
	183	土器	甕	250	094				6	磁器	不灰	595/7/4	ハク目+ナチ	ハク目		5765	9737	
	184	弥生土器	甕	142			81	41	5	磁器	青	595/8/7	ロク	ロク	へう割	5766	9738, 遺跡へう割	
	185	弥生土器	甕	043			82	30	3	磁器	青	595/7/5/1	ロク	ロク	へう割	5767	9739, 遺跡へう割	
	186	弥生土器	甕	048					5	磁器	青	オリ-795/6	ロク	ロク		5768	9740, 9741	
40	187	弥生土器	甕	075		023		47	4	磁器	青	595/7/5/1	ロク	ロク	へう割	5769	9742	
	188	弥生土器	甕	053			84	77	5	磁器	青	595/7/5/1	ロク	ロク	へう割	5770	9743, 9744	
	189	弥生土器	甕	014			70	46	5	磁器	青	595/7/5/1	ロク	ロク	へう割	5771	9745	
	190	弥生土器	甕	014			83	41	4	磁器	青	595/7/5/1	ロク	ロク	へう割	5772	9746	
	191	弥生土器	甕	014			72	46	5	磁器	青	595/7/5/1	ロク	ロク	へう割	5773	9747	
	192	弥生土器	甕	033			83	44	4	磁器	青	595/7/5/1	ロク	ロク	へう割	5774	9748	
	193	弥生土器	甕	140					5	磁器	青	595/7/5/1	ロク	ロク	へう割	5775	9749, 9750, 9751	
	194	弥生土器	甕	140					5	磁器	青	595/7/5/1	ロク	ロク	へう割	5776	9752	
	195	弥生土器	甕	037					4	磁器	青	595/7/5/1	ロク	ロク		5777	9753	
	196	弥生土器	甕	009	40				10	磁器	青	オリ-792/50/1	ロク	ロク		5778	9754, 二重ロク口甕	
41	197	弥生土器	甕			004			8	磁器	不灰	595/7/5	へう割		5779	9755, 土甕		
	198	弥生土器	甕	038			88	40	5	磁器	青	595/7/4	ロク	ロク	へう割	5780	9756, 9757, 9758	
	199	弥生土器	甕	044			82	46	3	磁器	青	595/7/4	ロク	ロク	9759, 9760	5781	9759, 9760	
	200	弥生土器	甕	043			83	88	3	磁器	青	595/7/4	ロク	ロク		5782	9761	
	201	弥生土器	甕						4	磁器	不灰	595/7/4	カキ	カキ		5783	9762	
	202	弥生土器	甕	078	042	030			5	磁器	青	595/7/4	ロク	へう割		5784	9763	
	203	土器	甕	156			80	71	6	磁器	青	595/7/4	ロク	へう割		5785	9764, 9765	
	204	土器	甕						54	6	磁器	青	595/7/4	ミナキ		5786	9766, 9767	
	205	土器	甕			04			5	磁器	青	595/7/3	ロク	ミナキ	へう割	5787	9768, 9769	
	206	土器	甕			013			5	磁器	青	595/7/4	ハク目+ナチ	ハク目+ナチ		5788	9770	
42	207	土器	甕	065					6	磁器	不灰	595/7/4	ハク目+ナチ	ハク目		5789	9771, 9772	
	208	土器	甕			013	030		8	磁器	青	595/7/3	ハク目+ナチ	ハク目		5790	9773	
	209	土器	甕				82		7	磁器	青	595/7/4	へう割	へう割		5791	9774	
	211	土器	甕	032	023				7	磁器	不灰	595/7/3	ハク目	ハク目		5792	9775	
	212	土器	甕	041	023	038			5	磁器	不灰	595/7/3	ハク目+ナチ		5793	9776, 9777		
	213	土器	甕	023	032	079			5	磁器	不灰	595/7/3	ハク目		5794	9778		
	214	土器	甕			023	72		8	磁器	不灰	595/7/4	ハク目		5795	9779, 9780		
	215	弥生土器	甕				88		5	磁器	青	595/7/2	ロク	ロク	へう割	5488		
	216	弥生土器	甕			48			6	磁器	青	595/7/3	ロク	ロク	9781, 9782	5489	9781	
	217	土器	甕						7	磁器	不灰	595/7/3	ハク目+ナチ	ハク目		5490	9782, 9783	
43	218	土器	甕						6	磁器	青	595/7/3	ハク目+ナチ	ナチ		5491		
	219	弥生土器	甕			84			4	磁器	青	595/7/6/1	ロク	ロク	へう割	5492	9784	
	220	弥生土器	甕	023			54	44	3	磁器	青	595/7/2	ロク	ロク	へう割	5796	9785, 9786	
	221	弥生土器	甕	025					3	磁器	青	595/7/3	ロク	ロク		5797	9787	
	222	弥生土器	甕	141			60	51	3	磁器	青	595/7/3	ロク	ロク		5798	9788	
	223	土器	甕			023			3	磁器	青	595/7/4	ロク	ミナキ	9789, 9790	5799	9789, 9790	
	224	土器	甕				72		5	磁器	青	595/7/3	ロク	ミナキ	9791, 9792	5800	9791, 9792	
	225	土器	甕						7	磁器	青	595/7/4	ハク目+ナチ	ハク目		5801	9793	
	226	土器	甕						6	磁器	青	595/7/2	ハク目+ナチ	ハク目		5802	9794, 9795	
	227	土器	甕	023	023	043			5	磁器	青	595/7/2	ハク目+ナチ	ハク目		5803	9796	
44	228	土器	甕						5	磁器	青	595/7/3	ハク目	ハク目	丸底	5804	9797	
	229	土器	甕						7	磁器	青	595/7/3	ハク目+ナチ	ハク目		5805	9798, 9799	
	230	土器	甕						6	磁器	青	595/7/3	ハク目+ナチ	ハク目		5806	9800	
	231	土器	甕	244	236	225			5	磁器	青	595/7/3	ハク目+ナチ	ハク目+ナチ		5807	9801, 9802	
	232	土器	甕	078			83		6	磁器	青	オリ-795/4	ナチ+へう割	丸底	3118	9803, 9804		
	233	土器	甕	043					6	磁器	青	595/7/3	ナチ	へう割	丸底	3119	9805, 9806	
	234	弥生土器	甕	046			90	33	4	磁器	青	オリ-795/7/1	ロク	ロク	へう割	5008	9807, 314・315・325, 9808	
	235	弥生土器	甕	043			85	40	4	磁器	青	595/7/2/1	ロク	ロク	へう割	5009	9809	
	236	弥生土器	甕	038			88	30	4	磁器	青	595/7/1	ロク	ロク	へう割	5010	9810	
	237	弥生土器	甕	045			86	35	4	磁器	青	オリ-795/7/1	ロク	ロク	へう割	5011	9811, 9812	
56	238	弥生土器	甕	048			102	33	5	磁器	青	595/7/2/1	ロク	ロク	へう割	5012	9813, 9814	
	239	弥生土器	甕				90		4	磁器	青	595/7/3	ロク	ロク	へう割	5013	9815, 9816	
	240	弥生土器	甕	038			88	46	4	磁器	青	595/7/1	ロク	ロク	へう割	5014	9817, 9818	
	241	弥生土器	甕	033					3	磁器	青	595/7/1	ロク	ロク	へう割	5015	9819	
	242	弥生土器	甕	048			88	38	4	磁器	青	595/7/1	ロク	ロク	へう割	5016	9820, 9821	
	243	弥生土器	甕	033			82	33	4	磁器	青	595/7/2/1	ロク	ロク	へう割	5017	9822, 9823	

表-12 出土土器観察表(5)

田	番号	種別	形状	計量					胎土	陶質	色調	成形技法			出土状況	備考	
				口径	高さ	底径	体高	重量				外周	内周	底厚			
A	244	須恵器	杯	(32)					5	細砂混	灰白か白	口周	口周	へら割	3039F1		
	245	須恵器	杯	(34)	66	40	4	細砂混	灰	オリーフツ06/1	口周	口周	へら割	3039F2	PP27, 底縁へら割		
	246	須恵器	杯	(34)	76	37	5	細砂混	灰	オリーフツ06/1	口周	口周	へら割	3039F3	PP28, 底縁へら割		
	247	須恵器	杯			40	5	細砂混	灰	オリーフツ06/1	口周	口周	へら割	3039F4	底縁へら割, 土塊		
	248	須恵器	杯			40	5	細砂混	灰	オリーフツ06/1	口周	口周	へら割	3039F5			
	249	須恵器	杯		22	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F6	PP28, 底縁へら割			
	250	須恵器	杯	(14)	30	36	5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F7	PP28, 底縁へら割		
	251	須恵器	杯		60	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F8	PP28, 底縁へら割			
	252	須恵器	杯		73	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F9	PP28, 底縁へら割			
	253	須恵器	杯		59	3	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F10	PP28			
	254	須恵器	杯		30	5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F11	PP28			
	255	須恵器	杯		59	4	細砂混	灰	オリーフツ02/1	口周	口周	口周	3039F12	PP28			
	256	須恵器	杯		30	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F13	PP28			
	257	須恵器	杯		60	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F14	PP28			
	258	須恵器	杯		70	5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F15	底縁へら割, 「x」			
	B	259	須恵器	高台付杯	(13)	62	48	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F16	PP28	
		260	須恵器	高台付杯	(14)	66	47	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F17	PP27	
		261	須恵器	高台付杯	(13)	64	48	3	細砂混	灰	オリーフツ02/1	口周	口周	へら割	3039F18	PP28, 底縁へら割	
		262	須恵器	高台付杯		75	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F19	PP28, 底縁へら割		
		263	須恵器	高台付杯		86	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F20	PP28		
		264	須恵器	高台付杯		62	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F21	PP28		
		265	須恵器	高台付杯	(36)	58	52	3	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F22	PP28, 底縁へら割	
		266	須恵器	高台付杯	(29)	78	44	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F23	PP28	
		267	須恵器	高台付杯		69	6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F24	底縁へら割		
268		須恵器	高台付杯		60	6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F25	PP28			
269		須恵器	高台付杯		66	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F26	PP28			
270		須恵器	高台付杯		67	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F27	PP28, 底縁へら割			
C	271	須恵器	高台付杯		69	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F28	PP27, 底縁へら割			
	272	須恵器	高台付杯		4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F29	PP28				
	273	須恵器	高台付杯		69	4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F30	PP28			
	274	須恵器	高台付杯		76	5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F31	PP28			
	D	275	須恵器	蓋	(10)		45	6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F32	PP28, 底縁へら割	
		276	須恵器	蓋	(13)	38	6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F33	PP28, 底縁へら割		
		277	須恵器	蓋	(16)	25	6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F34	PP28		
		278	須恵器	蓋	(17)	34	6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F35	PP28		
		279	須恵器	蓋			5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F36	PP28, 底縁へら割		
		280	須恵器	蓋	(14)	25	5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F37	PP28		
		281	須恵器	蓋			5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F38			
		282	須恵器	蓋	(14)		5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F39	PP28		
283		須恵器	蓋			6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F40				
284		須恵器	蓋			5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F41	PP27			
285		須恵器	蓋			4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F42	PP28			
286		須恵器	蓋			5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F43	PP28			
E	287	須恵器	蓋	(14)		6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F44	PP28, 底縁へら割			
	288	須恵器	豆鉢		14	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F45	PP28				
	289	須恵器	豆鉢		10	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F46	PP28				
	F	290	須恵器	鉢		6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F47	x			
		291	須恵器	鉢		6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F48	x			
		292	須恵器	長頸瓶	(41)		7	細砂混	灰	オリーフツ06/1	口周	口周	口周	3039F49	PP28		
		293	須恵器	蓋		5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F50	PP28			
		294	須恵器	蓋		4	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F51	PP28			
		295	須恵器	蓋		10	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F52	PP27, 底縁へら割			
		296	須恵器	蓋		5	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F53	PP28			
		297	須恵器	蓋		10	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F54	PP28, 底縁へら割			
		298	須恵器	蓋	(4)	11	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F55	PP28			
299		須恵器	蓋	(13)	14	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	へら割	3039F56	PP28				
300		須恵器	蓋	(6)	7	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F57	PP28				
301		須恵器	蓋		7	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F58	PP28				
G	302	須恵器	蓋	(11)	6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F59	PP28, 底縁へら割				
	303	須恵器	豆鉢	176	153	(27)	332	5	細砂混	不灰	オリーフツ06/1	PP28, 底縁へら割	口周	口周	へら割	3039F60	PP28, 底縁へら割
	304	須恵器	蓋		12	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F61	PP28				
	305	須恵器	蓋		7	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F62	PP28				
	306	須恵器	蓋		6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F63	PP28				
	307	須恵器	蓋		8	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F64	PP28				
	308	須恵器	蓋		7	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F65	PP28				
	309	須恵器	蓋		6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F66	PP28				
	310	須恵器	蓋	(6)	7	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F67	PP28				
	311	須恵器	蓋	(6)	6	細砂混	灰	朝ナリーフ02/1	口周	口周	口周	3039F68	PP28				

遺構と遺物

表-13 出土土器観察表(6)

区	番号	種別	数量	計 量					出土 形式	色 調	造 形 装 法			出土状況	備 考	
				口部	胴部	底部	取柄	取土			外 面	内 面	取 部			
61 区	312	須恵系 甕					5	輪郭状	黄褐色, 507/1	口口口			3008P1	PP32		
	313	須恵系 甕					7	輪郭状	黄褐色	口口口	口口口		3008P1	PP30		
	314	須恵系 甕					8	輪郭状	灰オリーブ色/2	口口口	口口口		3008P1			
	315	須恵系 甕					9	輪郭状	オリーブ色/1	口口口	口口口		3008P1	PP421		
	316	須恵系 甕					10	輪郭状	灰オリーブ色/2	口口口	口口口		3008P1			
62 区	317	須恵系 甕	[52]				6	輪郭状	オリーブ色/1	ナツキ	アケ		3008P1			
	318	須恵系 甕					8	輪郭状	灰オリーブ色/2	ナツキ、口口口	アケ		3008P1			
	319	須恵系 甕	[8]	[3]	[30]		6	輪郭状	黄褐色/1	ナツキ	アケ	丸底力	3008P2	PP6、417		
	320	須恵系 甕	[17]			90	30	6	輪郭状	黄褐色/4	口口口	口口口	ヘラ切	3008P2	PP25	
	322	須恵系 甕	[142]			78	43	4	輪郭状	黄褐色/4	口口口	口口口	ヘラ切	3008P2	PP44	
63 区	323	須恵系 甕	[142]			78	39	3	輪郭状	黄褐色/4	口口口	口口口	取土	5-1		
	324	須恵系 甕					4	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口		3008P1			
	325	須恵系 甕				89		4	輪郭状	黄褐色/2	口口口	口口口	取土	6-1		
	326	須恵系 高台付坪				6	輪郭状	黄褐色/4	口口口	口口口	ヘラ切	3008P1	PP28			
	327	須恵系 高台付坪				9	5	輪郭状	黄褐色/4	口口口	口口口	取土	3008P1	PP45		
	328	須恵系 甕				6	輪郭状	不整	オリーブ色/4	口口口	口口口		3008P1			
	329	須恵系 甕				75	5	輪郭状	黄褐色/2	口口口	口口口	取土	3008P1	PP18		
	330	須恵系 甕	[142]	[25]		4	輪郭状	不整	黄褐色/3	口口口	口口口		9278			
	331	須恵系 甕				3	輪郭状	不整	黄褐色/4	口口口	口口口	カキメ	3008P1	PP33		
	332	須恵系 甕				4	輪郭状	不整	黄褐色/4	口口口	口口口	カキメ	3003			
64 区	333	須恵系 甕				9	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	口口口		3830			
	334	須恵系 甕	[242]	[25]	[18]	7	輪郭状	黄褐色/4	口口口、ヘラ切	口口口、ヘラ切	口口口、ナツ		3008			
	335	須恵系 甕				78	6	輪郭状	黄褐色/6	口口口	口口口	カキメ	3008P2			
	336	須恵系 甕				78	6	輪郭状	黄褐色/6	口口口	口口口	取土	3008P2	PP4		
	337	須恵系 甕				108	5	輪郭状	黄褐色/2	ヘラ切	ヘラ切		3008P1	PP3		
	338	須恵系 甕	[242]	[25]	[18]	6	輪郭状	黄褐色/3	口口口、ヘラ切	口口口、ヘラ切	口口口、ナツ		3008P1	PP45		
	339	須恵系 甕	[242]	[25]	[18]	6	輪郭状	黄褐色/3	口口口、ヘラ切	口口口、ヘラ切	口口口、ナツ		3008P1	PP45		
	340	土師系 甕	[142]			78	40	4	輪郭状	黄褐色/2	口口口	口口口	ミナキ	3008P2	内面褐色化	
	341	土師系 甕	[132]			89	4	輪郭状	黄褐色/2	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	342	土師系 甕	[132]			89	6	輪郭状	黄褐色/2	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
65 区	343	土師系 甕	[132]			89	6	輪郭状	黄褐色/2	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	344	土師系 甕	[132]			89	6	輪郭状	黄褐色/2	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	345	土師系 甕	[132]			89	6	輪郭状	黄褐色/2	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	346	土師系 甕	[132]			89	6	輪郭状	黄褐色/2	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	347	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	348	土師系 甕				89	4	輪郭状	黄褐色/4	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	349	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	350	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	351	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	352	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
66 区	353	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	354	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	355	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	356	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	357	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	358	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	359	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	360	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	361	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	362	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
67 区	363	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	364	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	365	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	366	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	367	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	368	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	369	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	370	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	371	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	372	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
68 区	373	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	374	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	375	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	376	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	377	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	378	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	379	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	380	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	381	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	382	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
69 区	383	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	384	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	385	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	386	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	387	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	388	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	389	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	390	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	391	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		
	392	土師系 甕				89	5	輪郭状	黄褐色/3	口口口	口口口	ミナキ	3008P1	内面褐色化		

表-14 土製品・石製品・金属製品観察表

図	番号	種別	器種	計測値(mm・g)				破損有無	調査その他	出土地点	登録番号
				直径	短径	厚さ	重量				
15	51	金属製品	紡錘車	円盤 63 軸部 6	62	3	41.63	有	輪部を円盤に差し込む	ST31EL	RM44・45
	67	土製品	紡錘車	円盤 64	34	12	4.06	有	摺圧痕、中央に穿孔	ST20Y	RP37
	68	石製品	砥石	98	54	37	220.06	有	5面に研ぎ痕跡、ノミ状工具による研ぎ痕	ST20Y	RQ31
	69	金属製品	鈍鐵	39	26	3	13.64	有	5角形で逆側有り	ST20Y	RM47
19	70	金属製品	釘	31	6	3	2.07	有	先端部欠損	ST20	
	77	土製品	紡錘車	円盤 53	30	14	16.38	有	摺圧痕、中央に穿孔	ST177F1	
	78	金属製品	紡錘車	円盤 58 輪部 42	50	3	52.76	有	輪部を円盤に差し込む	ST177EL	RM48
20	122	石製品	紡錘車	円盤 56	54	17	65.51	無	中央に穿孔あり	ST840北壁	RQ196
43	210	石製品	カマド 構築材	80	40	54	134.27	有	外面被熱	ST489Y	RQ122
62	320	土製品	円状製品	52	51	7	30.45	無	須臾器壁破片、7方向から打欠痕	S6936F1	
66	364	石製品	砥石	56	29	16	36.54	有	4面使用痕	S0470	RQ236
	365	石製品	砥石	39	20	20	32.75	有	4面使用痕	S0936F1	RQ398
	366	石製品	不明	98	81	43	478.08	有	2面に凹取り痕跡	S0936F1	
	367	金属製品	刀子	207	17	4	36.84	有	検閲刀	SK990	RM360・361
	368	金属製品	片口鋸	125	100	10	201.29	有	注口部	SK990	RM362
	369	金属製品	片口鋸	75	52	6	52.80	有	注口部直下力	SK510	RM266
	387	石製品	石碇	73	50	24	79.54	有	一面に使用痕	SK1153	RQ383
75	388	石製品	五輪砥	221	167	140	5000	有	凝灰層、空輪部	B-32	RQ430
	389	石製品	砥石	74	45	21	146.23	有	4面使用痕、キリ状工具研ぎ痕	SK1051	RQ267
	390	石製品	砥石	101	35	24	136.63	有	1面使用痕、2面切り離し痕	E-52	
76	381	金属製品	釘	64	10	4	6.90	有	丸釘	SK746	RP268内
	392	金属製品	釘	62	14	4	6.82	有	角釘	SP1132	RM333
	393	金属製品	釘	42	8	4	4.43	有	角釘	SK443	RM381
	394	金属製品	刀子力	50	9	4	4.88	有		SK1025	
	395	金属製品	不明	28	8	3	3.18	有	直角に曲がる	D-49	
	396	金属製品	刀子力	38	13	3	5.96	有		XD	
	397	金属製品	ノミ状	41	14	11	21.13	有		C62X0	
	398	金属製品	キリ状	125	8	8	29.79	有	角状	SK931	RM293
	399	金属製品	キリ状	74	8	9	13.80	有	角状	SK1061	RM358
	400	金属製品	刀子力	53	13	3	6.58	有		SK459	
401	金属製品	キセル	25	12	13	2.63	有		C-40		

表-15 出土銭貨計測表

図	番号	貨幣	計測値(mm・g)		出土地点	貨幣名	備考
			直径	重量			
24	280	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	281	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	282	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	283	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	284	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	285	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	286	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	287	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	288	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	289	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	290	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	291	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	292	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	293	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	294	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	295	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	296	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	297	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	298	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	27	299	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年
300		銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
301		銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
302		銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
303		銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
304		銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
305		銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
306		銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
307		銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
308		銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ

図	番号	貨幣	計測値(mm・g)		出土地点	貨幣名	備考
			直径	重量			
27	299	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	300	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	301	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	302	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	303	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	304	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	305	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	306	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	307	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	308	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	309	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	310	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	311	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ
	312	銅貨	25.5	1.1	3504	1111年	東 朝ノヤシ

V 調査のまとめ

今回の調査は、主要地方道山形天童線道路改築事業にかかる緊急発掘調査である。調査成果をまとめると以下のようになる。

1 縄文・弥生時代の遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構はほとんどA区で、堅穴住居跡4棟、溝2条、土坑24基、落ち込み遺構1基である。主に落ち込み遺構東側の微高地に住居及び土坑が検出され、包含層と住居跡などから縄文中期～弥生時代までの土器・石器が出土した。出土量の多い土器型式から主体の時期を縄文後期中葉～末葉があらわれる。

2 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は、全調査区にわたって検出され、集落の中心を南北に縦に長く調査したようになっている。古墳時代については、土坑1基のみである。古墳時代中期南小泉式が該当する土師器環が出土している。奈良・平安時代の遺構は、堅穴住居跡28棟、掘立柱建物跡8棟、柵列1基、河川跡2条、溝36条、土坑99基が検出された。

本遺跡出土の土器について、分類をしてみる。それと合わせて、主な堅穴住居跡から出土した土器についての考察を加えた。なお、種別で灰軸陶器Ⅰ、須恵器Ⅱ、赤焼土器Ⅲ、土師器Ⅳとし、器種で坏A、高台付坏B、双耳杯C、蓋D、鉢E、壺・瓶F、甕G、皿H、甌I、椀Jと分類した。

A区の住居跡について述べる。ST1では、床面出土のⅡD4類の須恵器蓋やⅢG5類の赤焼土器甕、ⅣG7類の土師器甕が出土している。須恵器蓋・赤焼土器甕ともに切り離しが回転糸切である。住居の年代は9世紀前半と考えられる。ST31では、貯蔵穴出土のⅡA5・6類の須恵器環、カマド出土のⅣG2・5・7類の土師器甕が出土している。須恵器の形態から9世紀第2・3四半期と思われる。ST20・177は、切り合い関係にあるが、ⅡA1類の須恵器環が両遺構ともに出土しており、切っているST20で床面出土のⅡD2類の須恵器蓋やⅣD1類の土師器蓋が出土していることから時期差の余り無い8世紀後半の時期を想定したい。床面資料は泉谷地窯段階周辺と思われる。畿内では8世紀代から鉄製紡錘車が出始めており、本遺跡でもあまり時期を置かず導入されたものと思われる。

B区の住居跡について述べる。ST202では、カマド出土のⅡA5類の須恵器環、ⅢG6類の赤焼土器甕が出土している。9世紀前半と思われる。ST201では、下層出土のⅡA2類の須恵器環、ⅡF1の須恵器小壺、ⅢD1類の赤焼土器蓋が出土している。覆土内出土のため時期決定では差ができるが、9世紀前後と思われる。

C区の住居跡について述べる。ST558は、ⅠJ1類の灰軸陶器椀、ⅢG6類の赤焼土器甕が出土している。ST800は、ⅡD6類の須恵器蓋、ⅢA3類と思われる赤焼土器環が出土している。9世紀前半の様相を示す。ST486では、覆土内ではあるが、ⅡA1類の須恵器環が出土している。覆土の上位からⅡC1双耳杯が出土している。8世紀末～9世紀前半の段階と思われる。ST487では、覆土内からⅡA1類の須恵器環、ⅢE1類の赤焼土器鉢、カマド出土のⅣI

I類の土師器甕やIVG4・5・6類の土師器甕が出土する。カマド周辺出土の非クロロ系土器から8世紀後半と考えられる。ST840では覆土内出土II B3・4類の須恵器高台付環、カマド・床面出土III G3・6類の赤焼土器甕が出土している。9世紀第1四半期を想定できる。ST913では、床面からII A5類の須恵器環が出土している。9世紀前半と思われる。ST863では、カマド出土のII A2類の須恵器環、II B3・4類の須恵器高台付環やIVG3類の土師器甕が出土している。9世紀初頭を想定できる。ST864では、カマド出土のII A1類の須恵器環やIVG6類の土師器甕を出土する。8世紀第3四半期を想定できる。ST865では2層目出土のII A2類の須恵器環、IID1類の大型の須恵器蓋、床面・2層目出土のIII G5・6類の赤焼土器甕が出土している。9世紀前後を想定できる。

ST492では、床面からII A3類の須恵器環、III G2類の赤焼土器甕、IVG1土師器甕が出土している。切られているST847からは、IVG6類が出土する。ST847は様相のわかる資料が希少である。ST492の様相は9世紀第1四半期にあたる。ST494では、ST492出土の須恵器環と同様のものが、カマドから出土している。III A1類の赤焼土器環が覆土1層目から出土している。ST492と同様の時期と思われる。ST489では、カマド出土のII A1類の須恵器環、床面出土のII B2・5類の須恵器高台付環、IID5類の須恵器蓋やII F3類の長頸瓶などが出土している。覆土1層目からは、IVA1類の内黒土師器環、底径が広くへう切のIII A1類の赤焼土器環が出土している。床面及びカマド出土のものから住居跡の時期は8世紀第3四半期と考えられる。なお、覆土1層目は8世紀末～9世紀第1四半期と思われる。上層から9世紀後半～10世紀初頭のIII A3、III B2類の赤焼土器環・高台付環が出土している。上層で10世紀代の住居があった可能性がある。ST490は、土師器のみであったが、IVG7類の土師器甕が出土している。切り合い関係から8世紀後半と思われる。

ST814では、III A3類の赤焼土器環やIII B2類の赤焼土器高台付環、IVB2類の土師器高台付環や口縁端部につまみ出しを施すIVG8類の土師器甕が出土する。ほとんどカマド資料である。

また、大型の掘立柱建物跡から突帯付瓶の小破片が出土しており、区画するSD470からII A7類須恵器環などが出土しており、9世紀半ばを想定できる。土坑からは、稜腕風のII B1類高台付環など8世紀半ばの土器なども出土している。堅穴住居を中心とした集落の変遷については、A・B区集落が8世紀後半から9世紀半ばまで、C区集落が8世紀後半から10世紀初頭までの時期を確認できる。

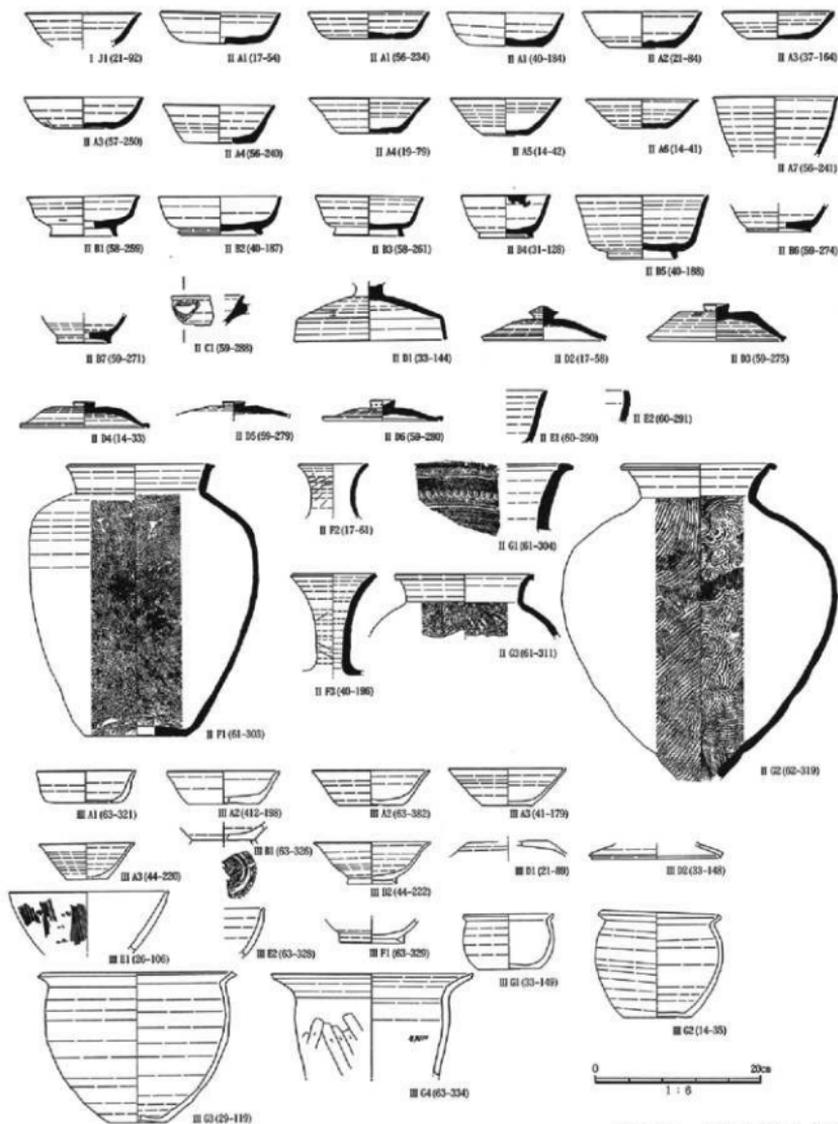
3 中世以後の遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は、河川跡1条、溝跡2条、土坑・土坑墓32基、井戸跡1基が検出された。人骨・馬骨を含む土坑墓は、3基検出され最少個体4体の人骨と白歯などの馬骨を出土した。その他、古銭を出土する小判形ないし槽円形の土坑は、土坑墓の可能性もある。ただし、上部削平や切り合いにより開口部の状況が不明瞭な場合もあり、形状による分類はできなかった。また、遺物として、13世紀代の青磁や、14世紀代の古瀬戸など山寺関係の墓域の継続期間を知る上で重要な資料がでていいる。古銭も宋銭まででサシ銭を含む41枚が出土した。

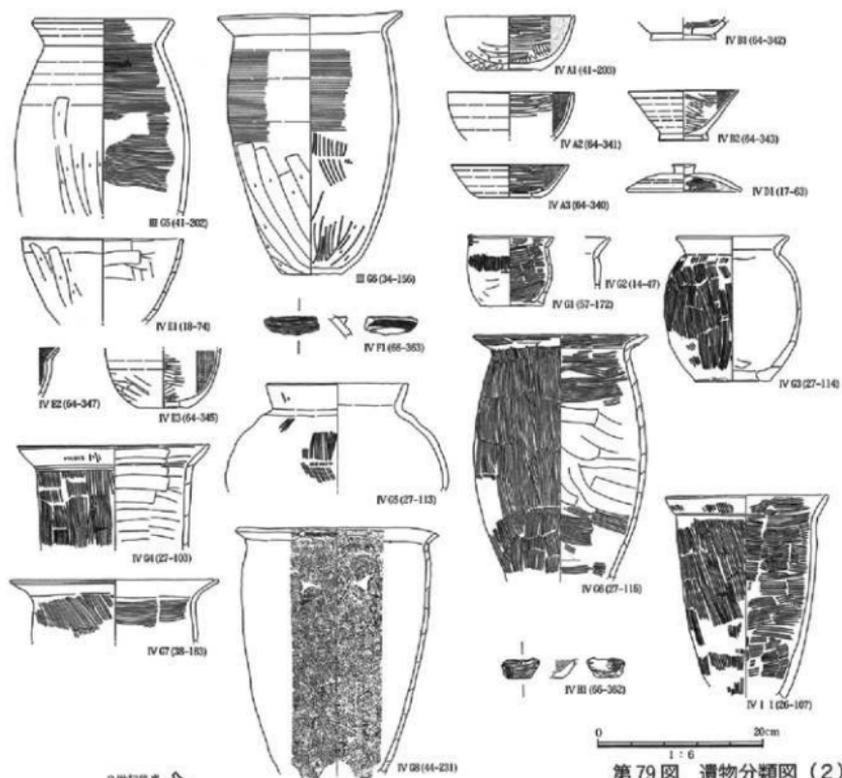
調査のまとめ

表-16 土器分類表 ※底部切り直し・調整 (aはへら切、bは回転糸切、cは菊花状ナデツケを示す。)

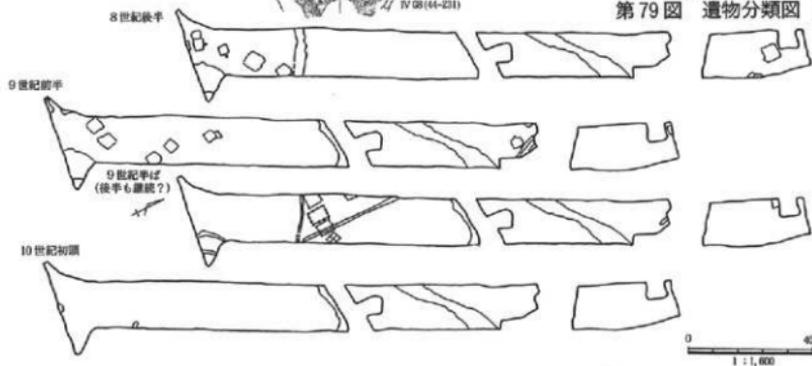
種別	器種	分類	口口口 使用	口部部~体部部部			底部調整	切り直し・調整		
				外周調整	内周調整	不明				
I 灰 胎 器	J 椀	1	使用	体部が緩やかに内湾しながら立つ	口口口	口口口	不明	不明		
		A 杯	1	使用	断面が大きく、断面が定形的になる	口口口	口口口	平底	a・b	
			2	使用	断面がやや大きく、断面が定形的になる	口口口	口口口	平底	a・b	
			3	使用	断面がやや大きく、体部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	平底	a・b	
			4	使用	断面がやや小さく、ゆるやかに内湾しながら立ち上がる	口口口	口口口	平底	a・b	
			5	使用	断面がやや小さく、体部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	平底	b	
			6	使用	断面が強く、断面がやや小さく、傾斜的に外反する	口口口	口口口	平底	b	
7	使用		断面が強く、体部が傾斜的に立ち上がる	口口口	口口口	不明	不明			
II 須 器	B 高 台 付 杯	1	使用	口部が大きく、縁をもつ	口口口・削	口口口	竹高台	a		
		2	使用	断面が大きく、やや傾斜的に立ち上がる	口口口	口口口	竹高台	a		
		3	使用	断面がやや大きく、やや傾斜的に立ち上がる	口口口	口口口	竹高台	a		
		4	使用	断面が小さく、やや傾斜的に立ち上がる	口口口	口口口	竹高台	a		
		5	使用	断面が強く、体部が傾斜的に立ち上がる	口口口	口口口	竹高台	a		
		6	使用	断面がやや小さく、体部が傾斜的に立ち上がる	口口口	口口口	竹高台	b		
		7	使用	断面が小さく、体部が傾斜的に立ち上がる	口口口	口口口	竹高台	b		
III 須 器	D 甕	1	使用	断面が立ち上がり、体部は、斜前方に肥厚がつく	口口口	口口口	不明	不明		
		2	使用	大型で、口部部が傾斜的に外反する	口口口・削	口口口	不明	不明		
		3	使用	宝珠形のつまみをもつ、丸い糸帯をもつ	口口口	口口口	不明	不明		
		4	使用	断面が強く、大井・体部の境が線をなし、口部部が直立する	口口口・削	口口口	不明	不明		
		5	使用	断面がやや広く、口部部が強く、屈曲する	口口口・削	口口口	b	b		
		6	使用	断面が強く、平坦な大井部をもつ	口口口・削	口口口	b	b		
		7	使用	断面が強く、口部部が直立する	口口口・削	口口口	b	b		
IV 須 器	E 鉢	1	使用	口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
		2	使用	口部部が傾斜する	口口口	口口口	不明	不明		
		F 壺・瓶	1	使用	口部部が傾斜的に外反し、体部が丸く膨らむ	口口口	口口口	不明	不明	
			2	使用	やや長い口部部が傾斜する	口口口	口口口	不明	不明	
			3	使用	長い口部部が傾斜して外反する	口口口	口口口	不明	不明	
			G 甕	1	使用	口部部が大きく、口部部は、波状の縁を飾る	口口口	口口口	不明	不明
				2	使用	最大径がやや上にあり、口部部が外反する	口口口	口口口	不明	不明
3	使用			口部部が傾斜したのち、上端が立つ	口口口	口口口	不明	不明		
A 杯	1			使用	断面がやや大きく、断面が定形的になる	口口口	口口口	平底	a	
	2	使用		断面がやや小さく、傾斜的に立つ	口口口	口口口	平底	a		
	3	使用		断面が傾斜的に外反し、体部が傾斜的に立ち上がる	口口口	口口口	平底	a・b		
	III 高 台 付 杯	1		使用	断面がやや小さく、切り直し・へら切りで傾斜的に立つ	口口口	口口口	平底	b	
		2	使用	断面がやや大きく、断面が傾斜的に立ち上がり、体部が内湾したのち、外反する	口口口	口口口	平底	a		
		II 高 台 付 杯	1	使用	断面が強く、平坦な大井部をもつ	口口口・削	口口口	竹高台	c	
			2	使用	断面が強く、口部部が直立する	口口口	口口口	不明	不明	
E 鉢			1	使用	体部が傾斜的に外反する	口口口・削	口口口	不明	不明	
			2	使用	体部が傾斜しながら立つ	口口口	口口口	不明	不明	
			I 土 器	1	使用	断面が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明
	2			使用	断面が傾斜して、内湾しながら立つ	口口口	口口口	竹高台	b	
	G 甕			1	使用	やや口部部が強く、口部部が傾斜的に外反し、体部がやや丸く膨らむ	口口口	口口口	平底	a
		2		使用	体部が傾斜しながら立ち上がり、口部部が傾斜したのち上端が立つ	口口口	口口口	平底	b	
		3		使用	口部部が強く、斜方に立ち上がる	口口口	口口口	平底	b	
4		使用		体部がやや傾斜的に立ち上がり、口部部が強く外反する	口口口・削	口口口	不明	不明		
5		使用		体部がやや傾斜し、強く外反する	口口口・削	口口口	不明	不明		
6		使用	大型で断面が強く、口部部が傾斜したのち、上端が立つ	口口口	口口口	不明	不明			
A 杯		1	不使用	断面がやや大きく、内湾しながら立つ	ナデ	ナデ	平底	不明		
	2	使用	断面がやや小さく、内湾しながら立つ	口口口・削	口口口	不明	不明			
	3	使用	断面がやや小さく、傾斜的に立つ	口口口	口口口	平底	不明			
	B 高 台 付 杯	1	使用	断面がやや大きい	口口口	口口口	平底	不明		
		II 須 器	2	使用	断面が傾斜して、体部が傾斜的に立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	平底	C	
			IV 土 器	1	使用	断面が強く、小さなつまみがつく	口口口	口口口	不明	不明
				2	不使用	体部が傾斜しながら立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	ナデ・削	ナデ・削	平底	不明
3				使用	体部が傾斜しながら立ち上がる	口口口	口口口	不明	不明	
I 土 器				1	不使用	体部が傾斜して立つ	口口口	口口口	不明	不明
				G 甕	1	不使用	小型で、口部部が傾斜的に外反し、体部がやや傾斜的に立つ	口口口	口口口	不明
	2				不使用	小型で、口部部が傾斜して、やや傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明
	3	不使用			中型で、口部部が傾斜的に外反し、体部が丸く膨らむ	口口口	口口口	不明	不明	
	4	不使用	体部が傾斜的に立ち上がり、口部部と体部の境に流線を飾る		口口口	口口口	不明	不明		
	5	不使用	体部が丸く膨らみ、口部部が傾斜する		口口口	口口口	不明	不明		
	6	不使用	体部がやや傾斜し、口部部が傾斜して外反する		口口口	口口口	不明	不明		
7	不使用	体部が傾斜的に立ち上がり、口部部が傾斜する	口口口		口口口	不明	不明			
II 土 器	1	不使用	口部部が傾斜的に外反し、断面が肥厚をもつ	口口口	口口口	不明	不明			
	I 土 器	2	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
		3	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
		4	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
		5	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
		6	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
		7	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
8		不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明			
III 土 器	1	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明			
	I 土 器	2	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
		3	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
		4	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
		5	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
		6	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
		7	不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明		
8		不使用	断面が傾斜して立ち上がり、口部部が傾斜的に外反する	口口口	口口口	不明	不明			



第78図 遺物分類図(1)



第79図 遺物分類図(2)



第80図 集落建物群変遷図

4 永源寺跡遺跡の奈良・平安時代の集落について

本遺跡を含む北側の地域は『和名類聚抄』に記載のある「芳賀郷」(天童市高橋地区の芳賀周辺)に比定されている。これについては吉田東吾の『大日本地名辞典』において言及している。なお、当郷は下野国芳賀郷からの征夷軍の兵士が移り住んだという伝承がある(芳賀諏訪神社縁起)。遺跡北側の集落名は中里と言ひ、集落の中心地を指すとされている。今回の調査では、集落を構成する住居跡が多く検出され、集落の一部ではあるが集落の変遷を概観できる。

A・B区の住居跡からは、8世紀後半から9世紀半ばまでの集落を検出した。C区住居ST487にも言えるが、ST20などの8世紀の住居はやや大型である。A区住居からは紡錘車が出土していることから、本遺跡で生産されたのは、『延喜式』「調庸」にある「調、庸、輪狭布」していることが想定される。さらに同「貢限」により調庸を「更納当国」こととなっていた。都での需要のない狭布を当国で官人や番上・長上の兵士・鎮兵に差配していたと思われる。しかし、9世紀後半の集落が検出されず、全容はまだ不明な点があるが、近接する中里B遺跡出土遺物も8世紀後半の須恵器高台付坏などで様相はST20段階である。C区竪穴住居跡を中心とした住居跡は、調査区東側に偏る。南側から北東にのびるSG936に沿って集落を構成していたと思われ、ST487、489の時期の8世紀後半からST492、840の時期の9世紀前半までは中央部から南にかけて検出されている。C区中央部で9世紀半ば頃の区画溝を伴う掘立柱建物跡が検出されている。それを切る掘立柱建物があるため、このタイプの集落構成はその後継続したと見られる。ST814の時期の10世紀初頭になり、C区南側際に小規模な住居群が構成される。河川跡は9世紀初頭までに埋土し、小溝が9世紀半ばに数条流れることになる。小溝が消滅した後は、より立谷川側に集落が形成される。

A区のST31の他は9世紀中・後半にかかる一般集落の実態が不明であり、特にC区集落は8世紀から続いた集落形成が9世紀半ばに何らかの事由で変化したものと思われる。特に、3×4間の掘立柱建物跡は全国的にも中核となる規模でSB700がそれに該当する。『類聚三代格』延暦14(795)年9月17日条に郡倉は郷毎に一院を設置されていることがわかり、河川に近接し、古道が通る立地条件から当地域が設置場所として考えられたのではないと思われる。ただし、有力豪族の倉庫を借用しながら、郷倉として使用していた例もあり官営のものは一概に言えない。

次に、当時の状況を主に徴税関係をみながら概観する。しばしば出羽国に関して「復」関係の記載が9世紀半ばに目立つようになる。「復」とは、賦役令人在狹郷条(集解古記)に「復謂令還本業也、去本居已絶其産業、故優復其業、除其調役雜役」とあり、本業に還えさせ、それに専念させるための調庸全体の免除にあたる。個別的に免除する「免」とは根本的に違う。「復」は弘仁2(811)年~斉衡2(855)年に4回にわたり「給」わっている。特にこの時期に顕著に現れることから、積極的な救済と農民経営の建て直しが想起される。なお、賑給支給については、『日本紀略』承和13(846)年5月29日条に「出羽国飢、遣使賑給」とあるが、天長10年官符にみる動用穀の使用を計上したものと思われる。『続日本後紀』承和11年(844)4月1日条には、最上郡の外従八位伴部道成の記載がある。爵位下賜の記載ではないが、地域の富豪層に対しても

蝦夷暦などを付与し、積極的に私穀献上を推進させる一端を窺える。また『類聚三代格』承和10(843)年4月24日に「応陸奥出羽两国淳浪人送付本貫事」の太政官符が出されている。「遂令課賦之民脱於籍帳、調庸之物欠官庫」状態であった。『類聚国史』天長10年(833)5月26日条に大和国の事例だが、「夫富豪所貯、是貧窶之資也」と正税不足分相当を富豪層から拠出するようになる。調庸だけでなく、田祖においても困窮している状況も窺える。以上僅かではあるが、文献的な概要を述べた。頁数が限られているため、詳しい言及は避けるが、集落の構成要素が周辺状況といわゆる「勸農」政策に大きく依拠していると感じられる。本遺跡の9世紀半ばの掘立柱建物を中心とした倉庫の出現は、郷倉設置と「勸農」政策との関係があるものと考えられる。

《引用・参考文献》

- 相原淳一・阿部恵他 1986 『田柄貝塚I遺構・土器編』宮城県文化財調査報告書第111集
- 阿部明彦他 1990 『川口遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第151集
- 阿部明彦・水戸弘美 1999 『山形県の古代土器編年』第25回古代城郭官衙検討会資料
- 伊藤邦弘他 1999 『木ノ沢遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第62集
- 植松曉彦 1999 『宮の前遺跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
- 植松曉彦 1998 『津山長表遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第58集
- 氏家信行他 1998 『山居遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
- 上田秀夫 1982 『14～16世紀の青磁碗の分類について』貿易陶磁研究No. 2
- 片桐孝浩 1994 『香川県における中世墓出土銭貨』出土銭貨第2号
- 佐藤庄一他 1998 『平野山古窯群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集
- 塩田達也 1997 『律令国家の「勸農」政策』東北歴史資料館研究紀要第23巻
- 庄司敦・菊池逸夫他 1990 『利府町郷来遺跡II』宮城県文化財調査報告書第134集・利府町文化財調査報告書第5集
- 須賀井新入他 1997 『荒川2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第43集
- 鈴木孝之 1990 『古代～中近世の井戸跡について(1)』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要第7号
- 高橋誠明 1999 『宮城県古墳時代中期の土器様相における北部の地域性』
水沢市埋蔵文化財センター考古学フォーラム北の古墳を考える資料
- 天童市史編さん委員会 1981 『天童市史上巻(原始・古代・中世編)』
- 永井久美男 2000 『模倣銭の全国的様相』東北中世考古学会第6回研究大会資料
- 藤澤良祐 1997 『中近世瀬戸焼の編年』東北中世考古学会第3回研究大会資料
- 北陸古代土器研究会 1999 『須恵器貯蔵具を考える1つぼとかめ』北陸古代土器研究8号
- 山口博之他 1996 『渡戸遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第35集
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 米倉秀紀他 2000 『郡衛正倉の成立と変遷』奈良国立文化財研究所研究集會報告資料集

報告書抄録

ふりがな	ようげんじあといせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	永源寺跡遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第86集							
編著者名	押切智紀 衣袋志雄							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL023-672-5301							
発行年月日	2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ようげんじあといせき 永源寺跡遺跡	やまがたけんてんどうし 山形県天童市 おおいせき 大字清池 あざかほら 字笠仏	6210	239	38度 19分 12秒	140度 21分 47秒	20000418 ～ 20000809	5,000	主要地方道 山形天童線 遺路改築事 業
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
集落跡	縄文・ 弥生時代	竪穴住居	4	縄文土器	浅鉢・深鉢・壺			
		溝	2	弥生土器	壺・甕			
		土坑	24	打製石器	削器・石匙他			
		落ち込み遺構	1	磨製石斧				
	奈良・ 平安時代	竪穴住居	28	灰釉陶器	椀			8世紀後半から
		掘立柱建物	8	須恵器	坏・高台付坏・壺他			10世紀まで継続
		欄列	1	赤焼土器	坏・高台付坏・蓋・			した集落跡
		河川	2		鉢・壺・甕他			
		溝	36	土師器	坏・高台付坏・耳皿・			磁北に直線的に
		土坑	99	石製品	蓋・鉢・甕・甌他			のびる区画溝と
				土製品	紡錘車・砥石他			掘立柱建物跡を
				金属製品	紡錘車・片口鍋他			検出
墓域	中近世	河川	1	中世陶磁器	青磁・瀬戸・甕器系・			土坑墓から人骨
		溝	2		瓦質・珠洲系			・馬骨が出土
		土坑・土坑墓	32	近世陶器	甕			
		井戸	1	石製品	砥石・五輪塔・石硯			
				金属製品	渡来銭・無文銭他			(総出土箱数：35)

版 函



調査区全景(東から)



重機稼動状況(北から)



面整理(北から)



遺構精査(南から)



記録作業(東から)



人骨保存処理(西から)



現地説明会(南から)



A区縄文時代遺構(北から)



SD39 完掘状況(東から)



S K 505 出土状況(西から)



A区縄文時代竪穴住居(東から)



ST 1 完掘状況(西から)



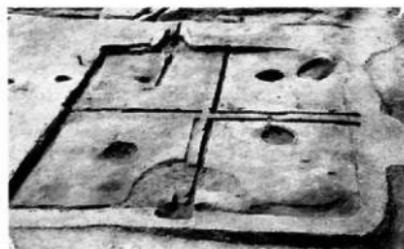
ST 1 EL(西から)



ST 31 完掘状況(北から)



ST 31 EK 1 断面(南から)



ST20 完掘状況(北から)



ST20 E.L断面(北西から)



ST177 E.L断面(北西から)



ST20・177掘り方(北から)



ST201 完掘状況(南から)



ST201 E.L断面(南西から)



ST202 完掘状況(南東から)



ST202 出土状況(東から)

図版 4



S T 823・844・846 (南から)



S T 823 E L 断面(南西から)



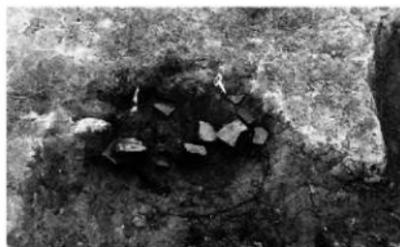
S T 844 E L 断面(南西から)



S T 846 E L 断面(西から)



S T 558・800 (南から)



S T 558 出土状況(南から)



S T 486 完掘状況(北から)



S T 486 E L 断面(西から)



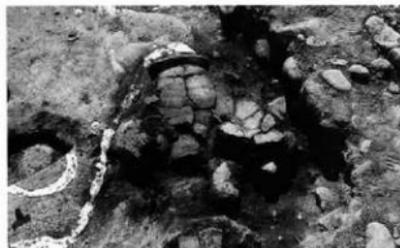
S T 487 断面(西から)



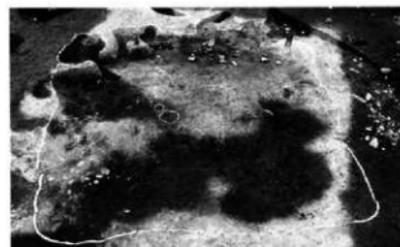
S T 487 E L 断面(南東から)



S T 487 間仕切り検出状況(東から)



S T 487 土師器甕出土状況(北から)



S T 840 出土状況(南から)



S T 840 E L 断面(西から)



S T 913・S X 923 (北西から)



S T 913・S X 923 断面(西から)

図版6



ST863 完掘状況(西から)



ST863 EL出土状況(西から)



ST864 出土状況(西から)



ST864 EL(西から)



ST865・SX866(南から)



ST865・SX1221(南から)



ST492 完掘状況(西から)



ST847 EL(北から)



S X 493・ST494 完掘状況(南から)



ST 494 断面(西から)



ST 489 EL出土状況(南から)



ST 489 断面(南から)



ST 489 EL断面(西から)



ST 489 EL(南から)



ST 489・490 出土状況(西から)



ST 490 EL(西から)

図版 8



ST491 EL断面(東から)



SX488・ST814・496(南から)



ST814 EL出土状況(南から)



ST814 EL完掘状況(南から)



SB92 検出状況(北東から)



SB600 完掘状況(北西から)



SB700 完掘状況(南から)



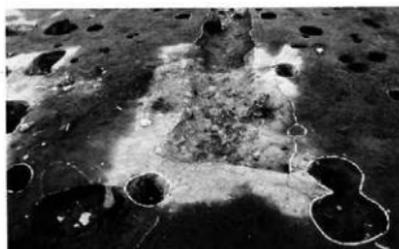
EB712 断面(西から)



S B 650 完掘状況(南から)



E B 652 断面(東から)



S B 832 完掘状況(南から)



S B 845 完掘状況(南から)



S A 894 完掘状況(北から)



S B 1070 完掘状況(北から)



S B 1200 完掘状況(西から)



S G 267 完掘状況(北東から)



SD470 完掘状況(真上から)



SD470 出土状況(南から)



SD470 断面(南から)



SD470 周辺SK完掘状況(南から)



SK510・943・1040・1041・1061 断面(南から)



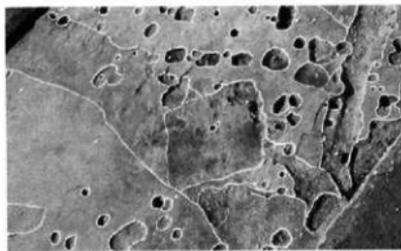
SK510・943・1061 断面(南東から)



SD470・SK870・SD893 (西から)



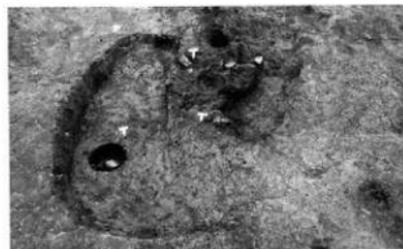
SD671 完掘状況(西から)



SD670 完掘状況(南から)



SD670・SK1166 断面(西から)



SK1166 出土状況(南から)



SD914 出土状況(北から)



SG936 断面(東から)



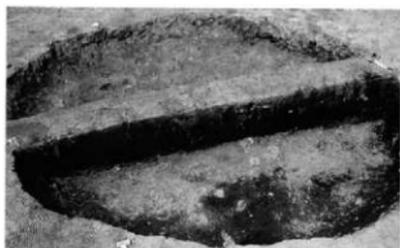
SG936・SD947 断面(北から)



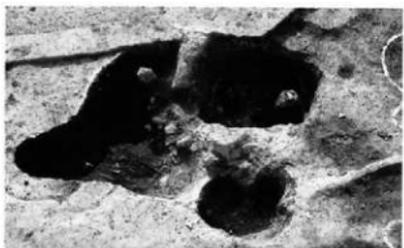
SG936 完掘状況(南から)



S K 6 断面(南から)



S K 530 断面(南から)



S K 782・S X 785 出土状況(東から)



S K 873・872 断面(北西から)



S K 563・584 断面(西から)



S K 1171 断面(南から)



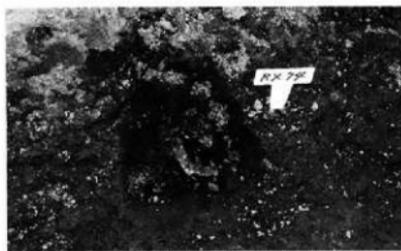
S X 545 出土状況(西から)



S K 1024・1023 断面(南から)



C区北側完掘状況(北東から)



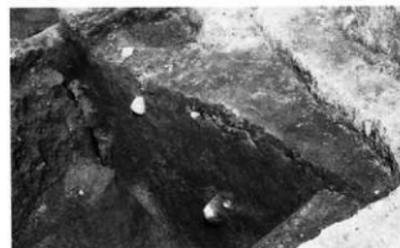
SD402 人骨出土状況(西から)



SD204・サシ銭 出土状況(西から)



SD204 断面(東から)



SK274・SX276 断面(南東から)



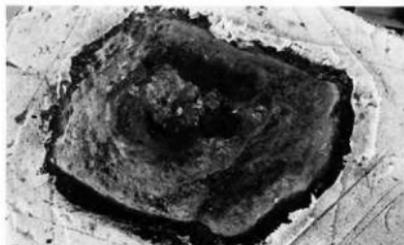
SD203 断面(南から)



SK274 人骨頭部骨片(西から)



SK274 人骨歯冠(西から)



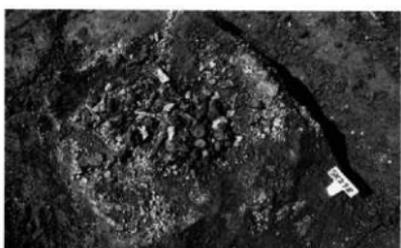
S K 274 人骨頭部精査状況(現場事務所にて)



S K 274・S X 276・S D 203・235 (南東から)



S K 778 人骨骨片出土状況(南から)



S K 298 人骨骨片出土状況(東から)



S K 746 短頸壺出土状況(南から)



S K 527・1025 断面(南西から)



S X 444 断面(西から)



S K 931 断面(北から)



C区中央土坑群(真上から)



S K 1239 無文銭出土状況(北から)



S X 547・S K 1051・1052・1053 断面(南西から)



S K 944 断面(西から)



S X 547 青磁碗破片出土状況(東から)



S K 458 断面(南から)



S K 990・S K 1153 断面(南東から)



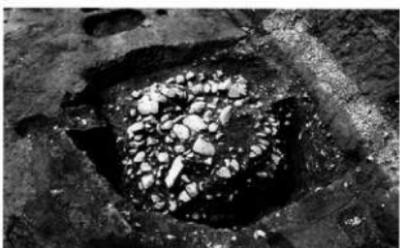
S K 990 片口鏡出土状況(北から)



五輪塔出土状況(南から)



S E 1196 検出状況(北西から)



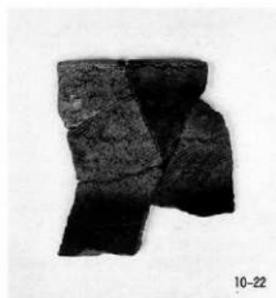
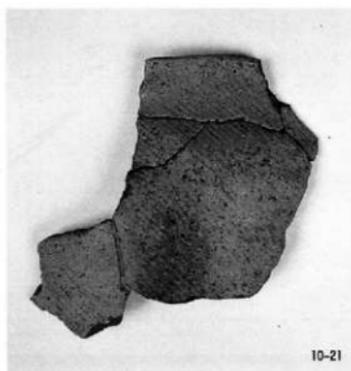
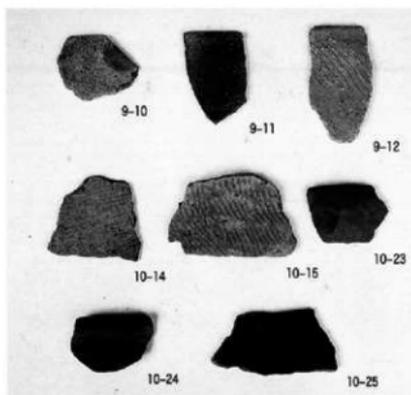
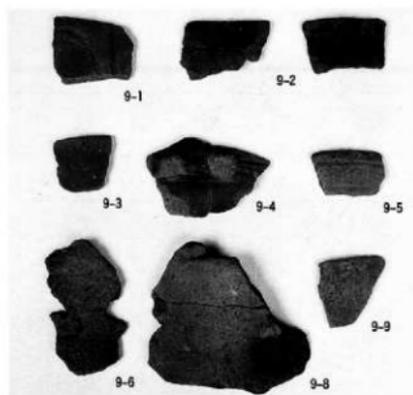
S E 1196 (北から)

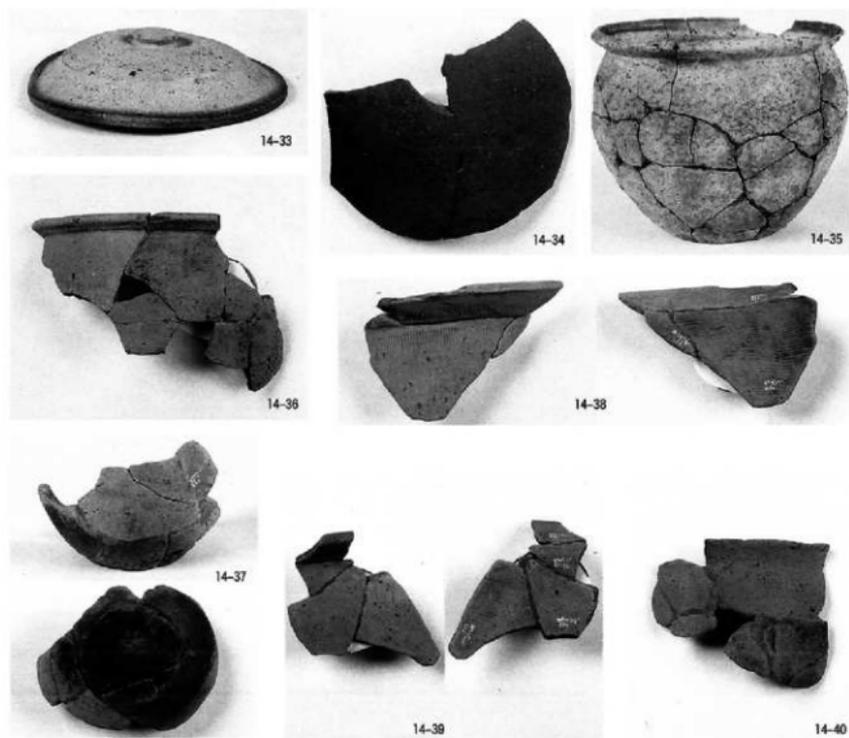
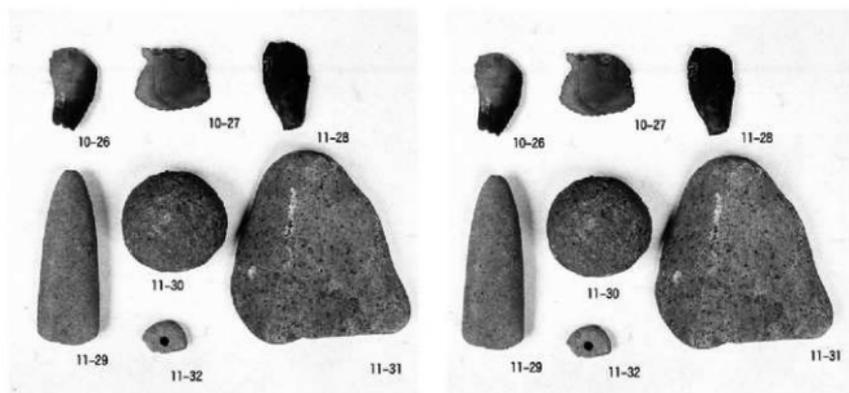


S E 1196 断ち割り状況(北から)

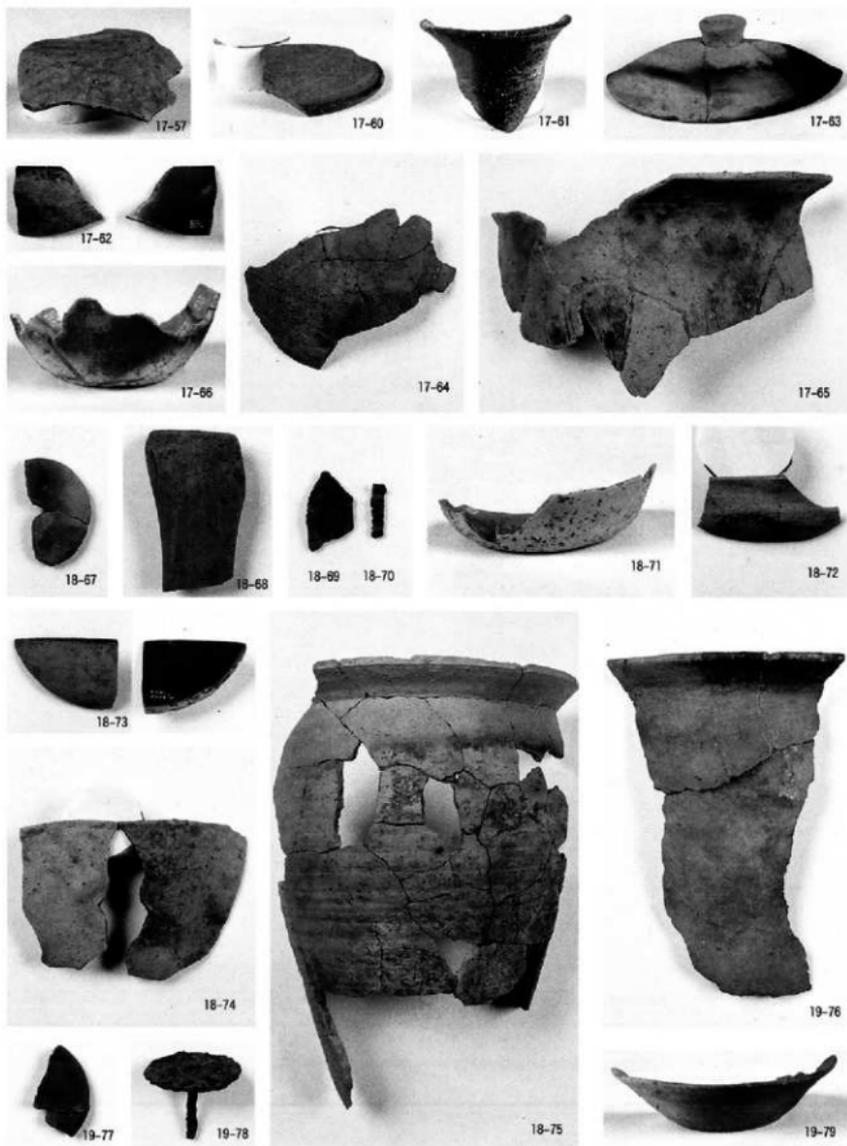


S E 1196 上層内壁状況(北から)









出土遺物(4)



19-60



19-81



19-82



19-83



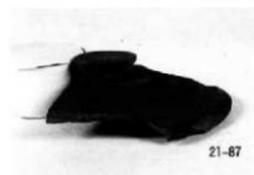
21-84



21-85



21-86



21-87



21-88



21-89



21-90



21-92



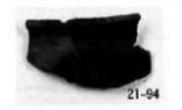
26-95



21-91

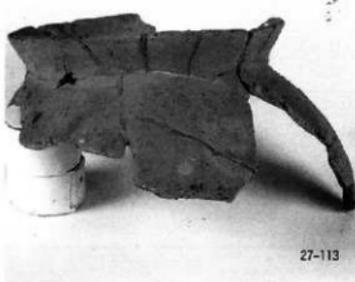
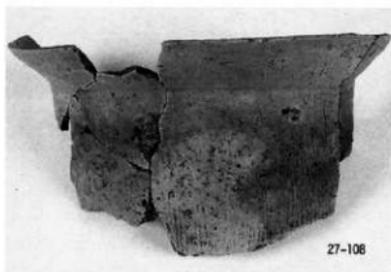
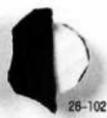
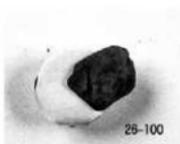


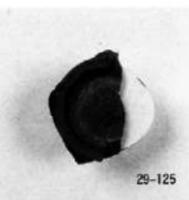
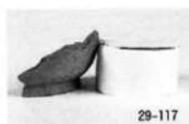
21-93

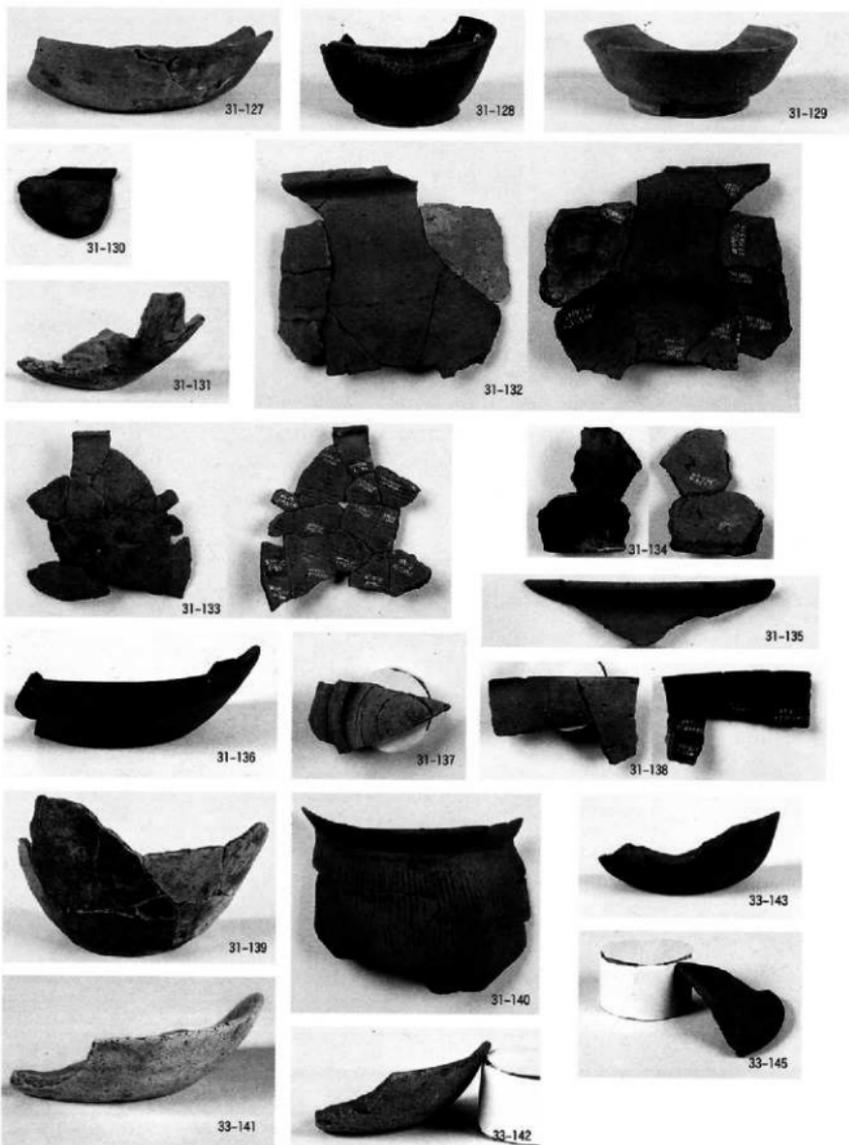


21-94











33-144



33-146



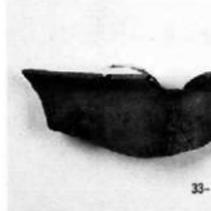
33-147



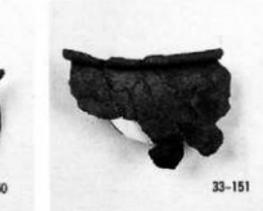
33-148



33-149



33-150



33-151



33-152



33-153



33-154



34-158



34-157

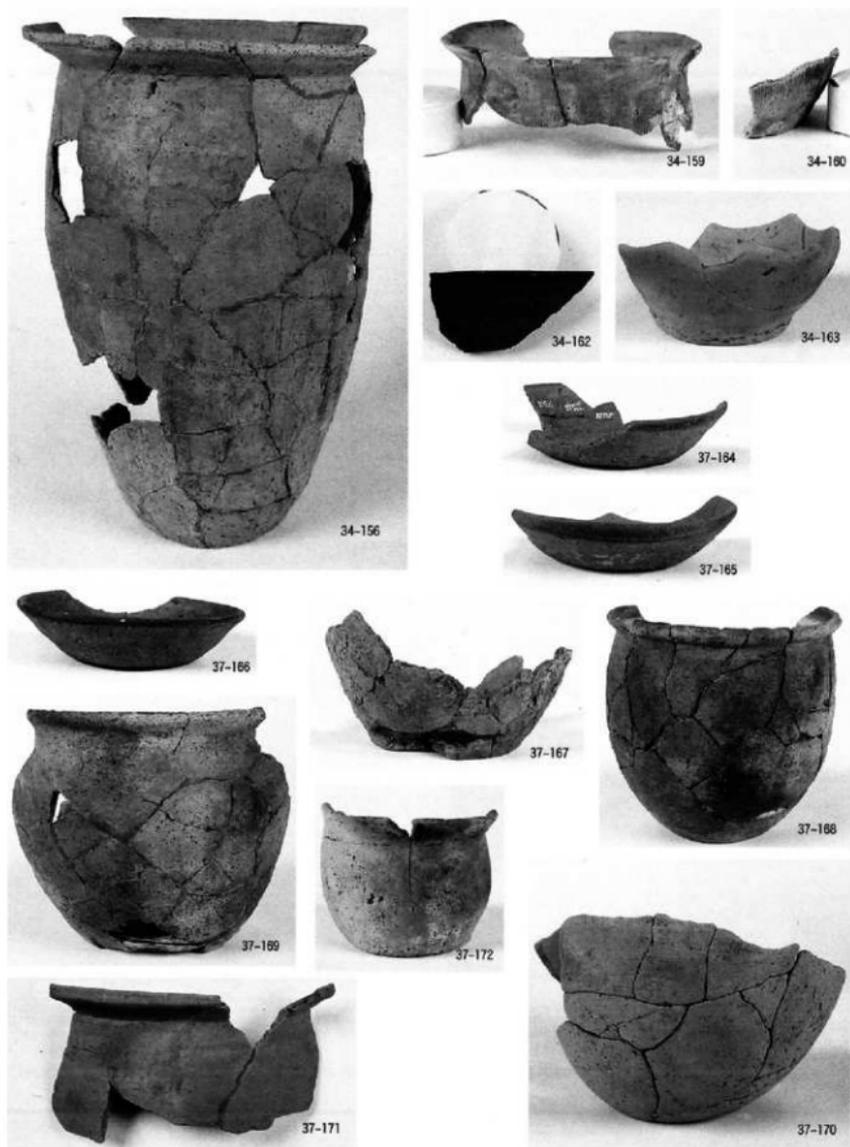


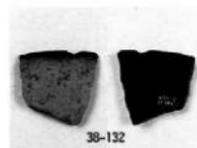
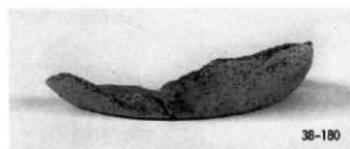
34-161

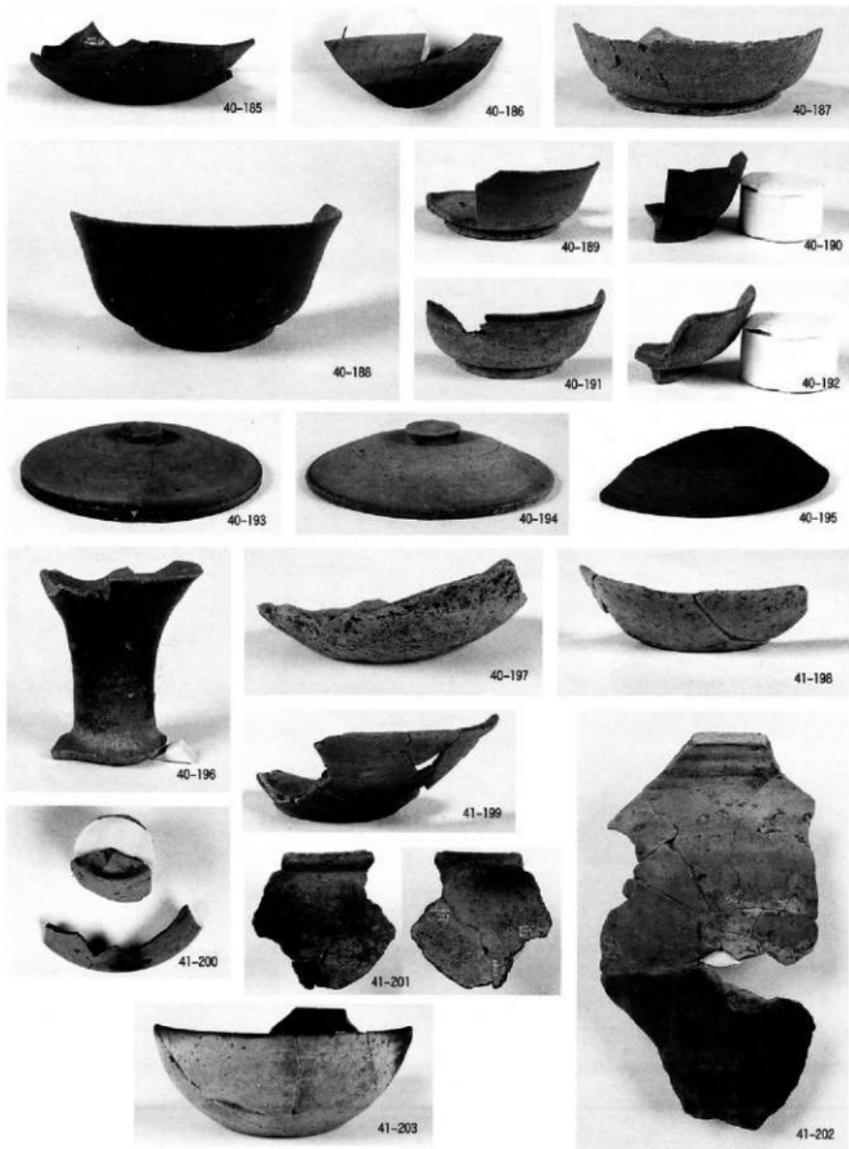


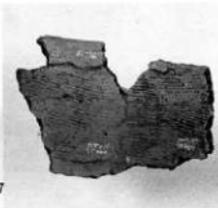
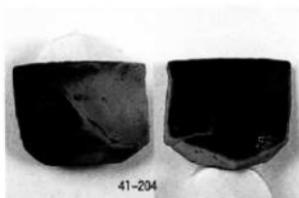
34-155

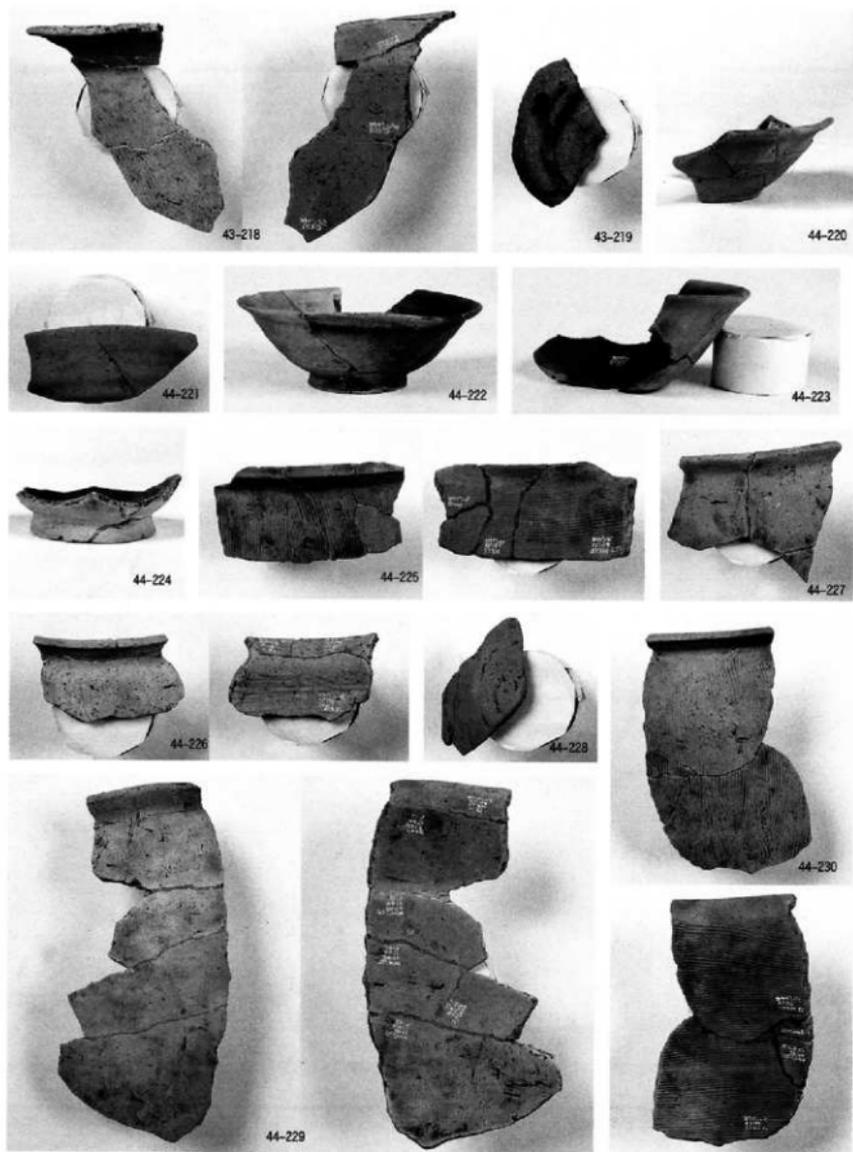
出土遺物(9)



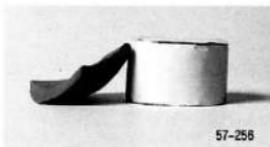
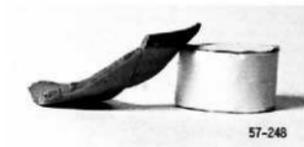
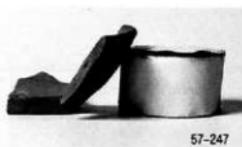














58-265



58-266



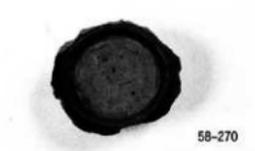
58-267



58-268



58-269



58-270



59-271



59-272



59-273



59-274



59-275



59-276



59-277



59-278



59-279



59-280



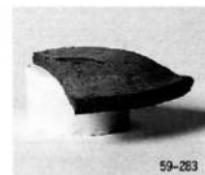
59-281



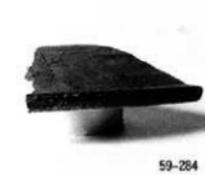
59-282



59-283



59-284



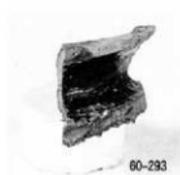
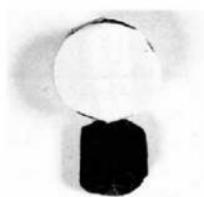
59-285



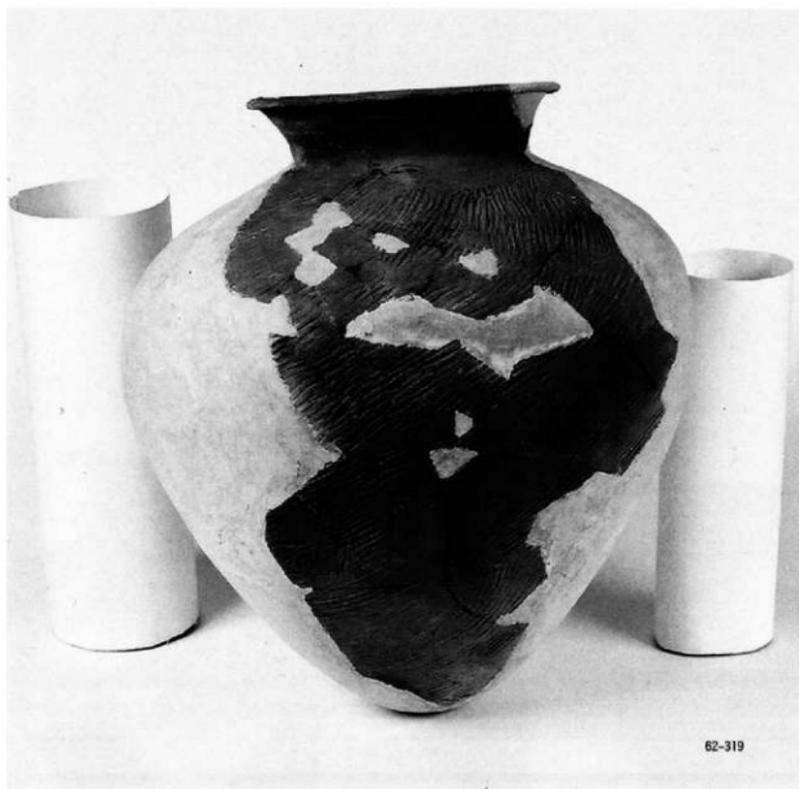
59-286



59-287



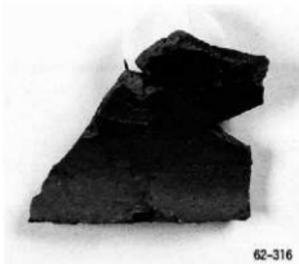






61-314

61-315



62-316



62-317



62-318



62-320



63-321



63-322



63-323



63-324



63-325



63-326



63-327



63-328



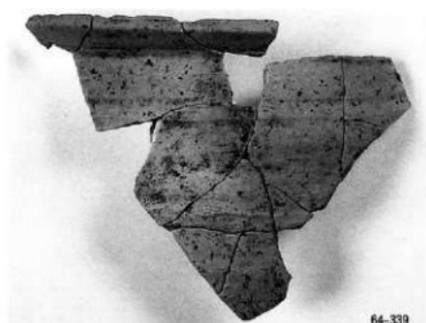
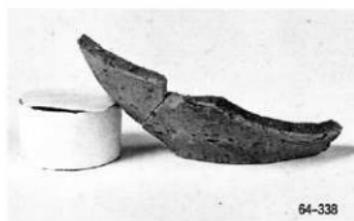
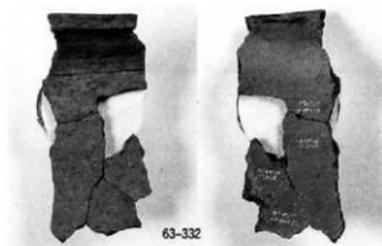
63-329



63-330



63-331





64-342



64-343



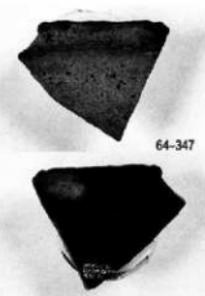
64-344



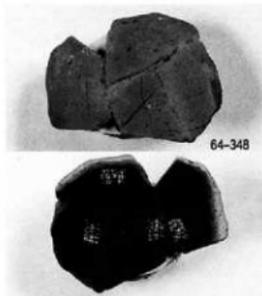
64-346



64-345



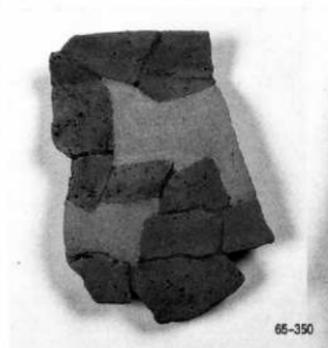
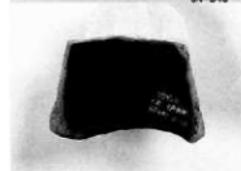
64-347



64-348



64-349



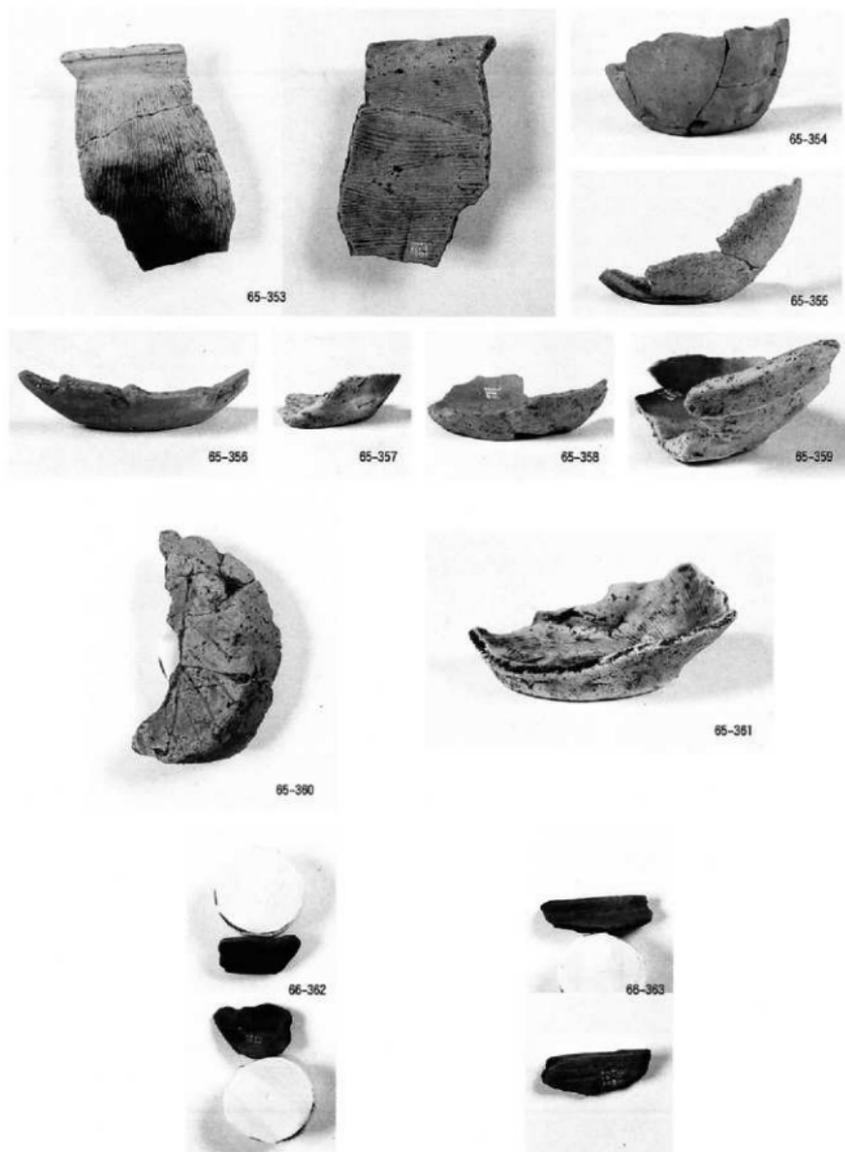
65-350

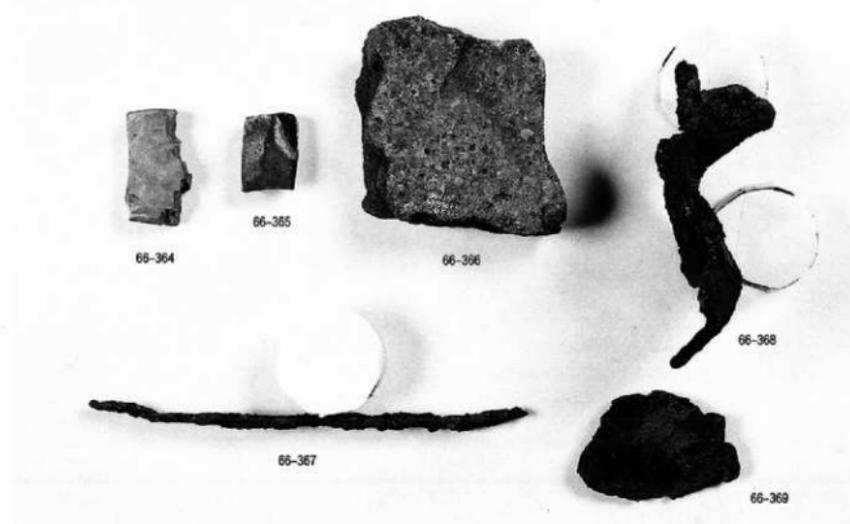


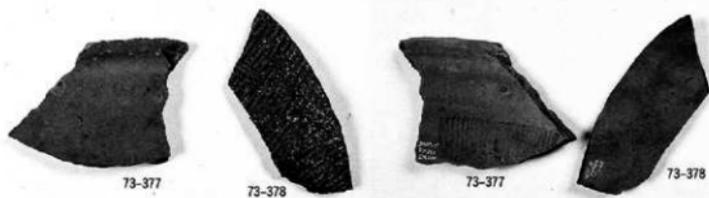
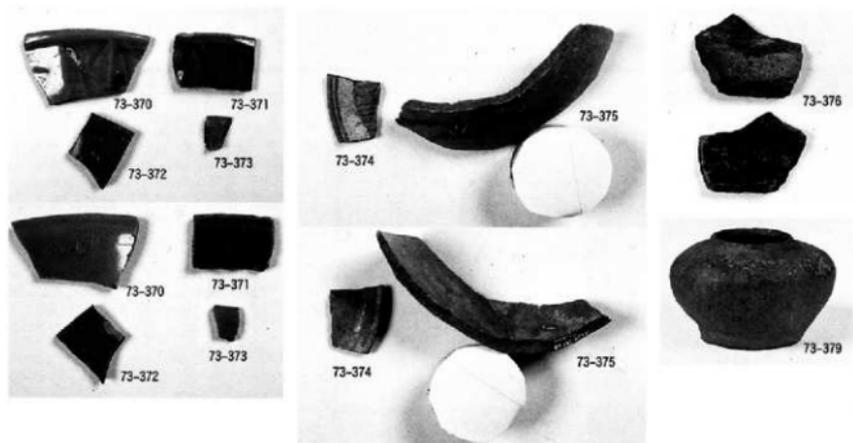
65-351

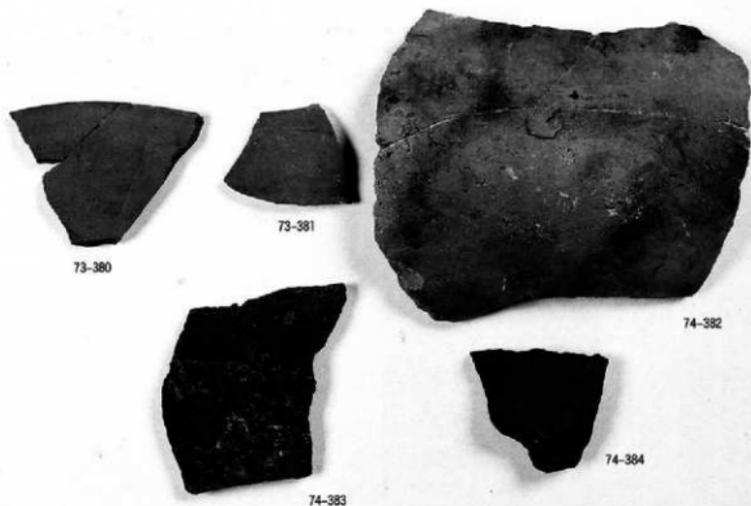


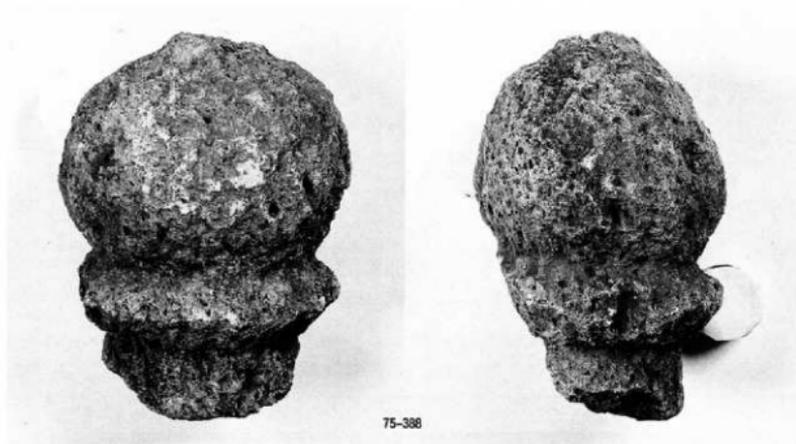
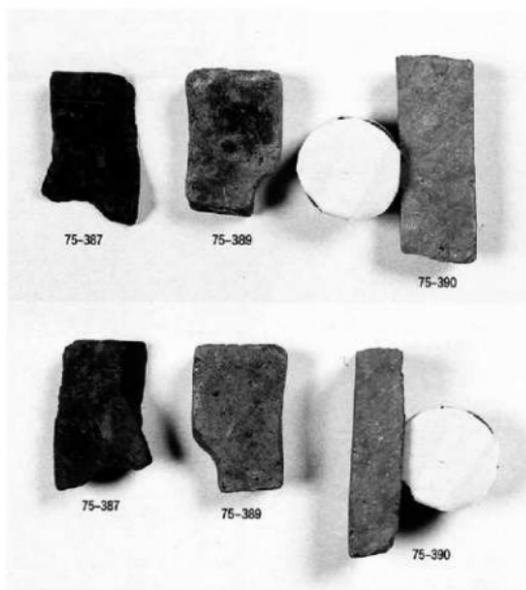
65-352



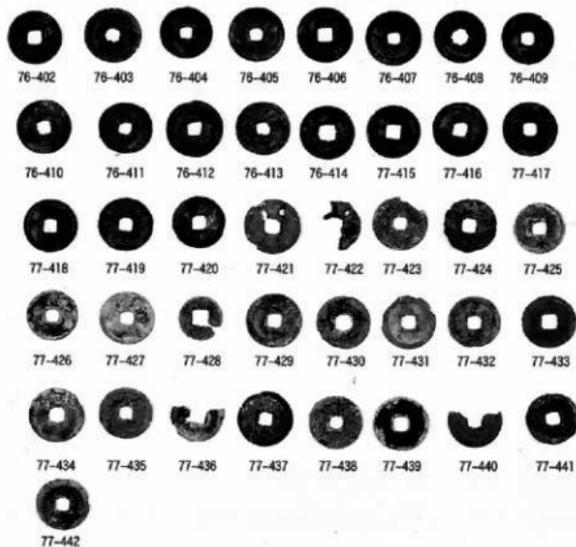
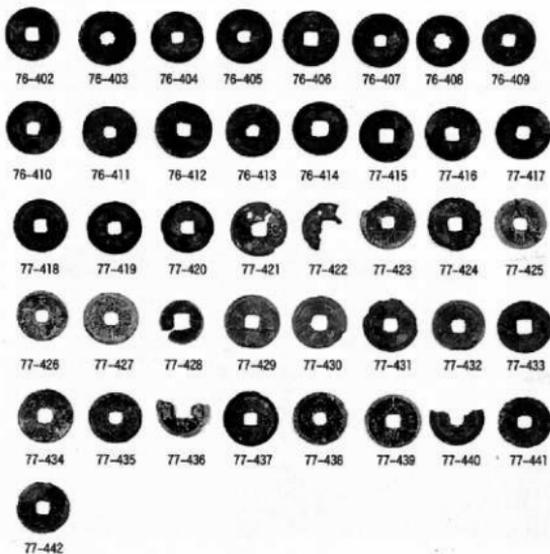












付 編

永源寺跡遺跡の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山形県天童市に所在する永源寺跡遺跡は、奥羽山系に源を発して西流する立谷川扇状地の扇端部に立地する。本遺跡からは、縄文時代、奈良・平安時代、中世の遺構や遺物が多数検出されている。中でも、奈良・平安時代の住居跡が多数検出されており、集落の変遷を追うことができる。土坑・河道跡等から人骨を含む骨が出土している。このうち土坑は土坑墓と考えられており、一部からは13世紀末～14世紀中ごろのものと思われる陶磁器が出土している。出土遺物の年代や遺構の重複関係からみて、永源寺建立時期とされる16世紀より古いことから、建立以前に調査地点が霊場として機能していた可能性が考えられているが、はっきりした年代は不明である。

今回の分析調査では、出土した骨の種類を明らかにするとともに、人骨については性別・年齢などの情報を得るために、骨同定を実施する。また、土坑の埋没年代について情報を得るために、土坑から出土した骨の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定も実施する。なお、同定は早稲田大学の金子浩昌先生にお願いしたので、その結果はⅢに署名原稿として掲載する。

I. 試料

試料は、以下に述べるSK778、SK274、SD402、SK298、SG936から出土した骨である。

〈SK778〉

C区から検出された土坑である。須恵器を伴う遺構を切って構築されている。構築時期は中世と思われるが、出土遺物に乏しく詳細は不明である。出土した骨は①～⑥に分けて取り上げられており、土坑全体から出土したものを便宜上⑦とした。

〈SK274〉

B区から検出された土坑である。須恵器を伴う遺構を切って構築されている。構築時期は中世と思われるが、出土遺物に乏しく詳細は不明である。この土坑からは、ヒトの頭蓋骨と大腿骨がまとまって検出されており、今回の分析試料は、それらの周辺から検出されたものである。出土した骨は、①～⑤に分けて取り上げられた。

〈SD402〉

C区から検出された溝である。須恵器を伴い、骨片が散在して出土した。試料は、一括して

取り上げられた。

〈SK298〉

B区から検出された土坑である。河道跡のSG267を上層から切る遺構である。土坑中央部に、骨が数点まとまって出土しており、一括試料として取り上げられた。

〈SG936〉

C区から検出された河道跡である。骨が数点まとまって出土しており、一括試料として取り上げられた。

II. 放射性炭素年代測定 (AMS法)

1. 試料の選択

分析試料として、SK778①とSK274RX78②から検出された骨を選択した。

2. 分析方法

測定は、(株)地球科学研究所を通じて、アメリカ合衆国ベータ社 (BETA ANALYTIC INC.) が行った。

3. 結果

いずれの試料からも、測定に必要なコラーゲンが抽出されないため、測定値を得ることができなかった。

III. 骨同定

「永源寺跡出土の人骨と馬歯」

早稲田大学 金子浩昌

1. 試料

試料は、Iに記した骨全点である。詳細は、同定結果を示した表1に示した。

2. 方法

試料は、土が付着した状態であったため、水洗によりこれを除去する。乾燥後、接合を試み、種・部位の同定をおこなう。

3. 結果

(1) 検出された動物

各遺構から検出された動物は、以下の通りである。

脊椎動物門

Phylum Vertebrata

哺乳綱 Class Mammalia

霊長目 Order Primates

ヒト科 Family Hominidae

ヒト Homo sapiens

奇蹄目

Order Perisodactyla

ウマ科 Family Equidae

ウマ Equus caballus

(2) 人骨について

〈SK274〉

火葬されることなく、この場で埋葬された人骨であったが、形状を保っていたのは、頭骨と四肢骨の一部のみである。四肢骨は断片的あり、部位を確認することはできなかった。

また、歯が検出されているが、頭骨とは離れているため、同一個体のものであるか判断できない。前臼歯(上顎第1・2)と臼歯(上顎第1・2、下顎第1)があり、前者は10~11才、後者は17才と考えられ、少なくとも2個体の人骨があったものと思われる。

〈SK778〉

火葬骨である。頭骨と四肢骨

表1 骨同定結果

遺構	取上げ番号	分類	部位	部分	左右	破片数/量	被熱跡
SK778	①	ヒト	頭頂骨	破片	右	14.8g	有
			指骨	遠位端	-	2点	有
			四肢骨	骨端	-	1点	有
	②	ヒト	四肢骨	破片	-	11.1g	有
			後頭骨	破片	-	1点	有
			腕蓋骨	破片	-	2点	有
	③	ヒト	後頭骨	破片	-	1点	有
			側頭骨	破片	-	3点	有
			下顎骨	骨体	左	1点	有
			寛骨	寛骨臼破片	-	1点	有
			大腸骨	破片	-	1点	有
			四肢骨	破片	-	10.3g	有
	④	ヒト	後頭骨	破片	-	1点	有
			腕蓋骨	破片	-	2点	有
			大腸骨	破片	-	1点	有
			大腸骨	後端(軀)	-	4点	有
	⑤	ヒト	四肢骨	破片	-	2.1g	有
			腕蓋骨	鼓室部	左	1点	有
	⑥	ヒト	四肢骨	破片	-	1点	有
			腕蓋骨	破片	-	1.4g	有
	⑦	ヒト	椎骨	破片	-	11.8g	有
			後頭骨	破片	-	1点	有
			側頭骨	破片	-	1点	有
下顎骨			骨体	-	1点	有	
			四肢骨	破片	-	35.5g	有
SK274	上①	ヒト	上顎第1前臼歯	歯冠	左	1点	無
			上顎第2前臼歯	歯冠	左	1点	無
			上顎第1後臼歯	歯冠	左	1点	無
			上顎第3後臼歯	歯冠	右	1点	無
			下顎第1後臼歯	歯冠	左	1点	無
			歯	破片	-	0.3g	無
	下①	ヒト	歯	破片	-	0.6g	無
	②	ヒト	腕蓋骨	破片	-	8.8g	無
	③	ヒト	四肢骨	破片	-	9.0g	無
	④	ヒト	土器	破片	-	1点	無
⑤	ウマ	臼歯	破片	-	3.6g	無	
	ウマ	上顎臼歯	破片	-	6.7g	無	
SD402	-	ヒト	脛骨	骨体	-	1点	有
			椎骨	破片	-	3点	有
			肋骨	破片	-	27.7g	有
			變形骨	-	-	1点	有
			側頭骨	鼓室部	右	1点	有
			腕蓋骨	破片	-	4点	有
			舌骨	体	-	1点	有
			指骨	近位端	-	1点	有
			四肢骨	破片	-	25.5g	有
			不明	破片	-	21.2g	有
			椎骨	破片	-	1点	有
SK298	-	ヒト	頭頂骨	破片	-	9.8g	有
			腕蓋骨	破片	-	31.7g	有
			大腸骨	遠位端	-	1点	有
			四肢骨	破片	-	33.0g	有
			不明	破片	-	40.6g	有
			ウマ	臼歯	破片	-	4.1g
SK936	F52	不明	不明	不明	-	-	有
	F52~	不明	不明	破断破片	-	0.04g	有?

が検出されており、頭骨がややまとまった状態であった。頭頂骨は、比較的大きい破片が残っている。下顎骨の破片は、第3臼歯が萌出した後の歯槽痕がみられた。このことから、20才以上の成人骨とみられる。四肢骨は小さな破片であり、部位は不明である。成人骨である。

〈SK298〉

頭骨、四肢骨はともに小破片であり、部位は不明であるが、成人骨である。

〈SD402〉

頭骨、四肢骨等が検出されている。出土地点が近いことから、ここで検出された右の鼓室部は、SK778⑤で検出された左の鼓室部と同一個体の頭骨に所属する可能性もある。

(3) 馬歯について

SK274とSK298でウマの歯が検出された。臼歯の破片であり、修復できないほどに破損していた。これらが同一の個体のものであるかは明らかではなく、火葬人骨との関係も不明である。これらの遺構の近くにウマが埋葬され、その一部が墓域などになったため掘り起こされ、散乱した可能性などが考えられる。

IV. まとめ

以上から、今回の試料は馬歯をのぞいてすべてヒトの骨であり、SK274に非火葬骨最小2個体、SK778に火葬骨最小1個体、SK274、SK298に火葬骨(個体数不明)があったと考えられる。また、ヒトの骨とともに出土したウマの歯は、埋葬時などに混在したものの可能性がある。なお、ヒトの骨に関する年代測定では、コラーゲンが残留していなかったため、年代資料を得ることはできなかった。以下に、骨同定結果を中心に、遺構毎のまとめを行いたい。

〈SK274〉

ヒトの埋葬骨(非火葬骨)およびウマの歯が検出された。頭蓋骨と大腿骨の間の地点から取り上げられた③は、四肢骨の破片であったことから、この個体はある程度の解剖学的位置を保っていた可能性がある。①はこの個体から離れた位置であり、ここで検出された歯が、この個体のものかどうかは判断できない。①地点の歯は10~11才の小児のもの、17才の若い成人のものであり、この土坑墓には少なくとも2個体が納められていたことが明らかとなった。これらの歯のどちらかが、頭蓋骨・大腿骨を残す個体のものである可能性があるため、今後の調査が望まれる。今回の試料から、性別は判断できない。

なお、人骨とともにウマの歯の破片があるが、出土状況が明らかではないため、人骨に伴うものか、混入したものかは判断できない。

〈SK778〉

ヒトの火葬骨が検出された。①～⑦に分けて取り上げられているが、どの地点からも頭蓋骨の破片が検出されている。それ以外の部位も、地点によるまともはみられず、散在した状態である。性別不明の成人骨であり、最小個体数は1体である。

〈SD402〉

ヒトの火葬骨が検出された。右鼓室部が、SK778で検出された左鼓室部と同一個体であると考えられることから、当遺構の人骨は、SK778など周囲の火葬墓から流入した骨片である可能性がある。性別は不明である。

〈SK298〉

ヒトの火葬骨およびウマの歯が検出された。人骨の最小個体数は1体であり、性別不明の成人骨である。ウマの歯は被熱の痕跡がない。出土状況が明らかでないため、人骨に伴うものか、混入したものかは判断できない。

〈SG936〉

微細な骨片が検出された。種、部位ともに不明である。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第86集

ようげんじふと
永源寺跡遺跡発掘調査報告書

2001年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161

山形県上市市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 藤庄印刷株式会社
